
セキレイ 翼と拳と恋物語

嘘口 真言

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

セキレイ 翼と拳と恋物語

【コード】

N9062U

【作者名】

嘘口 真言

【あらすじ】

新東帝都^{しんとうていと}。かつて東京だったその街は、今小さな戦場になろうとしていた。

一人の青年・白羽黒人がそんな街で繰り広げる、小さな恋の物語。

その戦の名は

鵲鴿計画^{セキレイけいかく}。

青年と少女達は、出会う

べくして出逢うのだった

はい、気まぐれに書いたから適当にアップしてみた。
ええ、セキレイですよ。そして不定期更新ですよ。
続くかも解らないから期待せず暇つぶしにどうぞ、駄文をどうぞ

第零話 青年、語る（前書き）

一応プロログなんだが………こんな初めて書いたから、プロ
ログになってるのかも不安だよ。
さて、原作の設定が2020年だから これは………使える

第零話 青年、語る

2020年、時期は春。桜が蕾をつける程度に暖かくなったこの時期。いつもと変わらぬ光景。

町はいつもの日々。車が行き交い、人が行き交い、ものが行き交い、なにもかもがまじりあい溶け合うこの二十一世紀の大会。そんな街は、今日も今日とて平和だった。

「帝都大学の合格発表か……………若いねえ、あんなに頑張れて」

「今年もダメ、か……………二浪なのに、どうしよう……………母ちゃんになんて言えば……………」

青年はそう呟き、帝都大学の前を素通りする。現在その帝都大学の前には大量の人間が波を作り、大騒ぎになっていた。このうち三割は勝ち組で、五割が負け組、あとの二割は見る組だろう。

青年の視界には、さえない受験生の青年が落ち込んでいる姿が目映った。ああ、青春だなあと。

そんな街、そこは東京だった街

名を改め新東帝都^{しんとうていと}

と呼ぶべきか。

地図としては東京に位置し、国籍も日本に存在するが、この土地は既にある人物の所有地と化している。個人で所有出来る土地の広さではないが、事実上ここは「彼」の庭なのだ。彼の庭で、彼の家で、彼の遊び場。彼、その者の名は御中^{みなか}広人^{ひろと}。世界を牛耳るとまで言われる程に肥大化した企業「M・B・I」の社長だ。創始者にして創造者、そして稀代の天才の一人である。

M・B・I 正式名「MID BIOLOGIC INFO
MATICS」。

製薬会社に始まり今では世界のほとんどにその名を刻む一大企業に発展した。その本社はこの帝都のど真ん中に位置し、この帝都で一番高いとされるタワー状の企業ビルであり、外観は塔のようでもある。そして何故かイギリスの時計塔^{ビッグベン}を連想させる。

今やスーパーから食品から運送会社から製薬会社から、なにからなにまでその名を刻み、ありとあらゆる企業に精通する存在になったその本社を、一人の青年が見上げていた。

視線を正面に戻すと、なにやら白髪の女性が深刻そうな顔で電話をかけていた。

「焰か？ 悪い、また光と響がちよっかいを出していな……………」

頼めるか？ ああ、すまんな。助かるよ、今度店

に顔出すからその時に。ああ、感謝する」

閑話休題 青年の名は白羽黒人^{しんはくろん}。今年の末で二十一歳の美青年、フリーターである。

身長187cm、体重72kg、ビジュアル系っぽい顔立ちで、若干筋肉隆々な身体と肩にかかるくらいの長さの黒髪が特徴。デニムに黒革のブーツ、七分丈の無地・黒シャツを愛着している。

スーパーで昼食の食材やらの買い物済ませた彼は、自宅への道中にふとこのビルに立ち寄った。

別になんの事はない、ただの気まぐれ程度の事だ。故に気まぐれにその場を立ち去る。

帝都のはずれにある自宅はワリと大きく、豪邸という呼び名が相応しい。一人暮らしには大きすぎるが、見栄を張るにはもってこいのサイズだった。一人暮らしとは言ったが実際は両親もいる

のだが、世界各国を巡る仕事をしている為に、家に帰るのは年に一回あるかないか程度 が、いないのと同義。

そして余談だが 彼は格闘技と二次元が好きだ。

毎日アニメは欠かさず見るし、週刊誌も欠かさず読む。グッズも買うし、ゲームもする。

一人暮らしだから料理もするし、家事は一人でこなせる。そんな彼がたしなむ格闘技は、ある物語の主人公の武術をモデルにしている。その名を まだ明かさないのでおこつ。

今から十年ほど前の話だが、彼はその主人公の武術にえらく感銘を受け、現存するあらゆる武術から利用出来る『オイシイ』動きばかりを抜き取り、その武術を現実的に再現する事に成功した。はい

話、彼は『二次元を現実に持ち出している』のだ。それ故にその身体は人より抜きん出た筋力と腕力と脚力と体力と、全てが人並み以上に鍛え上げられている。否、そうしなければ空想を現実には持ち出せない。

そしてそんな彼にとって、現実こそが理想であり、理想こそが現実なのだ。

自宅に着くや否やキッチンへ一直線、包丁を取って野菜を切り刻む。油を引き、肉を炒め野菜を炒め、湯を張った鍋に叩き込む。そしてカレールウを落とし、余熱でルウが解けるのを待つ事十数分。そこから彼はのんびりと昼寝を決め込む事にした。

カレーは一日寝かせてからが美味しい、という彼の持論である。そして急だが、彼の家族構成を紹介しよう。

まず父親。名前は白羽 須佐^{すけ}、年齢不詳。息子にすら年齢を教えず、黒人が十五歳の頃に仕事で家を飛び出し、現在はヴァチカン市国にて聖十字騎士団式剣闘術を習っているとの事。

このことから、常軌を逸した戦闘好きで武闘好きが窺える。所属の企業はM・B・I軍需鉄鋼部門の統括。

そして母親。白羽 詠子^{ていこ}、年齢不詳の超絶美人。外見は二十代前半である。

父親と同じく戦闘が大好きで、現在はインドにて『パンチャックシ

ラット』と呼ばれる伝統武術を学んでいるとの事。諸族はM・B・I政治経済部門の統括。なお、父親より強い腕っ節が自慢である。

この二人が世界各国を駆け巡ると、その行先は大体M・B・Iの息のかかった国になる。

というか、そのために二人は動いている。そして同時に趣味のためにも動いている。比率は仕事：3、趣味：7の割合。何故かと聞かれれば、御中の指示に従うのが心底嫌だから。M・B・Iで働いてはいるものの、両親は御中とは知人の間柄であり、そして同時に彼の事を心底嫌悪する半ば怨敵のような間柄でもある。

「御中死ね」

が口癖だったのを、彼はよく覚えている。

そしてそんな両親バトルマニアをもった彼は、当然ながら武術に通ずる人間に育っていた。

国内で学べる武術はすべて親の指示で習得し、後々は自分の『理想の武術』の完成の為にそれらを進んで会得していた。そんな事は五歳の頃から続いていた為、当然高校には行っていない。が、学力は大卒レベル以上はあると本人は言う。実際、帝都大学の過去問はすべて簡単だったそう。

ふと喉が渴いたので、コンビニに切れていた麦茶を買いに行くついでに小遣い稼ぎをと意気込んで外に出る。

と。町中に出て五分もしないうちに、何故かボンテージファッションの女性が二人、鬼の形相で街を駆け回っていたのは忘れたい記憶。そしてそのお姉ちゃん達から巫女服を今風に改造した女の子が逃げていたが、彼にとってはまあ全てがどおでもいい事である。一分したらもう忘れていた。

そんな彼の収入源は、少し変わっている。

カレーを作り置きした後、黒人は帝都の人通りの少ない路地裏

簡潔に言えばよろしくない人間の溜まり場に足を運ぶ。するとまあ溜まっている溜まっている、彼からすればゴミ同然の連中が。その人たちの中に、黒人は堂々と足を踏み入れる。当然こんな異端がやって来たなら、彼らの反応は決まっている。武力による排除、ならず者たる彼らの選択はこれ一択だ。だが

「ご苦労様不良諸君、よく頑張った。僕に喧嘩を売った褒美として、財布の中身を頂戴してあげよう」

彼らの対峙する青年は、武道に通ずる青年である。

ただの不良である彼らが、まともに太刀打ちできる筈などないではないか。だが売られた喧嘩は買わなければならない、それが黒人の主義である。同時に敗者は勝者に何をされても文句は言えない、というのも彼の思想である。ゆえに、彼は敗者から所持金全てを奪う。これが、黒人の収入源だ。

しかし退屈だった。黒人は心底退屈していた。

何故こんなに弱い人間しかいないのかと、何故この世には自分が愛

する二次元のように馬鹿げた強さを誇る超人はいないのかと。いたなら、何故自分の前に現われてくれないのかと。不良達からかすめ取った所持金を勘定しながら、黒人はそんな事を考えていた。

だが彼は知らない。

この後、彼は自分の欲求が満たされそれ以上が与えられる事を。自分の理想が他人の空想へと刃を向ける事を、そしてその思いを賭けて彼は戦場を駆け抜ける事を。

縁より続く輪廻は、この街『帝都』で、巨大な因果の渦となって愛憎狂乱渦巻く華を咲かせる。

2020年は春、同時に青年・白羽黒人の人生の初恋の年でもあった

第一話 拳乱舞刀

「あーあ、今日はこれっぽっちかー……………足りるかなあ今月」

俯せに倒れているガラの悪い男の身体を座布団に、僕は腰を下ろしていた。

倒れてるのは別に一人じゃない。全員で十二人、キレイに気絶している。誰がやったかと言えば僕だ。

そんな戦鬼ほくの足元には空の財布が幾つも転がっている。安物から高級革財布まで選り取り見取だが、僕が全部を物色してカードやら現金やらを抜き取っている。しかし中に入っていた札束を全部合わせて十五万ぼっち、安すぎるぜ。それを自分の財布に丁寧に押し込むと、ゆつたりと腰を上げる。

家賃は親が払うからいいんだけど、両方出稼ぎだから家にはいないんだよね。お陰でこんなに自由に遅しく、中途半端な不良みたいに成長しちゃったよ。

「てっ、テメエ……………白羽黒人……………このままで済むと思って

んじゃねえぞ！」

さっきまで気絶していた不良っぽい男、年齢は二十代後半くらいか。ジャージに坊主頭、ピアスにイヤリングにリングに、ちょっとはしゃぎたい年頃は過ぎたんじゃないのかなあと言いたくなる、そんな男だった。故に、真っ先にボコボコにしたのをハッキリ覚えている。そんなムカつく彼は鼻血を滴ながら頭だけを上げて僕を睨んでそう叫んだ。対して僕は表情も変えず、投げ棄てていた財布から彼の身分証明書を見つけ出す。一番派手だったから見分けはすぐについた。だってミルクィホームズのイラストが入ってるんだもん。そしてその財布から取り出したのは身分証明書
まあつまり
は免許証だ。

「はたみちわじまひ端道薫^{はたみちわじまひ}、二十七歳。えーと職業無職っぽくて、財布には風俗に古市のカードにこれはゲズかー。お、ポイントスゴいや28000ポイント、これもーらい」

「てめえ、あんま調子ノってつと痛い目みるぜ……………もうすぐ俺の最強の僕が来るから覚悟しな」

「うわ臭いセリフ……………ふうーん、じゃさっさと帰るわ」
「えっ、あ、ちょっと待ってってオイ！ こういうのって待つのがセオリーなんじゃないの！！！！？？？？」

「痛い事になると解って逃げないヤツはいない」

「あ待って待って行かないでー！ ツツツ！！！！！！！！！！」

叫び声を無視して僕は颯爽と路地裏を去ろうとした。足取りは軽く、歩みは重く。

そうそう、自己紹介をしておかねば。僕は白羽黒人・二十歳、フリーターだ。

趣味は『二次元』 『料理』 『家事全般』、特技は『ゲーム』 『速読』 『模倣格闘』、好きなものは『二次元』 『甘いもの』 『美少女』、嫌いなものは『三次元』 『むさ苦しい男』 『努力・根性説』。

ようはダメ人間だ。日々漫画を読み漁りアニメを見尽くし、ゲームをやり尽くし、眠り尽くして生活する半ニートだ。何故『半』と付いたのかと聞かれれば、僕はこうやって定期的で『出稼ぎ』に出てきているからだ。被虐的な自慢だが、僕は昔から親がいなかったから非常にひねくれた性格をしている。いや、捻れ曲がってしまったんだ。

その数百数千の一例として、僕は昔から不良という人間に対してよくケンカを売っている。いや、わざと向こうから近寄るように仕向けるのだ。警察に聞かれても問題にならない程度の挑発、そして不良が襲ってきたなら正当防衛で逆にボコボコにして金を巻き上げて脅して黙らせる。これを二年ほど続けていた。お陰で普通のケンカからマフィアっぽい連中に極道も相手取った事もあったね。血の十代、華が咲くが如し、ってね。平和な生活が最近は恋しいけど、これを止めたら生活費が無くなる。仕事と同義なのさ、これは。

「さーっさーととーんずーら とーんずらーだー ……………っ」と

視界の彼方、路地裏から大通りに出るための一本道。その先に、一人の女の子が立っていた。

少女は別にカバンやリュックなどを持っている訳ではなく、仕事や学校の帰りと言うわけではなさそうだ。なにより、その存在はまるで僕を通すまいと立ち塞がる壁のような気もした。黒い髪に白い肌に綺麗な顔立ち、それにあればメイド服　　いや、黒ゴスロリ服だろうか。

そんな身長150cmくらいの少女が僕の行く道を塞いでいた。以上、僕から見た彼女の第一印象。

少女はこちらに歩き出し、僕の隣を通り過ぎると端道の方へ歩み寄る。まるで待ち合わせを待ちくたびれた恋人のように。端道はそんな少女を見ると、ゆっくり手を伸ばす。少女はその手を取り、端道の身体を起こした。

「申し訳ありません、葦牙様。私が遅いばかりに葦牙様をこんな目に……………」

「俺の事はいい……………そいつから俺達の金と、この傷の借りを返してやれ」

「傷つて、口の中切っただけじゃん。大袈裟だねえ、君もしかしてワリと貧弱臆病？」
チキン

それにしても葦牙ねえ、女の子に変な呼ばせ方をさせる男もいるんだねえ。

少女は端道をビルの壁に凭れ掛けさせると、こちらを向いて一言。今度は気のせいではない。彼女は明確な敵意を抱いて僕と対峙している。敵意、殺意、いやこれは　　貴意だ。戦士や騎士が持つそれと同系の、強い意志だ。

鋭い視線が僕を捉え、僕は殺気も覇気もない無気力な視線を返す。

「今すぐお金を置いて一発殴られて下さい。さもないと、大変な事になりますよ」

「って、君がやるの?」

「ええ、ですからまずは忠告です。そういう『取り決め』ですからね、だからもう一度　お金を置いて一発殴られて下さい。さもないと、大変な事になりますよ」

……………これはあれか、痛い病気の子なのかな。主に精神疾患の。

それとも普通に武術に精通してるからの自信なのかな。いずれにせよ、僕は殴られるの前提らしい。二度目の忠告になって、彼女はようやく構えた。右手を前方に、腰を深く落として左手を腰に添える。よくある格闘技の構えの一つだ。

構えられては構えるしかない、僕も構える。足を大股に前後に開き、対になるように右平手を前に、左拳を腰に。小説から得た武術『虚刀流』吉の構え・鈴蘭だ。知ってる人は知っている、知らない人はググるといい。すぐに出るよ

「面白え、卯月と闘ろうってのか。いいぜ、やってやれ卯月。半殺しだ」

「……………はい。解りました、葦牙様」

さて、どうくるのかな
スタイルは剛か柔か。出来れば見た事のない極地の秘伝の武術がいいな。勉強になるし。』どんな偏屈な武術でも勝てる』
そんな余裕を持つていた。相手は女性だ、多少は手加減せねば。

そう考えてたら『来てた』んだよ
目の前に。

一応追記だが、僕と彼女
卯月との距離は目測10m以上はあった。誤差はほとんどない。だが彼女はその距離を『二秒未満』。『たったの一步で』渡りきった。人間が駆け出す際の爪先での小さなジャンプの様に、彼女は10mを一步の『跨ぐ』様に飛び越えた。そして彼女はその『跳ね飛んだ』速度を保ったまま僕と肉薄し、眼前1mに迫った瞬間空中で右へ一回転しながらの側頭部への回し蹴り。当然僕はそれに『咄嗟とはいえ』反応し、仰向けに反って蹴り

を避けた。イナバウアーって感じだよ。必死だからそんな冗談を交える余裕はないけどね。

卯月はその慣性に身を任せ、新体操ばりに僕を飛び越えて二mほど後方でキレイに着地した。『舌の構え』に体勢を戻し、ワリと真顔で僕は彼女に問いつめる。

「……………マジ？」

「参ります」

「やっちまえ……………卯月イイツツツ!!!!!!!!!!」

僕はやむ無く本気で闘う事にした。身体を『脱力』させて緊張を無くし、柔軟性を取り戻す。脱力とは即ち『身体の本来の自由性』を取り戻す事だ。反射・伝達・行動。これらを現状最高の状態に引っ張り上げる。

だってそうだろう？

『人間離れた筋力の少女』が相手なんだ、初見なのに本気以外どつやって戦えと言っただ。彼女は端道が指示すると同時に駆け出し、またも僕の頭部を狙ってきた。どうやら極力ダメージを避けての気絶狙いらしい。優しい事だ。だが痛いには変わらない。なら

抗う。

「じゅめんなさいツツツ!!!!!!!!!!」

ビュオンツツツ!!!!!!!!!! と、側頭部を狙った卯月の鋭い蹴り

が迫る。さながら鎌の横一文字か。

鎌とは違いリーチの短いそれを一步退いて回避し、彼女もそれを確認するとそのまま遠心力を応用して身体を回転させながら僕を追って蹴りや拳を絶え間無く放ってくる。

手刀や脚刀でそれらを往なし、そして理解する。彼女は『人間じゃない人間』なんだと。

僕は『人間らしくなくなった人間』だから言える、彼女は僕の敵だ。瞬間、僕は『対女性非戦闘主義』を捨てた。頭の中を戦闘状態に切り替え、視覚を最大限で攻撃を見切り、聴覚と嗅覚をフルに稼働して彼女との位置や間隔を把握し、触覚で彼女のおよその筋力を測り、回避しながら往なしながら、作戦を練って闘う。

そして分析結果

彼女、卯月は一撃一撃がコンクリ

ートを破壊するほどの全身の細く均一な強筋力、感覚機関は人間と同様だがその数倍鋭敏、そして彼女の太股。彼女が蹴り上げた瞬間見えた、彼女の脚に入れられた刺青。鳥を横から映したような紋に、その腹に抱く対極図と数字。59と表記されたそれは、まるで焼き鑊で家畜に付けたナンバーと同様の

「スキあり！ はあああツツツ！！！！！！」

ズドムツツツ！！！！！！ と、思考に頭を持っていかれ過ぎて、深く前蹴りを鳩尾に食らってしまった。

ただのか細い女の子の蹴りなのに身体がくの字になって吹き飛び、5mほど宙を舞ってようやく地上に舞い戻った。蹴りと地面に叩きつけられたショックで身体が動かないし呼吸が覚束ないが、なんとか上体を起こして片膝を突きながら彼女に問いかける。

「ゴホッ！ き……………君の脚の、そのナンバー……………君はまさか、人間じゃないのかな？」

「遠からず近からず、ですね。私を、私達を知る者は私達をこう呼称します
セキレイと」

「セキ、レイ……………セキレイ 鵺セキレイ……………鳥の名前だね。君ひよつとして鳥人間？」

「いえ、私達は
人間ですが、人間の形をした別の
生き物ですから」

彼女は僕に歩み寄ってくる。そのブーツの足音が頭の中で反響し、頭痛を引き起こしていた。

いや、これは僕の身体がたったの一撃で限界を迎えていると知らせているんだ。なにせ『半分は』殺す気でキテルんだから。こつちも殺す気だから文句は言えないけど……………逃げる逃げると頭で理解しても既に遅い、身体はダメージで言う事を利かない。彼女は僕の目の前に立ち
何も言わず胸ぐらを掴み上げ、拳を頭部に向けて構える。

「
おやすみなさい、何処かの誰か、知らない敵さん。目が覚めたら骨が数十本折れてる程度ですから、安心して下さ

い。死ぬ訳じゃありません」

「ぐっ、でも……………起きたら死ぬほど痛いんでしょ、それ」

「男の子なんですから、我慢して下さい」

超ピンチだけど

ヤバい、今の萌えた。

ニヤついているの間近で見られてるけど、関係ないや。お姉さんキヤ
ラマジヤバい。

「何してンだよ卯月！ さっさと殺れよ、この愚^{ダマ}ツツツ！！！！

！！！」

「……………さようなら」

その一瞬だけ。ほんの、コンマ数秒の一瞬だけだった。だがその瞬間だけ彼女は確実に戦う事を、攻撃するのを躊躇っていた。それは表情に現れて、そしてすぐに消えて。その鉄槌を僕へ向け振り抜き
次の瞬間、僕を投げ捨てて後ろへ跳び跳ねた。

「ぐ　　がほっ、ゴホッ！　な、なに……………が……………」

噎^むせ返る喉を抑えながら卯月を認識する。

何故逃げたのか

それは彼女の身体が語っていた。

それは彼女の右腕、上腕部。そこに、一本の矢が刺さっていたのだ。時代錯誤もいいところ、ちゃんとした羽根をあしらったそれは、神社や地域行事でしか見る事はないと思っていた、本物の『射殺す為の凶器である』矢。またの名を『破魔^{はまや}矢』。卯月はそれを左手で引き抜くとそのまま握ってへし折り、適当に投げ捨てて俺

の背後の先を見据える。

建設中の高層ビルとビルの間、仄かに香る鉄の臭い。その長さ二十m強の道の先、救済の射手は其処にいた。

「セキレイが『弱いものいじめ』とは何事ですか！ 恥を知りなさい！」

弓に矢をつがえた少女が、僕の先にいる卯月を捉えていた。

改めて認識すると、口調や風貌もさる事ながら、その少女自体が時代錯誤を起こしていた。

まずは巫女服。赤い袴に袖の部分がカットされた機能性重視の胴着。手には指を保護する為の『ゆがけ』を嵌めて、左手で弓を、右手で弦と矢を引き、構えたまま。姿勢は非常に美しい。足元は草鞋を履いて、彼女だけ時代が二百年ほど遡ったのかと思っただよ。

卯月はその少女を認識すると、僕の時とは違った雰囲気を漂わせ始める。これはそう 闘争の空気だ。互いに命や誇り

を賭けて闘い争う空気だ。端道を電柱の影に隠れさせると、卯月は深く腰を落として拳を構える。二人はどうやら戦うらしい。そしてハブられた僕は
その間にゆらりと、ふらつきながら割って入った。

「そこの方！ 邪魔です、退きなさい！」

「申し訳ありません。彼女……………セキレイが絡んできた以上、これは既にセキレイ同士の話。ただの一般人の貴方には関係のない事なのです……………そこを退いて下さい」

「……………今、弱いものって言った？」

「今、弱いものって言ったよね……………」

私とセキレイの間に立つ彼は、ゆらゆらと立ち上がって私に問いかけてきた。

私も二十mほど先のセキレイも、それには答えない。そんな気は微塵もない。今は目の前の彼女を倒す、セキレイとしてそれだけを考えれば良い
そう思っていた。彼が、そのセキレイ
に対峙するまでは。

「ちよつ、な、なにをしているんですか！」

「うるさいなあ……………僕は弱いものじゃないのを証明するだけじゃあないか。それに彼女に先に勝負を挑まれたのは僕で、まだ決着も着いてないのに勝負を横取りとは……………中々浅ましいねえ、君」

「貴方、最初の一撃で肋骨にヒビが入ってる筈です。動きを見れば解りますよ……………そんな身体で戦うおつもりですか？ 私は人間以上の力で貴方を徹底的に叩きのめす事になりますか」

ゆっくりとした調子で彼はセキレイに相對し、彼女と同様少し腰を落として構える。右平手を正面に、左拳を腰に添え、脚を前後に開いた構え。まるで、正面から何かを受け止めるかのような構え方。

「我流拳闘家、虚刀流想像者・白羽黒人
る」

推して参

名乗ると共に、彼の空気が一変する。私はまだ知らないがこれが

殺気。もしくは、覇気。

肌を刺すような緊迫感と身体への重圧。彼の表情は見えないが、きつと険しく真面目な表情に違いない。心無しか、私は身震いしていた。武者震いじゃあなく、これは恐怖の震えだ。

「仕方がありませんね……………葦牙様、もうしばしお待ちを」

「おう、お前の頼みなら待ってやる。負けんなよ卯月、お前は最強なんだからな」

「……………はい」

羨ましい
いと葦牙あしかびという存在。

私が敵である二人に抱いた感情。セキレ

愛し愛され、想い想われる二人。縁えにしより決められたその運命さだめに導かれ、出会うべくして出逢う二人。私もいつかそうなりたいとらしくもなく、嫉妬してしまう。

だが、自分で言うのもなんだが

私は弱い。

セキレイの中では近接戦闘が不得手と言うのは中々に痛い点だ。セキレイの大半は戦闘向きで近接戦闘を得意とするが、私の得物は弓矢、近接戦闘には程遠い武器とスタイル。これで勝ち残れるのかと聞かれれば否と答えるしかない。

本来ならもっと早くに脱落してもおかしくはない。だが幸か不幸か私は隠れるのが得意で、ずっと逃げ回っていた。弓兵は目がいいから、人を見分けるのが得意なんです。だからしばらく　　そう、葦牙を見つけるまではそうするつもりだったのに。セキレイに戦いを挑む彼を見て

居ても立ってもいられなくなった。

彼を、助けたくなくなったのだ。

臆病な自分よりも弱い、人間な彼を。助けたくなくなった。

だが彼は満身創痍なその身体で、再びあのセキレイに対峙する。死ぬぬかも知れないのに、彼は自分が『弱いもの』と言われる方が嫌なのだ。馬鹿馬鹿しい、全く以て馬鹿馬鹿しい限りだ。だが何故だろう　　そんな彼の背中に、胸が高鳴るのは。

そんな彼の背中を、もっと見ていたいと思ったのは。もっと一緒にいたいと思ったのは。

「セキレイNO.59、卯月うしつき。参ります」

「ああ、来いよ。ただしその頃にはアンタは八つ裂きになってるだらうけどな」

文面をそのまま声に出す。言う側になるとワリと恥ずかしい……………
が、伊達や酔狂でこんな小説の中の絵空事の武術をやってる訳じゃない。これは僕からすれば理想的な武術、剣術、拳術なのだ。今の時代に強者と戦うならば、拳と武器の両方に対応出来なければならぬ。そんな折、この小説『刀語カタナガタリ』がアニメ化するという話を耳にした。

そして見て
めた武術だと。

直感で理解した。これこそが、僕が求

以来、僕は主人公『鑓 七花』の動きを現実的に再現し、そして形を造り上げていった。現実でやるとなるとアニメみたく激しい衝撃は出ないが、それでも人間を殺す程度の破壊力は持ち合わせている事に気付いた。

放送していたのは2010年だから、ざっと十年前になるのか。だから僕は十歳の頃にこの武術に、この物語に出会い、これを現実で『完了』させる事を目標にした。母親が格闘技が好きでそれが祟^たつて父親も同類化、そして僕に五歳の頃から格闘技を学ばせたのだ。空手からボクシングから柔道から、身近なものは手当たり次第。その最中にも僕は虚刀流を鍛え続け、そしてひとまず完成した。それが二年前の話だ。学生としての生活の傍らでの武術家生活は中々に厳しく、夜更かししても早起きで鍛錬、アニメを見たらすぐに鍛錬の日々。

それが十年続き、両親は世界を回る仕事兼格闘技巡りの旅に出た。そして今 僕は自分を試される時がやって来たのだと知る。初戦の相手は人外染みた身体能力の美少女、通称『セキレイ』。僕は心身を研ぎ澄ませ、一振りの刀になった。

「はあツツツ!!!!!!」

卯月は駆け出し、回し蹴りを放った。僕はそれを身体を屈めて回避し、そのまま左手刀で斬り上げる。

技名『雛罌粟^{ひなげし}』、原作なら直に当たれば身体が斬れるほどに鋭い技だが、真人間の僕には無理なのでまあ普通の手刀だ。だが相手は超人セキレイ、雛罌粟を空中で身体を反らして回避しそのまま着地、再び攻めに転じた。

「はあっ、はあっ……………貴方、本当に人間なのですか。戦闘タイプのセキレイに素手で渡り合えるなど聞いた事がありませんよ」

「おやそうか。なら今日から僕がその第一人者だ。覚えときなさい。……………とはいえ君達セキレイは秘密主義な存在だから、それを知った僕はいずれにせよこうなる運命だったのかも知れないね」

「ふんっ、なら疾く死になさいツツツ！！！！！！」

ドンツツツ！！！！！！と脚で地面を蹴る。ただそれだけの動作でコンクリートが抉れる。

その爆発的な慣性で僕へ向け突進し、打撃
ではなく、体当たりをしてきた。頭部で胸を叩き、両足を持ち上げて身体を倒してきた。知っているだろうか
これは柔道の

マイナー技『もつてが双手刈り』だと。

相手を転こけさせるにはもつてこいの技であり、不意を突かれた僕はそのまま背中からコンクリートに叩きつけられる羽目に。肺の空気が強制的に吐き出されるが、意識は目の前の卯月にのみ向け続ける。僕を倒した彼女は僕の胸に馬乗りになり、拳を握る。

「これなら避けられないし逃げられない……………覚悟です」

「（不味い……………！ 試合に水を差すようですが、計画で一般人に死なれるよりはまだマシです。良識あるセキレイとしてそれだけは阻止しなければ……………ならせきれいもん鵲鳩紋を潰すしかありません……………
…御免！）」

巫女服のセキレイは矢をつがえ、卯月の首筋のちよつと下を狙う。何故解ると聞かれたら、意識の先がそこに向いてるっただけだよ。僕はそれを左手で拒絶を示す。弓矢を得物にしてるんだから目はいい筈。案の定、彼女は弓矢を下げた。そしてそれと共に卯月は右腕を掲げ、ギョツと拳を握る。そしてそれを振り下ろすと

ヒュボツツツ！！！！！！ という空気の裂ける音が聞こえた。

「か、ツハ

ツ……………」

「虚刀流奥義

鏡花水月きょうかすいげつ」

メリツ と、卯月の鳩尾に僕の掌底が打ち込まれる。

虚刀流奥義『鏡花水月』、腰の捻りと身体の捻りで超高速の掌底を繰り出す奥義で、その動作を差し引いても全奥義中最速の出と当たりであり、僕が最も愛用する技でもある。そして卯月の拳は僕の鼻先数センチのところまで止まり、その上体がぐらりと傾いて僕に倒れ掛かる。

まとめると 僕が卯月の拳を喰らうよりも先に彼女に奥義を決めたというだけの話だ。

「……………た、ただの掌底で、セキ……………レイの、私が……………」

「『ただの』は余計だよ。僕の奥義なんだから、馬鹿にしないでほしいね」

「悔しい、ですね……………ああ、初めての闘いで負けちゃいました

……………悔しいなあ……………葦牙様、ごめん なさい……………」

そう言い残し、卯月は僕の胸の上で気を失った。鏡花水月は殺す気で打ったから死んでる筈なんだが、彼女からはまだ鼓動を感じる。まさしく超人、常識が当てはまらない。こればかりは素直に驚いた。なお一般人に鏡花水月を当てた場合 臓器と骨組織が潰れます。

そして卯月はワリと巨乳だった 彼女の胸に溺れて

いるのも悪くないが、そうし続ける訳にもいかない。彼女を起こし、抱き抱えるとそのまま端道の下へと連れていき、彼の前で横にさせ

「……………卯月？」

「気絶しているだけだ。いずれ目が覚める」

「……………ふざけんなよ。全部テメエのせいだ、テメエがいなけりや卯月はこんな事にはならなかったんだ！ テメエがいなけりや、卯月は戦う事なんてなかったんだツツツ！！！！！！」

「キレんなよ」

ガスツツツ！！！！！！ と、端道の頬を殴りつける。結構全力でぶっ倒れた彼の胸ぐらを掴み上げ、面と向かってこう言い放つ。

「少なくとも卯月はお前を守る為に戦ったんだ。ならお前は彼女が勝っても負けても誇るべきだ、褒めるべきだ 負け
ても誇れよ。それが守られる者の義務と責務なんだよ」

それだけ言うと、端道は涙腺が壊れたかのように涙を流し、卯月を抱き締めた。

彼も悪い人間だが、卯月を思う気持ちはホンモノだった、という事

なのだろう。それ故の涙。それが解ると、僕の彼の対する考えは百八百度変わる。『クズな男』から『愛妻家』へクラスチェンジだ。終わった
それを認識し、僕は帰ろうとした。緊張の糸がぶつりと切れると

どさり。

と、まるで糸の切れた人形のように身体が動かなくなる。

そして共に、肋骨に強烈な痛みが迸る。そういえば肋骨折れてるって言うってたっけ
そんな事を考えながら、痛みから

のショックで僕は気を失った。というかこれ、目が覚めても痛いんじゃない
眠りの中そんな事を呟いていた。

第二話 合縁奇縁

目が覚めたらそこは、一面白の世界だった
なんて厨二病なことは言わず、素直にここはどこかの病棟だと言っ
ておこう。

僕の腕には点滴の針が刺され、見た事も聞いた事もない薬品が僕の
身体に流し込まれていた。覚えている事は、僕はセキレイという超
人と戦って相打ちになったという事。そして臆気だが、どこかにへ
りで運ばれてきた事まで。

辺りには特に何もなく、ベッドと点滴台と僕と 巫

女服の少女セキレイがいた。黒のロングヘアを肩の辺りで二つに結った、
日本人らしい顔立ちの少女。じつと僕の顔を見下ろしながら、ぴく
りとも動かない。

人形のようなその雰囲気は、ちょっと不気味だ。そんな彼女は僕が
目を覚ましたと気付くや否や、僕に覆い被さるように顔を近付けて
くる。鼻先数センチの距離は、お互いの呼吸や鼓動が解るほどだっ
た。

「一つ聞きます」

「……………なにかな。出来れば離れてくれると話しやすいんだけど」

「……………貴方は何故、戦ったのです？ セキレイ中でも弱小の私よりもひ弱な、人間の貴方が」

なんだ、『そんな事』だったのか。

僕はてつきりこう、『貴方は本当に人間なのですか』とか『貴方には貴方の知らない過去があるのです』みたいな超展開を期待しちやっただけで、それは無いよね。うん、あつたら我ながら気持ち悪い。しかしその表情は本気そのもので、まるでテストの合格発表を待つ受験生のような感じがした。

そんな彼女に、僕は 真面目に答える事に、真面目に質問する事にした。

「君はさ、戦う理由って考えた事ある？」

「私は……………セキレイです。故に、私は葦牙様と婚くまで、葦牙様と嵩天へと至るまで戦う、そう心に セキレイの魂ほこに誓っています。それがなにか？」

「なるほど、理由らしい理由だね。ひどく真つ当な理由だ。素晴らし」

「……………何が言いたいのですか？」

「昔読んだ本の登場人物のセリフにね、こんな一文があつたんだ

『馬鹿馬鹿しい。戦う理由を考えるくらいなら、そもそも戦わなくていい』
これに僕はえらく共感してね」

「私は貴方の言う……………馬鹿馬鹿しい人間なのですか？」

別に君の事を馬鹿にした訳じゃない。

僕は理由を考えて答えるのなら、考えずに『素直に』答えれば良いんじゃないか、そう言いたいのだ。

「君達^{セキレイ}はさ　　葦牙の事が好きなんだよね？」

「……………ええ、そうですね。好き、愛、友情、尊敬、信頼、畏怖　　色々ありますが、結局のところ私達は葦牙様の事が好きなのでしょう」

「……………素直じゃないか」

「『そうあれ』と諭したのは貴方では？」

「……………かもね」

た服を直す。

数秒の沈黙の後、彼女は身体を起こして少し乱れ

そして気のせいだろうか。彼女が一瞬微笑んでいたのは　　ガ
チャリと、病室のドアが開いた。

「なんだ、もう目が覚めたのか。流石だな」

白髪の女性が、カルテを手に僕に近付いてくる。少女はぺこりと一礼し、窓際の椅子に腰を降ろした。

その女性の年齢は三十代半ばだろうか、それにしても美人だ。隣のセキレイの少女は可愛いだが、女性は大人らしい色っぽさやキレイさを漂わせている。そしてなにより、白衣はやばい。エロさが五割増しだ。女性は僕のベッドの横に立つと、カルテと僕をにらめっこしながらふむふむと頷く。

「で、話はどうまで？」

「すみません、高美さん。まだなにも話しておりません」

「そうか……………ま、丁度いい。君の名前は白羽黒人、合ってるな？」

「ええ、それがなにか？」

「最初に言うておく。なるべく抑えろよ」

……………？ なんの事だろうか？

とりあえず痛み止が効いているので、身体を起こすくらいは出来る。そして念のために、ポケットに忍ばせていた家のキーに手を掛ける。そして彼女がベッドから離れて数分後、再びドアが開き

「ぱんぱかぱーん！ おめでとぅくる」

ヒュンツツ！！！！！！ と躊躇う事なく、キーをその気色の悪い声をあげた男に投げつけた。

「ちょ、これはダメ！ アウト！ いくら私でも死ぬから！！！」

が
キーは扉の横合いから伸びた手に掴み止められ、殺害は失敗に終わる。

男、その名は御中広人。M・B・Iの社長であり、我が人生でこれ以上ないほどに憎みきっている人物。御中は咳払いをすると、若干足が躍っているような気もするが、アハハとムカつく笑い声をあげて中へと入ってくる。

……………投げるものか殴るものはないだろうか。

「うるさいなあ、静かにしないと口にTNT突っ込んで吹っ飛ばすよ。」

「ぶぶっ、なるほどねえ。これは確かにセキレイを倒してきたって

のも領けるかな」

声は、病室のドアの陰からだった。声の主は勿体ぶる事無く、すぐに姿を現す。

一言に言えば　黒。どう表現すればいいのかと言えるほどにどす黒い、真っ黒な女性だった。

真っ黒な振袖　　なのだが丈は異様に短く、最早ミニスカートの領域　　にあまつさえニーソックス。そして袖を通しておらず肩に引っかけた羽織や腰に携えた刀。そして銀灰色の長髪に

濁りきったような、穢れけがきって穢れけがしかない澱みなど無い、
穢きたなく澄んだ目。

「からすば烏羽……………」

白髪の女性　　高美さんはそう彼女を呼んだ。

銀灰色の髪の女性　　烏羽は、笑顔のまま僕に近付いてくる。

目線だけを少女に向けると、少女は心無しか震えているように見えた。烏羽は彼女らにとって、恐ろしいセキレイなのだろうか。僕にはそんな風には見えない。むしろ

「いやあ、まさか君がこのセキレイけいかく鶺鴒計画に関わる事になるとは夢にも見なかったよ」

「僕も……………今後貴方と顔を合わせる機会があるとは思ってもみませんでしたよ」

「社長と彼は知り合いかい？」

「知り合い以上家族未満だよ、No.4、烏羽君。だが、繋がりはいくつもない」

否定は出来ない。少なくとも、僕はこの男と小さい頃にある用件で関わった事がある。

小さくもあり、大きくもあるなんでもない物語。だが僕には大きすぎて、言葉では語れない物語だ。彼には小さな小事でしかなかっただろう、だが僕にはそれが人生の分岐点とも言えるほどに大きな事だった。そう、まるで夢のような出来事だったんだ。

「ではまずは
君が関わったこのプロジェクトの事を話
そうか」

「計画………これは実験かなにかの一環なのかい？」

「遠からず近からず。このプロジェクトの名は
鶴鴿計画。
再び神々の世をこの時代に呼び戻す為の戦記だゲームよ。戦うのは彼女らセキレイとその主たる葦牙、セキレイと葦牙は己が絆と愛を賭けてこの闘いを勝ち残らねばならない………ようはバトルロワイヤルだよ」

「貴方らしい馬鹿馬鹿しい話だね。でも
現実だ」

「そう、これは紛れもなく現実だ。現に、私の隣と窓際の彼女もそうだ。彼女らはセキレイだよ」

改めて彼女ら セキレイをまじまじと見つめる。

烏羽は露骨にセキレイと解るから仕方がないとしよう、だが少女に
関しては全く解らない。極々普通の女の子、という感じなのに実際
はあの時の彼女・卯月と同じセキレイだなんて、正直信じられない。
そしてこの男の今の話から察するに これは大人数
でのバトルロワイヤルだ。

「……………セキレイの数は？」

「ほお……………『何故自分が』ではなく『セキレイの数は』か……
……………最早抗う事もしないのかね」

「貴方の言う通りなら、僕は既にこの計画の一員だ。それも『葦牙』
つていう闘わない立場じゃあなく、どちらかと言えば戦う『セキレ
イ』の立場に近いね。如何せん、僕はセキレイを倒しちゃったんだ
から」

そう あそこで素直に尻尾を巻いて逃げてしまえば良かった
んだ。

不様でも不恰好でも羞恥であろうとも、逃げて普通に忘れてしまえ
ば良かったんだ。

もつと言えば、僕は卯月にあのまま気絶させられるか、少女に助け
てもらえば良かったんだ。そうすれば僕は『ただの被害者』で済ん
だんだ。だが遅い。僕は既に『加害者』『当事者』になってしまっ
たんだ、僕の周囲を廻りながらも決して触れる事のない『運命の輪』
に触れて、自ら巻き込まれに行ったんだ。

だからこそ、抗わない。受け入れ、認め、理解し、受諾し、学習し、

肯定する。否定は断じてしない。

「ではセキレイの数を教えよう　　総数百八羽の小鳥達は今、この新東帝都に羽ばたいている。君の責務は、君の義務はこのセキレイ達と闘い、勝ち残る事だ。そして君もいつか出逢うだろう、出会おうべくして　　君のセキレイに」

「僕の　　セキレイ……………」

「なるほどねえ……………知らざるは及ばざるが如し　　ホントに何も知らなかったんだね」

烏羽は僕にうんと近付いてくる。こう、面と向かって。

言葉の例えじゃなく、向き合っているんだ。目と目、鼻と鼻、顔と顔。そして心と心が。

互いに笑みが自然と溢れて、クスクスと笑い出す事から始まらないと思つてたけど、これはいいコミュニケーションになるね。そして一頻り笑い倒すと、彼女はそつと僕から離れていった。

「いやあ、こんなに面白い人に会つたのは久々だよ。笑わせてもらった」

「こちらも、だよ。烏羽さん、また縁があつたら」

「そつだねえ、また縁があつたら」

殺し合おう

いつか必ず。

彼女はそう言い捨てて病室を去っていった。似たり寄ったりという言葉が今日ほど愛しいと思った事はない。烏羽と僕がここまで似てるなんてね。求めるが故に、なにかが欠けている。

否 欠けているが故に、失ったが故に。いつまでも無くしたモノを欲し、求めるのだろう。

話が反れたね 僕は御中に鶺鴒計画について更に聞き出そうとしたんだが……………

「アイツは？」

「済まない、知らん内に何処かに行ってしまった……………」

逃げたな。あのクソメガネ。ヒーロー被れ。

女性 高美さんはなんとも申し訳なさそうな顔で軽く頭を下げてきた。そんな事はしなくてもいいのにと、遠慮の意志を示すと苦笑いで返された。そういえばこの人の事は確か、母さんの話から聞いた事があるようなないような……………まあともかく。

「あの、高美さん　　でいいんでしょうか」

「ああ、それでいいわよ。別に名前の呼び方なんてあんまり気にしないから好きに呼んで」

「じゃあ高美さん　　僕の事はどこまで？」

「一通り。詳しい事は知らないけど、君が御中と幼少の頃から関わってたのは今日知った」

「……………そう、ですか。それは良かった。僕の事を知ったらたぶん高美さん、御中を殺しますよ」

「今でもたまたまに殺しそうだよ。冗談抜きに。あ、それともう退院してもいいわよ。傷は治ってるから」

治ってる？　そう言われて、肋骨の辺りを擦さすってみる。

痛んでたのは左下の二本　　なんだが、触っても全く痛まない。いつもの肋骨だ。

服は戦った時のままで、別に汚れたりはしていない。返り血とかシミとかの意味合いで。靴を履いて身体を軽く動かすが、全く以て支障がない。寧ろ十全万全じゅうぜんばんぜんだ。心なしか、関節や筋肉痛まで治ってる気がする。

「流石に二日も寝るとよく治るわね。もう完璧じゃない」

二日もつて……………二日も寝てたんかい。僕の身体弱ツツッ！……………！

いやいや、これが普通なんだって。セキレイに殴られたら『化物語』の三章三話みたいな事になるかもしれないし。こつ、蹴りで腹に風穴がボカンツ！と開いたり。にしても『化物語』は十年前の作品だけど、あれは面白いよね、作者の言葉遊びが巧いんだろう。

「という事は退院してもいいんですか？」

「ああ、全然OKだ。治療費は御中のポケットマネーから支払う事にしてやるよ」

「
ありがとうございます。高美さんの事、好きになれそうですよ」

「残念だな。これでも二児の母親なのよ」

2020年、桜の舞い散る春の事。白羽黒人、初恋かもしれないが散る。

高美さん母親には見えないんだけどなあ……………どっちかって言えばバツイチ。夫が病気が事故で死んで、若くもて余したその身体を僕が優しく止めよう。虚しくてバカらしい。なにより未練がましい。

時刻は昼の午後二時。お腹も減ったから作り置きしていたカレーを……………つて、二日も経ってるから腐ってるか。二日振りの自宅での最初の作業は『腐敗したカレーの処理』からか。いやだなあ……………で。も一つ気になる事がある。

「なんで君がいるのかな……………」

「おや、不服ですか？」

僕の後をぴったりとくっついてくるセキレイの少女。三歩後ろを同じ歩幅・同じ速度で歩いている。

そんな慎ましい少女の背中には二mを超える『日本弓』と矢の束が布に包まれて隠されている。隠しきれないのは言うまでもないが、カモフラージュ程度にはなる筈だ。僕が度々ピタッと歩みを止めると彼女もピタッと止まる。振り返ればお辞儀。一步近寄れば一步退く。

バカにされてるのかな、これ。それにしては……………視線が『熱い』。

「えっと、もう僕の家なんだけど……………君はひよっとして見送り？」

「……………何を言っているのですか」

我が自宅、地域でもちよつとだけ有名な大豪邸。その洋風の門の前で、彼女を改めて直視する。

が、今回は頭は下げず、静かな足取りで僕に近付いてくる。ああ止めてよ、そんな艶めかしい表情で僕を見るなよ……………ここは現実でゲームやマンガやアニメの世界じゃないんだよ。そんな簡単に恋愛^{ラブ}が立ったらおかしいじゃないか。

「まさかこの状況で、高美さんの話を聞いて尚^{なお}先が読めない、とは言いませんよね？」

「い、いやぁ……………なんの事やらわかりませんの事よ？」

歩み寄ってくる彼女から逃げるように後ずさっていく。

が、背後には家の門しかない。ガシャンツツツ！！！！！！と背中から門にぶつかり、逃げ場を無くす。ゲームではこんな状況を『詰み』と言うがそんな生易しいモンじゃない。『死ぬよ』と書かれた看板を跨いで先に進むしかない、みたいな絶望しかない。

追い詰められた僕に、追い詰めた彼女はそつと手を伸ばす。左手の

行き先は僕の硬直気味の首裏、右手の行き先は僕の引きつってる頬。カミングアウトだが、セキレイには『羽化^{うか}』という現象が存在するらしい。葦牙たる人間のDNAを撮取する事でその葦牙と婚^くぐ

つまりは婚約みたいなものと思ってくれていい。

そしてその最も簡単でセキレイの間でも一番オーソドックスな方法は

ちゅっ。

唇と唇が重なる。暖かく甘い感触。ほのかに香る彼女の匂い

彼女からは甘い匂いがした。華の香り、これは百合の香りだ

ええそう、キスです。なんの変哲もないキスですよ。

キス、ベーゼ、接吻、口吸い。

科学的に言うなら『粘膜接触』だ。数秒のキスの後、彼女に変化が
顕れた。

「んっ……………」

光の翼、というのが一番的を射た物言いだろうか。彼女の首筋辺りに光が灯り、そこから翼が広がった。

幾重にも羽根を広げた鳥。朱色の光が彼女を包み、数秒後に光は収まり、彼女はなんと幸せに満ち満ちた表情で僕から離れる。先ほどと同じように三步後ろに下がり、ぺこりと一礼。ななめ45°のキレイなお辞儀だ。

顔を上げるとそこには僕がこの二日

寝てたから実質一日な

んだが、その間には見た事のない笑顔を見せてくれた。可愛らしい、十代の少女の無邪気な微笑みはダメージが大きかったと言っておう。

「NO.37、弓のセキレイ・魅^み弦。不束者ですがどうぞ

幾久しく」

第三話 数日後、彼氏彼女

「おはよう魅弦^{みづる}」

「おはようございます、黒人」

「朝は七時だ。けど早速怒ろうか」

「なにを？」

「人のベッドになあに勝手に入っとんじゃあああああああああああ
ああッッッ！！！！！！！！！！」

「近所さまがないのはこつても有難いのか。朝っぱらから叫んでも

問題ないね。

卓袱台返しちゃぶだいの要領でベッドの布団を返し、ベッドから魅弦を転がして頭から落とす。しかしセキレイの彼女は何の事は無しに起き上がり、寝起きのぼーっとした目で僕をじとつと見つめる。

「そんな庇護欲を掻き立てる顔してもダメエ！ とりあえず正座
！！！！！！！！」

「え、あ、はい」

素直なのはいい。実によろしいね。素晴らしい。

座布団を投げつけると丁寧にキャッチして膝に敷いて正座する。背筋が伸びてキレイだ。じゃなくて。

「はい、白羽家家長・黒人が決定した事項は？」

「えと……………」 『寝床に忍び込まない』 『人前であまりベタベタしない』 『僕にもあまり肌を見せない』 『逆セクハラしない』
でしたよね。合ってますか？」

「うむ、間違いない。だが早速最初の事項を破っているね」

「すみません、黒人さま。一度は貴方の寝顔を見なければと、我を忘れてしまい……………」

「そこはいい、寝顔を見たいのは女子の本能に近い衝動だから許容
しよう。だが　　なあって露骨に着物の胸元やら帯やら足元を

「……………」

キッチンへ向かおうとドアに手を掛けると
ギョツと、背中から抱きつかれた。 なにも言わずに

胸が当たってるけど、意図的じゃないから了承。むしろ来い。並乳でもふくよかだよ柔らかいよ。そんな彼女はスリスリと背中に頬擦りしてくる。いや、じゃれてるのか、これは。そんな温かい人の感触は、随分と久し振りに感じられた。

「黒人さま、今日も一日よろしくお願いします」

「(やってる事派手なのに言ってる事が普通なんだ……………) うん、よろしく。魅弦」

x

x

「虚刀流奥義『柳緑花紅』 ツツツ!!!!!!」

空中に放り投げた空のビンが目の前に落ちたとき、拳をそのビンの底面に叩き込む。

するとどうだろう、ビンの中に事前に入れておいた筈の炒った蜆の殻『だけ』が粉々に砕け、粉末状に姿を変えた。拳の衝撃で数秒宙を浮いたビンは再び重力に従い落下、それを爪先で小突いて再び宙に上げて右手でキャッチする。

その様子を見ていた魅弦は、怪訝な目で僕を睨んでいた。

「うぬ、我ながら調子は万全……………日々これ、怠慢墮落はなしだね」

「黒人さま、今のは？」

「我が七つの奥義が一つ『柳緑花紅』。対象の内部のみに衝撃を通す鎧通しという技だね。解りやすく解説するなら、物の中身だけを破壊する技と言えば解るかな」

「なるほど。それで卵を殴ると黄身が先に潰れている不思議な卵の誕生、という訳ですか」

「例え話の例えのレベル小さッッッ！！！！？？？？」

まあ僕も人の事は言えないか……………なにせ蜆のふりかけを作る為に奥義使ってるくらいだからね。

でも美味しいんだよ、これ？ 蜆と一緒に味噌汁にすると、味噌を入れる前に炊いたら蜆の出汁が殻に染みてていい感じに よ

し、今日は和風海鮮パスタにしよう。蜷アサリと若布ワカメと細く切った木耳キクラゲにこれを振り掛けて……………くくく、美味に違いないぜ。

「黒人さま、そろそろガン ムの時間では？」

「はっ、しまった！ ケーブルテレビで再放送の『ガン ムUC』……………見逃せんで、ガン ムッ！」

夕食を放棄、貝殻はキッチンへ。そして……………Blu-ray起動！
白羽黒人、目標の録画を開始する。見せてやる……………M・B・I
の過学力、二百四十倍速の録画を！

ちよつと先日のお話をしようか。これは僕が魅弦くなと婚くいだ日の事だ。
あのあと魅弦は『お世話になってた人に挨拶してきます』といつて
何処かへ行ってしまった。ならばと黒人は自室の『イケないモノ』
を処理すべく猛ダッシュで部屋に向かうのだが

「ん？ あ痛

」

背中に、突如痛みが走った。最初はチクリと針で刺されたような傷みだった。だが階段を登りきった次の瞬間、頭の余裕がみんな纏めて吹っ飛んだ。

「

」

この日ほど、近所に人が住んでいない事に感謝した事はなかった。だって聞かれたら間違いなく、救急車か警察を呼ばれるレベルの叫び声だったから。

悲鳴、絶叫、雄叫びと言つてもいい。その痛みは身体を『とぐる』を巻いて駆け回り、指先から毛根の一つまで遜色無く『全身』に痛みと灼熱が迸る。壁に身体を叩きつけ、床をのたうち回り、叫び声をあげて暴れまわる。怒りとかそんな大々的な理由なんて無い。ただ痛くて苦しくて、それだけでここまで暴れられる。

「なん、だよ……………これ、は……………」

起き上がり廊下の突き当たりに備え付けの大鏡で自分の身体をまじまじと見る。

そこには
魅弦と同様の光の翼を生やした、光の翼を伸び伸びと広げた僕がいた。

訳が解らない、意味が解らない、今が理解出来ない、状況が説明出来ない。
とにかくこの痛みはこの光の翼がある事と伴っているようではあった。
それが理解出来たのは、翼が消えると共に身体の痛みが全て^{じつじつ}消え去ってくれたからだ。

平常心を以てようやく理解出来たんだ。

尚更慌てて服を脱ぎ捨て、自室から手鏡を持ち出して大鏡と合わせ鏡の要領で僕の背中を見る。身体を無理に捻る事なくしつかりと見据えたその背中には、正確には首筋の下辺り。そこには、彼女

僕が相對したセキレイ・卯月の脚に描かれていたのと同じ紋様が描かれていた。だがそれはすうっと消えて、そこにはいつもの僕の背中があった。

女性よりも肌の瑞々しさには自信がある、僕の背中。ちょっと筋肉質な、僕の身体。

「これも貴方の仕業、という事ですか……………御中広人」

窓からはあの男がいる巨大な塔、悪のラスボスの城と例えてもいい。それが聳え立ち、まるで全てを見下しているようにも見えた。彼はこんな今の僕の事すら逐一確認をしている事だろう。何故こんな事を、なんてテンプレな質問はしない。ここに来てそんな馬鹿馬鹿しい質問はする気にならないよ。

「欲しければ掴み、奪い取れ……………母の教えが活きる日が来ようとはね」

いいだろう御中、人で遊びたいなら僕が相手をしてやろう。
その代わりアンタが負けたら
アンタの命を奪ってやる。

「か
カッコ良すぎます……………勇者王」

ものっそい目をキラキラさせて、まるで夢見る少年のように勇者王を見ていた。

いやいや待ってよ、君この間まで研究室でインテリちゃんだったんだよね？

なのになんでそんなに大衆文化アニメに馴染んでんのさ。しかもDVDの中からわざわざ勇者王を選ぶとか、通過つうぎて笑いそうになる。あまつさえカッコ良すぎますって……………君は女の子でしょーが。せめてプリキュアとかセレクトしてよ。もしくはセーラームーン。

僕はプリキュアとおじや魔女とナージャをわざわざDVD全部買って見たからね。金は惜しまないのさ。

「黒人さま、他には……………他には勇者系じゆうけいはないんですか？」

「残念ながらないんだよねえ……………僕は異端者だから、勇者系じゆうけいで好きなのはガオガイガーだけなんだよ。ジェイテッカーとかゴルドラとかダグオンとかはCATVの再放送で見てたけど」

「そうですか……………残念です」

そう残念そうな顔をするなよ……………いろいろと布教したくなつちやうじゃないか。

そうだね、じゃあ次辺りは化物語でも見せてみようか……………いや待て、見せたら蟹の人みたいになりかねないぞ。もしくは小学生。毒舌暴言美少女or饒舌小学生……………どっちもいいが、出来れば前者。

「黒人さま、お腹が空きました」

「いや急だね……………ていうか、一時間前にドリア食べたところですよ？」

「申し訳ありません、私こう見えて燃費がとてつもなく悪いんです。でもって大食らいでなんでも食べるんですけど、同じものを一週間に二回以上出されたら暴れまわりますし。そして家事は苦手です」

「デメリットしかない!!?!??」

「あ。それといい忘れてましたが先日、黒人さまのゲームのデータ勝手に上書きしちゃいました。てへ」

「小娘、表に出ようか……………」

ガシツと頭を鷲掴み、そのまま窓の外へ放り投げる。

幸い庭は広く、端のほうで地味に野菜を育ててたりもする。親の趣味の『武器』をしまっ倉庫もあるよ。

しかしあえて石畳の方へ放り投げるのは愛の成せる技。しかし意外な事実が発覚。弓兵の彼女が、割と身軽だったという事。空中で一回転し、落下エネルギーを霧散させて、ふわりと石畳の上に正座。

いつのまに取ったのか、ソファア¹の上のクッションを莫座¹に使っている。こんの小娘がア……………

「甘いですね、黒人さま。セキレイたる私をその程度で倒そうなどとは」

「いいや君はダメな方のセキレイだ。それも一、二を争うくらいに」

「よよよ、黒人さまは私をコケになさいますのね……………というわけで、ちよつと出かけてきます」

「嘘泣きからの真顔やめろよマジぶつ飛ばすよ」

瞬間、彼女は足の跳躍力で家の外壁を軽々と飛び越えて、どこかへ行ってしまった。

彼女が敷いていたクッションを取るとその下には何と驚き、さらに新聞紙が敷かれていた。クッションを改めてチェックするが汚れはなく、傷もない。おのれ小娘、出来るようになったな……………とはさておき。

「夕食……………用意しとくか」

こうでも言わねば黒人さまのもとを離れられません。

あの方はおそらく過剰なまでの心配性ですから、ああ言った方がちよつど良いですよ。

というわけで皆さんこんにちわ。セキレイ？37、弓のセキレイ・魅弦みじるです。良しなにどうぞ。今日は先日言いそびれた『下宿先』への別れの挨拶をしに行こうかと思ひ、飛び出した次第です。言いそびれた理由は、なにやらあの方の城に新たに二人の入居者がやつていた事と、それがあまりに騒さわがしく関わつたらめんどくさそうなのでこの件は後回しでいっか、という軽いノリで決めた事なんですよ。住宅の屋根を八艘跳びのように駆け上がり、たどり着いたのはM・B・I本社から見て北側、住宅街の一角にそびえるちよつと年季の入ったアパート。名を『出雲荘』
般若がんにゃが住んでいる鬼やしろの社やしろです。

「誰が年増ですかあ？」

「ひびぢゅおおツツッ！！！？？？？」

背後に猛烈な邪気　　もとい怒気を感じ取り、逃げようとした
ら足を引つ掛けられてこけました。
おずおずと振り返るとそこには、この『出雲莊』の王にして般若の
正体、バツ一の美人家主、浅間美哉あさまみやその人がいた。どうやらお買い
物の帰りのようです。エコバッグの中はいっぱいです。

「しばらく帰らないから心配しましたよ？　どこに行ってたんですか？」

「いえ、その……葦牙さまに出会いました。婚いだついでに数日泊まってきました……」

「まあ、それはそれは……その方は、良い葦牙さまなのでしょうね」

「ええ、それはもう最高の葦牙さまです……家事が出来て、料理も美味しくて、美形だし、強いし、お金持ちだし……文句なんてある筈がありませんよ。そうですとも」

「……なんだか貴女が巫女服を着ているのがよろしくないような気がしてきました」

なにを仰るやら。清廉潔白、純真無垢、聖人君子とはこの私をおいで他にはいませんよ？

巫女服は勿論、セーラー服も騎士甲冑もお姫さまのドレスもドンと来いなパーフェクトなセキレイですよ？　似合わない服なんてある

の始末を」

「ふふっ、そう言うと思って先に片付けさせてもらいましたよ。私の部屋に風呂敷に包んであります」

「風呂敷ですか……………ダサイですねえ……………一応主婦だったんですからヴィトンとかGUCCIの一つでも無かったんですかねえ」

「明日は燃えるゴミの日でしたねえ」

平謝り、またの名を土下座。侍が困った時に使うと言われる儀式の一端　らしい。

というのも、この事を聞かせてくれたのは他ならぬ黒人さまなのです。

自信満々に『土下座は奥義だ、必殺技だツツツ！！！！』って
いっから使ってみたんですけど……………哀れみの目線しか
感じないのは何故でしょうか。とりあえず帰ったら黒人さま射つて
やる。

「ですが新しい入居者も来た事ですし、丁度いいみたいです。これも八百万の神々の巡り合わせか、はたまた只の偶然でしょうか」

「そうですね……………魅弦、困った時はいつでも出雲荘を」

「有難う御座います……………美哉。ですが……………私はあの人と、
葦牙様と勝ち抜いてみせます。この馬鹿げた闘いを。その時は……………
……………また一緒に暮らして戴けますか」

彼女の言葉は暖かい。彼女声は優しい。彼女の全てはまるで母親の慈愛のよう。

護られていればそれはそれは暖かく優しく傷一つつく事の無い日々をおくれるのでしょうか。

ですが、それでは私はいつまで経っても弱いセキレイのまま。彼女に護られなければ葦牙様と生きていく事すら叶わない、弱い者になつてしまう。そんなのは御免だ。私がまだ小さかった、神座島かみくわじまにいた頃と同じままだなんて
そんなのは彼女が可哀想だ。私が哀れだ。

『美哉おねえさま、魅弦も美哉おねえさまと一緒にみんなを護りたいです！』

『……………貴女はまだ雛鳥ひなどりなのです。今は私達おとなに護られていても良いですよ』

『じゃあ！ じゃあ私が大きくなったら、その時は美哉おねえさまと一緒にみんなを護つてもいいですか！？』

『そうですね……………お好きになさい。それが貴女の選択なら、私は何も言つつもりはありませんから』

『はいっ、美哉おねえさまっ…』

今こそ、あの時の約束を果たすとき。

この人と翼を並べ、この帝都を共に羽ばたき、またあの時のように

……………一緒にいたい。

今度は雛鳥ひなどりとしてではなく、一人の女メキレイとしてこの人と、葦牙様あしごさまと共に。

「そうですね……………お好きになさい。それが貴女の選択なら、私は何も言いつもりはありませんから」

「はいっ、美哉おねえさまっ！」

第四話 初仕事

「黒人さま、お小遣いを要求します」

「なら働けよ小娘^{ニート}。せめて家事くらい手伝いなよ」

昼食の野菜のごった煮を摘まみながら、目もくれずにそう言い放つ。やあこんには皆。空想武術『虚刀流^{きょとうりゅう}』の想像者、白羽黒人^{しはくくろ}、二十歳だ。そして目の前でアジの開きをはむはむしている黒髪の少女・魅弦^{みづる}は僕のセキレイだ。得物は二m超の日本弓。

「そろそろ、そろそろだよ。君にもなにか家事をしてもらいたいんだけどさあ、そこんとこどう?」

「とは言われましても……………私、家事は苦手ですからどうなっても知りませんよ?」

「料理でせいぜい暗黒物質ダークマターが出来る程度だろう？　ならそれ以外をしてもらうよ」

「すいません、掃除をしたら余計散らかって洗濯したら服が臭くなつてしまいますがいいですか？」

「オウノオオオオオオオオオオオツツツ！！！？！？」

尚更やらせる訳に行かなくなつたじゃないか……………クソツ、御中め。もうちよつと家事の出来る子に調整してやればよかったのにさあ……………全くクソメガネめ死ねばいいのに。

「あ、でもお裁縫は得意ですよ？　服からぬいぐるみからお任せです」

「どや顔してもデメリット庇いきれてないからね！？　寧ろデメリットに掻き消されてるからね！？」

「ちなみに下着は綿100%で手編みです。白ですよ」

「変なトコで清純派を主張した！？」

と、化物語バケモノカタリみたいな他愛のない会話が僕らの日常だった。

しかし、家事マスターな僕でも流石に毎日『路地裏賭博喧嘩』と家事を完璧に両立させるのは段々と難しくなっていた。そんな折である。テレビでふとニュースがやっていて、それはなんと摩可不思議な内容だった。

『えー、私は現在帝都都内にある植物園の上空にきています。ご覧下さい、この草々と生い茂った巨大な木々を！ これらは植物園内で異常繁殖した植物との事で、今日の午後未明に帝都とM・B・Iがこれの駆使に当たることを発表しました。ニュースをご覧になっている視聴者の中で植物園から半径五百m以内に住んでいる方々は、ただちに避難して下さい！』

というニュース。これはええ、間違いなく
イ絡みですよねえ。

セキレ

そして同タイミングで携帯に一通のメールが。送り主はM・B・I社長・御中広人その人である。ってゆーかアドレス教えてないのにメールしやがって……………高美さんになんか嫌がらせ代行してもらおっかなあ。

それはまあ置いて、メールの内容はこうだ。

『植物園にとつても可愛いセキレイがいますよ！？ 早い者勝ち！
？ 羽化させられるのは貴方も……！』

という挑発バリバリの内容でしたとき、おしまい と行きた
いんだが、それと立て続けに一通のメールが届く。送り主はタワー
を出る時にこっそりアドレスを交換した高美さんからだった。

『悪い、白羽君。御中のアホがまたやらかした………すまないが、君にもアソコにいるセキレイの保護に向かつて欲しい。今は黒服で覆面、炎を使うセキレイ「焰」^{ほむろ}が先に向かっている筈だ。御中の思い通りにさせたくないのは君も同じだろう?』

その話、ノツた。昼食を食べきり、ごちそうさまをして食器を流しに置いておく。

魅弦も僕の考えを理解してくれたのか、彼女の自室に置かれている日本弓を持ち出し肩に掛け、腰と背中に矢筒を背中と腰に掛けて完全武装モードの魅弦が誕生した。が、中身はバカでありアホ極まらないままだ。

「では、ちょっと食後の運動と行こうか。魅弦、準備はいい?」

「ええ、少しは運動しないとお腹回りや二の腕が余分にぶにぶにしていますから」

「それは由々しき事態だ。では魅弦のダイエットも兼ねて出陣」

キングクリムゾン

世界は消し飛ばす！

時間を吹き飛ばし午後は三時頃。場所は植物園前のM・B・Iの検問所前である。

銃器を持ったM・B・Iの私設軍部が装甲車で待機している様子を、僕は真つ正面から見ていた。隣には魅弦の姿はなく、彼女は現在ここから数百m離れたビルの上にいる。

ここで追記だが、彼女の弓の射程は『2km』である。遠距離から小型マイクでの通話で、彼女からの情報は逐一リークしている。彼女が『観て射つて』僕が『断つ』。これが僕らがセキレイ鵲鴉計画を生き残る為に考えた布陣だ。

「どうだい、魅弦。そこからセキレイの少女は見えるかい？」

『いえ、流石に森の中までは私でも……………少なくとも、そこから二百m先の樹木の密集地帯にいるのは確認出来ました。あと五十m後方からセキレイ二羽と葦牙らしき男性が一人、それと一緒に別の葦牙が一人、接近しています』

セキレイの少女の方は直感ですけどね、と付け足したがまあいいでしょ、そのくらい。

後方を振り返ると魅弦の言葉通り、ボンテージファッションに身を包んだセキレイが二羽とその葦牙らしき男性が一人。その背後に青年が一人、引き連れられるように歩いていた。僕は物陰に姿を隠し、様子を伺う事にしたのだが

ズバアアアツツツ！！！！と、二人のセキレイから紫色の雷が放出された。

予想してたけど本当にいるんだね、ああいう能力を使えるセキレイ。古今東西アニメやゲームには能力を使用するキャラが多数いる。五行属性や重力や音などの自然能力など、多種多様。そして今回は雷に行き当たったという訳で。彼らは憲兵を追い払い装甲車を適当に破壊すると、堂々と中に入っていた。

「……………魅弦、他のセキレイや葦牙ってあんなのばっかなのかな？」

「そんな訳ないでしょう。あの野蛮な二人を基準にしないで下さい」

いつの間に背後に、魅弦は指定したビルを降りてこちらに来ていた。まあ場所は分かったからいいけど。二百mかあ……………虫に刺されなければいいけど。

そして僕らもこの機に乗じて中へ入ろうとしたら　　ゴウツ！

と、突如赤い炎が巨大な壁のように僕らの道を遮った。そんな炎の壁が左右に割れ、その向こうから黒服の男が姿を現した。そうか、彼が高美さんの言っていたセキレイ……………

「セキレイNo.06、焰^{ヒヤ}……………だね？」

「へえ。僕の事を知ってるなんて君、中々情報通だね」

「いや、高美さんから聞いたんだよ」

「ご無沙汰してますね、焰」

「高美さん……………？ それに君の後ろのセキレイは魅弦……………じやあ君が高美さんが言ってた」

「はい質問。白衣で白髪でメガネで若作りの男は嫌いですか？」

「大嫌いだね。いつでも殺したいくらいに」

「僕もだよ」

数秒の空白、後に熱い握手を交わす。彼は覆面だがその上からも解るくらいに満面の笑顔。

僕もまるで懐かしい友人に出会ったかのような嬉しさに表情を綻はらばせる。男性の友達は少なかったけど、まさかその少数に男性のセキレイが加わるとは夢にも思わなかった僕でした。お互いに敵でない事を認識すると、すかさず携帯のアドレスと番号を交換した。

「いやあ、まさかこんな所で御中殺しの仲間に出会えるなんて……運命だね。それに魅弦とも知り合いみたいだし。運命としか言いようがないよ」

「こつちこそだよ。魅弦とはちょっと前まで同居人だったんだ。別れの挨拶は無かったけど……とにかく、高美さんには友人の紹介料でお礼を言わないとね。後でドンペリ空けてもらうけど」

ドンペリって……ああ、夜の仕事がホストなのか。なるほど納得。

だからイケメンでキザで炎使って覆面で顔隠してたりするのか。なるほどなるほど、ちよつとム力つく。でも夜にここに来てるってことは、今頃は順位とかピンチなんだろうねえ。

「では早速メガネの謀略を砕きに行こうか友よ」

「……………そうしたいのは山々んだけどなあ」

焰は僕達の背後、爆煙の先を凝視する。僕も人並み外れた視力で見てみると

いた。

かたや黒いメイド服とゴスロリ服を合体させたような、鎌を持った

『不思議の国のアリス』の“黒”アリスみたいな服のお姉ちゃんと、白い振袖を着崩し鎖を巻いた、オレンジの髪の女性。その額には真紅の鵲鳩紋せきれいもんが浮かんでいる。彼女らは僕らに相對すると、その足を止める。

「来たな『元凶』
No. 43、夜見よみ」

「ホホホ、いやですわあ、元凶だなんて。わたくしはただ葦牙に代わって、緑の少女を貰い受けにきただけですのに。これはこれは酷い言われようですわねえ」

「ねえ焰君……あのセキレイってひよっとしてブリっ子かな？」

「だろうね。『ホホホ』なんて古典的かつ嫌われやすい笑い方をする辺り、間違いないと思うよ」

「ちよつとお!？」

「二人とも、先に行ってくれ。夜見の葦牙は少々質が悪くてね……
…手に入れられるセキレイは誰でも手に入れようとするんだ。今回もそうだ……だから頼む。僕の代わりに、緑の少女を守ってやつてほしい」

うわあ……キザなのにメチャクチャカッコいい。いや、キザだからカッコいいのかな？

とにかくヤヴァい。こんなイケメンの頼みなんて、訊く以外の選択肢がないじゃないか。背後の通路を確認、一本道
とり
あえず別れの挨拶程度に、カッコよく決めてこの場を去ろうじやな

いか。焰君の一步前に歩み出し、中国拳法の内勁ないけいきこう功の要領で体内に氣を溜め、地面目掛け双掌打を放つ。

「虚刀流奥義

『飛花落葉ひなはくくわつ』 ツツツ！！！！！！！！」

脇で手を合わせる『溜め』の動作からはじまり、地面に双掌打を打ち込む。

直後。波紋のように衝撃が地面に伝わり、僕と背後の二人を起点に五メートル・百八十度の方向全ての『装甲車や公共物を除いた、地面だけが破壊され』、地割れのように砕けたコンクリートはまるで流氷のように隆起する。敵のセキレイ二人は突然の事態に後方へ飛び去り、巻き添えを食らう事を懸念してこちらへ近づこうとしなくなった。そんな事はないのに……………これは『指定した一部分だけ』を攻撃するのに特化してるんだから、彼女らが食らう事はまずないが、警戒には十分だ。
おまけに土埃ちちで互いの視界が遮られ、正確な位置は確認出来なくなつた。

「それじゃ焰君、また今度！」

「またお食事に連れて行ってくださいね」

「ふっ……………ああ、行ってらっしゃい」

最後までキザだなあ……………敬意を表するよ。

葦牙
見えないね。

か。あれが葦牙なのか？ 僕には人外にしか

だってそうだろう。ただの人間、ただの葦牙が『ただの掌底』でコンクリートの地面を五mに渡って碎くなんて馬鹿げてるとは思わな
いかい？ 普通ならまず有り得ない。セキレイとく婚いだ葦牙でも、
まして光と響の葦牙の瀬尾せお薫かおるのように『あの男』から特別な能力を
もらった訳でもないのに。

高美さんは彼を『ただの葦牙』と呼んだけれど、本当にそうなのか。
彼女は何か、嘘を吐ついているのではないのか。それも、この鵲つばき計
画にの根幹にも関わるほど重要な、異常な事を

「なんですの今は……………けどそれは後！ 秋津、焰は任せまし
たわよ！」

「あーっ、かがりさんだーっ！」

「ツツツ！！！????」

背後からなんと陽気な、悪く言うなら能天気な少女の声。

おそろおそろ振り返ると、やはり予想通りで思い通り。うちのアパートの新人り、佐橋皆人君さはし みなとのセキレイ、結ちゃんむすびだった。彼女は常に笑顔で、スタスタと僕に近寄るや否やマスク越しに顔を覗き込んでくる。

「あれ、人違い？ あ、篝さんかがりはマスクの人じゃありませんでした」

「（なんだろう、この変装に対する虚しさは……………）」

「お風邪ですか？ 気をつけて下さいねーっ！」

シュダツツツ！！！！！！ と足早に森の中へ飛び込んでいく彼女。たぶん、皆人君を追ってだろう。

そんな嵐のような彼女に、僕も廃棄ナンバーのセキレイ・秋津もただただ呆然としていて。

「……………風邪、なのか？」

「ちつがーっつツツツ！！！！！！……………強いて言うなら、風邪を引くのは君と闘った後だろうね」

「ヒラタいかなあヒラタ……………へラクレスかコーカサスでもいいなあ。大きいのがいいなあ」

「ヒラタ、へラクレス、コーカサス……………あ、クワガタとカブトムシですね。飼うんですか？」

「いや、売るね。たぶんデカかったら十万くらいにはなるんじゃないかな」

「今世間の純粹無垢な子供達の夢を叩き潰しましたよ……………」

え、そう？ ワリと普通な気がするけど……………アレはいい小遣い稼ぎだよ、いやホント。

へラクレスやコーカサスは日本にはいないけど、M・B・Iの事だから都内でこつそり繁殖とかさせてそうな気がするんだよねえ。森の半ば辺りで邪よこしまな心を露にした僕でした。それにしても広い、広す

ぎるよこの植物園。

たぶん十分くらい歩いてるけど、いつこつに緑の少女は見つからない。

道らしい道の形は残っているけど、それも何処へ通じているのやら。気分はRPGの主人公だ。

「ねえ魅弦。なんかセキレイ同士のテレパスイ〜みたいなのはないの？」

「セキレイは便利ユニットじゃありませんよ……………そこはかとなくは感じるんですけど、これはあくまで『かもしれない』か『虫の知らせ』程度のモノですから。信用性はありませんよ？」

「どうせ道が分からないんだ。ならちよつとギャンブルも悪くないだろ？」

「はあ。では　　ここから南南東の方角、距離二十七・九五m先……………です」

「分かってるよね？ 絶対位置とか分かってるよね！？ なに、レ―ダー！？ インテル入ってる！？」

パッポー。

それから数分後

「……………いたよ」

「……………いましたね。いちゃいましたね」

森の茂みの中からこっそり覗けば、まるでその少女を囲むように草木が絡み合っている。

そしてその中心に、まるで彼女を隠し、守るように。御中の言う『緑の少女』がいた。彼女は膝を抱えて、寂しそうに泣いていた。緑の、というよりは

黄金の少女。長い金髪に、白のワンピース。緑は彼女ではなく、その周囲が緑なんだ。

とりあえず焰君の頼みでもあるので、少女の保護の為に彼女に接近する。

「こんにちは」

「ひっ……………」

外に出るための穴から覗き込んで挨拶。返答は華奢な悲鳴だった。思わず哀しさで膝から落ちて、さあポーズ。その名は『orz』

ポーズ。

涙が溢れそうだ……………ああ、魅弦。頼むから横からジト目で脇を

ツンツンしないでおくれ。腫れ物をつついてるみたいで、どんどん胸が苦しくなる……………そして頼むから少女よ、僕を嫌わないで。

「……………だれ？」

「えっととりあえず、高美さんって知ってる？」

「……………たかみちゃん？」

「そう。僕は高美さんのおつかいで、君を助けに来たんだよ。君が本当の葦牙に出会えるようにね。僕は君に痛い思いをさせたり、怖い思いはさせない。約束するよ。だから其処から出てきてくれないかな？」

少女は泣きながら、こちらへと少しずつ近づいて来てくれた。

そして手が届く距離、僕からは手を差し伸べるだけで、手を掴もうとはしない。

何度か彼女の小さな指が僕の手を触り、怖がってまた離れる。そして十数秒後に、ようやく彼女は僕に気を許してくれたのか、僕の手を掴んでくれた。それはなんと華奢な、小さな手だった。

「ありがとう。君の名前は？」

「……………草野くさの」

「草野……………んじゃとりあえず、くーちゃんでもいいかな。くーちゃん、このまま一回外に出るよ。此処に恐あゝいお姉さんが

来てるからね。いいかな？」

「（コクコクッ！）」

「あら、そつは問屋が卸しませんわよ」

くーちゃんをお姫さまだつこ　　かなり軽かつたのはよく覚えてる。他意はない　　して外に出ようとした、このなんとも言えぬタイミングで。

デッデーンッ！　夜見が現れた！　相手は鎌を持っている！

「空気読むなよエセアリス！　自分の国に帰れエツツッ！！！！！！！！！！」

「探し回つてようやく見つけたらクレーム！？　わたくしの努力は褒められないのですか！？」

「褒めるかア！　都合のいい時だけテンプレ守ってんじゃねーよバカヤローツツツ！！！！！！！！！！」

「フツ、陰険女は虐められる運命なのですよ……………受け入れなさいな」

二人がかりで一人のセキレイを苛める……………あれ、なんだろう。ちよつと楽しいぞ。

とまあ遊びはここいらにしといて、だ。くーちゃんを魅弦に預け、一歩前に踏み出る。

そして今回の戦闘体勢は弐の構え・水仙^{すいせん}。脚を平行に大きく開き、両手を手刀にして脇に添える形の構え。なんで水仙かって聞かれたら、まあ……………気分？ だって相手一応鎌とか持ってるし。ってゆーかセキレイだし。

だが夜見はそんな僕をきよんとした顔で見つめ、数秒の空白。そして。

「……………ふふふふふ、おーっほほほほほほほ！」

「うぬ？」

「はあ、はあ、はああああ……………先ほどの貴方の攻撃。地面を砕いた時は驚きましたが、ですがそれでも！ ただのひ弱な葦牙が、セキレイたるこのわたくしに戦いを挑むと！？」

「ひ弱って……………地面砕いた時点でひ弱じゃないよね……………？」

「お黙りなさい！ いいですわ、そのセキレイを舐めきつた性根、叩き直して差し上げますわ！」

そうして、僕と夜見の戦闘は始まった。

次回、虚刀流対鎌のセキレイ

こつこつ期待。

「セキレイが葦牙を攻撃するとは何事ですか！」

……………なに、またこの流れ？ そしてなに、この子。巫女さん？
巫女っぽい服なんだけど、魅弦と違ってその袴はミニスカでニーソックスである。僕と夜見の間に割って入ったその少女は、僕に振り下ろされた鎌を白刃取り、ぴたりとその動きを止めていた。
この数十分後に知った。彼女は

結むすびという。

第五話 刀、夜を貫く（前書き）

のんびり書いてたら時間かっちゃったよ……………サーセン（汗）。
一部にオリジナルな観点がありますが、何卒ご了承ください承を。

第五話 刀、夜を貫く

過去に一度起こった事が、また起きている錯覚を覚える。人はそれを『デジャヴ』と呼ぶ。

僕は白羽黒人^{はくしやくくじん}。二十歳の青年だ。住居は帝都に建つ大豪邸。容姿は超・美青年。

そんな僕は今、デジャヴを体験している。場所は帝都都内の植物園
なのだが、その植物は『ある存在』によって爆発的に成長し、擬似的な樹海を作り出していた。そんな植物園の中心にて、僕が体験しうる過去の出来事とはなんでしょう？

- 一、神秘的な美少女に出会う。フラグなし
- 二、謎の美女に殺されそうになる。手持ちに武器は無し
- 三、謎の美少女に助けられる。ムチムチのばいんばいんだった

「セキレイが葦牙を攻撃するとは何事ですか！」

総じて僅か、十分未満の出来事でした。どこらへんがデジャヴってるって？

最後の三番、美少女に助けられるの粹さ。他は僕がついさつき体験した事なのさ。

目の前のセキレイの少女、名も知らぬ彼女は僕に振り下ろされた鎌を白刃取り。僕を庇うようにして夜見の前に立ち塞がる。だがやる気を出していた僕からすれば、人の闘いを邪魔されたうえに、それを横取りしようと言っただから、もう不快極まりない。

「むっ、結ちゃん!？」

「あ、皆人さん!」

彼女の葦牙、らしき青年が森の中から飛び出してきた。なんと頼り無さそうな、普通の青年。

そしてその後ろから続くように、装甲車を破壊したボンテージファツシヨンのセキレイ二人と、その葦牙が姿を現す。後方の三人はまづ夜見を一瞥し、次に僕から後ろの魅弦へと視線を泳がせる。

「無視しないでくださります!? くっ、このっ、離しっなっさい
いいッッッ!?!?!?!?!」

「危ないですよ、こんな物を人に向けて。折っちゃいましょう、え

いつ

「ぎゃあああああああッッッ!!!????」

夜見は悲鳴をあげて、刃先をポキッと折られたマイ・鎌を凝視する。そんな落ち込んで膝を突く彼女を、若干無視しながらセキレイの少女・結は葦牙・皆人君に駆け寄る。それと入れ替わりに三人は前に踏み出し、緑の少女を『所有』^{ほし}している僕らを注視する。別に青年は、力関係で付き添っている訳でもなさそうだし、悪い人間ではなさそうではある。

ならちよっと話し合ってみるのも悪くはないかな。早速魅弦にくーちゃんを………

「萌〜え萌〜えじゃ〜んけん、じゃ〜んけんポンツ！」

「あいこでもえ〜！」

「……………ナニやってんだよ君は」

「なに、と言われましたら……………じゃんけんですね。なんだかややこしい流れでしたので。しゃしゃり出るのも面倒ですから、くーちゃんと萌え萌えじゃんけんや『プチ・掌シユレディンガー』^{てのひらの}をしてみました」

「みーちゃんつよいも。くー勝てないもー!」

さつきまでの脅えていた儂げな少女は何処だよ……………魅弦、空気ブレイクし過ぎだろ。

そしてくーちゃん馴染みすぎ。メツチャ楽しそうじゃん、めっさ和んだるやん。なに、僕ら邪魔?

「おい青年、あのガキだよな?」

「はい……………間違いないです」

「くーちゃん、あのお兄ちゃん。たぶんくーちゃんの……………葦牙だよ」

「くーの……………お兄ちゃん」

一瞬の和みを、刹那に緊張に戻す。互いに前へ歩み寄り、向かい合う。

皆人君の後ろにはセキレイの結ちゃんが、くーちゃんの後ろには僕と魅弦が。なんだか家族の再会みたいな空気だね、これ。他人にしてみれば、別にそんな大それた事じゃあないけど、彼女にとつては運命の出会いに近い。

『出会おうべくして出逢う』

クソ御中の言葉通りだ。

ああ忌々しい、死ねばいいのに。

「あ、えと……………やっと会えたね」

「お兄ちゃん……………」

そして、二人はようやく出会えた。くーちゃんは皆人君に飛びつき、まるで仲の良い兄妹みたいだ。

くーちゃんの反応から、彼がくーちゃんの葦牙でまず間違いないだろうね。なら僕の役目は終わりだ、あとは彼と彼女達の問題、任せとさっさと帰りますか。今日はアニメなにかやってたかな……………

「ゆ……………ゆ、許しませんわ」

ガガンッ！ 夜見は生きていた！ さっきより強くなっているぞ！ 折られた鎌を握りしめ、折られた刃を脚で砕き、ゆらりゆらりと立ち上げる。

そんな彼女には今や殺意しか感じられず、ちよつと気圧されたのは内緒の話。魅弦も一応程度に弓に矢を掛け、戦闘の体勢を取る。皆人君達もそれを感じてか、結ちゃんが皆人君を庇うように構える。

三人は かなーり離れたところで、観戦を決め込んでいた。

「わたくしの愛しい鎌をへし折り、あまつさえ無視に無視を重ね存在を空気のように扱い……………その上で緑の少女を奪われた？ ふ、うふふふふふふふ ちョーシに、乗るなああああ

「さあ、まずは誰から死にたいのかしら!？」

「では結がお相手します! 自己紹介を」

すつと、腕を差し出し結ちゃんを止める。そして代わりに僕が前に出る。

構えは漆ななの構え・杜若かきつばた。クラウチングスタートのような、現代的な構え。

「虚刀流想像者・白羽黒人

推して参る」

「は? あはははははは………ただの葦牙が、セキレイたるわたくしに戦いを挑むと!? いいですわ、その舐めきった性根、叩き直して差し上げますわ!」

「同じセリフは死亡フラグだって知らないのかな?」

「寝言は寝て仰いなさい! いえ、わたくしが手ずから寝かせて差し上げますわ!」

「ただしその頃には、アンタは八つ裂きになっているだろうけどな」

わかってたけど、相手はどう足掻いても女の子なんだよねえ………
確率から言つと、百八人中・九十人以上が。

となると『対女性非戦闘主義』は今後しばらく、無効にしなきゃダメか………やだなあ、めんどいなあ。

だっただらせめて一瞬で、刹那の内に痛みを感じさせる事なく、夜見を倒す事にしよう。出来るだけ派手に、今後誰も僕に敵意を抱かぬぐらい派手に倒されてもらおう。ならここは一つ、最終奥義でもやってみるか。

「では遠慮なく、肉塊になってしまいなさいな、人間風情がツツツ
！！！！！！！！」

再度放たれる見えない攻撃。その衝撃で、攻撃が通ったであろう場所には土埃が上がり、後を引く。

まるで戦闘機の翼が空気を裂いて雲を生み出すかのように、その『行き先』を示してくれていた。方向は真つ正面と左方向下段より、同時のタイミングで。知ってる人は知っている、知らない人のために解説しよう。この構え『杜若』の特性は

「虚刀流 奥義」

「えっ」

『移動に関する、前後の徹底的な自由性』と『圧倒的な短時間での最高速度への加速』である。

スポーツにおいてもクラウチングスタートは、屈んだ際の体重を利用した、前方への爆発力を使用する走法。

原作ではこれで、前方に加速した後に後方へ一瞬で後退する、という荒業を成し遂げたが、今はそこまでする必要はない。見えない攻撃 改め加速した視界で認識したが、アレは『カマイタチ』

だ の隙間を掻い潜り、夜見の真つ正面・足元に潜り込むように飛び込む。

そして左手を照準に、夜見の鳩尾に狙いを定める。あとはやるだけ。

「きつ

」

咄嗟に後方へ跳ばうとする夜見の鳩尾に、一撃目を叩き込む。

虚刀流の七つの奥義を一度に叩き込む事から、主人公は“ああ”名付けたが、僕には理由もあると思うのだ。例えば、それぞれの奥義には特定の部位を、徹底して破壊する性能があると、僕は読んでいる。

吉いちの奥義 『鏡花水月』

対象の任意の部位への攻撃、牽制。

式にの奥義 『花鳥風月』

対象の胴体を破壊する。

参さんの奥義 『百花繚乱』

対象の脳を攻撃する。

肆よんの奥義 『柳緑花紅』
を破壊する。

対象の骨格、及び全身の内臓・血管

伍ごの奥義 『飛花落葉』

対象の皮膚組織及び筋肉を破壊する。

陸ろくの奥義 『錦上添花』

対象の四肢を破壊する。

漆ななの奥義 『落花狼藉』

対象の頭骨を破壊し、即死させる。

それらを絶え間無く、続けて打ち込む。

これが今の僕に出来る、最大の技。七つの奥義、これらを合わせて
こっつ呼ぶ。

「虚刀流

七花八裂！！！！！！！！！！」

掌底での打撃、手刀での刺突、膝を用いて顎への打撃。拳での打撃、
双掌打での発勁、手刀での横腹部への打撃。最後に跳躍からの踵落
としによる頭部への打撃。

その身体が打撃で浮き上がりながらも尚、手を、足を止める事なく
叩き込み、そして終了。嗚咽も悲鳴も、叫びも抵抗もなく、夜見は
力無く地面に顔面から落ちて倒れた。

「お粗末」

「（せ……………セキレイを倒しちゃった~~~~ツツツ！！！！
?????）」

皆人君、そんな化物を見るような目で僕を見ない
でよ。

僕も奥義が成功して、かなりリビックリしてるんだからさ。こう、ホラー映画見たときくらいに。

とは言うものの、頭の中じゃ形は出来ていた。力加減も、感覚も、打ち込み方も。後はそれを成功させられるだけの、馬鹿馬鹿しい程の筋力・腕力・脚力だけが難点だった。のだが、それはどういふ訳か解消されていた。

何もドーピングをした訳でも、チートコマンドを使った訳でもない。付け焼き刃で身体を鍛えても、これほどの力は出せない。まあ間違いない。あの時の、光る翼が関係しているんだろうね。

すたすたと魅弦は僕に歩み寄り、袴のポケットから何かを取り出して、僕の手を直に握らせる。

「黒人さま、お疲れさまでした。はい、ご褒美のキャンディ」

「イチゴミルクじゃないとダメだよ」

「チツ、好き嫌いめ……………」

「ほら、それはいいからさっさと帰るよ。長居する理由はないんだから」

握っていたキャンディは、マスカット味だった。と

まあ、それはそれで別として。

魅弦は僕の袖を掴み、僕を引き留めようとしていた。なんとも、やるせなさそうな顔で。何故なのか。

「私達は……………セキレイは倒したセキレイを、M・B・Iが回収するまで見守る“義務”があります。それが例えセキレイでない黒人さまだったとしても、御中博士を嫌いだとしても。それだけは守って欲しいんです」

ああ、と。今更ながらに思い出すのは、僕が最初に相対したセキレイ『NO.59・卯月』の事。

彼女は僕に倒されたあと、何処に行っただろうと一度、魅弦に聞いてみた事がある。同じセキレイならば敗者の未来がどうなのか、知っているんじゃないかと。それは別になんの事もない、気紛れ同然の質問だった。そしてその答えは。

『負けたセキレイは、葦牙の元を離れ、再び神座島に送り返されま
す。それが私達セキレイの 神世より降り立った者の運命な
んです。それが善かれ悪しかれ問わず、です』

という答えだった。つまり、一度負けたら再起不能の、名前通りのサバイバル。

それは例え誰であろうとも、変えられない運命であると言う。魅弦も、あの烏羽も例外ではない。葦牙と添い遂げたければ、闘って戦って生き残れと、御中はそう言っているのだ。『恋は戦争』とはよく言ったものだ。

「……………分かったよ。その代わり、今後は洗った洗濯はちゃんと干す事。いいね？」

「ぶっ……………ええ、はい。分かりました」

事が済み、話の終わりが見えてきたので、僕は彼に接触する事にした。

一羽は羽化していないとはいえ、二羽のセキレイを抱える青年・皆人君。

魅弦の手を振りほどき　　離れようとしたら、ワリとガチで腕を握られた。ミシミシとかイッた気がする　　皆人君の方へ歩み寄る。結ちゃんが守ろうとしてか前に出るが、僕が手で戦意がない事をジエスチャーすると、なんだかあっさり納得してくれた。家の微・腹黒とは大違いだね。ゲヘナとは地獄の　　以下略。

「君の名は？」

「あ、えっと……………佐橋皆人、です」

「佐橋皆人……………君か。うん、覚えた。僕は白羽黒人、彼女僕のセキレイ・魅弦の葦牙だ」

「白羽……………さん」

「『さん』はいいよ。それに、別に僕の事は黒人でいい。面倒ならさんは付けないでくれると気楽かな」

「あ、えと、うん。じゃあ黒人君　　でいいのかな」

「セキレイNO・88、結！　拳系です！」

「セキレイNO・37、魅弦です。弓が得物　　ですけど、今

回今後は闘わないですよ。面倒ですもの」

「はあ……………じゃあ、最後のちょっと前に勝負しましょう!」

「ならまあ……………いいでしょう。受けました」

別になんでも良いって言うてるのに、気の弱い青年だなあ。21世紀には珍しいタイプだね。

そんなこんなで、M・B・Iの回収班が来るまで彼と話をしていた。セキレイ同士なんだか、仲良くなってるようになってないような、微妙な空気も漂っていたけど。ただ彼は『闘う気はない』と、そう言うてくれた。それが救いだ。

お陰で誰かを　　結ちちゃんを傷つけずに済む。たぶん僕という人間は、セキレイにとっては天敵に成りうる存在なんだろう。自分でなんとなく分かる。だから高美さんも御中も、僕にはやたらと気を掛けてくれたのか。なるほど、納得だ。

そして回収班が到着するや否や、瞬足で森を駆け抜け、外へ出る。そしてまだいたんだよ、彼が。

「やあ焔君」

「やあ黒人君」

「あ、さっきの葦牙」

「焔と知り合いみたいだよ。どうする瀬尾?」

「放つとけ放つとけ。別に危害を加えようって訳じゃねえんだろ?」

「なら極力無視だ無視」

丁度、正面の門のところに、焰君と三人組がいた。三人組は危険物を扱うように、焰君はなんともフレンドリーに拳をぶつけてきてくれた。ヤヴァイ、カッコいい。イケメンすぎる。三人組はそのまま何も言わずに立ち去ったが、焰君はまるで結果報告を待っているんだろっね。

ところで、足元がなんかやたらと水でビチャビチャなんだがなにと闘ったんだ？ アイスマン？

「緑の少女は？」

「葦牙に出会った、いや、葦牙を引き寄せたのかな。自分から」

「自分から……………とにかく、無理矢理に羽化、なんて事は無いんだね？」

「保証する。この白羽黒人、名と命を賭けよう」

「……………なら、本当なんだろうね。なら僕の仕事は此処までだ。後はさっさとトンスラするよ」

「また君とは会えそうな気がするよ。ワリと近いうちに」

「フツ……………僕も同感だ」

そう言い捨てて颯爽と跳び去っていったイケメン・焰君。カッコい

い、カツコ良すぎる。

一度御中をどう効率よく、かつ確実に殺せるかを検討してみたいものだ。酒を飲みながらのんびり。爆殺、射殺、殴殺、刺殺、焰君の能力で丸焼き、他多数。なにがいいかな
と、魅弦
が袖を指で摘まんで引っ張ってくる。

「黒人さまお腹が空きました。ご飯です」

「ん、ああ……………そうだね。じゃあ今日は友人が出来た事を祝って、ご馳走にしようか」

「メニューは？」

「ラーメンだね。チャーシュー盛り盛りの、超・肉ラーメン。こんがり焼いた焼豚が食欲そそるねえ」

「その心は？」

「焰だけに焼く、なんてね」

「笑えませんかよそれ……………」

第六話 これは新キャラですか？（前書き）

低速なのを読者の方に申し訳なく思い、全速力で執筆……………約・

二日モノ！

多少の手抜きはガマンしてくれえ……………！

『お　　大当たり！　出ました今日の三等、お米50kg！』

「これぞ、我が奥義

運命カッツうんめいりよく！！！！！！！！！」

ガシツ、シュバツツ！！！！！！　と、昔からだが、引いたクジは大体当たる。

僕の特徴　無駄に引き運がいい。ゲームにせよくじ引きにせよ、なんせツイているんだから。

場所は御子上デパートタワー。帝都タワーより南に位置する、とにかく巨大なデパートという名のアミューズメントパークでもある。

十階からなる様々な店舗の数々、その周囲に並ぶ小売店から遊園地もどきのアトラクションなど、言っちゃなんだがもうデパートじゃないよねこれ。

時々やつてるくじ引きも、こつやつて豪勢な景品を用意してくれるんだから、そりゃ人気だわな。

こつなる事も踏まえて持ってきた台車に米袋五俵を乗せて、とりあえず車に運ぶ。

……………えつ、なんで車に。つてゆーか免許あつたのかつて？ そりゃあ持つてるさ君イ。

これでも二十歳の青年だよ？ 車に興味がない訳無いじゃないかあ。十八歳になつた当日に教習所に駆け込んだり合宿したりで、半年かけて色んな免許取つたさ。乗れない自動車は たぶんあんまりないつ！ 好きな乗り物は大型のバイクだ！ ライダー最高ツツ！！！！！！

「はああああああああん……………」

米袋を車に運び、再びデパート内に繰り出す僕ら。そして魅弦の喘ぎ声にも似た溜め息。頬をほんのり薄紅に染め、そんな顔を隠そうと頬を手で覆う。それはまるで恋する乙女のように見えるが騙されるな！

コイツは人がデザートを食わせてくれると知るや否や、手当たり次第に注文をする外道だ！ デザート風情に諭吉が翔んだなんて生まれて初めてだよチクシヨウ！

「黒人さまあありがとうございます……………魅弦は一生黒人さま

の桃色奴隷ですう」

「公衆の面前で何を言うかこのエセ巫女！ いやさ変態！」

「変態でも構いませんよお………魅弦は黒人さまに一生お仕えしますう。一緒に変態になりましょう？」

「なにこの子ちょっと怖いよ！？ お巡りさんっ、お巡りさーーんツツツ………？」

「陸奥、ひよっとしてあれかな？」

「だろうな。他の一般人に比べて雰囲気や存在感が違いすぎる。やはり異質だ」

「あーあ、秋津がいれば話聞いてすぐ解るのに」

「お前がセキレイ狩りに行かせたんだろっ………」

街中の人影、よりも一段高い場所。それは小さなカフェながらも扱う品がバカ高い有名な店だった。

高級カフェの二階のテラス。そんな一席から人混みの中に、異様に目立つペアを双眼鏡で見ている、共に金髪の少年と青年がいた。かたや『お坊っちゃん』といった豪華なシルクの服の少年に、かたや『従者』といった簡素な服の青年。

青年の手には、鞘に納められた刀が握られていた。無論剥き出しではなく、布で隠してはいる。

「噂がホントなら、かなり面白いよね」

「『セキレイ殺しの葦牙』『自由の葦牙』か……………ロクな噂じゃないな」

「ねえ、やっぱりM・B・Iの人間かな？」

「かもな。セキレイを倒せる葦牙なんて、まず有り得ねえ。俺もワリと色々な人間を見てきたが、今までそんな人間はいた事がない。そしてそんな人間を用意出来るのは世界でおそらくM・B・Iだけだ」

「ゲームマスターが用意した『バグ』ってところかな。ちょっと盛り上がりすぎてきたかも……………でも」

「でも？」

「夜見を殺られたのは許せないね。よろしくない……………陸奥。ア

イツ、殺るよ」

バンホーテンのココアを飲み干し、カップを置く。実に味わい深く、美味であつた。

少年の表情には先ほどまでの遊びを楽しむ少年のあどけなさはなく、寧ろ敵意に近いモノが現れていた。彼のセキレイ・陸奥にも、心なしかその感情が伝わってくる。葦牙の憤りを、セキレイたる彼はどう宥^{なだ}めるのか。

「（面倒だが……………ま、適当にやるか）」

「アイスにケーキにパイにドーナツ、プリンに菓子パン、羊羹にお餅にそれからそれから……………」

「以上、魅弦の登場シーンは此処までだ。じゃあねー」

「えっちよっ 黒人さま置いてかないでエ!!!!????」

自分が食べたお菓子を言い挙げていく度に苛々が募り、ついに魅弦を置いて車出しちゃった。

食い意地だけは張ってるんだから、ホント。涙目で追い掛けてくるそんな彼女は、いつもの巫女服。

今日の買い出しの本来の目的は当然明解、お菓子を食べさせる事なのでは全くなくて、彼女が服が欲しいと言い出したからだ。我が儘なイメージが強い魅弦だが、実際その要求の九割は『冗談ですよ』の一言に片付いており、真に何かを要求してきた事はあまりに少ない。

それ故につい不粹ながらも聞いてしまった。その理由を。

『私だけこんな巫女服だと、黒人さまのセキレイとしては良いんでしょうけど……………女の子としては、ちょっと恥ずかしかったです。淋しかったですよ？ オシャレな服を着てみたいな、とか。黒人さまと可愛い服でデートしてみたいな……………とか』

可愛かったよ、うん。本気で彼女にこっちから襲いかかりそうになった。

もじもじしながら、そっぽ向いたり俯きながら呟く彼女は、なんとも可愛かった。またちよつと好きになったよ、彼女の事。元から彼

女の事は好きだけど、どちらかと言うと僕のそれは『女友達』としての好き、の方が相当しっくりくる。

結局彼女の事は拾った。運転する僕の隣に座る彼女は、心からウキウキワクワクと言った状態で、早く僕が見繕った服を着て出かけてみたいらしい。そんな道中には、今日の買い物のお話を話したり、お菓子を喰い漁った事を謝罪してきたり、あんな店があったよ、とか、今度はこんな物が食べたい、とか。

彼女が僕にこれほど素直に何かを求めてきてくれた事が、嬉しくて堪らなかつたんだよ。

×

×

帝都タワーを中心に、最南端に位置する御子上デパートから帰宅、家の玄関前。

三十分の道のりは、今日を語るには短すぎたようだ。たぶん部屋に戻っても話は続くだろう。

「黒人さま」

「うん？」

「今度は……………どこか遠くに行ってみたいですね。二人で」

「……………そうだね。じゃあ今度、海でも行ってみようか。夏も近いし」

「あ……………でも私達、この街から出られないんです」

そついやそんな話もあつたね、高美さんが言つてた憶えがあるような無いような。

セキレイけいかく
鵓鴿計画に参加した葦牙及びセキレイは、この新東帝都から出る事が出来ない。それは、この帝都から逃げ出す葦牙やセキレイが現れる事を考慮して、御中が下したルールの一つらしい。まずこの鵓鴿計画には段階があり、現在はセキレイ達が葦牙に出会い、羽化をする為の第一段階。

そして一定数のセキレイが羽化した後に、この帝都を覆う包囲網を形成し、街を鵓鴿計画の為の戦場に作り替える。それが第二段階。その際の羽化していないセキレイは高美さんの予想だが、十羽にも満たないと言う。

そしてもう一つ。高美さんにも予想がつかない、第三段階。内容もルールも一切不明との事。

迂闊にも外に出ようとすれば、M・B・I直轄のセキレイが、その葦牙とセキレイを『肅正』しに来るそうだ。

だがたぶん僕なら、そんな包囲網を強行突破出来るだろう。闘うならともかく、逃げるだけなら容易い。なにも正面からぶつかるといふ訳じゃ無いからね。それにまだ女の子と闘うのは気が退けるし。

「……………それじゃ、この計画が終わったらしょうか」
「えっ」

「僕はこの計画を勝ち残ろう。そして君と、嵩天こまつたに辿り着こうじゃないか
不肖の葦牙・白羽黒人。我がセキレイ・魅弦を最後まで守り抜く事を、細さいやかながら此処に誓おう」

「……………プロポーズ、ですか」

「さあ？ 魅弦の好きーなように解釈すると良いよ」

「くっ……………黒人さまあツツツ！！！！！！」

予備動作無く、問答無用に飛び付かれ、抱き着かれた。胸を押し当てながら。

別に僕はプロポーズしたつもりはないんだよ。今のは『葦牙としての』心意気であって、告白じゃない。

どちらかと言えば、宣言だ。彼女を最後まで守り抜くという、自身に打ち込んだ誓いの楔くわだ。だがこの程度で喜んでくれるなら、易いものだ。何かを、誰かを守る事の無かった僕に、守りたいモノをくれた。守る喜びを教えてくれた。

僕を一人ぼっちじゃいられなくしてくれた。そんな彼女への、細や

かなお礼だ。

「お風呂！ 今日是一緒にお風呂入りましょう！　ね、黒人さま、そうしましょー！？」

「なんだよ今度は逆セクハラですか！？」

「あーイライラする」

声がした。直後　　ゴインツツツ！！！！！！　と、僕は静かに背後に迫っていた刃を蹴り弾く。

刃は魅弦と僕を狙っていた。それも傷を負わせようとかじゃなく、致命傷狙いの攻撃だ。

長く延びた刃はまるで蛇のようで、刃と刃の間には金属のワイヤーがあり、それらを一本に繋げている。それらは長さ四mはあるだろうか、豪邸たる僕の家の門の上に腰を降ろしていた女性の手から、左右にうねりながら延びていた。

女性が右手の柄つかを勢いよく引つ張ると、分解された刃は一気に鏢つばに戻り、一振りの剣になった。

二m超の、両刃もろはの大剣。漫画やゲームでは『蛇腹剣じやばらけん』と呼ばれるそれを、女性は肩に担ぐ。

「あーイライラする。人前でイチャイチャしちやっつてさあ」

「……………どちら様かな？ 客を招いた覚えはないよ」

「んじゃあたしが勝手に遊びに来ちゃったって事で。お茶と菓子を出しな」

「不躰な方ですね……………名を名乗りなさい」

「はい。んじゃ改めまして名乗りをば

セキレイ

No.90、煌刃^{こは}だ。よろびく」

女性 煌刃は、剣を地面……………もとい僕の庭に突き刺し、

それに続くように下に降りた。

そしてそれを背凭^{せもた}れにしながら、なんとも軽い調子でこちらに話しかけてくる。大人の女性だ。

袖の無い、褐色・薄手のコート。裾は膝よりも長く、腰まである全面のボタンを全て留めている。その下は影であまり見えないが、生足が見えている。たぶん直にパンティかショートパンツを履いているに違いない。

手には穴空きの黒革グローブ、脛^{すね}の半ば辺りまでの黒革のブーツ。

そしてかなり目立つ、深紅の髪。

スタイルもかなり宜しくて

ボンツキュツボンツだった。魅

弦はボンツキュツボンツである。

「で、その煌刃さんが僕になにかご用でも？」

「まったまたあゝ。分かってるくせに」

「黒人さま？」

「……………なんとなくは感じてただけだね。まさかホントに有り得るとは」

「『あり得ない、なんて事はあり得ない』……………グリードさんの言葉通りですよ。なんとなく、私にも分かりました」

「そつ。あたしはアンタに反応してる……………アンタはあたしの葦牙で、あたしはアンタのセキレイだ」

あり得ない、とは思っていなかった。それは少し前、皆人君にくーちゃん反応した時に考えていた事だ。一人の葦牙に一人のセキレイ、とは誰も言っていないし、誰も決めてない。そもそも、決められる筈がない。

セキレイの葦牙への反応は、ただ単に相性なんかじゃなく、遺伝子レベルでの適合がセキレイを反応させる。例えるなら、料理人がスープを作るのに何百何千という調味料を調合し、何億分の確率を導き一つのスープを作り上げると、同じだ。

彼女は僕を探し、僕を見つけてくれたんだ。そんな彼女を、追い返せる訳が

んだ。自分がまず先に闘らなきゃ損でしょ？」

ガチャリと、剣を引き抜いて構える。腰を落とし、切っ先を前に突き出した、攻めの構え。

ようは彼女は、一度僕の腕を見てみたいんだそうだ。セキレイを倒せる葦牙の実力や如何に、ってとこなんだが　　今回はかりは交流試合という事で僕も楽しもう。なにも、命を賭けてるんじゃないし。

倒さず煌刃をノックアウトする、ただそれだけの簡単なルールだ。

「ただし！」

「ひょ？」

実に楽しそうな表情で、煌刃は続ける。

「負けたら　　アンタは今後闘うのは許さない。戦闘はあたしに全て任せて貰う」

「……………ならこっちも条件だ。君が負けたら、僕の言うことには従ってもらう。そして、今後僕の家事を手伝う事。衣食住は完全保証付きだ。いいね？」

「家事って……………アンタのセキレイはなにしてるの？」

「すみません、私が家事をすると破壊活動になってしまうので」

「……アンタも、災難だね」

「……ありがとう、そう言ってくれるだけで嬉しいよ」

虚刀流、壱の構え・鈴蘭。脚を前後に開き、手刀を対に構える。

これは楽しい勝負になるぞ。きつと楽しい。こんなにワクワクしながら闘うのは初めてだよ。

「勝っても負けても、文句なしッッッ……!!!!!!」

夜は七時、ご近所さまがいない事を喜んだ、何回目かの騒ぎである。

第七話 はい、あまり目立たない新ヒロインです（前書き）

なにやら皆さんが僕の事をかなり褒めてくれているようで……
嬉しい限りですよ、全く以てねえ。

私の小説が面白いと喜んでくれるなら、筆（ ）という名のキー（ ）が
進みますよ。では六話をどうぞ

第七話 はい、あまり目立たない新ヒロインです

『悪イが ころから先は一方通行だア！

大人しく尻尾巻きつつ泣いてエ、元の居場所へ引き返しやがれエ！
！！！！！！！！』

「キュインキュインしてますねえ……………」

いやあ、黒人さまのDVDは色んなモノがあって飽きませんねえ。
その枚数、実に一万本以上……………なにせDVD保管・鑑賞専用の
部屋があるくらいですから。しかも地下に！ 大音量でも問題ない
です！

今日は『とある魔術の禁書目録』を鑑賞中。一方通行さんがカッコいいですねえ、ホント。

私にもあんな超能力があれば、黒人さまに頼らなくても闘えるんですが………如何せん弓ですから。

「さて、見終わった事ですし………そろそろ様子を見に行きましようか」

最近よく、私はこの地下室で朝を迎えている。起床はだいたい午前七時から八時の間。

今日もそんな感じに朝を迎え、黒人さまに朝食をと起こしに行ったら、部屋にはいなかった。

まさかと思い、七時頃に庭に出てみるとまあ案の定、黒人さまは随分と忙しそうでした。忙しそうなので、しばらく放置しようかと、牛乳を飲んで地下室に戻り、紅茶を飲みながらこうして五話まで見ていた、禁書目録の話を進めていた訳です。

スタスタと階段を登り、キッチンの棚の裏に隠れるように作られた扉から、キッチンに出る。

そして外靴に履き替え、庭に出てみると 二人とも帰っていた。私の葦牙と、私のライバル。

白羽黒人、二十歳の青年。美形、肉体派の好青年です。流派は虚刀流。

煌刃、セキレイNo.90。蛇腹剣を使うセキレイであり、巨乳。年齢は二十歳くらいだろうか。

二人は息も絶え絶え、疲労困憊の状態で庭の芝生に寝転がり、眠る

ように気絶していた。

では昨晚の事を回想してみよう………と思いましたが、面倒なのでやめましょう。簡単に説明します。

一、黒人さまと私を煌刃さんが襲撃、自身が黒人さまのセキレイである事を告白。

二、黒人さまと婚^くぐ事に異論はなし。しかし、勝負して負けたら今後戦闘に参加するのはなし。

三、黒人さまも賭けを提案、了承。対戦開始
と
黒人さまが移動を提案。 と思いきや、

四、黒人さま、煌刃さん、場所を移動。一晩かけて戦い抜き『参った』と言わせた者の勝ち。

しかし帝都を駆け抜け抜け刃と拳を交え、一晩戦い抜いても決着は着かず、最終的にこの庭で勝負をする事に。

五、両者ダブルノックアウト。それどころか疲労困憊で危険
なんでしょうか。

「生きてますかあ〜？」

「ビクンビクン……………」

「みつ、水ウ……………」

これは重症だ、とりあえず煌刃さんには水と………黒人さまにはアニメでいつか。

一人一人を抱えて、リビングに搬送。目元に冷やしたタオルを当て、とりあえず服を着替えさせる。

二人ともドロドロな上にボロボロでしたよ。黒人さまはご自身の服に着替えさせてあげて、煌刃さんには私のシャツを。身長差とバスト差が仇となったか、シャツの胸元はピッチピチに張っていた。蓄つほみがヤケに浮き出たりもしましたが。

そしてそれぞれの要求の品を　　黒人さまは面倒な注文をしてきそうだから、とりあえず無視で　　持つてくる。煌刃さんに

は二リツトルの水を、黒人さまには劇薬アニメを

『フンハハハハハハハハハハハア!!!!!!!!!!!!　強靱!　無敵!　最強オ!』

「粉碎!　玉砕!　大喝采イ!　ハアーーーーッハッハッハッハ!　!!!!!!!!!!!!」

「ハッ、僕は何を……………確か煌刃と勝負して、それから……………」

「おお、ホントに復活しましたか……………怖ッ！」

心は身に多大な影響を及ぼすと、社長や高美さんも言っていました
が……………

まさか、エネルギーの無い状態からテンションだけで身体を持ち直すなんて、馬鹿げてます。

トリコですか？ 自食作用オートミールですか？ スゴいですねそれは、黒人さま日に日に二次元に近付いてますよ。まあ私達セキレイが既に二次元に近い存在だから、あんまりアレコレ言えませんがね。いや全く。

しかしそこはやはりほら、どう足掻いても黒人さまも人間という事でした。

黒人さまは立ち上がっても、すぐに力無くソファーに落ちてしまう。一晩駆け回ればそうなりますよ、それがフツッ。コンビニに全速力で駆け込んで、スポーツドリンク・ニリットルを購入。黒人さまの口に差し込むとあら不思議、まるで給水機のようにドンドン飲み込んでいくじゃありませんか。
ベコベコッ！ とペットボトルが潰れるまで吸い尽くすと、黒人さまは空のボトルを掴んで一言。

「やっぱこれだね〜〜、アク リアス！」

「ト ポですか」

「ゴメンみっちゃん、あたしにも水お代わり……………ボトルで」

「僕にもよろぴく……………ぐう」

「はあ……………ふふっ、分かりました。では少々お待ち下さいね、ついでにパンでも買ってきます」

×

×

夢見る〜明日へ〜 広げる翼は〜

店内放送では、可愛い女子四人の歌が流れている。

「おや、なんでしょうこれ……………梅パン？ 夏バテ予防には良さ

そうですね、面白い買いましょう」

馴染みのスーパー三店舗に徒歩で赴いて、それぞれのお店をチェック。

一番遠いスーパーでは、タイムセールで二リットル・アクリが一本百五十円だった。六本購入。

最初のスーパーに近いスーパー・二では、全商品が二割引。お肉と野菜にちよこつとお菓子を購入。

そして最後のスーパーでは、いつもの事だがユニークなパンが多数仕入れられている。

入れ知恵は黒人さまからだけど、以降は暇を見つけてはここに面白可笑しいパンを探しに来ている。

「あら、魅弦ちゃんじゃないかい！」

「パートのおばさん、おはようございます。朝からご苦労様です」

「いやいや、これがあたしらの仕事さね。また面白いパン探してるのかい？」

「ええ、まあ」

「じゃあ色々買っていきな。店長はアンタにメロメロだから、ちょっとくらい割引しても文句は言わないよ。レジの人なも話は通しとくからさー！」

「おばさん……………ありがとうございます、ではちょっとだけ甘えさせてもらいますね」

顔馴染みとは、やはり便利だ。最初は下心丸出しでやって来た店長さんから始まり、それから私を助けようとしたパートの方々に。夕方に買い出しに来たなら、アルバイトの学生の方達にもいつのまにか顔馴染みになっていたり。

人の輪とは、こんなにも簡単に広がるのだと、勉強になっています。両手いっぱいビニール袋を下げて、私は近くの公園で休憩がてら、伊 衛門を飲んでいた。五月は終わりの頃、風も暖かい。

「それにしても、買い込み過ぎましたかねえ……………お金はマネーカードでなんとかありますが……………」

黒人さまは基本、マネーカードをかなり、それも重度に使い込んでいます。

御中社長を殺す殺すと言いながら、何故？ そんな問いをした事がある。すると彼はこう言った。

『使えるんなら使えるだけ、使わせてもらっただけだよ。僕は彼を嫌ってるし、殺したいとも思ってる。けどね……………だからと言って、それだけで彼の全てを否定する気はないんだよ。受け入れるべきは受け入れ、拒むべきは悉く拒む。それだけさ』

なんて味のある言葉でしょうか、そう思わざるを得なかった。嫌いでも受け入れるんだ、と。

矛盾しか孕んでいない言葉だったけど、それを口にした彼の表情は、なんだか哀愁あいしゅう いや、それよりももっと色濃い、絶望に近いなにかを抱えていたように思えた。

私や煌刃さんにすら話せない、酷く重く、暗く哀しい過去の物語。それは黒人さまの過去であり現在であり、そしてこのまま未来永劫続く無限の楔かぎののだと、私は悟った。それは葦牙かきを守るべき存在であるセキレイの私には、死ぬよりも辛かった。

「……………」

見上げる空は、五月晴れの明るい空。暖かな空気は心を落ち着かせてくれる。

彼の心は 黒人さまの心に、いつかこんな空のような平穏が、こんな空のように心晴れる日が来るのでしょうか。叶うなら、私はその手助けをしたい。私だけじゃない、煌刃さんや、今後黒人さまと婚くぐセキレイ達くがいるのなら、その皆と。守られているそのお礼に。私は、彼を救いたい。

「そうしたら……………美哉おねえさまと黒人さまと私と、あと煌刃さんや誰かと皆で仲良く同居……………愛憎渦巻く恋愛ドラマが毎日繰り広げられ、そんな日々嫌気が差した黒人さまを私が優しく癒す

……完璧だわッ！」

「ハア……何を言ってるんだお前は……」

くるーりと、背後にゆっくりと振り返ると。何やら見覚えのある顔があった。

金髪に胸元の開いた黒装束、首に巻いたオレンジのスカーフ。手には鞘に納められた刀と、仏頂面。

彼はセキレイNo.05・陸奥。第一期懲罰部隊の末席であり、あの美哉と共にあの大战から私達を守り抜いた、シングルナンバーのセキレイである。そして私にとっても、彼は敵対する存在ではなく、兄に近い存在である。故に私は彼をこう呼ぶ。

「陸奥……やはり帝都に出てきていたんですね」

「そりゃな。俺だってセキレイだ、葦牙探して婚いで、いまや立派なセキレイだよ。昔と違ってな」

「おや珍しい、というより変わりましたね。面倒くさがりな貴方がこんなに行動派だなんて」

「やあかましい」

ゆったりと私の隣に腰を下ろし、刀を抱き抱えるように、右膝を立てるように座った。

途端に欠伸をかい、なんとも面倒くさそうな顔で、私をじっと見つめる。対し私は完全無視で答える。

「……………お前こそ変わったな。昔はもつとやんちゃだった憶えがあるか？」

「色々あつたんですよ。大人になったつて事です。色気もムンムンでしょう？」

「そんな事を言ってるうちは、まだまだ子供だな。魅弦」

過去の話です。実は私は、他のセキレイよりも随分と早く取り出され、調整されていた。

私の調整を手掛けたのは、御中社長に並ぶ天才・浅間健人。あさまたけひと美哉の旦那さまである。そして私を外に出したのは御中社長で、シングルナンバー前半に次いで私を出したその理由は、ただただ聞いて呆れるものだった。

『高美くん高美くん、試しに他の個体も調整してみたいねえ。で、私の名前は御中だから……………んじゃ37番を試しに調整してみよつか！ さあ頼んだよ高美くん、浅間くん！』

そんな軽い感じに、私は生まれたのでした。受精卵から高美さんと健人さんに調整され、誕生。

おぎゃあと泣いて皆に喜ばれ、様々な薬品による肉体の調整を施され、世界に適合していく。

そうして、私は今に繋がっていくのでした。つまり、私は他の子達よりもちよっぴりお姉さんなのです。ロリ姉さんなんですよ。それ

故にか、私は美哉おねえさまや陸奥達おにいさまには、大変可愛がってもらっていた。まるで妹のように、娘のように、孫のように。
……ただ一人、烏羽からすはだけは苦手でしたが。それでも彼女にも可愛がってもらえたのは奇跡でしょう。

「……………魅弦。聞きたい事がある」

「なんなりと」

「『セキレイ殺しの葦牙』 『自由の葦牙』を知っているか？」

「ええ。それに類する、若しくは近い方なら存じていますよ」

「……………俺はソイツを倒せと言う命を受けていてな。出来れば事細かに教えて欲しいんだが」

「すみません無理です」

しれっとさらっと、簡潔にそう答える。だって、自分の葦牙を売るなんて出来ませんから。

それにしても『セキレイ殺しの葦牙』に『自由の葦牙』ですか、中々味のある呼び名ですねえ。僕キャラなのに、役回りはドンドン悪役に近付いていってますよ。根っこがちよっぴり変態だったりもしますが。

「フツ……………そうか。流石に自分の葦牙を売るほど、落ちぶれちゃいないって訳か」

「当然です。陸奥は私がそんな軽い女に見えますか？」

「いいや。身も口も堅い女だよ、お前は」

「褒めてくれてありがとうございます」

「……………真面目な話だ。お前は俺とも鬪うつつもりか？」

「それはもう。いずれ戦場で出会うのですから、仕方ない事ですし」

此処も既に戦場だ、と言いたかったが、実際に陸奥とやり合うとなれば、私に勝ち目はない。

得物も此処にはない訳ですし。本人もやる気が無いようですから、此方としては有難い限りですとも。

「用はそれだけだ。じゃあな」

「陸奥」

「なんだ」

「またいつか
昔みたいに、頭を撫でてもらえますか？」

「……………機会があれば、な」

ひゆるりと、暖かな風が吹き抜けた。靡く髪を手で抑え、風がやむと再び陸奥のいた方を見る。

そこに彼はもういなくて、彼がいた場所にはいつの間にか、手元から無くなっていた伊 衛門の代金・百五十円が置かれていた。そしてその下に、小さな書き置きが。内容はこうだ。

『今、俺の葦牙がお前の葦牙を狙ってる。名前は御子上隼人だ。これ以上は自分の葦牙を売っちまうからな、情報は自分で仕入れな。あと 頑張れよ、魅弦』

「.....やさしい、おにいさまだこと」

×

×

「アアアアアア.....」

「枯れるウウウ.....」

「悪ノリいえーい」

第八話 ラブストーリーとキスとフラグは突然に（前書き）

想像せよ、その姿！

第八話 ラブストーリーとキスとフラグは突然に

「ぬおっほおおおおおおおお………うおほあああああ………」

気絶しながらも、ビクンビクンと動き回り、絶え間無く呻き声を上げ続けている魅弦。

前回のあらすじ エロワード 魅弦が禁句を口にしたので、額の秘孔を突いて落としました。

秘孔については、小さい頃に親から教えられていたんだよ。『これは相手をお仕置きする技だ』と親父の談。他にも『性欲増強の秘孔』とか、『治癒力促進の秘孔』とか色々あるそうだが、当時中学生だった僕にはあまり詳しくは教えてはくれなかったんだ、という話。そしてなう、僕が突いた魅弦の『閃穴』せんけつの効果を無効にする『鈍孔』どんこうを突いて、彼女を平常時に戻す。すうつと痛みが引いていくように、マッサージで凝り固まった筋肉が解れていくかのように、安らかに眠った。

「いやあー、スゴいねアンタ。そんな事まで出来るんだ」

「なあに、紳士のたしなみさ。それに僕は、“飽くまで”彼女を貪りたただけだよ」

「なにそれ、あたしにやよく分かんないさね」

前回ほとんど出番の無かった彼女こそ、他でもない僕の第二のセキレイ・煌刃（シュウヘン）である。

得物は蛇腹剣・大蛇（オオヘビ）。刃が多数に分裂し、それらをワイヤーで一本に接続した、特殊な剣だ。

丈が膝まであるノースリーブの褐色・薄手のコートは、腰まである前面のボタンを全て留めてあり、その内側はおそらくパンティかシヨートパンツだと思う。意外と彼女からはパンチラが撮れないのが特徴だ。そしてそのウェーブと赤みがかかった、ロングの茶髪。

手には黒革の穴空きグローブと、靴は同じく黒革ブーツ。彼女を言いで得るなら『カッコいい女性』だ。

今はグローブとブーツを脱ぎ捨てて、リビングのソファアにて胡座をかいている。

「でさあ、黒人オ。いつになったらあたしと婚（く）いでくれんのかなあ」

彼女はさつきから、事あるごとにこればかりを口にしている。まるで蓄音機のように。

僕も、それについてはよく解っている。葦牙として、早く彼女を羽

化させてやらなければならぬ、と。

実は昨晚の戦いは、結果的に僕が勝利していたのだよ。というより、彼女が一方的に敗けを認めた、と言った方がいい。セキレイの中でも強い側の自分が人間に勝てない、それ自体が既に敗けだ、とね。だが、それは別として。

正直、僕はもう誰かと婚くぎたくはないのだ。それは、あの夜の事が深く関係している。

「僕はシチュエーションを重んずるタイプなんだよ。もうちょっと待ちなさいな」

「コラー、早くしろよおー。ぶうーぶうー」

身体を駆け巡った灼熱と痛み、全身を隈くま無く襲うあの感覚。未だに忘れられない。

アレはたぶん魅弦と婚くいだからじゃない。セキレイと婚くぐと、ああなるんだと直感的に感じた。

セキレイが羽化するように、僕の何かがどんどん書き換えられていくような、そんな感覚。今まであった僕が一瞬で消し去られていく、そんな感覚。可能性の話だが、それは煌刃と婚くいだとしても、起こりうる事だ。そして今後ずっと。

僕を求めてくれるのは至極嬉しいが、アレだけはもう勘弁だ。もう嫌だ。死んでも味わいたくない。

「ま、あたしもフツーにちゅーして終わり、なんてのもあじけなっと思ってたからさ。どうせなら実戦の最中にこう、ロマンチックに？ ドラマチックに？ キスしたいなー、なんちゃってねー！」

にやはー！ と、顔を赤くしてそんな事を言ってくる。おまけに舌ペロ。

ちくせう、可愛らしいじゃんか。お色気お姉さんキャラなのに、なんか可愛いじゃんか。ああ、なんだか魅弦がキャラ負けしてるような気分だよ。……………いや、負けてるのか。

「そついやさ、黒人は自分が他の葦牙になんて呼ばれてるか知ってる？」

「いいや、僕は他の葦牙やセキレイとはほとんど出会であわさないからね。そう言うのはあんま分かんないや」

「あたしの姉貴分で情報通のセキレイがいてね、双子なんだけどさ。ソイツらが言うには黒人は『セキレイ殺しの葦牙』とか『自由の葦牙』って呼ばれてるらしいよ」

「うわ物騒、気をつけないとね。煌刃、あんまり夜遅くに歩いちゃダメだぞ？」

「自覚して言ってる辺りがイライラするねえ。まっ、それは追々解るとして」

シユタツ！ と、胡座の状態から足の力のみで跳躍。空中で一回転し、着地。

今度はなにを仕出かすのやら
とか考えてたら、突如ボタンを外し始めた。

「??」

なっ、なにか、なんか当たってる！　なんか柔らかい何かが僕の背中に当たってるうっ！

抱きつくな、頼むから抱きつくなああああッッッ！！　ああそ
うさ認めるよ、僕はムツツリだよ、ムツツリーニだよ！　実際に僕
には女の子に対する免疫が無いんだからしょうがないだろ！　小さ
い頃から女の子と話したり触れ合う機会なんて微塵も無かったんだ
からさあ！

お陰で魅弦との生活も毎日がドキドキだよ！　ドキドキで壊れそう
だよ1000%LOVE！

「ほら、こっしたら身体がもつと触れ合っ
つ　　んあ

「変な声を出すなあああああああああッッッ！！！！
！！」

十分後。

「しちそうさま」

「……………もう……………お婿に行けない」

「お婿に行けないねえ……………じゃ、お婿に行きたくなくなるくらいに、あたしの虜にしてあげる」

「ひっ

」

「はあっ、はあ、はあっ

」

どうして、こんな事になったんでしょうか。それはある晴れた日の事。
僕はただ妹を探しているだけなのに。あ、妹って言っても血が繋が

ってる訳じゃ無いんですよ？

番号順の関係で、調整とかのタイミングが近かったのと、能力が真逆だったりした事もあって、皆が僕らの事を兄妹みたいだっけ言うから、今では本当の兄妹同然なんです。仲もスゴく良いんですよ。生まれた頃からずっと一緒。ずっと仲良く、そういられると思ってた。

でも僕らは
セキレイだから。だから、いつかは闘わなくちゃいけない運命にあるんだと思う。それは無意識に解っている事だから、仕方ない事だと思う。

でももし僕らがそれを拒むなら、それを赦してくれるなら、それを可能にしてくれる人がいるなら。僕はその人と一緒にいたい。それは葦牙だ。その人と一緒なら、僕らは闘わずに済む道を選ぶのかもしれない。いや、僕らに限らず。セキレイ皆が、仲良く平和に過ごせる、そんな世界があるのかもしれない。

だから、あんな人とは

絶対にく婚なぎたくない。

「待ちなさいよコリアーツツッ！……！！……！！……！！」

「嫌だ……！！……！！僕は絶対に、あんな人の下には行かないツツッ！！……！！……！！」

走る。ひたすら走る。がむしゃらに、街の中を走り続ける。行き先なんて考えてない。

今はあの人達から逃げる事だけを考えていればいい。あの人達から隠れる事だけを考えていればいい。

高架下、歩道橋、大通り、ビルの間や上、デパートの中。逃げられる場所なら何処にだって逃げた。でも、それでも見つかってしまう。そしてその度あちこちに移動して隠れて、また逃げて。ここ数日はこればかりを繰り返していた。

そして今日も背後には二人のセキレイ。前方には曲がり角。ここで一気に撒いてやる！

そう思って、勢いをつけて角を曲がり、全速力で駆け出したら

ドンッ！

「わっ!?!」

「ぎゃっ!?!」

とうとう、やってしまった。人にぶつかってしまった。今まで散々注意してたのに。

ああ、これで僕も悪い子の仲間入りだよ、ゴメンねくー……………

…………… ってそんな場合じゃなくって!

目の前にはぶつかってしまった女性　　黒髪で、ゴシック系の

服を着た人だった　　が尻餅をついていて、慌てて僕はその女

性に駆け寄る。見たところ、怪我とかは無さそうだ。良かった、そ
う心底安心した。

「あ、その、ぶつかってごめんなさい……………大丈夫ですか？」

「だ、大丈夫だよ。それより膝、擦りむいちゃってる！ ちょっと見せて！」

「えっ、あの、僕は……………」

「ほおら、観念しなさいってばもっ」

とうとう追いつかれた。僕を捕まえようとしている人の、セキレイ。金髪のセキレイと、オレンジ色の髪のセキレイ。片方は鞭で、片方は氷を使っていた覚えがある。

「あっちこっちと、ちょこまか逃げ回っちゃってさあ。アンタを連れて戻らないとあたしがマスターに怒られるんだからあ、さっさと一緒に来なさいよあ」

「嫌だ、くーをいじめた人のところなんかには僕が行かないッ！」

先日の植物園でのくーの能力の暴走。あれは間違いなく、あの人達の葦牙のせいだ。

くーを無理矢理羽化させようとしたに違いない。僕はそんな人に従

うつもりはない、絶対に捕まらない！ なにがなんでも逃げ延びて、くーを見つける。その為なら、闘う事もいとわない。そう決意した矢先、僕とぶつかった女性が、僕を庇うように前に出た。

「大丈夫、おねーさんが守ったげるから！」

「えっ……………」

「ちょっと、どきなさいよ一般人！ あたまおかしいんじゃないの！？」

「どけるかバカヤロー！ 美少年は国の宝なんだぞ！ それに……………
…………… パンツ丸出しの女にあたまの心配されたかないわよ！
まずはテメーのパンツ隠しやがれコンチクショー！」

なんだろう、これ。胸がざわざわする。

まるで幸せな気持ちだが、何処ともなく溢れてくるような、そんな感覚。心が、身体が暖かいモノでどんと満たされていく。これは、この感覚は。これこそが この人こそが。

「ムカツ……………いいわ。もう一般人だからって容赦しないんだかねツツツ……………」

「あ、危ないッ！」

しゅるりと、金髪のセキレイが腰につけていた鞭を取り出した。

「ってエ
……ッッッ！……！！！！！！」

ありゃりゃ、それは失礼。こっちは貞操守るために必死だったからね。

では状況整理
焔君がいる。少年セキレイと少女がいる。それを敵視している金髪セキレイと………先日の夜見の仲間のセキレイがいる。整理するまでもなく、敵味方の区別は着いていた。ピツと人差し指で、金髪セキレイを指さす。

「お前はもう、死んでいる」

「はあ？ なに訳わからない事言ってるのよ！ 上等じゃない、やったるわよこの一般人！」

「気をつけて、黒人君。彼女はセキレイ？ 38・蜜羽^{みつは}。武器は特殊合成樹脂の鞭だ」

「ありがとう焔君。だけど心配ご無用、僕にはあんなギャルに負ける気がしないよ」

「秋津！ アンタはあっちの覆面やりなさい！」

「……………分かった……………」

これで一応対戦表は出来た。黒人VS蜜羽、焰君VS秋津。物理対物理、能力対能力の試合である。

本音を言えば、あの秋津というセキレイと闘ってみたかったりする。今後、能力持ちのセキレイとの戦闘は一回や二回では済まない筈だ。ならば、今のうちにある程度能力持ち相手に慣れておきたかった、それだけだ。

背後には少年セキレイと一般少女が。とりあえずは二人を逃がさないと

「その二人、早く逃げな！ 羽化前のセキレイの出る幕じゃないよ！」

「あ、え、あの……………」

「ありがとうお姉さん、今度会ったらケーキ奢るねー！ ツツツ……！」

「アイライクミルフィーユ！ よろしくねー！」

「（速い……………」

……………おい、僕のセキレイ二号。お前は葦牙を立てる気はないのか。

そしてお前も羽化前じゃないのかよ、棚上げして言ってんなよコラ。いい加減苛めるぞ。そんな事を心で呟いてたら、煌刃は蛇腹剣・大蛇を構え、僕の代わりに蜜羽に相対する。

「なにアンタ、その男のセキレイ？」

「そだよ。そしてアンタの敵だ。だから戦って負ける、争って敗れる、斬られて死ぬ」

コイツ……………僕より目立つ気でいやがるぜオイ。

ふん、だが甘いな。僕より目立つなど、出来る訳がないだろう。見せてやるう、目立つという事を！

「見ておきなさい煌刃よ。これが我が流派
南斗孤鷲拳なんとうこしゅうけんが技
の一つ」

「南斗？ なに北斗ネタなのそれ？」

「あれ、君の流派って虚刀流じゃあ……………」

「はあ、遊んでるつもり？ だったらこっちから
」

「と見せかけて
いきなり南斗獄屠拳なんとうごくとけん！」

純粋な脚力+ により、二階建てのビルの屋上にいる蜜羽目掛け、
鋭い跳び蹴りをかます。

咄嗟に頭を下げて回避した蜜羽は、そのまま僕から逃げるようにビルから飛び降りる。続いて秋津も降下。

直進したままの僕の先には避雷針があって、それに当たった訳でも

ないのに。傍を通過しただけで、それが切断されてしまった。着地と同時に避雷針が折れて屋上を転がり、それを見ていた全員が啞然としてしまっていた。僕も含めて。

「……………あちゃー（テヘペロ）」

「あ　　アンタ人間じゃないでしょ！？　絶対人間じゃないわよ……！」

「失敬な！　僕は生まれも育ちも人間だ！」

「いや黒人さあ……………今のはないわあ」

「はあ！？　お前僕のセキレイだろ！　カバーとかフォローとかしろよ……！」

「すまない、黒人君。今のは流石にフォロー仕切れないや……………」

「焰君！？」

「じつ、こんなヤツとなんかやってらんないわよ！　秋津、帰るわよ……！」

「流石にこんな表情の彼女を見たら、温厚な魅弦でも発狂しかねないからね……………」

「いや、ホントに助かったよ焔君。今度焼肉食べに行こうか……………」

焔刃の表情を詳しく説明してみよう。ちょっと、や・ら・し・い・ぞ

故に一言で表そう　現在の焔刃の表情。まるで事後の愉悅に浸る、濡れ場の乙女のようなだった。そしていまさらな情報だが、僕の服装はジーンズに黒のロングスリーブ、そして黒いスニーカーの、黒尽くし。焔君は言うまでもないが、マスクは外している。

「君のセキレイって、どうしてこう……………」

「はしたないんだろうね……………僕にも解んないや……………」

「……………けど、このまま放っておくのはまずいと思つよ?」

汗だくになっていた彼女の服を二人がかりで脱がせて、僕のシャツに着替えさせる。二人がかりの理由は、僕が女性への耐性がないが為に、焔君にフォローしてもらっただけの話だ。

流石はホスト、女性の身体の扱いを心得ている　と思いきや、着替えの最中、大変な事が分かった。焔刃の身体は現在、剥き出しの神経の状態に近いのだ。そつと触るだけが、愛撫にも似た快感を与える。布の擦れる感触が、極上の絶頂を導いてしまう。

正座で爪先が痺れる感覚を覚えているだろうか。ようはアレが全身で起こり続けている状態である。

「たぶん起きてもしばらく続くだろうから、何か手を打たないと……秘孔を突くのは？」

「ノー。突いたら最後、イキ死にそうだ……高美さんに頼む」

「ノー。高美さんは确实こんな無視すると思うよ。忙しいからね、あの人………いつそ攻め殺すのは？」

「ノー。彼女はセキレイだ、並の人間が死ぬレベルが続いたとしても、確実に生きている自信がある」

「つまりは　彼女をイキ死なせる事なく、高美さんに頼る事なく、一瞬一回の接触で彼女を助け出す。そんな無理難題………という訳ですか。詰みゲーじゃないですか」

「うわビックリしたあ！？　急に出てくるなよ魅弦!？」

「すみません、なんだか気になっちゃって………まあ、それはそれとしてですね」

「　　方法は。無くもない」

ビクウウウウウウウウウウツツ！！！！！！と、解っているが故に反応してしまった。

そう、方法が無い訳じゃないんだ。方法はある。だがそれは今現在、僕が最も採りたくない手段であり、そして今後とも断じてやりたくならない方法

遠回しに言うまでもなく、羽化である。

「羽化させれば彼女の身体は安定するし、ちょっとしたショック療法みたいに治るかもしれぬ」

「いや、あの……………焔君？」

「アリですね。早速してもらいましょうか」

「み、魅弦さん？」

「じゃあ僕らは部屋から出るとしよう。勝手にお茶もらつとくよ」

「あ、そういえばいい紅茶があると聞いた事がありますね。淹れましょう」

ボタン、扉が閉まり、そして沈黙。静寂は、いたく胸に突き刺さっていた。

眼前には、布団に横たわる我がセキレイ・煌刃。表情は艶やかそのもの。溢れる色気が色欲を誘う。しかし

そんな事

はそっちのけで。僕はただキスするという単純な事が、恐ろしくて仕方なかった。

「？」

「さあ……………気まぐれかな。キスしたくなっちゃったよ」

「あたしの魅力にようやく気付いたかあ……………遅いぞ鈍感」

「いいシチュエーションだろ？ それにいい言葉を教えて上げよう。
『じっくり時間をかけた方が恋愛は燃え上がる』
恋愛マスターの、母さんの名言だ」

「……………そりゃ確かね。あたしも今 燃えてるよ」

その日、僕は人生で母親以外の女性と、出会って二回目の女性と、
二度目のキスをした。

人生で二度目のキスは甘く、激しく。愛し合い、求め合うようなキ
スだった。

そしてついに、彼女は目覚めた。褐色の翼が広がり、部屋は光に包
まれる。

「幾久しく、よろしくね。あたしの旦那さま」

第八話 ラブストーリーとキスとフラグは突然に（後書き）

想像できたかな、ハエトリグサとウツボカズラの形！

第九話 恋心、即ち語るに及ばず（前書き）

そろそろ頭が疲れてきた……………しばらく投稿遅れまーす。

第九話 恋心、即ち語るに及ばず

『ああたあああああたたたたたたたたたたたたたたああ
たたたたたたああたたたたおわつたああああああああ
ああツツツ!!!!!!』

『うばあああ』

『 北斗・百烈拳』

「『お前はもう、死んでいる』……………きゃーけん
シロウーッッッ!!!!!!」

君らホントに格闘系のアニメ好きだよね。北斗の拳は格闘マンガの

第一人者とも言えるし。

実年齢が二十歳の煌刃なんか、研究室ラボにいた頃にアニメ見たそうだし。というより、見せてもらってた。

なんでも、高美さんのお父さんが見てたのを高美さんが見てハマったらしく、それを聞いた煌刃も見せてと要求、見たら速攻ハマったらしい。北斗は好きだが、最強は僕の虚刀流だぜ。暗殺拳もなんのその、こっちは戦国最強の流派だ。そしてモノマネヘタクソだなあ！。

……話は変わるが、キッチンで昼食の片付けと皿洗いをしながら、リビングの二人を眺める僕は、今やお父さんのような気分だ。そして今日はラーメンを作ってみたんだ。麺を打って作ったから、これがまたイイ。スープも自家製だから、オリジナリティ溢れる旨さがあると好評。

「黒人ー、お茶持ってきてー。麦茶ー！」

「あ、じゃあ私も。麦茶をお願いします」

「立ってるヤツは葦牙でも使えって事ですか……………ちょっと待ってなさいよー！」

「「はぁーい」「」

訂正、気分はお母さんの方がしっくりくる。主夫だよ主夫。

麦茶は冷蔵庫にありますー、氷をグラスに入れてましてー、トクトクと注ぎましてー、出来上がりー。

「はい。お代わりは自分でやりなよ。僕はちょっと用事で出掛けるから」

「黒人！」

「うん？」

「……………夕飯、どうしたらいい？」

「……………ちゃんと夕飯前には帰って来るから、安心しなさい。あと各自、自分の部屋の掃除をする事。それと洗濯物を干しなさい。魅弦はメモ帳渡してあるから、五時頃に煌刃と買い出しに行く事。いいね？」

「はぁーい。分かりましたよ、お母さん」

×

×

「随分イライラしてるみたいだね」

「そう見えるかい？」

「うん、スゴクイライラしてる。あの二人はやっぱりぐーたらかな？」

「不答^{こたえず}。と言うか、聞くまでもないと思うんだけど。焰君分かって聞いているよね？」

「まあそれは確かに。そりゃそつか。アハハハハハ」

午前三時頃。場所は帝都南部の駅前。やはりこの時間帯は、学校帰りの学生で賑わっている。

そんな若人の集う場所に焰君と二人、別に遊びに来た訳じゃない。今日は彼の手伝いをしに来たんだ。

「昨日のセキレイ、No.107・椎名^{しいな}だっけ？ なんでそんなにあの子に肩入れするのさ。君も高美さんも」

「ちよつと訳アリのセキレイだね。家の居候……………佐橋皆人君は知ってるよね？」

「……………なに、またあの子と関係あるのかい？」

「正確には彼のセキレイに、椎名の妹のようなセキレイがいてね。その子達は高美さんが最後に調整した個体だから、思い入れもあるみたいで、その子達も兄妹みたいに育ったんだって。そしてその子は毎晩、泣いてるそうだ。『会いたいよ』ってね」

「……………なるほど、理解した。今回の敵は前と同じ、御子上隼人でいいのかな？」

「ああ。おそらく昨日彼を連れていった少女が椎名の葦牙だから、今頃は婚くいでるだろうけど……………もしもって事があるからね。君みたいに」

僕みたいにつて、つまりはヘタレて一晚音沙汰無しって事かよ…………

……………言うねエ。

僕は事には至らなかつたけど、あの子の痛みは
想
像を絶した。想像を越えていた。

煌刃の部屋を出て、真つ先に自室に逃げ込み、ベッドに倒れ込む。
ひとまず声を抑える為腕を噛んで、暴れたくなる衝動を『自身を
殴つて』抑えてたから、シヨックで記憶も曖昧なんだ。いや、寧ろ
曖昧な方がいいのかもしれないね。あの子はまだと、危メンタルアウトうく人格崩壊
を起こしそつだつたし。

そして最後。痛みが去つたあとにはやはり
光の翼
が広がっていた。

しかも、前回よりもより大きく、光りもより強く。セキレイを羽化
させる度に成長しているかのように。

「さて、No.107の居場所は……………」

すつと取り出したのは、小型のiPhone型の端末。堂々とM・B・Iと書かれた一品だ。

タッチパネル式なのか、焰君が指を器用に動かす度に画面がスクロールし、ものの数秒でこの帝都の現在地の地図が表示された。ご丁寧に、カーソルまで付いている。焰君が赤、僕が白。昨日のセキレイは灰色で、少女はピンクだった。

「ここから近いな……………急ごうか」

「ねえ、そんな便利アイテム何処で？」

「高美さんに貰ったんだよ。流石に僕一人じゃ手が回らないだろうって」

「あら優しいお姉さまだこと。僕も欲しいね」

「一応最高機密なんだけどね、携帯^{コレ}端末」

横合いから覗き込んでみると、あら不思議。地図にはいくつもの『S』の文字が。

重なっているのもあれば、大半はバラバラに散っている。そんな『S』の一つが、僕らの近くに

ドクン。

「ぐ……………あ、がああああああッッッ！！！！??」

「黒人君!?!」

ドサリと、膝をついてしまった。人前だが、そんな事はそっちのけで。

グツグツと。ジワジワと。メラメラと。
ギリギリと。シリシリと。ガリガリと。
ザクザクと。ドストスト。ブスブスと。どうしようもない痛みと悪

寒と熱が、身体を襲う。

思考が働かない。脳が焼ききれそうだ。神経は何処にある。感覚とはなんだ。

身体は此処にあるか。意識は残っているか。自身をちゃんと理解出来ているか。僕は生きているか？

「おいしつかりしろ、おい！ 黒人君ッ！」

焰君の声が遠い。目の前にいるのに、南万光年も彼方にいるような錯覚を覚える。

身体が重い。僕だけ、地球の重力を何倍にも受けているような気分だ。吐き気がする。

しかし、そんな状況でありながらも。僕の感覚の一つは、鋭敏にソレを捉えていた。丁度僕の前方、距離にして二十mほどか。徐々に集まってくる人混みの隙間から一瞬だけ覗いた『彼女』の姿。彼女は僕をじっと見つめていた。

だぼだぼのシャツにスパッツ、小柄な体躯。子供のような少女は、あっという間に人混みに消えていった。

「黒人君、とりあえず人のいない場所に……………！」

×

×

「だ、いじよ、ぶだから……………焔、君」

「なにが大丈夫なんだ！ 息絶え絶えじゃないか！ 待ってる、今高美さんと呼んで」

ガシツ！ と、携帯に手を掛けた彼を止める。かひゅうかひゅうと、細い呼吸音がイヤに聞こえた。ひとまず、痛みは退いてきた。身体も徐々に楽になってきてる。この調子なら、数分で戻る筈だ。

「もう、動けるようにはなってる……………大丈夫だよ」

「なら、今の君の症状を説明してくれないか。でなければ納得出来ない」

「……………どうやら、僕は他の葦牙よりもセキレイの存在に過剰に反応するらしい。魅弦と婚ぐ前は何にも無かったんだけど、煌刃と出会った時には胸がざわつく程度だったんだ……………」

「それが彼女と婚いだ事によりさらに強化され 近づくだけ」

で激痛を伴うようになった、と」

「なにより反応するのは、自分のセキレイの可能性がある個体だけみたいだ………焔君が傍にいても反応しないのが、身近ない証拠だよ。そしてたぶん………向こうはこっちに無反応だと思っよ」

「大体は理解した。でもこれ以上悪化するようなら、僕は高美さんに助けを求める………大事な友人を見殺しにしたとあつては、僕も寝覚めが悪すぎるからね。そこだけは分かっほしい」

僕の悩み・友人が過剰に少ない　それは今となつては過去の話だった。

こんなに優しくして強い友人がいてくれるとは、僕は幸福者しあわせものだね。いやホント。

ひとまず、話を最初に戻すでしょう。焔君の端末には、まだセキレイの信号が表示されている。灰色のアイコンと、ピンクのアイコン。そして先ほどまでと違い、新たな信号が二つ、表示されていた。それは『S』と『A』のペア。つまり

「焔君！」

「ああ、解っている　　急ごうー！」

逃げ込んだ路地裏から全速力でビルの壁を駆け上がり、屋上を飛び越える。

距離はここから直線で
五km先の市街地。間に合
つてくれと願い、僕らは駆け出すのだった。

x

x

キング・クリムゾン

世界は消し飛ぶッッッ！！！！！！！！！！

百m先のベンチ。腰掛けているのは昨日のセキレイ、No.107・
椎名^{しいな}。何故か女装で白ロリ。
そして椎名に近寄るのは、先日のセキレイ狩りの葦牙と思われる少
年。椎名に近寄っている。

その後ろにはセキレイが一羽。黒い服を纏った、青年。首の黄色い
スカーフが特徴的だった。とりあえず少年は椎名を羽化させようと
している。近くに椎名を連れて逃げた少女はいない。そして椎名は
どうやら、抵抗しているようだ。

敵　　金髪の少年、及び金髪のセキレイ。保護対象　　コ
スプレセキレイ。

「虚刀流・薔薇！……！」

「うおっ！？」

杜若かきしほの超加速、そこからさらに敵のセキレイ目掛け、正面蹴りを接
続。

敵のセキレイ　　セキレイには珍しく、男性の個体だった。得
物は手の刀だろう　　は仰のけ反そるように蹴りを避けて、そのま
ま後ろに飛ぶ。その一連の動作として、キス直前の葦牙を無理矢理
抱えて後方へ下がるというのは、かなり驚いた。器用だなあのセキ
レイ。

庇うように、守るようにして、僕は椎名の前に立った。互いの距離
は短い。

「ちよっ陸奥！　邪魔しないでよ！」

「放っておいたらお前が襲われてたかもしれないんだ。我慢し
る」

「ぶーぶー」

「なるほど、君が夜見の葦牙か。なるほどなるほど、確かにセキレ
イと葦牙はよく『似てる』」

「やっぱり、アンタが夜見を殺ったっていう葦牙なんだ」

「殺ったというよりも、真っ当に殺られる要因を作った方が悪い気がするね」

「うわ、大人ってホントやな性格ー。いいよ、やつちゃって陸奥」

「だそうだ。悪いな、葦牙の兄さん。セキレイN.O.05、陸奥
殺らせてもらうぜ」

ゾクリと、空気が変わった。ざわつく肌が、心底気持ち悪いと感じる。

達人が闘う時は、空気が変わる。換気だとか風が吹いたとか、そんなモンじゃなくて。

気迫、殺気、闘気、覇気、土気、彼から放たれる存在感全てが一変する。彼が見せていた気だるさなど微塵もない、純粹な戦いのため
の存在へと至る。これが本物の
強い者か。

「椎名！」

「紫さん！」

一步遅れて少女が登場。彼女には早く来てもらいたく、悪いが焰君に探して連れてきてもらった。
焰君のお姫様だっこのから抜け出すと、一目散に椎名に抱きついた。
どうやら完璧なまでに相思相愛な様子。

「……………なるほど。セキレイが葦牙を呼び寄せた、という訳か」

「二人はいいのかい？ このままだと羽化しちゃうよ？」

「俺はお前を倒せと命じられたんだ、今さら急に相手は変えられんさ」

「あら、いい男……………」

カッコいいね、僕の身の回りの男は

虚刀流・弐の

構え『水仙』。

腰を落として脚を開き、手刀を腰に添えた構え。じつと陸奥を見据えながら、自己紹介。

「改めまして名乗りをば 虚刀流想像者、白羽黒人。自称『セキレイ殺しの黒人』、推して参る」

「あの、白羽さん……………」

白羽さん……………むず痒いな、その呼び方。さん付けは、あまりさ
れないからさ。

陸奥はクスリと笑い、鬨気を少しだけ逸らしてくれた。振り向くぐ
らいの時間はくれるという事なのか。

「あ、えと……………助けてくれて、ありがとうございます」

「君は？」

「はっ、はじめまして！わたし、佐橋紫つて言います！」

「えと、N O ・ 1 0 7 ・ 椎名です」

「うむ、礼儀正しいいい子達だ。とりあえず二人とも、さっさと婚
いじゃないなさい」

「……………へっ？」

「そこまでだ」

シュンツ！ と、振り返る僕の背後にいつの間にか陸奥がいる。

右手の刀を鞘に納めたまま、僕の脇へ身体の捻りを加えた突きを繰

り出していた。

「虚刀流

」！

「遅い

……………はさいてん 破砕点ツツツ！！！！！！！！」

咄嗟に反撃しようにも脇へ、しかも背後からの奇襲な為に、反応が遅れてしまった。

そして、ズドムツ！ と、案の定攻撃を受け、僕の身体は数mほど宙を舞い、さらに数m地面を転がっていた。

いやあ、中々にいい攻撃だ……………身体に衝撃が響き渡ったよ。こんなに身体に響く攻撃は久々だ。というより、今まで攻撃をほとんど喰らわない僕がスゴいんだろうか。セキレイとの実戦経験たった三回しかないけど。

「黒人君！」

「うそ、死んじゃった……………?」

「……………なんだ、今の手応えは」

「貴様、よくも

」！

「だあいじょうぶだよ、焰君」

ムクリと、横たわる我が身の上体を起こす。そしてなんだか寝違え

たみたいな感じの首を、コキコキと鳴らしてみる。地面に身体を打ち付けたせいか、微妙に首の骨が歪んで
あぁ、ゴキッ！ って音がしたら治ったよ。

そのまま気だるそうに立ち上がり、ゆらゆらと紫ちゃんの方に戻っていく。

「何をした」

「ちよつと裏技を」

僕が用いた裏技　その名を『忍法・足軽^{あしがる}』。我が人生の武の標『刀語^{カタナガタリ}』に登場する、敵の真庭の忍の一人が使う忍法だ。その忍の名は真庭蝶々（ちようちよう）、小柄な南蛮出の忍であり拳法家である。

さて、忍法に話を戻そう。この忍法の能力は『触れた物体の重さを失くす^な』というモノ。

鉄の塊だろうが、人間だろうが、何であろうとその質量を零にする事が出来る、女性必死の忍法。

その正体は『遠心力や体重移動などを用いて質量を「消す」、物理に則^{のっと}った』実に科学的な忍法である。そもそも忍法とは当時の科学の最先端を取り入れたモノばかりで、実にユニークなモノが多い。少なくとも、僕はこの忍法をそう分析した。故にそれを基点に忍法を実現化してみた。そして　成功。

打ち込まれた『破砕点』の衝撃を、事前後方へ跳び、ヒットした瞬間身体を上手く捻って衝撃を霧散させ、ダメージをほぼ零にした。上手くイクとは思っていなかったがね。しかし今後の改良点は多々ある。打ち込まれた後の受け身や、応用範囲の拡大などが主な課題だ。

因みに先日の『南斗獄屠拳』だけど、アレの超跳躍にも『忍法・足輕』を用いていたんだ。これが+だ！

「ってゆーか、不意打ちってアリ？」

「アリだ。一応あのセキレイも家のワガママ大将の要求でな、応えてやらんといかんのは面倒だ」

「苦労人だねえ。ああ、あとそれ気付いてる？」

「なにを……………っ、これは」

打ち込まれた直後、カウンター気味に『雛嬰粟』を放つてみたんだが、当たったようだ。

右脇の辺りの服の弛みに、すうっと切れ目が入っているのがいい証拠だ。ニヤニヤと笑いながら、今度は『伍の構え・夜顔』。脚を均一に開き、平手を腰の前に揃えた構えだ。陸奥も少々僕を侮っていたようで、深呼吸の後に改めて刀を構える。腰に刀を添え腰を深く落とした、まるで居合いの構えのように。

「なるほど……………確かにこれなら、並のセキレイぐらいは簡単に倒せそうだな」

「お褒めに預かり光栄の至りだよ」

「御子上、少し離れてる。危ないぞ」

「はい」

「なら俺も少々本気だ。俺の刀は速いからな、一瞬で殺られないよ
う気をつけな」

「ああいいぜ。ただしその頃には、アンタは八つ裂きになっている
だろうけどな」

と、キメ台詞を放ちあつたはいいんだが
なにやら陸奥の様
子がおかしい。

その視線は僕じゃなくその後ろ、焰君に守られている二人に注がれ
ていた。

おそるおそる振り返ると……………二人はどうやらとうとう婚いだら
しい。灰色の光が椎名の背から伸びて、翼のように広がる。そして
同時に 焰君は二人から一気に離れた。いや、アレは逃げた
というべきか。

その理由、僕にもすぐに分かった。椎名からなにか『よくないもの』
を感じられるのだ。

「（これは三十六計逃げるが勝ちってかあ！？）」

「嫌な空気だ……………御子上、逃げるぞ」

「ええーっ！っ！？ まだゲットしてないのにーっ！っ！っ！
！……………」

夜顔を解除し、即座に愛用の漆ななの構え・杜若かきつばたに移行。そして一瞬で
加速・退避。

忍法・足軽と併用する事で、地球の重力を無視した移動を可能とする今の僕は、とりあえず近場のビルの外壁を駆け上がり、逃げ込む形で屋上に辿り着いた。そしてすぐさま屋上から地上を見下ろす。

「世界の終わりの庭 《ワールド・エンド・ガーデン》！！！！」

椎名を中心に、力の波動がドーム状に広がり、衝撃と爆発音が、瞬間に辺りを包み込んでいく。

椎名の力を例えるなら、アレは死の波動。おそらくアレに触れたものはすべからず、生命力を奪われ死人と成り果てる事だろう。故に陸奥も僕も、危険を直観で感じて咄嗟に逃げたんだろう。たぶん、婚いだ葦牙はその耐性が出来るのかもしれない。

椎名が彼女にだけは外したのか、それとも彼女が力への耐性を持っていたのかは別として、椎名と紫ちゃんを中心に数十mの空間は、空気が死んでいたとだけ言っておこう。そして屋上に逃げた僕を見つけると、椎名は深く頭を下げて、紫ちゃんは元気に手を振っていた。

僕も軽く手を振り、その場から少し後ろに下がって二人の視界から姿を消した。

振り返ると、何処かへ逃げていた焰君がいつの間にか帰ってきていた。マスクは外している。

「これでいいかい？」

「ああ、上出来だよ。ありがとう黒人君、助かった」

「気にしない気にしない。友人が少ないんだ、このくらいの頼みは

聞かないとね」

「君ってワリと社会適応出来てないよね」

「あ痛ツツツ！！！？？？」

×

×

なんだかんだ探し回って、焰君がお礼にと服を買ってくれたり

何故か魅弦や煌刃の分まで買ってくれた　　りして、時刻

は午後八時を回っていた。そして今日は電車と徒歩での帰宅。

さあて、家の子は一体どうなってる事やら。大方『腹減った』と泣いている事だろう。

「ただいま〜」

「お帰りー。モグモグ」

「お帰りなさい。まぐまぐ」

……あつれえ……、なんか普通に食事してるよお
……？

以外と大食家な二人の食事量にあったメニューと言える内容。それは中華料理だった。

熱々のご飯に炒飯^{チャーハン}、回鍋肉^{ホイコーロ}、青椒肉絲^{チンジャオオロス}、餃子^{ギョウザ}、小籠包^{シヨウロンポウ}、焼売^{シヨウマイ}、酢豚^{すぶた}、エビチリなど、オーソドックスなモノは大体取り揃えられている。というかフツーに旨そうだ。腹が減ってきたぞい。

「これは誰が？」

「あたし」

本日は晴天なり、本日は晴天なり。午後二―二時、虚偽を吐く者アリ。

これだけの中華料理を彼女が作ったと？ そんなバカな、そんなのは夢だ、彼女の妄想に決まってる。渡したメニューにはこんな豪華なメニューは無かったぞ。金はクソ御中から出てるからいいけど。

「煌刃さん美味しいです。また作ってください」

「おうありがとう。気が向いたらねー」

「ばっ、バカな
手いわけが！」

ガサツなキャラの煌刃が料理が上

マイ箸を取り出し、とりあえず一品一品口に入れていく。咀嚼、味わい、飲み込む。

肉の食感と瑞々しい野菜の歯ごたえ、割れば溢れる肉汁、しつこくない油加減と胡麻油の風味。気がつけば無言のまま、さらりと茶碗三杯お代わりしたうえに、オカズを手当たり次第に平らげていた。丁寧な箸と茶碗を置いて合掌。そして椅子から立ち

「……………参りました（土下座）」

「うわかればよろしいのよ。アーツハツハツハツハア！」

「あれ？ これって黒人さま初の黒星……………?」

第十話　せめて、友達のように遊びたい（前書き）

こっちにかまけて片方の更新忘れてた……orz
次回もまたしばらくかかるので、のんびり待っててください

第十話　せめて、友達のように遊びたい

『キラ・ヤマト、フリーダム　　行きますッッッ！……！！……！！』

『アスラン・ザラ、ジャスティス　　出るッッッ！……！！……！！』

「ガンダム、ねえ………あたしはあんまり分かんないや」

「おやそうですか？ では地下室でDVDを見る事をお勧めしますよ。丁度ファーストからありますし」

「てゆうかさあ……………それよかさあ、昼飯まだあー？」

「仕方ありませんよ。今日は黒人さまは焰さんのお宅に、遊びに行かれていますから」

「いいなあー、あたしも混ぜりたいなあー……………イチヤイチヤ見せびらかしたいなあー」

「それは許しませんけど……………なら会いに行ってみますか？」

「はい？」

「ほへえ〜、ここがあ〜……」

「そ。僕の下宿先の、出雲荘だよ」

ボロい、と言えはそれまでだが、これはどちらかと言えは、年期が入っていると云うべきだ。

古い日本家屋のような建築方法で、かつ瓦張りの屋根と和洋の外観を混ぜたかのような佇まい。

外周を囲っている壁はほんの少し色褪せていて、味があると言えよう。焔君に案内されて敷居を跨ぐとあら不思議、なんだか不思議と心が落ち着いてくる。まるで我が家に帰ってきたかのような、そんな感じ。その名は出雲荘、焔君の下宿先である。

六月はその暖かさ故に、最近の僕は七分丈のシャツにデニムとブーツでシンプルにしているんだよ。

「お邪魔します」

「いらつしゃい」

「あら篤さん、お客様ですか？」

ドドン、玄関にて本日最初の驚き。焔君の下宿先には、超美人のお姉さんがいた。

年齢にして二十代半ばだろうか、しかし少女のようなあどけなさを残す、そんな女性。割烹着がよく似合う。

「お邪魔します。じゃあ自己紹介を　　白羽黒人と言います。
以後お見知り置きを」

「あらまあ……………じゃあ私も自己紹介ですね。出雲荘の大家をさ
せて戴いております、浅間美哉と申します」

「これはご丁寧に……………菓子折でも持ち合わせてくれば良かった
かな」

「あら、いいんですゆそんなに気を遣われなくても。それに、うち
の主人の口癖でね、『来る人を拒まず』という事なんですよ、家は
ですから、どうぞごゆっくりなさって下さいな。篝さん、後でお茶
を持っていきますね」

「ああ、うん。ありがとう美哉、頼むよ」

大家さんが台所へ向かい、僕らは一階の焰君の部屋へ向かう。だが
その前に。

「大家さん、めエーっさ美人やないつかあーいッッッ！！！！！！」

「痛^いアッッッ！！！！????」

思わずツツコンだ。僕はペチツ、くらしいのもりだっただが、焔君にはベシツ！ ぐらしいの痛みがあつたらしい。ううむ、どうにも焔刃と婚いでからと言うものの、力加減が微妙にズレてきている。力加減を忘れたという訳ではなく、僕の力が急に強くなったからズレたんだと思う。

当てられた胸を抑えながらフルフル震えて、キツとこつちを睨んで一言。

「力加減考えるよこの体力バカアツツ！！！！！！」

「あつはつはー……………ホントにゴメン」

「あれ、篝さん。お帰りなさい」

二階から誰か降りてきた、と思つたら。誰かと思えば佐橋皆人君じゃあ、あーりませんか。

同居人の焔君　　「ここでは篝かがりという名前で通しているようだ。合わせとこ　　を見つけるや否やまず挨拶、まではいいんだ。僕を見た瞬間、サアーっと血の気が引いていき、すすすーと後ろに下がっていく。」

「（ナンカスゴイ人キターーツツツ！！！？！？）」

「ねえ、こつちも露骨に怖がられると胸が痛むのはなんでだろね」

「いや、フツの葦牙からしたら君は怖いんだと思うよ？」

はあ……………そんなに怖いモンかね、僕の存在は。とまあ、そんなこんなで皆人君と再会。

焰君があればこれやと説得し、とりあえず怖いイメージだけは払拭出来た模様。

と、皆人君の後ろにいるのは……………くーちゃんじゃあな
いか。セキレイNo.108・草野^{のく}、通称くーちゃん。金髪の少女
で、まだまだ発展途上な感じの女の子である。だが

足りない。彼のセキレイは覚えている限りで二羽はいた筈だ。だ
が此処にいるのはくーちゃんだけ。

あと一羽……………No.88・結^{むすび}ちゃんは何処だろうか。

「むーちゃんね、つーちゃんとお買い物なの」

「お買い物かあ、なるほどなあ（むーちゃんは結ちゃんとして、
つーちゃんって誰だ？……………まさかね）」

ふと考えたのは、彼のセキレイがまた増えているという可能性。

出会った時には既に二羽。そしてあれから既に1ヶ月は経っている
だろうか。1ヶ月で一体何羽のセキレイと婚いだ事やら……………気
になるなあ、なんか気になるなあ。僕はまだ二羽だからあんまり言
われる事もないだろうしね。

では所変わって皆人君の部屋。焰君の部屋は、話するには向いて
いないそうだ。くーちゃんも僕と遊びたいらしいし、それなりに広
い皆人君の部屋は丁度いいのかもしれない。焰君は部屋が変わった
ので、手ずからお茶を取りに行ってくれた。

「あ、じゃあ改めまして……………佐橋皆人です」

「改めまして、白羽黒人です。同じ葦牙同士よろしく、皆人君」

正座から軽く会釈。机を挟んで向かい合った状態だ。と言いつつも僕は正座があまり好きじゃないからすぐに足を崩したし、皆人君もくーちゃんが膝に乗っかってるから、すぐに足が痺れて崩していた。そんな感じに談笑開始。

「いえ、もう白羽さんは葦牙ってゆーかセキレイに近い気がして……………」

「んーまあ、間違っちゃいない気がする……………実際二羽倒しちやってるからね」

「くろちゃんつよいも。くろちゃん、むーちゃんよりつよい？」

「さあ、どっちが強いかなーと。ああ皆人君、その結ちゃんは何処に？」

「えと、お買い物です。夕御飯の食材を買い出しに、月海と」

「ふうーん」

月海……………聞き慣れない名前だね。彼の新しいセキレイかな、このムツツリ。

とはいえ、これで彼のセキレイは計三羽になった事になる。拳系に非戦闘能力系、三人目の月海はなんだろね。なんだか皆人君も、フ

ツ一の華牙とはちょっと違う気がするな。

と　　なにやら外から気配がする。これは……………

「あ、帰ってきたかな」

「むーちゃんつーちゃん、かえってきたも！」

いや、違う、これは違うぞ。これは買い物から帰ってきた感じじゃない。

これはそう、僕がよく知ってる

闘争の臭いだ。

「へえ、ここがアンタの前の下宿先なんだ」

「ええ、名を出雲荘。まあその……………大家さんが鵓鴉計画につい

て、ある程度の事を認知していますから、言っちゃえばセキレイの休憩所みたいな場所なんですよ。だから私も此処にいたんです」

「はぁあん……………」

とはいえ、美哉おねえさまは優しいようで意外と刺々しい性格ですから、甘えるだけなんて赦されませんけどね。
とはいえそこはやはり優しい美哉おねえさま、働かせると言ってもせいぜい買出しや家事の手伝い程度でしょう。

うちの黒人さまも大概優しいですが、アレはアレで中々にサディスティックですから、怒るとなにをしだすか全く分かりませんし……………煌刃さんが良い例でしょう。快感で殺すなんて、DS以外の何者でもないでしょう？

「あ、それと言い忘れましたが……………中に計三羽のセキレイがいますが、敵ではないのであしからず」

「了解。因みに容姿は？ セキレイ三羽って言われても、誰か特定出来なきゃ意味ないし」

「まず一人は銀髪の男性、女性寄りの容姿です。一人は黒髪で活発、髪を片方結っています。一人はオレンジの髪の三つ編み、メガネを掛けています。これで分かりますか？」

「あい分かったわ。つまりそれ以外は敵って事なんだよね？」

「一様にそうとは言い切れませんが……………まあ、そうでしょうね」

あとは、私が出ていった後に入ったという大学生と、その彼女らしい女性。

焰さんから黒人さま経由なので、あんまり上手く伝わってきていないんです。

にしても……………おねえさま美哉、遂にまともな入居者が現れたんですね。出雲荘に入居した時は『この下宿大丈夫？』とか思っていましたが大丈夫なようになによりですね。そうそう、その方達にも一応挨拶をせねば。

私と黒人さまの熱愛を、とことん見せびらかすんです。どうです、素晴らしいでしょう？

「ねえ魅弦」

「はい？」

「って事は……………アレは敵って事でいいんだよね？」

煌刃さんが指差すのは、私達が立つ出雲荘の門のその先。約五十mほど先にいる二人の……………二人の、二人……………の……………メイドのような、ウェイトレスがこちらに向かってきていた。

片や金髪の外国人らしい女性、スタイル超ヨロシ。片や黒髪の日本人らしい女性、スタイル超ヨロシ。

「はあ……………全く、買い物の間違えるとは何事じゃ」

「うう、すみません……………結、月海さんとお買い物勝負に夢中になって、ネギさんとニラさんを間違えちゃいました……………無念です……………」

「それに気付くのが遅すぎたの。まあ今回はそれに気付かなかった、吾にも責がある……………共に頭を下げて、赦して貰えるよう、頼むとしようではないか」

「うう……………、月海さん優しいです……………（涙）」

「こっ、こら抱きつくな結！ 買い物袋が破れるではないか！」

なんともかましい、年頃の女の子同士の会話だった。なんだか羨まげフンゲフン。

そんな彼女達は、まあ名前の響きからある程度、想像出来る通り

セキレイだ。

向こうはメイドorウェイトレスだが、こちらは普通にセキレイとしての制服、袖の無い巫女服に袖の無い褐色のコートを着ている。得物も一応持つてきていますから、故に彼女達は私達の存在にすぐに気付き、こちらへ早足に近づき、身構えられる。

「汝^{なれ}ら、セキレイじゃな？」

「はい。それがなにか？」

「えっと、挑^{ちか}戦^{せん}って事なんでしょうか？」

「んー、どーだろね。あたしらは偶然アンタらに出会^{でくわ}したただけだからね」

「じゃが……………出会したのも何かの縁。汝らも葦牙を同じくするセキレイのようじゃいな。ならばこれも、セキレイとしての運命……………
No.09・月海、参る！」

「No.88・結！ 拳系、よろしくお願いします！」

「No.37・魅弦、弓使いです。お相手致します」

「No.90・煌刃。武器は蛇腹剣だ。かかってきな」

背中に風呂敷に包んでいた弓を取り出し、矢をつがえる。長さ五尺の日本弓だ。そして煌刃さんは閉じていたコートのボタンを外し、徐に裾の中に手を突っ込む。その内側、彼女の脚に、蛇腹剣は巻き付けられていた。それを掴むと、まるで蛇を巣穴から引き摺り出すかのように抜き放つ。

ワイヤーに繋がれたその刃は瞬く間に柄に戻り、一振りの蛇腹剣に戻った。

私達は己の得物を構える。準備は完了、いつでも戦えます。

彼女らは買い物物の途中という事で、買い物袋を門の内側に下ろして

準備完了。

月海さんは能力系　　二次元にはテンプレの、水系能力者だった　　で、彼女の周囲には膨大な水があちこちからかき集められていた。そして結さんは宣言通りの拳系、深く腰を落として構えている。

「いざ、参る！」

「水のセキレイは私が、拳のセキレイは煌刃さんに任せましたよ」

「あい任された！」

「よろしくお願ひしますッ！」

煌刃さんが前に飛び出し軽く跳躍、空中で身体を右回転させてその遠心力に任せて剣を振るう。

だが七尺の蛇腹剣は近接戦闘には若干不向きなのか、結さんには頭を下げるだけで簡単に避けられていた。だがそれだけには留まらず、煌刃さんは下段から打ち上げてきた結さんの拳を左手で受け止め、その慣性を利用して距離を取る。

そして距離が5mと空いた瞬間、蛇腹剣を解体、鎖刃にして展開する。まるで蛇ムネのようにうねりながら、刃は結さんを狙い飛び回る。結さんは頭を下げて、身体を捻って、飛んで刃を殴つてと、あらゆる方法で攻撃を避けていた。

かくいうこちらはと言うと、一度に二本の矢を放つ私は、常に左右に動いていた。

それは今も私の頬を掠めるこの　　水の弾丸があるからだ。名を『水ノ矢』、高圧水流の弾丸だ。それを秒間十発の勢いで撃ち続けてくるから、移動を休めると瞬く間に蜂の巣ですよ。故に今日現

在私は目をフル稼働させ、弾丸を見切っていた。

「くっ、ちょこまかと……………!」

「これが遠当て使いの正しい戦闘方法です、咎められる覚えはありませんよ」

「よかるっ、ならば

水龍スイリウツツ!……………!」

膨大な水が凝縮され、一匹の龍へと姿を変える。月海さんは迷う事なく、水龍を私にぶつけて来た。

私はそれを避ける訳ではなく、弓の端を掴んで、まるで刀のように構えた。示現流、とでも言いましょうか。

弦を正面に、水龍が1mと接近した瞬間、日本弓を一気に振り下ろす。するとどうだろう、高圧水流の塊たる水龍は、斬撃と衝撃で爆散したではないですか。流石はM・B・I製の特殊な弦です、堅く柔らかいいい品ですね。

「(弓を……………刀のように……………!?)」

「ぼおっとしてる暇はありませんよツツツ!……………!」

あまりの突然の事態に戸惑う月海さんを余所に、私は弓に新たな矢をつがえ、放った。

狙いは胸、その心臓。矢は直線のまま、まっすぐに月海さんの方へ進んでいく

「ねえ、アンタ」

「はい？」

剣を元に戻し、煌刃は結に話しかける。

「アンタの葦牙ってさあ、今何処にいんの？」

「皆人さんですか？ 皆人さん、結のお家は此処ですよ」

指差すのは、真横にある出雲荘。

「……………あたしの葦牙も、こん中にいるんだけどさ。此処に男って住んでるの？」

「男の方ですか？ あ、はい、いますよ。篝さんという方が住んでいます」

「……………あたしの葦牙、たぶんソイツの連れなんだよね」

「えーと、煌刃さんの葦牙様が中にいて、煌刃さんの葦牙様は篝さんのお友達で……………篝さんは結や皆人さんのお友達で、篝さんは大家さまのお友達で、という事は……………煌刃さんの葦牙様は結達ともお友達という事ですね！」

「（まーわりくどい解釈な上にメチャクチャ言うなこの子……………アホか？）」

「なにをしておる結！」

「あ、月海さん！ この方達、敵じゃなかったです！」

「はあ！？ なにを」

「あ」

「な、No.09・月海じゃ……………よ、宜しく頼む」

「まったく、ちよつと前に会った結ちゃんの事すら忘れていたとは、なんと愚かさ甚だしい。」

「くーちゃんの一件は結構刺激的に衝撃的だったのに、キレイサツパリ忘れてた。逆にどう忘れたのか教えてほしいもんだよ。謎増殖した植物園で、謎の少女に出会い、以下略。とりあえず、今後魅弦には『バカキング』の座を与えよう。」

「わ、悪イ黒人。コイツら知り合いだったのか」

「いにや、気にしなさんな煌刃よ。ただ単に物覚えの悪い、くおんのヴァアカが悪いだから」

「た、タツプタツ……………ぐげえ」

「キヤメルクラッチをしながら煌刃の気を紛らわせようと、軽く魅弦をイジる。」

「そんな風に魅弦達と戯れていると、月海ちゃんやら皆人君やらがなんと奇異なモノを見るように、こちらを見ていた。それもそう、セキレイは本来なら人間の筋力よりも圧倒的に力が強く、また、人間程度に力負けするなど断じてあり得ない事を知っているからだ。魅弦『程度』なら最早筋力負けする事はないのが、僕の現状だ。煌刃とも腕相撲すれば負ける気はない。」

「とつ、とりあえず俺の部屋に……………このまま此処で立ち話もな

「んですから。ね？」

「それは有り難い。うちの嫁から君のセキレイ達に、謝罪をさせたかったところなんだ」

「あたしはハナからそのつもりだぜ。非礼は詫びて未永く仲睦まじく、これがサイコーだろ」

「よろしい、君はいい子だ。帰ったらアイスを買ってあげよう」

「わーいやたー」

ピクピクとヒクついてる魅弦を抱き抱え 廊下が広いから、

お姫様だっこが出来たぜ 二階の皆人君の部屋へ一同移動。
テーブルには焰君が持ってきてくれたお茶が、まだ温かいままで残っていた。だが人数分には足りないのので、再び焰君が取りに行ってくれた。

円形のテーブルを半分に分け、テーブルから離れて並ぶように僕と皆人君を基準に話を始める。

結ちゃんと魅弦、月海ちゃんと煌刃。敵対関係が互いに向かい合い、腰を降ろす。くーちゃんは僕と皆人君の間に。美哉さんは夕食の準備で離れられないらしく、上がってはこない。他にも住人がいるそうだが、出てくるかは分からないとの事。

「では改めまして自己紹介を。なお、此処にいる面子は今後敵対する事は赦しません。この禁を破った者には、僕の悪魔のツボ^お圧^おして“死よりも恐ろしい快感”を与える。いいね？」

『……………（コクリ）』

「じゃ、じゃあとりあえず俺の方から……………えと、葦牙の佐橋皆人です。よ、よろしく……………」

「葦牙の白羽黒人、二十歳。特技は炊事洗濯、趣味は二次元愛好。流派は虚刀流だ。よろしく」

「うわ堅ッ！ 誰ですか貴方ああだだだだだだだだだだッッッ！！
!?!?!?!」

邪魔者の腰辺りの痛覚のツボを刺激する。名前は 忘れた。
魅弦には、まるで焼き鏝こてされてるみたいな痛みが感じられる筈だ。
さてそれは捨て置き。結ちゃんと月海ちゃんはセキレイの正装に着替えていた。ミニスカ巫女服と、白黒のヒラヒラしたヤツ。

「NO・88・結です。ふつつかものですが、よろしく願いします！」

「NO・09・月海じゃ。良しなに頼む」

「NO・37・魅弦です。痛みの中でも自己紹介は忘れあぎゃああああああああ」

「な、NO・90・煌刃……………な、なあ黒人？ そろそろ赦してやれば？」

「え、なんで？」

「死んじゃう！ 魅弦そろそろ死んじゃうからやめたげてよぉ！」

「あ、あとごっちの子はNo.108・草野。みんなはくーちゃん
って呼んでます……………」

「むふーッ！」

そんな混沌とした部屋のドアの前では。

「（黒人君……………君も大概大変なヤツだよ）」

「あらあら、仲睦まじいですね」

「うわ楽しそう、けど入りたくないなあ……………」

「ぬふふふ、なにやら新たなドラマの幕開けの予感ですよぉ〜」

……………「！」

第十一話 よじやく会合

「ありがとうございますー」

コンビニで買った弁当。最近はこのどれが当たりかハズレかを見つけるのが暇潰しになっている。

他にはジュースや茶、パンにデザートなど。真つ当な食事に少しでも近付けようと頑張ってみた。

それを持っていくのは帝都内の小さな公園。子供向けの遊具が多数設置されていて、保護者が休める背凭れ付せもたのベンチ、飲み水が出る水道と、中々に整えられた場所である。そのベンチの一席、木陰に重なるそこに、俺の待ち人はいる。

「ほれ、お待たせ。今日はミックス弁当だ、野菜と肉がたっぷりだ
せ」

「……………ん」

麦茶は苦手らしいので、彼女には烏龍茶を。ミックス弁当と手渡しで、俺は彼女の隣に腰を降ろす。

五月は末の、梅雨の前。空気が気持ち悪いくらいの湿気を帯び始めた、そんな頃合い。

弁当をひたすら無言で食べ続け、数分で完食。ゴミは纏めてゴミ箱へ。今日は茶を飲みながら、今後について語らおうと思う。まず一つ、俺達は人間じゃない
『セキレイ』と呼ばれる、ある種のミュータントのような存在だ。

物理的な破壊力を持つヤツ、火や水などの能力を駆使用するヤツ、得物を持つヤツ。事様々なセキレイがいる。

そんな俺達は、あの塔……………帝都タワーに居座る男、M・B・I社長・御中広人の差し金で、この闘いを始めていた。無論、俺自身闘いに抵抗がある訳じゃない。本能的に『闘う事』を求めている自分がいるのが、いい証拠だ。

だが、力無き者はどう生き残ればいいのか。そんな単純な疑問も浮かんでくる。

神座島かみくらしまにいた頃にも、何体かひ弱な個体を見た覚えがある。アレは相当弱かった。

闘うとかそれ以前に、闘えるのか心配になるくらいだ。なにより、そんなヤツには闘う意志が無かった。

「……………デザート、欲しい。也」

「バナナプリンとマンゴームース、どっちがいい？好きなの選べ」

「……………バナナ」

そしてコイツも、そんな『闘う意志の無い』セキレイの一体だ。だが決して、弱い訳じゃない。

寧ろコイツは強い。並みのセキレイなら100%勝てる筈がないほどの、馬鹿馬鹿しい能力を持っている。

だがそれ以前の疑問が一つ浮かんでくる筈だ。何故セキレイ同士が『婚いでないのに仲良くしてるんだ』という疑問が。そりゃ簡単だ……俺はコイツの保護者的な存在だからだ、以上。色々あつて今はコイツの保護者ってだけで、いつかは闘う……かも知れない。

「さて、今日も探すか。お前の葦牙」

「……………」

南にはいなかった。御子上とかいう葦牙もいたが、なんかイケスかない。元からセキレイ持ち持ちだし。

東にもいなかった。氷我つてヤツはなんか、セキレイを道具にしか考えていない。だからこれもノー。

西のヤツは知らない。常にあちこちバイクで走り回っているらしく、見かける事自体レアで、地元民に聞き込んでも知らないとしたか答えなかった。とまあ、こんな風に帝都の各所をしらみ潰しに当たっているんだが、どうにもハズレしか引いてない。となると

「北にゃあ特に目立ったようなヤツはいないって話だ。なら
タワー近辺だな。行くぜ」

ぴよんこと、彼女は俺の背中にしがみつく。身長が小さいかし軽いから、背負っても楽々だ。

公園から次は帝都タワー周辺、その辺りを散策するでしょう。そしていい加減当たりクジを引きたい。そんな淡い期待を胸に街中の上、ビルの屋上を八艘跳びの如く駆け抜けていくのだった。

『……………』

「なんかカツコイイよな金髪って」

「そうですねえ、なんだか高嶺の華みたいな感じがして素敵です。それに静雄と臨也の絡みが……………」

「うちにも男のセキレイがいたら、もちっと妄想とか出来んのかなあ……………」

じつとりとした視線を感じる……………毎日家ではパソコンからアニメを垂れ流しにしてるが、なんで『デユラララ!!』にやたらと反応するんだ。腐女子でもないのに腐女子みたいな発言しやがって。

「ねえ、黒人オ？」

「なにかね」

「その、折り入ってお願いがあるんですけど……………後生なんで、叶えて貰っていいでしょうか？」

「ふうむ、後生か……………良かろう、叶えてしんぜよう」

「「男のセキレイと婚いでプリーズ!」」

「だが断る」

……………煌刃、何度も舌打ちするのやめなさい。下品極まりないよ。魅弦もじつとり視線で手をワキワキさせて近付かないでくれよ、怖いだろ。だが後悔なんてあるわけない。

「この白羽黒人が最も好きな事はッ！ 相手がyesと答えると思っっているヤツに、面と向かってnoと断ってやる事だッ！ そしてなによりッ！ 心の中で拒否すると思っただなら、その時既に行動は終了しているのだッ！」

とまあ状態混じりに断っている訳だが、拒否しているのはホントで本気だ。

彼女達の頼みであろうとも、こればかりは無理。先日にもあったが、今の僕はセキレイに過敏だ。

婚ぐ可能性のある個体のみだが、およそ二十m前後。たったそれだけの距離に近づかれただけで、あの激痛。それ以上の距離に踏み込まれれば、どうなるか。最悪死ぬかもしれない。そう考えると、可能な限り出歩かないのがベストかもしれないな。

「ったく、これだからへタレは……………」

「誰がへタレだ誰g」

携帯の着信音ユビドフマールゼーが鳴り響き、メールの着信を告げる。送り主は不明。とりあえずメールを開いてみよう。そうしなければ、話が始まらない。ウイルスなんか怖くない！

『葦牙諸君、ご苦労！ M・B・I社長・御中広人である！

そんな葦牙の諸君に朗報だ。現在帝都タワー近辺に、未羽化の個体のうち二羽が確認されている。ひよっとしたら羽化させられるのはあなたかも！？ なお、その個体は私のお墨付き、早い者勝ちだ！』

232

メールを読みきると共に即刻削除。続いて新たなメールが二件。送り主は焰君と高美さん。焰君はそのセキレイの保護に向かうそう
で、高美さんは御中をシメるとか。

「ぬぬ、なにやら美味しそうな話の匂いが……………黒人さま、今のメールはなんですか？」

「（首 貝）」

「目線反らすなよ。でもって言葉遊びにもなつてねえから」

「ふっ、遅かったな。既にメールは削除した！ 君達に話題を知る術はない！」

チッ

また舌打ちかよ。

「はい、この話はおしまい。ほら、さっさと掃除するよ。今日は天
気いいんだから」

「ブウーブウー」

だが心の欠片ほど残っている疑問はある。それはあの時、街で出会
った、一羽のセキレイの事。

幼さを抱えたままの彼女に『僕は』嗚咽を感じるほどに反応してい
た……………だが彼女は？

セキレイたる彼女は、人間であり、葦牙である僕に反応していたの
だろうか？ ひよつとしたら、ただ僕が誤反応を起こしただけなの
ではないか？ 気付かなかっただけで、実は別のセキレイが近くに
いたんじゃないのか？

断っておきながら、洗濯物を干しながら、今更そんな事を考えてしまった。

×

×

それから少しして、買い物がてら街に繰り出した時の事だ。

「いっ
っが

ッあ……………！」

僕は苦しみながら一人、地面に這いつくばっていた。

「あークツソ、なんでハズレしか引かねえんだよ……………イライラ
すんぜ、つたく」

適当に公共物でも壊してスッキリするか……………と思ったが、アホ
らしいのでキャンセル。

既に葦牙探索を始めて約三時間。未だに相方に反応はなく、俺にも
ピンとくるヤツは現れない。

やはり都心は都心、数多の人が行き交う此処でも、八十億と何分の

「一は中々に見つからないモノだ。歩き疲れた脚を休めんと、スーパーに近い公園を探しだし、相方を先に休ませてから自分はドリンクを買いに行く。」

M・B・エマネーカードは、本気で便利だと常々思う最近の俺だった。上限なしとかマジでVIPだよな。」

「ほれ、買ってきたぞ」

「……………ジンジャー、好き。也」

「そうかい、あそりや良かったな。おやつはバニラアイスでいいか？」

「(コクコク)」

なら俺はS a1とハーゲン ツツのバナナミルクを、一人じつくりいただくとするか。」

「は見た目は十代前半のガキなのに、好きなおやつや食べ物はかなり年期入ってるんだよな。」

「根菜の煮物が好きだったり、ゴハン党だったり、ネバネバ系の食べ物が好きだとか、チョコやクッキーよりも煎餅せんぺいや餅だったり。普通の子供の趣味趣向よりも、二十代三十代の感性寄りなのが特徴でもある。」

「で、お前にはなんの反応も無しかよ？」

「……………いない。たぶんこころ辺とは違う。也」

「キャラ造りに語尾に『也』とか付けんのやめる。マジウゼエから」

「……………影、薄くなる」

「知るかボケ」

あーイライラする……………そんな時だった。視界の片隅に、一人の青年が映る。

黒髪を肩辺りで切り揃えた、美形の青年。身長は高く、身体も細いが、ひ弱なイメージは一切無い。

二十数m先を歩く彼に、一瞬だが
胸が、心臓が熱くなるのを感じた。気温とか太陽光とか、そんなんじやなくて。内側から発せられた熱に、胸がざわめいた。そんな心臓を服の上から抑えながら、遠くに消えた青年を思い出す。

「……………アタリだ……………！」

ダッ！ と、地面を蹴りだし青年を追いかけた。

この葦牙探しなんて面倒な日々に、終わりを告げる為に。

それは、僕が地面に這いつくばるなんて不様極まりない状態になる、約十数分前の事。

自宅に掃除をさせる為に魅弦と煌刃を置いてきて、一人夕食の買い出しに出向いてきた。

タワー近辺には、大方の生活に必要なモノが揃っている。これは以前言った覚えがあるね。スーパーもあればゲーセンもあり、コンビニもあるしそれなりに大きい家電店もある。故に僕は、地元からはあまり出歩かない。

そんな今日、久しぶりに家電店で安売りの電球を買いだめし、スーパーで夕食を買った。その帰路にて。

「あれ、君達……………」

「あー、あの時の!」

「う、う無沙汰してます……………」

いつぞやに出会った二人。佐橋紫ちゃんとそのセキレイ、No.1 07・椎名君だったか。

二人の手にも買いた物袋が。最近の女子大生も、どうやらちゃんと自炊出来てるらしい。Yesジャパニーズガール。そんな感慨深い光

景に感銘を受けつつも、彼女らに出会った事に、久しぶりな感を感じざるを得なかった。

「そうか、もう一ヶ月か……………二人は仲良くやってるの？」

「そりゃもう！ あたしは椎名が大好きだし、椎名もあたしを大好きって言ってくれますし！」

「ちょ、紫さん……………恥ずかしいですよ」

「キヤーーッッッ！……………椎名きゃーわゆるーいッッッ

……………！……………（オノシ）」

うっわバカップル……………うちも大概バカだが、ここまでラブラブとは。恐るべし美少年。綺羅星……………！！

「あの、黒人さん」

「うん？」

「その、変な話なんですが……………最近、身体がおかしくなったりしてませんか？」

何を言い出すんだこの子は。身体が変だって？

それは今まさに僕が抱えている悩みそのモノじゃないか。なに君、エスパー？

だがそんな訳はなく、恐らく精神感応　　セキレイ間の微弱な
テレパシーとでも言うべきモノ。虫の知らせ程度らしい
やセキレイの直感で、僕の身体の“異常”を感じたんだろう。やは
りセキレイというのはスゴい。
長話になりそうなので、とりあえず場所を変更。近くの公園のベン
チにて。

「……………若干ね。婚ぐ可能性のある個体に近づくと、身体に激痛
が走る。僕がセキレイに反応するんだ」

「やっぱり……………」

「つえ、なんの話？」

「……………たぶん、黒人さんは高美さんが言ってた“最適合者”だ
と思います」

なにやら思わせ振りの表情で、椎名はそう言った。『最適合者』
恐らくその言葉通り。

「『最適合者』は、理論上葦牙に一人いるかないか、現実にはい
ないとも言われていた、言ってしまうえば《偶然》の存在なんです。
その名の通り、葦牙とセキレイの互換性が五対五なのに対して、最
適合者は『十対五』の比率でセキレイに反応するんです」

紫さんが言ってた『プリンにお醤油』と同じですね、と椎名は付け

足す。

「本来なら互いに身体が微弱に反応する程度の筈が、最適合者』だけ』は身体を越えて神経にまで影響を及ぼします。五感から痛覚まで、およそ身体の全てに働きかける……最終的には、セキレイと婚げば婚ぐ程にその感度は増していく、倍々式の探知機のようなモノ……らしいです。僕も高美さんが『暇潰し程度に話してやるっ』って言って聞いてたくらいですから、詳しくは……」

……つまりは。最適合者というのは、自身と婚ぐ可能性のある個体に対しては『剥き出しの神経』と変わらない
そう言いたいのか。なるほど、自分の身体が無闇あたりに痛みを感じていたのにも、ようやく納得がいった。
なら最初魅弦に出会った時の一瞬の脈動、煌刃に出会った時の身体の疼き。

街中で少女に出会った時の全身を這いずり回る激痛、婚いだ後の身体の熱と痛み。全てが繋がった。

「というか、高美さんもそこまで調べてるんなら、何かしら手を打って欲しいモンだよ……」

「最適合者に関しては全くの未知の状態だから、迂闊には対策を練れない、とも言っていました……下手をすれば、最適合者の人間とそのセキレイを殺す、もしくは実験動物にもしかねないって……」

それも得心がいく。やはり高美さんは優秀な女性だ、惚れ惚れするよ。

婚げば婚ぐ程に感度を増していく……………言ってしまったえば、これはエンドレスじゃあないか。

互いに反応して魅弦と婚いだ。魅弦と婚いで感度が増して、煌刃とも婚いだ。続いてその少女と婚いだら、また次が待っているのかもしれない。これは有り得ない推論だが、最悪……………『既に羽化した個体にすら反応するかも』しれない。それだけは避けたい事態だ。そんな事になれば、僕は一〇八分の一〇五羽に反応する事になるかもしれないから。自意識過剰とか言われても怒らない。だってここまで納得いく理論を言われたら、何が起こっても文句はないし、驚く事も無いからさ。腹もくくれたよ。

「ありがとう椎名、勉強になった……………今度は二人にお礼がしたいな。紫ちゃん、アドレス教えてくれるかな？ 出来れば住所とかあ、悪意は無いよ？ 気まぐれにサプライズでもしてみようかってくらいだから」

「もうサプライズじゃ無くなってます……………」

「しまったアアアーツツツツ！！！！……………」

「ま、まあまあ。アドレスくらいなら全然いいですよ。今度遊びに来てください。いいよね、椎名？」

「僕はもちろん構いません。是非遊びに来てくださいね、黒人さん」

「じゃ、ちゃちゃっとアドレスを交か」

「これは……………黒人さん、反応してるんですね？」

「ら、しいね……………たぶん近い……………」

「なあんか胸がザワザワすつからよオ。相方の言つ通りこつちに来てみりゃ、ホントにいやがった」

その声を聞いた途端、身体の痛みがすうっと引いていった。まるで今までのが嘘、夢幻のように。

若い、男の声。年頃の青年らしい声は、公園の入り口方面から聞こえてきた。三人がそちらを向く。

其処には、背の高い金髪の青年と、その後ろにくっついていいる少女がいた。痛みの引いた思考回路は、その少女を鮮明に思い出していた。彼女は間違いなく、あの時の少女だ。街中の人混みに見つけた、ダボダボシャツの少女、その人だった。

「アイツだな？」

「……………ん」

「アンタ、葦牙だな？ それも既にセキレイ持ちの。何羽持ってん

だ？」

袖の無い黒のインナー、腕には包帯で革の穴空きグローブ。
大胆にスリットの入ったゴシック系のスカートに、中には黒のレザ
ーパンツ。

靴は黒革のロングブーツで、ベルトアリアリ。ほんの少し長い金髪
を結っていたり、その顔立ちから彼をビジュアル系と勘違いするか
もしれないが、彼らは間違いなくセキレイだ。僕の『最適^{あしかひ}合者』と
しての直感がそう叫んでいる。

「オラさっさと答えるよ。ほおら」

「……………あー、君は。人に質問するなら先に名乗るといふ事を知
らないのかな？」

「んん？ あっははア、悪イ悪イ。んじや自己紹介させてもらっわ。
オラ、ついでにお前もしとけ」

青年はそう言うが、少女は寧ろ離れて近場のベンチに腰を降ろして
しまっていた。

青年は呆れ返ったかのような溜め息を吐いて、一人寂しくこちらに
歩み寄ってくる。距離にして二m。

「はじめまして、葦牙さま。セキレイN.O.1000・地^じ天^{てん}
アンのセキレイだ」

第十二話 大地(だいち)礼賛(らいさん)(前書き)

よつやく出揃った、黒人のセキレイ達……………十二話、始まります。

第十二話 大地（だいち）礼賛（らいさん）

前回のあらすじ

現れた。名をNo.100・地天^{じてん}。

公園にて、僕の新しいセキレイが

ビジュアル系の容姿と服装が特徴の、珍しい男性の個体である。身長も高く、顔立ちなんかもうサイコー。

そしてそんな彼に着いてきたのは、もう一羽のセキレイ。名前は知らないが、少女は近くのベンチに腰かけて傍観を決め込んでいる。

そしてすぐ後ろには、先程まで談話を繰り広げていた、佐橋紫ちやんとNo.107・椎名もいる。

最後に追記。僕は『最適者』と呼ばれるセキレイに過剰反応する人間らしい。たかだか二十m以内に近付かれるだけで全身に激痛を催すほどに敏感なのだが、どうやら十m以内に入られると、痛みは無くなるようです。

以上、前回のあらすじ

なう、地天と対峙中。

「No.100・地天だ、ヨロシク。アンタは？」

「白羽黒人……………人よりもちょっと強い葦牙さ」

身体の痛みが引いてくれるだけで、ここまで余裕が出るとは思わなかった。

互いの距離は二m弱。別段構えたり、攻撃の予兆のようなモノも無い。ただ立ってるだけだ。

目配せで紫ちゃん和椎名には下がってってくれと頼み、これで状況は出来上がった。たとえ戦闘になつたとしても、迷う事なく戦闘が出来る。場所が都心ど真ん中の公園ながらも、周囲にも人はいないようだった。

「で、僕のセキレイたる君は、一体何を思って思わせ振りな登場をしたのかな？」

「ベエつにイ。ただ出始めが肝心と思つて、最初はキャラ強めにしてみただけだよ」

「なるほど、納得……………あの子は？」

「さあ、たぶんアンタに反応してんじゃないか？ 今は俺の番だから引ッ込んでるだけだろ」

これはこれは……………ホントに二羽とも僕のセキレイなんだね。うわあ、大所帯だなあ。

ただでさえ大喰らいが一人いるのに、そこに更に二人って、マゾだな僕は。あと煌刃は小食なんだぜ。

「が」

「が？」

「それだけじゃないだろ？ 君は何か別の用事で僕に大々的に接触してきた 違うかな？」

「ンン~~~~……まあアタリ。なんかアリガちな展開だからあんま気は進まないんだけどよお、噂で『セキレイに相對出来る葦牙がいる』って聞いてた。本人に会ったらさ、そりゃ確かめねえといけねえっしょ？」

「まあまあ、それはいいだろう。僕はなんだか有名らしいようで、あんまり知られてないみたいだし」

正確には、アంతタの顔が割れてないってだけなんだがね。彼はそう付け足して構えた。

空手の有名な構え、『天地魔闘の構え』をご存知だろうか。両手を上下前面、対に突き出し、脚を前後に開いた構えだ。下手に拳を握る構えよりも有名で、今彼はまさしく『それっぽい』構えを取っている。本流のピシツとした構えじゃなく、若干気だるそうに力を抜いた状態。なんか『壱の構え・鈴蘭』すずらんに似ているな。

カタナガタリ刀語の世界では、壱の構えが後の時代に空手に組み込まれる、とかなんとかって話を聞いた希ガス。

「セキレイN.O.100・地天！ 行かせて貰うぜ！」

「虚刀流想像者・白羽黒人 来ませイ！」

構えから彼は近接格闘タイプと判断。なら僕に利がある。伊達に十年も修業してた訳じゃないからね。

相手が如何に速かろうとも、狙う場所が解りさえすれば攻撃を往^いなす事など簡単極まりない。

それに戦闘中は自然と、視線が狙う部位に集中してしまうものだ。

これは生物である以上、反射的に仕方のない事である。だから相手の目線だけを正確に読んでいれば、何処に来るのが分かる。分かっ^いてしまえば、対応が楽になる。

初動は決まっ^いて『壱の構え・鈴蘭』から。後の先を取らんと、地天を待ち構える。

バキヤツツッ！！！！！！！！！！

「が　　ッは……………アツツツ！！！？？？」

のだが、どうやら読み違えたみたいだ。失態無念。

目前一mに迫った途端、地天は掌を正面の僕に向けた。そして一秒経たずに手を振り下ろす。

直後だった

頭上から『見えない力』に押さえつけ

られ、身体ごと地面に這いつくばっていた。それも並の力なんかじゃない、まるでKONISHIKIやマツコDXが頭上から飛び降りて来たかのような、突然の衝撃だった。

だがそれはホンの数秒で消え去り、即座に身体を起こして地天を凝視する。

「こ、れは……………衝撃波　　！？」

「ほおら、あんまボオっとしてつと叩き潰しちまうぞコリアツツ
……………！！！！！！」

更に続けて掌を翳す。狙いは間違いなく僕だ。的を絞らせない為に、とにかく走り出す。

案の定僕がいた場所には小さなクレーターが出来上がり、如何に強烈な衝撃が襲ってきていたのかを証明していた。それは間隔的に僕の後を追い続けて、その度にクレーターを作り出している。だがな

により恐ろしいのは

「（攻撃方法が見えない、って事なんだよねエ
！）」

ッ

全くの無色透明、予備動作は掌を翳すだけ。音もなければ、座標理論も分からない。

ただ掌を基準にしているのか、彼が掌を向けた方向のみに衝撃波は発生していた。つまりはアレが基点。なら掌を中心に置かれる前に接近し、胴体を叩く。踵を翻し、反復横跳びの如く地天の背後から円を描いて突撃する。

能力系との戦闘経験は積んでおきたいが、あまり長丁場は厳しい
故に一撃必殺！

「虚刀流、陸の奥義・錦上添花！」

背後をとった。間合いは三m始動、だが地味に脚の速さには自信ありなのさ！
ギリギリこちらに振り向いてきたがもう遅い。掌がこちらに能力を発動する前に、技が決まる方が速い！

「って思ったかイ？」

間合い一mに踏み入った瞬間
！！！！と、身体ごと叩き伏せられた。

ドゴッッッ！！！！

「ぶぶッッッ！！！！????」

肺を鷲掴みにされて、中の空気をまるごと押し出されたような気分だ。

しまった、説明は古今東西ヤラレフラグだった……………しまった、僕とした事が。

地面に叩きつけられた身体を起こして周辺を見回すと、潰されているのは僕だけじゃなかった。地天を中心に地面が全方位一mほど、丸ごと潰されていた。これは範囲系の攻撃……………だがいつ掌から攻撃を？

「アンタの疑問は解るぜ。そんなアンタの代わりに答えてやんよ。アンタは俺を中心にグルグル回ってた、攻撃に捕まらない為に……………って言えば解るかな？」

「置き攻め……………時間差攻撃か！」

「ピンポーン！ その通りだ。俺の能力は応用利くんだぜ？」

なるほど、納得。僕が彼の周囲をグルグルと旋回していた時には既

に、能力の爆弾を配置済みだったと………ずいぶんとまあ利口な闘い方だなこれは。ギャル男っぽいのに利口だとか、裏切りすぎる。

だがなんとなく、能力については理解出来た。攻撃方法、範囲、方向性　　これらを統計すると。

「君の能力は……………重力だ」

「オオツ、スゲエ！　初見でそこまで見破られたの初めてだぜ！　けどよお、なんで俺の能力が重力じゃなくて『重さを操る能力』って勘違いしなかったんだ？　結構似てるのに」

「　　簡単だ、君の攻撃はまず範囲攻撃だ。そして君の攻撃が『対象の質量を増加させる』能力だと仮定しても、平面の地面がクレーター状に潰れる原因にはならない。そして質量を操るのなら、攻撃は僕の頭上からではなく身体の内部から比重を加速させて行われるモノ。だが実際は身体が重くなるのではなく『僕は頭上から何かに押し潰された』……………そこらへんから統計すると、君の能力は『重力』に絞れたという訳だ」

「正解正解！　いやアンタマジスゲエわ！　こんな葦牙見た事ねえよ！」

そりゃどうも、とは言わない。如何せん、初の能力持ちの相手が『重力』とは、なかなかどうして。

置き攻めアリ、範囲不明、最大威力不明、弱点不明、速度不明、最大弾数不明、不明だらけの相手だ。とりあえずバク転して再度距離を取る。互いの距離は五mとそれなりに広がった。依然余裕なのは、

自身の能力に絶対的な自信があるからだろう。

「椎名、どうにか出来ない？」

「ダメです。セキレイの闘いは本来一対一……それは相手が葦
牙の黒人さんでも、変わりません」

出来れば助けて欲しいんだけどね……………まあそれはさて
おき、どうするか。
攻撃に関する八割が不明な相手に、どう闘いを挑む？ 接近戦一択
しかないが、どう攻め崩すというのだ？

「まあ関係無い」

やるだけだ！」

「おつ、開き直りやがった。でエどうすんのさ、葦牙サマ？」

「至極簡単
トゥ・イーズイ

君が僕を捉える前に、君を倒す他無い」

「ご愛用、漆の構え『杜若』かきつばた。だがいつものクラウチングではなく、
両手は拳を作っている。

それを地面を殴るように立てて、クラウチングの構えを取る。そこ
までは変わらない。

変化するのは、この後の速度だ。拳は地面を殴るためのモノだ。高
威力の拳の打撃による反発力を利用し、元から速度のある『杜若』かきつばた
に更に速度を加える。だがこの平地だ、移動してもたぶんすぐにバ
しる。

「いいねこの空気！ やる気出てきたぜ！ かかって来オい、だが俺が勝アつ！」

「ああ 行くぞ」

前のめりになり、両腕に力が込められる。内勁ないけいきこう氣功 中国拳法に伝わる、秘伝の体法。

呼吸に始まり、身体の氣の流れ、筋肉の動き、骨の捻り。静から動への一瞬の反転。

それら全てを総動員し、この一瞬かそくに用いる。こんな素敵な舞台に、手加減なんて無粋で不様で無作法なモノは必要ない。向こうも、徐々にその重力の力が増していくのが解る。いい証拠が、彼の周囲の小石が、次々に宙に浮かんでいるという点だ。だが迷う事など何もない。ただ、突き進み、打ち倒すのみ

「いざッッッ！！！！！！！！」

瞬間、音もなく僕は駆け出した。正確には、音が立つ前に前に出たというべきか。

ソニック・ムーヴ
音速移動

人間の身体で擬似的な音速を出せるなんて、中々にスゴい体験だね。

流石にこれほどの速度を出されては、彼も焦らざるを得ないようだ。当初は一気に突っ込んで叩いて終わり、なんてシンプルな作戦だったんだけど、『前面から突っ込んだらアウト』と心の中の何かが叫

んだのを感じた。そしてそれに従い、迂回する形で公園を駆け回る。ベンチ、遊具、電灯、木々、ゴミ箱。自身の反射に使えるモノは全て使う。公共物の破壊などお構いなし！

そう、さながら今の僕は 超・スーパーボール！ スーパーが二個付くくらいにスーパーだ！

「オイオイマジかよ……………！！？」

（チツ、砂煙が視界を……………だが罨は張つてある、問題はない。周囲には、コンマ数秒で反応する特殊な空間型の爆弾を仕掛けてある。来れるモンなら来いよ、一歩でも踏み込めば、一瞬でタタキ肉だぜ！）

百分、彼の周囲には爆弾が仕掛けてある。それも、モーションセンサー並の精度を誇るヤツが。

範囲を仮定するならおよそ二m。彼を中心として、その全方位に高濃度の重力の爆弾が敷き詰められている。なら僕がすべき打開策は、たったの一つ 『アレ』しかない。

「（行く！）」

「（来る！）」

加速力を一切落とさず、急速反転。『真正面から』弩ストレートに突っ込んでいく。

そのまま一気に突っ込んで

とりあえず、罨に引っ掛か

つてみた。案の定、一瞬動きが止まってしまふ。範囲にして予測通り、周囲二m全てに強烈な重力の結界が発動された。コンクリートは砕け、小さな範囲で気圧が変わり、地響きが轟き、身体全体に通常の五倍近い重力が押し掛かる。

「かかったア！」

勝利の笑みを浮かべる。

揺るがぬ勝利を手にした、油断の表情だ

だが僕

は、それを尽く覆す。

「と、思うだろ？」

なんて吐き捨てて、五倍のGの中を『駆け出して、隙だらけの腹部に後ろ回し蹴りをお見舞いした』。

表情が油断の笑顔から驚愕に変わったのは、蹴り技『虚刀流・牡丹』の衝撃で吹っ飛ばされて、ブランコの柵に背中を打ちつけてからの事だった。苦痛と驚愕に、表情が歪んでいるのがよく分かる。

それと同時に、彼が放った重力の結界は解除され、僕の周囲は通常のGに戻る。

「フッ………なに、つが　　！？」

「賭けは五分五分………いや、七対三の負け側だったんだけど、今回は勝てたみたいだね」

「クッソ…………マジで負けちまったじゃねーかよ。情けねえなあ、
つたく」

「自分を過信した事が、君の敗因だ。次からは能力を過信せず、真
面目に闘う事だ」

「オイオイ待てよ」

立ち去ろうとする僕を、何故か引き留める地天。
勝負は着いたのに、まだ何か用があるのだろうか？ 因みに僕には
無い。

「肝心な事忘れんじゃねえよ。俺とアイツの羽化だよ、羽・化！
セキレイの最重要事項だっつーの！」

「（b ポンツ）ああ、羽化ね、羽化。すっかり忘れちゃってたよ
アハハハハ」

「お前なア……………まあそれは後だ。それに、あっちの輩
牙も俺を狙って来たんだろ？ だったら他のヤツに奪とられる前に、
俺とアイツ共々、早く羽化させてくれよ。俺達はアンタに反応して
んだからさ」

「え　あ、あぁうん、そうね。羽化ね……………そうだね」

「……………???」

「虚刀流・向日葵ひまわりツツ！！！！！！！！」

上段に向けて、後ろ回し蹴り上げを繰り返す。『打撃の蹴り』ではなく、『斬撃性を持った蹴り』だ。

故に直線に蹴り上げるのではなく、袈裟斬りの逆の要領で蹴り上げる。居合いで刀を抜き放つように。

弧を描いたその蹴りは、飛来する誰かに当たった 当たりは

したが、止められたという意味での当たりだ。脚に感じるのは、なにか堅い感触。上空から差す日光に遮られ、その姿は見えないが

敵である事は間違いないだろう。

僕の脚を踏み台に、数m後方へと下がり、じっと僕を見据える

それは、誰とも知らぬ少女だった。

「ありや、止められた」

「ありや、外しちゃった。君はだあれ？」

「私？ わたしはねえ、No.29・平坂ひらたか。ミコさまのセキレイよ」

「ミコ……………ああ、御子上隼人か。なるほど、懲りない子供だね」

ボブカットの黒髪、右のモミアゲに金のメッシュを入れた、ギャル風の少女。

両手には、刃をあしらった真っ赤なトンファーが握られている。服装はタンクトップ・スパッツっぽい黒服に、ロングブーツ。平坂は、トンファーをヒュンヒュン回しながら辺りを見回し、何か得心がいったように鼻を鳴らした。

「なあるほど、あっちの男とそこのチビッコがメールのセキレイね。じゃ悪いけど　　もらっわ」

「おおーい、俺らの意思は無視かー？」

「当然。まあそう言うと思って、今日は数で攻めに来たわ。ミコ様、レアな個体に興味津津なのよねえ」

平坂が指をパチンツ！ と鳴らすと、樹の影からさらに二人のセキレイが姿を現した。

かたや緑のロングヘア、十文字槍を持ったナイスバディの女性。スーツ風の服とタイトがよく似合う。
かたや栗色のツインテール、狼牙棒ろうがぼうを携えた小柄な少女。チェックのスカートとカッターシャツが学生らしい雰囲気きんぐいを醸し出している。そしてその三人、その誰もが殺気のようなモノを放っていた

僕に向けて。

「NO・45・阿須波あすは。悪いんだけど、そっちの男の子くれないかしら？」

「NO・68・金屋子かなやし。ダメならダメでいいよ。アタシが代わりに、アンタを黙らせてOKにするから」

「二連戦か……………まあ、大丈夫でしょ」

「あら、余裕ね？ さっきの闘いのダメージ、結構響いてそうだけ

ど?」

「いやぁ嬉しいね、歳上属性に目覚めそうかも」

耳元で空気の爆^はぜる音がした。直後、阿須波は槍を振るい、音の正体を叩き落とした。

僕の耳元を掠めたモノ　それは矢だった。白と赤の羽をあしらった、豪華な破魔矢。

それを再確認すると、僕は携帯を取り出してその射手に連絡を取る。相手は一秒経たずに、まるで掛けたのを見ているかのようにすぐに通話に応じた。その声にはなんだろう、怒気を感じた。

『……………浮気ですか?』

「違います。ただの趣味趣向の問題です!」

『……………次に同じ事を言ったら、頭を射ちますからね』

「弓のセキレイだと!?　どこだ、何処にいる!?!」

『黒人さま、すいませんが私に代わって名乗ってはもらえませんか?　此処からだと聞こえませんが』

コイツ、人をパシらせる気が……………淑女設定は何処に行った何処に。

まあこれも、セキレイの主人としての通過儀礼の一種だろう。甘んじて引き受け、後で必ずイジメル。

「『セキレイNO.37・魅弦。悪いが射させて貰います御免』」

ドスツツッ！！！！！！と、慌てふためいていた阿須波の右肩に矢が刺さる。

続いて間も無く金屋子の右大腿に、そして唯一平坂だけがその胸を狙った矢を叩き落とした。

順を辿れば自分だと、警戒を強めていたからだろうか。射られた二人は矢を強引に引き抜いて投げ棄てると、三人は背中合わせになつて公園の中央に集まった。互いの死角をカバーし合うよう、三者三方向に気を張り巡らせている。

『黒人さま、続けて』

「はいはい……………」

「くっ、姿を見せないなんて卑怯だとは思わないのかしら!?!」

「『いいえ微塵も。これこそが私の闘い方ですから、恥とは思いませんとも』」

「ちょっと！ 御託はいいからさっさと出てきなさいよ！ アタシら勝負にならないじゃない!」

ごもつともだが、それは逆も言える。魅弦は近接格闘が極めて苦手

なのだ。出来ない訳じゃないが。

だからこそ、わざわざ現場から二kmも離れた場所から狙撃をしている。弓は相も変わらずM・B・I製の超特殊素材の弦。弓の大きさ二mを超え、射程は全力でならば最大二km。セキレイとしてのしなやか且つ強固な筋肉であるが故に可能な技だ。

だが何故全方位から狙撃されているのか

簡単だ。

此処を何処だと思っっている。周囲を高層ビルに囲まれた公園だよ？

ビルの外壁から外壁へ、屋上から屋上へ跳び移れば、あらゆる角度からの狙撃が可能ではないか。つまりは、この公園は彼女の独壇場という事だ。

「『そんな事知りませんよ。私と闘いたければ、早く私を見つける事ですね』」

「いけしゃあしゃあと好き勝手言いやがって……でも、私達の目的はあくまで『回収』。阿須波、金屋子！ そっちの未羽化の二人さっさと連れ帰るわよ」

「って」

「この白羽黒人、よもやこの生涯で野郎と口づけを交わす日が来ようとは……………」

「うっせー。俺も美人のネエチャンが良かったってーの」

「あああああッ！　ちよっ、ちよっと待

ええ、ストーリーもドラマも、イベントも無しと無視で羽化させちゃいました。ゴメンちゃい。

この際アレだもん、数分痛いの我慢したらいいんでしょ？　それに痛み慣れつてのもあるし。

このままアレコレと騒がれて毎日つけ狙われるくらいなら、進んで飛び込む他内。まずはとりあえず面倒事を一つ解決

羽化の証である、鋼色の翼を広げた地天は、抱き抱える僕の腕を振り払って一人で立ち上がる。魅弦も煌刃も羽化の際には色っぽさが滲み出ていたが、彼の場合はイケメンらしさが倍増といったところか。白羽黒人、此処で男を見せにゃあいつ見せるんだい。

「うっそ……………」

「こら平坂！　羽化されちゃったじゃないのよ、このバカ！」

「う、ううううっさい！　阿須波だって矢にビビってたクセにえらそーに言わないでよ！」

「ど、どっちでもいいから！　ほら来たアアアアアッッ！！！！
！！！！！！」

「我が誓約の大地。葦牙が道、標し導かん

」

『うわヤバあ……………逃げるが勝ちツツツ！……………！』

「逃げるモノなら逃げてみるよ

『大地の轟渦』

「マズイ……………椎名、紫ちゃんこつち！……………！」

パンツ！ と両手を合わせ、地面を叩くように踏む。拳法でいう震脚きやくというヤツだ。そして合わせた掌を対に擦り合わせる

彼がとつたのは、たったそれだけの動作だった。

僕と間近にいる地天以外の、周囲の空間全てが震動し およそ半径五十m全てが押し潰されていた。ゴミ箱も、アスレチックも、石ころも、地面も、草花も。ありとあらゆる全ての物体が、重力によって押し潰されていた。

敵セキレイ三羽は全速力で退避、辛くも脱出したようで、迷わずにこの場を離脱した。

「くう~~~~ツ！ 祝詞いのち気ん持ちイ~~~~ツツツ！……………！！……………！」

「あーそ、そりゃ良かった良かった

（僕はこれからの激痛に憂鬱な気分だよ。ああ、クソツ……………つてあれ、もう一人は何処に）」

ガバツ！

からのちゅー。

「ぶむぐツツツ！……！……？……？……？」

「んんん~~~~」

「ぬおツツツ！……！……？……？……？」

「うひゃあ~~~~」

「ゆ、紫さん見すぎですよ……」

あ、ありのまま、今起こった話を話すぜ！ 『少女を探してたらいつの間にか少女にキスをされていた』

……何を言ってるのか分からないだろうが、僕にも分からない。頭がおかしくなりそうだった……だが、フラグだとかイベントだとか、そんな御大層なモンじゃ断じてない。もっと馬鹿馬鹿しいモノの片鱗を味わったぜ……

「む、むぐ、む………ぶはあッ！」

「んっ………」

唇が離れると共に、少女の背に光の翼が広がる。それは見た事のない
虹色の翼だった。

あまりの事態にキョドる僕は、つい腰を抜かしてしまった。一つ目は、これから二羽分の激痛に苛まれる事になるとは、という感想。

二つ目は 僅か一日に、しかもほとんど同時刻に。
二羽も羽化させちゃった自分に驚いていたからだ。
啞然、呆然、偶然か必然か。僕の日々が崩れ去る音が聞こえた気がした。

「は、はははは.....こりゃビックリたまげたや」

「ま、そんな事もアんだろ。人生は永ながエんだからよ」

「（コクコク）」

「フー訳で 幾久しく、ヨロシクな。黒人」

「.....幾久しく」

「あれ、君って名前なんだっけ？」

「.....また後日にご紹介。也」

第十二話 大地（だいち）礼賛（らいさん）（後書き）

なんか書き足りない気がするが、まあいいか……
そしてオリジナル勢初の祝詞登場。近々他のメンバーも出すつもりだから、期待しないで待っててね。

第十三話 身内、増加（前書き）

なんか頭が回らない……………少々手抜きっぽいのはご容赦のほどを

第十三話 身内、増加

痛みに耐えながら、僕は頻りに叫んでいた。理解不能な感情が、身体を駆ける。

今回は二人

地天と

の二人同時に婚いだとい

う事もあり、僕は場所を変えていた。

帝都内のホテルに一泊、という名目の、現実逃避だ。無論、魅弦達には何一つ伝えてはいないし、伝える気もない。それ以上に、この『現実』を教える事など、出来る筈がない。伝えれば、彼女達は僕を

「ッはア……………あ、が、ガガが……………」

昨日、僕は二人と婚いだ直後にその場を逃げ出した。まるで臆病者のように、子供のように。だが誰も追いかけては来なかった

ただメールが一通だけ。魅弦のアドレスで、一通に全員分の文が書かれていた。

『魅弦・何も言いませんが、早く帰って来て下さいね。お茶淹れて待ってます』

『煌刃・早く帰ってこーい。訓練したいぞー、美味しい飯を待ってるぞー（笑）』

『地天・野郎とキスしたぐらいで落ち込むなよ（笑）　　のキ
スでチャラだろーが。マジで気イ悪くしたんなら土下座すっから、
素直に言ってくれや。じゃな』

『……………ラブ。也』

時計を確認。時間にして三時間以上
死なずに耐え抜いた。

僕はなんとか

時刻は午前六時を指していて、窓からは朝日が差し込んでいる。シヤツを脱いで激痛に臨んだから、着替えは一着黒の七分丈のみ。シヤワーを浴び、服を着替え、顔を確認
よし、苦悶
の表情は型になってないな。

朝一速く、僕はホテルを後にする。此処から一時間はかかる、我が家へと

×

×

にしても眠い……………もうただひたすらに眠いん

だよ。

一晩激痛と闘い抜くのがここまでの疲労とは、恐ろしや恐ろしや。我ながら発狂せずに済んで何よりだ。

帰路の途中コンビニでパンをとコーヒー買って、軽く朝食を済ませる。その際備え付けのトイレで改めて顔を見ると、苦悶の表情こそ無けれ、疲労の色や不眠の隈は色濃く現れていた。理由はそうだね……………焔君の仕事に付き合って、一晩あんまり飲んでないけど呑み明かした帰り、でいいか。

そんな道中、僕は疲労の事もあって電車を利用する事にした。一時
間以上歩くのは流石にもう無理だし。

そしてこの早朝からなのに、M・B・Iの私設兵団は毎日警備を怠
つてはいない。あのクズの為にご苦労な事だ。

身分証明書を提示し、憲兵二人が行きしなに付き添う事になる。ど
うやら本格的にセキレイと葦牙を逃がさない為に動いているようだ。
御中は言った
『これは神代を蘇らせる為のゲーム
だ』と。

逃げるなどというのは元々許さないという事か。なんとまあ我が俣
な……………

「オイ兄ちゃん」

憲兵の中年の人が話しかけてきた。顔立ちは非常に気さくそうで、
話しやすかった覚えが。もう片方の憲兵はなんとも無口そうで、話
しかける気にもならなかったが、彼だけは別だった。

だがその表情は気さくに話しかけたりとかではなく、まるで僕の事
を心底心配しているかのようにだった。

「顔色悪いぞ。なにかあったのか？ 病気かなんかか？」

「……………大丈夫です、ただの疲労ですよ。一晚頑張ったら死にか
けただけです」

「一晚って……………なにしてたんだよ？」

「若気の至り、という事で……………秘密にしといて下さい」

「まあ俺も『鵲鳩計画』なんておかしなモンに携わってるから、偉そうな事は言えねえけどよお……………兄ちゃん、葦牙ってのだから？
なら忠告だ。俺も詳しくは知らないからアレだが 帝都を
出ようとは考えるな。セキレイごと殺されるぞ」

……………殺される？ 殺されるだって？ 何が彼にそう言わせるのだ
ろうか。

決して冗談ではない事は、彼の表情からすぐに伺える。^{うかが}殺されると
いう事は本当らしい。

「ありがとう、おっちゃん。覚えとくよ、ソレ」

「ああ、気をつけな っと、そろそろ指定の駅に着く頃だな」

おっちゃんがそう言って一分も経たず、駅に到着。足早に僕は電車
を出て、改札口で別れた。

時刻は午前七時前、朝日はもう登りきっている。朝日を眺めるのは
好きだが、とりあえず今は帰る事を優先する。早く帰らないと、う
ちの嫁や婿に何をされるやら……………あれ、なんだろう。馴染
みの我が家なのに、帰るのが怖くなってきたや……………

「……………」

「ん？ んんんんん？」

駅前になにやら、見た事のある少女がいるじゃないか。

少女としか呼ばないのは、僕は彼女のNo.と名前を知らないから過ぎない。知る機会も無かったし。

そしてここで一つ、報告すべき事がある。僕の身体はやはり、羽化させたセキレイには反応しないらしい。魅弦達然り、
や地天然り。この様子なら、他の葦牙が羽化させたセキレイにも反応しないだろう。

でまあ、そこらへんはさておき。

「あ、あの……………おはよう」

「……………ん」

ピツと手を立てて挨拶のつもりだろうか。少女は駅前のベンチでの三角座りの体勢を崩さない。

ダボダボの男モノのシャツにショートパンツ。その先に見えるのは他でもない、白い桃源郷だった。

ここいらで彼女について語っておこう。まずは容姿。首が隠れる程度に切り揃えた猫っ毛の茶髪に、小柄な体躯。身長は150cmあるだろうかくらいの小柄、手足も細く肌も白い絹

のよう、そして黒のタレ目。

さらに普段は普通の少女なのに、なにかあると姿がデフォルメされ、三頭身のキャラに変わる特性を持つ。おまけに身体から滲み出ているヒロインオーラは驚異的で、なにもしなくてもフラグを起してしまいそうになるほど。養女に見えなくもないし、少女に見えなくもない。どっちつかずな感じだ。

「えと、迎えに来てくれた……………のかな？」

「……………此処にいたら会える、気がした。也^{なり}」

「そ、そう……………じ、じゃあとりあえず帰ろっか。お腹も空いてるでしょ？」

「（コクコク）」

ツ……………
なんなんだこの他所^{よそ}他所^{よそ}しさはアアアアアアツツ

名前呼べないってこんなキツイモンなの！？　っーか接し辛い、話が続かない！話題が見つからん！

「そ、そうだ。み、魅弦達はなにしてるのかな？」

「……………留守番。私、此処に来る事、言っていないけど」

「それは夜遊びの部類に入るんじゃない……………」

「……………早朝出迎え、嫁の仕事。也」

えっへん、と胸を張る。だがデフォルメだ、どう足掻いてもデフォルメだ。……………デフォルメと言えは、出雲^{いずも}荘のくーちゃんもよくデフォルメしてたなあ。小さい子はデフォルメするのがマナーなのか？

「そつか。うん分かった、じゃあお礼に喫茶店でも行こうか。朝ごはんまだでしょ？」

「……………喫茶店、お店、入るの久し振り。也」

「久し振り、って事は地天と一緒に入った事あるの？」

「……………バイキング」

「ああ、そういう事。じゃあわかった、今朝は僕が喫茶店の楽しみ方を教えてあげよう。手取り足取り、教え込んであげようじゃないか
その身体にね」

「……………はよーざーます……………」

「はよー、魅弦。とりあえず顔洗ってきな」

「うゝぁい……………あ、地天さんも、はよーざーます……………」

「はよーさん」

他にセキレイいるたあ聞いてたが、二人もいたのか、コーヒーを飲みながら内心で呟く。

しかもかたやムチムチで、かたや清楚な大和撫子。俺が連れ回してるチビッコとは大違いだ。

俺と　を羽化させたあと、黒人は姿を消した。正確には、俺達が追い付けないほどの速度でどっかに行った。それから呆然としていた俺らの前に、魅弦と煌刃が現れて『自分達は仲間だ』と言い出す。

二人に言われるがままに導かれ、寝間着に黒人の服を着せられ、テレビじゃあ朝のニュースを見た後にアニメを垂れ流しにしてたり。分かんのは、此処の人間の趣味趣向は黒人にかなり影響を受けてるって事だった。

「つつか、ここの家事担当ってアンタなのか？」

「うんにゃ、家事は黒人の担当だよ。今朝はあたしが代わりにやってるだけ」

「代わりに、ねえ」

代わりにってレベルじゃないんだがなあ “コレ” …………… コレってのは朝食の事だ。

立ち読みしたなんかの雑誌にノツてた『世界一美味しい朝食』ってヤツのそのまんまがそこにあった。『世界一美味しいスクランブルエッグ』、煌刃が作ったのはそれだ。つつかコイツ、見た目“出来ない女”なのに、メチャクチャデキるじゃねえか。なにより美味え。気がつけば完食、あまつさえガツガツとお代わり連発しちまった。

「ゴチでした」

「お粗末様」

「あれ、魅弦のヤツ遅いな……………なにしてんだアイツ？」

「たぶんいつものクセだよ。着いてきな、運ぶの手伝って」

「すぴー……………すぴー……………」

「(ね、寝てる……………だと!?)」

洗面所に来たら、なんか洗面台にもたれ掛かるように寝てる魅弦がいた。

鼻に風船作って涎垂らして、美少女なのにだらしなさで美少女らしさが完璧皆無になっていた。

「コイツ最近二度寝が激しくってさあ。こうなったら一・二時間は目え覚まさないからさ、部屋に運ばなきゃ邪魔でしゃあないのよ。ほら、運んで」

「それは手伝ってじゃなくて任せた、じゃねえのかよ?」

「いいじゃんいいじゃん。アンタ能力で重さ無くせんだからさあ」

それを言われたらやるしなくなっちまうじゃねえか……………やむ無く魅弦を抱き抱える。

今更……………つかこの歳になってお姫様だっこをする事になるなんて、考えてなかったわ。

ではでは自己紹介 No.100・地天、男性個体のセキレイ。能力系で、能力は『重力』。格闘もそれなりに得意で好きで、ボクシングとムエタイとサバットをM・B・Iが雇った特別講師に習っていた。汗を流すのが好き、つてのもあるんだけどな。

でもって、俺が連れていた少女・ は俺が色々あって預かって

た^{セキレイ}個体だ。預け主は最終調整を担当した佐橋高美。俺を調整したのも彼女で、俺は彼女曰く『シングルナンバー並になんちゃ』だったらしい。細かい事は知らん。で、最終調整って言葉の通り、本来　　を調整してたのは

アレ、誰だっけ？

記憶を掘り返すが、全く思い出せない。なーんか大事な事だった気がすんだけど……………………

「ま、いつか。にしてもいい布団だなあ。畳もキレイだし」

ぼいっと魅弦を布団に投げ落とし、部屋をあとにする。なんかメチヤクチャ和風な部屋だった。

俺と　　はまだ部屋貰ってないから、昨日はリビングのソファで寝てた。野宿が多かったちよつと前と比べれば、寝床が柔らかいっただけで文句なし。しかも　　は妹分だから、特に気兼ねなく一緒に寝れる。後々部屋も貰えるんだろうか、なんか心配だな。

「ん？ そいやアイツどこ行きやがったんだ？」

朝から姿が見えないが、どっか出掛けてるんだろうか。それとも買出し？

そんなタイミングに玄関が開く音が聞こえた。丁度階段を降りきった時の事だ。

壁掛け時計の示す時刻は午前八時。昨日黒人が姿を消したのが午後三時か四時くらいだから、約二十八時間ぶりの再会って事になるのか。なにしてたかは知らないが、目元の隈と疲労を浮かべた顔色は

隠す気はないらしい。

「おかえり、って言うんだっけか？ こーゆー場合」

「合ってるよ、それで。で僕はただいま、と返すのさ」

「ソイツは？」

ソイツとは、
だ。なんか疲れきった子供みたく黒人に抱きついて寝てるヤツ。

「僕を迎えに来たらしくてね、心配であまり寝てなかったみたいなんだ。疲れてたみたいだからご飯食べさせて、そしたらすぐに寝ちやってね。ホント子供は可愛いよね」

「……………ロリコン、じゃねえよな？」

「失敬な、これは父性に近いモノだよ。愛娘を見守る父親の心とはこんな感じなのか、ってさ」

「ならいいけどよお……………マジでロリコンはやめるよ？」

「はいはい、しませんよ絶対そんな事。ほら着いてきて、君の部屋案内するから」

おっ、やっぱり用意されてたか、念願のマイルーム！ 待ってました

ア！

ゆっくりとした歩調で俺は再び階段を登り、俺の部屋へと案内される。位置は屋敷の端の方だった。

そこは少し広そうだが、男一人が過ごすには十分過ぎる生活空間が広がっていた。畳九畳、フローリングで家具は無し。大きな窓はベランダへと繋がっていて、外には木製の床で出来たベランダがあった。風もよく通るし、天井も高いから気分がいい。

「どうかな？」

「文句無しだ。アंगाとな、黒人」

「どういたしまして」

「ん、って事はソイツは？ まさかそんなチビッコに部屋一つくれてやるとか言わねえよな？」

「そうしたいのは山々なんだけど、生憎部屋に空きがなくてね、魅弦と同室になつてもらう事になったんだ。あーほらっ、部屋の話はおしまい。下でテレビでも見てなよ、僕も疲れたし、二度寝するから………おやすみ……」

寝ている　　を魅弦の部屋のベッドに寝かせると、そう言い捨てて自室に入ってしまった黒人。

俺はまだ白羽^{ココ}邸に来て日が浅い。だから言い付け通りこのまま一階でテレビを見るのもアリだろう。

だが　　イッコだけ、どうしたって気になる事が一つあった。それはさっきの黒人の発言『部屋に空きが無い』って点だ。

この部屋のドアにはそれぞれ、部屋の住人の名前の掛札がある。

神社の絵馬っぽい、シンプルな掛札には『魅弦& amp; 』と書かれていて。

盾に二つの剣と、西洋騎士を連想させる掛札には『煌刃』と書かれていて。

太陰玉の白い方に黒文字で俺の名前である『地天』と書かれていて黒人の部屋の掛札はホワイトボードで、ただ一文字『黒』と書かれていたり。

掛札の無い部屋は、目に映るモノだけでも三つはある。流石は豪邸、数が普通じゃない。

だが俺が疑問を持ったのは、別に部屋数が多いとかじゃない。掛札の無い部屋がこれだけあるのに『部屋に空きが無い』と言った黒人の言葉の矛盾。その矛盾を否定するべく、適当に一室のドアノブを捻り、中を覗いてみた。そこには。

何十何百という凶器が、武器が、闘器が。

まるでコレクションのように部屋のあちこちに飾られていたのだ。

「……………一般人？」

ドアを閉めると共に、そう呟いて。今の出来事を忘れる為にテレビを見に行ったのだった。

「皆の者、今宵は宴ぞ！
存分に騒ぎ、楽しむが良い！
ワシが許

す！」

「イエース、ウィーラーヴュー・スキヤキニクウイェーイッツ
!!!!!!!!!!!!」

「アホか……………」

「……………プスツ（笑）」

白羽黒人公認、午後六時より開催！ 新入居者二人を歓迎して焼肉
パーティー！

ノリの分かる先駆者二人はもう楽しみまくってて、新人二人はノリ
に着いて行けない様子。だがしかし。あだがしかし！ たとえ真つ
当な人間であろうとも、この焼肉様の前ではただの獰猛な獣でしか
ないのだ！ 見よ、あの魅弦の姿を！

「あ、煌刃さん次カルビ行きます？」

「うんよろひふー」

他人に次の肉を誘い勧めるという手口……………アレは自分は焼きに
徹すると見せかけているだけだ。

見てみたまえ、彼女の右手を。さりげに肉鉄で自分の取り皿に肉を
モリモリと取っているではないか！

煌刃はアホだから食べ専なのは分かる。地天もあんまりはしゃぐ夕

イブじゃないのも分かるし、はちまちま食べるタイプだ。だが魅弦は……あの子は狡猾な虎だ！ 燃費の悪さを理由に、手当たり次第に肉を焼いて勧めて自分が人より多く喰う。あれこそまさに虎だ！

「（ん？ なんだ、取り皿に取るのを止めた？ 何故……ハッ！）」

「な、んだと……取り皿に取ること無く、そのまま肉を空中に放り投げて食べただと！……バカな、淑女設定はホントに何処に消えてしまったと言っただけだ！ なにより手も使わずに肉を口に運んだだと！？ あれぞまさにフォーアス……！」

「じっ………」

「な、なにかな魅弦。僕の顔に何かついてる？」

「人が食べてる処を見るのはマナー違反、ではなかったのですか？」

「あ、そ、そうだねそう！ ゴメンゴメン、僕が悪かったよ！」

くっ、何故か彼女にだけはたじろいでしまうクセが……！
だが僕も一家の大黒柱、改め一家の一本刀！ ここは注意して、もっと協調性を持たせるべきだ、いざ！

「ん、どしたの」

「……………黒、イジメられてる」

「あー、アレはイジメじゃないよ。バカ二人の、ただの夫婦漫才さね」

「……………夫婦？ 煌刃と黒は夫婦じゃない？」

「あたしはどっちか言ったら幼馴染み、そしてお姉キャラなのさ」

「……………分からない。也」

「おつきくなったら分かる話。ほら、食べな食べな。早くおつきくなつて黒人をメロメロにしてやれ」

「（プルプル）ふおおお……………いただきます。也」

「高美くん、私は心底嬉しいぞ！ まさか私が五年も掛けて調整した個体が、よもや彼の手に渡るとは！」

「ふん、飽き性のお前が五年も掛けるなんて、それほどに優秀な個体なのか？」

「優秀、の一言では片付けられんよ。あれこそ私が生物に求める究極体だ」

「究極体だと？」

「そうとも」

生物とは、学習する生き物だ。何百年経とうと何千年経とうとも、変わらぬ生物としての習性だ。

見たもの、聞いたもの、触れたもの、食したものの、嗅いだもの、感じたもの、考えたもの、思ったもの。

今挙げた五感を代表として、人生には人間が感じ入るべき点がある。そのまま無限に存在している。生きていく限り思考から逃げられないのと同じようなモノだ。羽化したセキレイのリストに彼女と葦牙の名前が載っていたのを見た瞬間、私は運命を信じてしまった。過学者らしくもない、非科学的な運命という言葉信じざるを得ないほどの数奇な巡り合わせだ。

「人の運命とやらは生まれる前に神が与え、そして絶対として決ま

っている。だが例えばだよ、高美くん？ もしその運命を、人生の根幹を、生まれた後に操作出来ればそれは、神にも似た所業だとは思わないかね？」

「……………お前は何か言いたいんだ」

「解らなくても構わないよ、ただの独り言として忘れてくれ」

彼女がどう育っていくのか、一体どの様な色に染まっていくのか。私はそれが楽しみでならないよ。タワー最上階から見下ろす帝都はここまで美しかっただろうか　ご機嫌だよ。だから彼女に二つ名を与えるのなら、私はあえてこつ名付けよう。

『鏡のセキレイ』と。

「さあ、見せてくれたまえ。君の翼を！　セキレイNo.49

鴿めえよ
「よ」

第十四話 増加、数日後、街にて（前書き）

はい、ごーん。

仕事上がりにごうごうですよー、良い子は寝る時間だぞーっと。

第十四話 増加、数日後、街にて

鵂めえ

安時代後期の話だ。

という妖怪が存在していたらしい。昔も昔、平

頭は猿、胴は狸、四肢は虎、尾は蛇。幾つもの獣の入り雑じった姿をしている、らしい。

『ヒョーヒョー』という奇怪な鳴き声、一説では妖怪ではなく神の類、雷獣であるともされる。

一部ではその吐息や羽根は猛毒を持ち、触れただけで即死するほど

とされる。『鵯の声で鳴く』とはとある名のある小説では有名な例えだ。

国外のモノで例えるならば『キマイラ』が妥当だ。

何種もの生物を人為的に合成し産み出した生物、それがキマイラ。対して鵯や他の妖怪は自然に産まれた怪異、もしくは人が産み出した偶像や妄想に過ぎない。だが問題は鵯や妖怪の存在の有無などではない。

問題は何故人は鵯という『曖昧な存在を名付けたか』にある。

妖怪は意外にも、各地で見られている。四国の四十八ヶ所巡り、京都の霊園や神社、富士の樹海など。

そのどれもが昔から変わらない空想の存在だった。故に疎^{まば}ら、大きくまとまっても全く別の扱いをされる事もしばしば。至高の美女で女神ともされる人魚が、一説では人喰いとされているのがいい証拠だ。

だが、いるかどうかも分からない存在に『幻の妖怪・鵯』なんて名を割り当てるなんて、非常に言葉遊びを楽しんでいるとしか思えない。だってそうだ、過去今まで鵯を目撃したなんて話は“物語の中だけでしか”聞いた事がないからだ。

他の妖怪は地方で目撃例があるのに、鵯だけに関しちや一切の目撃例が無い。

だから鵯とは『幻、もしくは空想』を意味する造語にもなりつつある、だが。

もし 生物が鵯という存在を模したら、どのような生物になるだろうか。物真似をする妖怪か、姿の見えない存在か、生物の混ざり合った化物か、それはもう色々想像が膨らむだろう。

そして僕が^{でくわ}出会した鶴とは決して化物なんかじゃなくて、妖怪なんかじゃなくて、もうどうしようもないくらいに
少女だった。
美

最近は美人との出会いの場が増えている気がする。自宅でも、外でも。

それが敵であれ、味方であれ、僕は美人とよく関わり合いになる。月に数回の間隔で。

おはようございます皆さん、黒人さまの肉奴r
レイの、魅弦です。 　　もといセキ

はい、今日は早起きです。朝日の昇る、午前六時。天候は極めて晴天です。窓を開けると、朝の涼しい風が吹いてきて、それと共に気温が徐々にながっていているのを肌で感じられる、六月も末の事。

梅雨は瞬く間に過ぎていき、最近の天気は晴ればかり。心地好い事この上ないですよ。

そんな時期に、我が家もとい白羽家に新たな住人がやって来た。黒人さまの新しいセキレイです。

一人は男性、名を地天^{じてん}。少し長い金髪を結っている、ビジュアル系の方です。

もう一人は少女、茶髪の小柄な少女で、人形のような顔立ちでとても大人しい子供、名を鶴^{つる}。

地天さんは私の部屋から出て、左の廊下の突き当たりに部屋を貰ったそう、自室があるだけでも満足らしいです。家具に関しては、今度買い物に行ったときについてに買っただとか。

鶴ちゃんは私と同室、ベッドも共用していて、今は最近ふくよかになつてきた私の胸の中ですやすやと眠っています。しかしまあなんと、可愛らしい寝顔でしょうか。このままずっと抱き締めていたい程ですよ。

なのに　　窓の外、白羽家の庭からなにやら気配が。気になつてしょうがないじゃないですか。

鶴ちゃんを引き離し、乱れた寝間着の浴衣の襟を直し、一階の窓から庭を眺める事にした。黒人さまは朝一に家の換気をする習慣があるので、今朝も今朝とてリビングの窓は全開だった。おかげで良く見える。

「ふっ、ふっ

ハッ！」

まあ予想とかそんな事するまでもなく、家主で私の旦那様の黒人さまでした。

活動的なスポーツシャツに短パンと、ニヒルな黒人さまが珍しく子供みたいな服装をしています。

ですがその動きは……………私が過去一度も見た事の無い、初めて見る動きでした。まるで円を描くかのような、柔軟な身体の動き。しかし無駄の無い、綺麗な体捌きでした。それを数分繰り返し、最後に合掌しながらの深呼吸。それまでが一連の動作だったのか、とても深い深呼吸だった。

「……………おはよう、魅弦」

「おはようございます。気付いてたんですね、集中されてましたからてつきり気付かないものと」

「そこまで気は抜いちゃいないさ。でも珍しいね、君が早起きなんて」

「たまには、ですよ。それで黒人さま、今の動きは何ですか？」

「うん？ ああ、ちょっと復習をね」

復習、とは。質問の答えになってないじゃないですか。だが即席の変な動きでないのは確からしい。

その日その時の会話は、ひとまずそこで終わった。いや、黒人さまが一方的に終わらせてきたのだ。

『復習』、それだけ答えて、黒人さまは再び鍛練に戻られました。今度は私も見た事のある、空手の動き。それに続けてあの踊るような動きは………カポエイラでしょうか。まるで世界の武術を取り揃えているかのように、黒人さまはコロコロと型と動きを変えていきます。

そんな黒人さまを眺めていたら、いつの間にか一時間も経過、朝は七時になっていた。

となれば普通に早起きな煌刃さんは起きてくる訳で。Yシャツにジーンズと、寝辛そうな恰好の寝間着で煌刃さんは二階から降りてきた。続いて地天さんも、短パンにTシャツと若者らしい寝間着を着用していた。

それからさらに一時間ほどして鶴ちゃんが起きました。寝間着と私服として黒人さまのシャツを欲しいと言うと、黒人さまは別段躊躇う事なくシャツを数着プレゼント、着ていると彼女はご機嫌だ。

そんなこんなで、五人家族の日常が始まった

「第二回！ 白羽家私服購入会を 開催しますツツツ！！！！」
「……」

「「うううイエーイツツ！！！！！！！！」」

「おおー」

「……………パチパチ（無表情）」

説明しよう！ 私服購入会とは、本来私服を持たないセキレイの彼女達の為に私服を用意しようという、主人らしい心遣いより生まれたイベントである！ M・B・Eマナーカードを用いて上限額無しの買い放題、まさしく購入会である。

ようやく私服やら家具やらが手に入るという事で、地天はハイテンション。

煌刃は家具が少ないとかよく呟いてたから、まあまあ納得のノリの良さである。流石は元気屋である。

前回は南方面に買い出しに行った……………だが結果として、敵対チームの御子上隼人とそのセキレイ・陸奥と接触してしまった。ならばこそ、二回目はダブリを避けるのと御子上一派を避けるのを兼ね

て、東方面に出掛ける事に決定した。

僕はオシヤレは面倒だから、いつもの七分丈にジーンズの黒染め一色で。

魅弦は白のロングスカートに紫のカーディガン、なんかF a t eの桜みたい。中身のアレとかも含めて。

煌刃は寝間着とあまり変わらないが、デニムに黒革のブーツ、Yシヤツでカッコいい女性をイメージして。

地天には僕のお下がり。ジーンズに赤・黒ストライプのカッターとパーカー、白のスニーカー。

鶴にはとりあえず、朝一開店と同時に駆け込んだ近所のユニ　口で買ったシンプルな白のワンピースを。

形だけは普通にしておくべきだね。だってかたやダボダボのシャツに短パンだろ？

かたやゴシックっぽい服装にビジュアル系の顔立ちだろ？　ちよつとした変人の集まりじゃないか。

セキレイなんて“社会的に”異色の存在が無闇に目立ったところで、メリットなんかがある筈もない。ならばどちらかと言えば普通、より人間らしく溶け込むべきだ。セキレイはセキレイ、と割り切る葦牙もいるだろうが、僕からすればセキレイも葦牙も、結局は一緒の人間なんだ。

人と違う者は人から遠ざけられ、疎まれる

時代の

常じゃないか。僕は出来る事なら、彼女達をそんな目にはあわせたくない。彼女達の主として、彼女達の友人として。

少なからず、この白羽家では人種差別なんてみみっちい事は起こさ

ない。

過去に出雲荘の大家・美哉^{みや}さんが言っていた通り、これが『来る者を拒まず』というヤツなのだろうか。今の僕の姿を父さんや母さんが見たなら何と思うだろう、たぶん僕を本人かと疑いながら涙するだろうね。

昔の僕はそう

『孤独こそが人間の美德だ』と公言

しちゃう、痛い人間だったんだから。

x

x

という訳で現在東方面に出向いた我ら白羽家ご一行。午後の一時、本日は晴天なり。

で、今更なカミングアウトだが、この帝都はワリと方東西南北の面で色々と分かれている事がある。

東方面は医療関係や事業。代表格としては医療・工業共にM・B・

Ⅰの敵の氷我財閥が中心となり、纏め挙げられている。敵、と明確に分けられるのは、過去に御中がニュースにて『氷我財閥は我々のライバル企業だ。よって、同盟などは断じて有り得んよ』と明言している事からくる。

南方面は御子上財閥を中心とした、デパートやショップなどの小売・販売関係が非常に盛んである。小規模・大規模を問わず、数多の店が並び連なり、日々賑わいを見せている、活気のある街である。

西方面は主としては工業地帯。他には地方から伸びる高速道路が多数走っていて、外部から物資が持ち込まれる場合には大抵は西方面を通過する事になる。それに工業地帯とあつて住宅は少なく、暴走族の溜まり場が多数存在している事でも有名だ。

昔、中学の友人から『シメて』と頼まれて、数十人単位のチームを五、六団くらい潰した覚えがある。

最後に北方面。スーパーや郵便局、銀行など生活に最低限必要な場所は存在しているし、こちらは住宅地が集中していて、買い物・仕事の為に地下鉄が各方面に向けて多数走っているのが有名だ。佐橋皆人君や美哉さん、紫ちゃん達も揃ってこっち方面に住んでいる。

と、大まかに帝都を評価してみた。なにせ元東京だ、盛況っぷりは昔から変わらないよ。

で、今日は東方面。こちらは医療や事業ばかりなのだが、実は洋服などで一部のブランドが軒並み店を開いている事を、事前にググっているで迷わず到着。地元民の情報はやっぱり正確だ。

まずは服を購入する事にしよう、の筈なのに

「迷子ってなんじゃそりゃああああああッッッ！！！！！？」
「？」

「……………黒、うるさい。也」

「つつか隣で叫ぶな耳が……………あー痛エ^{イテ}」

「言わずにいれるか！ 自家用車を駐車場に適当に駐車して、僅か三分だけ！？」

「たった三分で迷子になる二十歳の女が何処にいるよ、えエ！？ バカなの？ 煌刃バカだから死ぬの！？」

「落ち着いて下さい黒人さま、なんにも誘拐されたという程でも無いんですから……………」

「いいや、あのやんちゃ娘が騒ぎを起こさない筈がない。早急に発見せねば、ろくな目に会わんぞ」

「お前絶対身内の事信頼してねえよな！？」

「……………くああ（眠）」

「くっく、已む無し……………魅弦、『眼』を使いなさい」

「ええ〜〜）……………やですよお」

「ほっぺにチューでどうだ!?!?（どや顔）」

「少々お待ちを（キリッ）」

我が家の交換条件では、僕を差し出した場合はほぼ100%勝てると大分前から調査済み。ので即実行。

で、知らない人ばかりなので解説を挟むとしよう。我が白羽家の長女、No.37・魅弦には固有能力^{レアスキル}がある。

と言うのも、地天や紫ちゃんのセキレイ・椎名のような『セキレイとしての』能力ではなく、彼女のみが持つ『特異体質』にも似た能力の事だ。前提に彼女が“弓のセキレイ”である事を添えておくとこの能力には何故か納得がいく、そんな能力。

『場所が悪い』と、魅弦は近場のビルを駆け上っていく。別段高くない、五階建ての株式のビルだ。

そんなビルの屋上を中心に、魅弦は脚を開いて深く呼吸をする。手はぐらりと下げたままで。

「……………これ」

すうすう……………と眼を開ける。日本人特有の黒い瞳は、今はない。彼女が能力を発動する際、彼女の眼は深紅に染まる。血のような、真つ赤な眼。

この眼を彼女はカツコよく『魔眼』とか『邪眼』とか呼びたいらしいが、あまりにありふれてなんか微妙。という事で、あえてシンプリな名前を付けてみた。その名は『神の眼 《オウル・レンズ》』

と言つ。

「……………つ、くつ……………」

莫大な集中力、膨大なカロリーの消費。それらを巻き込んで、彼女の能力は発動する。

『神の眼 《オウル・レンズ》』は、簡単に言えば“眼”を爆発的に強化する能力の事だ。

が 　ただ眼が良くなるという訳じゃない。例えば、視力が良くなったところで動体視力が上がる訳じゃない。この能力の驚異的な点は、彼女の眼が『捉えられないモノ』が無くなるという点だ。およそ、人間に見えないモノが見えるようになる、と言えは分かるだろうか。

紫外線、X線、（ガンマ）線、放射線、光の波長、電磁波、電流、音や衝撃の視覚化。
風の流れ、空気中の塵芥、物体の温度、微生物の微妙な動き、人間の動き、自動車の動き。

果ては物体の内部、人間の内臓まで、自分を中心としたありとあらゆる物体・物質・存在の全てを観測する事が出来るのだ。実験の結果、現在の最大観測範囲は全方位、上下左右問わずで約二十km。

その範疇ならば、全てを観る事が出来てしまう。

だが、全てを見ては彼女の脳が持つ訳がない。

だからまずは能力を調整し、視認する物体を絞るのだ。

対象が人間ならば疲労も馬鹿にならないが、相手がセキレイなら話は別。すぐに見つかるだろう。

イメージはクリーチャー系の洋画『プレデター』の視界に近いと本人は言う。

アレは温度差を映すが、彼女の目には通常的情景の中に異物が混ざっているように見えるのだろう。そう、ここが便利な点。視界に映すモノを自分で選択する事が可能で、それ以外は通常通り。まさしくプレデター、鉤爪は無いよ？

「ッ

はあっ、はあっ、見つけました

……後方、二kmの方向です」

「ご苦労、魅弦。少し休むといい」

「い、いえ、まだ動けますからご心配なく」

ふらつと身体が傾く。ほら言わんこつちやない、すぐに彼女の身体を抱き抱える。

魅弦をお姫様だっこし、目指すは後方二km先の迷子の二十歳の女。しかし軽いな、流石は女子。

「……（たまには頑張ってみるモノですねえ。役得役

得
」

「……………チツ、ビツチが。也」

「（ガバツ！）そんな言葉どこで覚えたんですか！？」

第十五話 彼女の昔と、彼女の今（前書き）

煌刃の過去の話を書いてみた。作者が『書いてみた』ってのも変だけれど、まあどうぞ。

第十五話 彼女の昔と、彼女の今

ちよつと昔の話だ。アレはそう、今から二年ほど前の事で、あたしがこの帝都に来る前と後の話。

帝都に来る前の話と来れば、そこはあたしらの実家になる、かみくらじま神座島の事に他ならない。

あたしのN.O.は後半の90。だから、調整を受けたのもそれなりに後の方だった。

で、あたしは調整者から武器を手渡され、身体の調整を施され、そのまま帝都にぱーんと放り出された。なんか藪から棒だけど、実際にこんな感じなんだよね、あたしの調整者は。

それでも人並みの常識は教えられたし、人間の社会での生活もある程度は理解出来た。

この世界は基本的にお金で動いていて、多少汚ならしかろうとそれが現実の人間の生き方なんだと、割り切っていた。

だからあたしは普通に生きる事にした。鶺鴒計画がどうした、そんなモノ知った事が。あたしは自由に、セキレイとしてではなく“一人の人間の煌刃”として生きるんだと、胸に誓っていた。

そんな風に生活を始めて約一ヶ月

そこであたしは、

あたしの人生に関わる最大の出会いをした。それはあたしが今後、姉として慕う二人のセキレイとの出会いである。

「光ー、響ー！」

「ん？」

「アレって……………まさか煌刃！？」

再会は、別に大した事はない街中での事だった。二人は、何故かウイトレスっぽい服を着ていた。

両手には買い物袋をぶら下げて、買い物帰りのようである。だがウエイトレスだ、たぶんメイドだ。

セキレイNO・11・光^{ひかり}。響の双子の姉で、能力は雷撃。勝ち気な姉貴肌の持ち主。

セキレイNO・12・響^{ひびき}。光の双子の妹で、大人しいながらも芯の通った心の持ち主。

二人はあたしの義姉妹^{ねえちゃん}。帝都に出てきたばかりの頃のあたしに良くしてくれた、怖優しいセキレイである。

「いやー、久しぶりだね二人とも！ 元気だった!？」

「アンタこそ元気みたいね。で、その様子だと葦牙は……………」

「おう！ 一発かましたぜ、ぶちゅーつと!」

「もう、はしたないよ煌刃。女の子なんだからもつと慎みを……………
…つて、元気つ子な煌刃には無駄か」

「うつさいわね、響こそ瀬尾の兄ちゃんとはどーなのよ？ いい加減光を出し抜いたのかしら？」

「そ、それは関係ないでしょ！ それに瀬尾はあたしだけのモノじゃなくて、あたしと光のモノなの」

まあなんと仲の良い姉妹だ。セキレイは本来闘い合う存在なのに、そんな気は微塵も無いらしい。

それに瀬尾の兄ちゃんも『俺の女はコイツら二人だ。どっちか欠けたら意味ねえだろ?』とかカッコいい事言ってたけど、聞き方間違えたらバカにしてるみたいなんだよね!。だから二人が即座に兄ちゃんを黒焦げにしてたし。

二人で一人のセキレイ。双子のセキレイ、光と響。二人揃って雷撃の能力の使い手。二人とも同じ葦牙。

二人はいつも二人だし、あの時も二人揃ってあたしと出会った。たぶん、ずっと二人は一緒なんだろう。

「アレ、でもアンタ達って住んでんの北方面じゃなかったっけ。なんで東に?」

「そ、それはその……………色々あんのよ、色々!」

「色々?」

「大人の事情よ、だからあんまり聞かないでね……………」

スーパーの買い物袋、遠出、街中……………ああ、安売り目当てなんだ。主婦業、ご苦労さまです。

「ちよつ、そんな目で見てんじゃねーよ! 別に今日こっちのスーパーで一円セールがあるとかじゃねーんだよ! 肉がタイムセール

で198だとかじゃなくてだな、アタシらはただ………」

「光……、なんか言ってるて哀しいよお、やめよおよお………」

「にゃはははは……でもさ、やっぱあたしもアンタ達も変わらないね。あん時から」

「……………」

人間らしく生きる、それがあたしこと、セキレイNO・90・煌刃が望む生き方だった。

だが人間以上の力にこの無駄に突出した容姿、それに何故か手放せないこの蛇腹剣^{へんぽくけん}。

これが、あたしがあくまでセキレイである事の証明に他ならないモノだった。どう足掻いたところで、どう望み抗ったところで無駄なんだと、そう言葉なき意志で告げているのだ。だが抗った、無駄に

抗った。

「痛ッ！クソッ、なんでこんなに出会すのさ.....」

行く先行く先の殆ど、確率で言えば約八割で、あたしは他の個体に
出会でくわしていた。

まるで神様に『お前の逃げ場、ねーから！（笑）』と言われてるよ
うな気がしていた。

だが全身ズタボロになりながらも、あたしはセキレイと闘う事を善
しとはしなかった。だってそれは、当時のあたしに言わせれば“敗
けを認めた”のと変わらなかったからだ。今では全く価値観も考え
方も別人だけど。

マネーカードだけは手放さず、住居は固定ではなくビジネスホテル
を転々として。

食事は外食のみ、コンビニからファミレスからあちこちを巡った。
寝床は最悪野宿をした、変態が寄って集ってきた事もあったなあ.....

.....（涙）

面倒な時は、店の中でバツタリ相対しちまった時さ。ありや逃げら
れないし、闘っても店に迷惑がかかちまう。そうなたら出入り
禁止どころじゃない。だからあたしはまず、人前も気にせず土下
座をした。

「いやっ、ちよっ、なにしてんの!？」

「此処じゃ闘えないし、あたしは闘うつもりはない.....今日は

見逃してくれ」

それが、あたしの常套手段になっていた。出会うヤツ出会うヤツ全てに、一度はこうしたモンだ。

平謝りでその場をやり過ぎす。惨めとでも不様とでも、なんとでも言え。闘わずに済むなら易いモンさ。

けど一人、いや。一組だけ、これが通じない相手がいた

そう、あの双子だ。

「「雷いかずちツツッ！……！！！！！！」

「うひゃあツツッ！……！！！！！！」

最初に頭を下げた、のだが
なり本気で。

何故かキレられた。か

二人はどうやら雷の能力者らしく、バンバンビリビリ雷を撃ってくる。

コンクリートは碎けて弾け飛び、その破片も周囲の空気も微妙に帯電してたり。さっきから静電気がチクチクして痛いなの、攻撃は当たってないから痛くはない。雷を避けながら、あたしは叫ぶ。

「ちよつ、あたしは闘いたくないって言ってんのよ!? なんで雷攻撃しと」

「黙らっしや雷いかずちイイイイイイ……ツツツ……!!!!」

「ぎゃあああああ……ツツツ……!!!!???」

モロに直撃。なんか背負ったままの蛇腹剣が避雷針の代わりに以下略。あー痺れる……

「おいコラ! 闘いたくないだあ!」

「そ、そうひよ! なんは悪ひの!」

「アンタさあ、じゃななんで外に出てきたの? こっちに来るのは基本、葦牙に会いたいヤツが闘いたがってるヤツばかりだよ? それともないに此方こちに來たタイプ?」

「……………(フルフル)」

「じゃあなんで?」

ああ、この赤い方の姉ちゃんは優しいなあ……………なんか話しやすい。
黒い方の姉ちゃんは歯をギリギリ鳴らして、露骨にイライラを表してるし　　で、告白タイム。

「普通に暮らしたいだけエ!!!!????」

「こ、声大きいって……………あたしってなんか変なの?」

路地裏万歳。人がいないってマジ有難いよね、騒いでもあんまり何も言われないから。

涙目に尻からへたり込むあたしを、二人は愕然・啞然の表情で見下ろしていた。怒ってるってゆうより、なんか珍獣を見るかのような呆れた目をしている。互いにぱちくりぱちくりと、大きく瞬きをする。

「普通になってアンタ、それってつまり『人間みたいに生きたい』って事?」

「(コクコク!)」

「アンタさあ……………バツカじゃねーの!? この計画がどーゆーのか、アンタも聞いてんだろ!」

鵜鴒計画、M・B・Iが秘密裏に行くバトルロワイアル形式の闘いセキレイけいかく

! 一〇八羽のセキレイは最後の一羽になるまで闘わなきゃならない、アタシらもアンタも! そこに“人間みたく生きる”なんて選

択肢は無いんだよ!」

「ちょっと光……………」

「分かつてる……………でもあたしは、それでもあたしは。人間みたくに生きてみたいんだ」

「でもソレ、たぶん普通に闘うより辛いよ?」

「それは分かつてる、だからあたしは意地でも闘わない。あたしは“闘わないセキレイ”だ」

それだけが、いまのあたしの望み。強くななくていい、ただ自由^に生きてみたいだけ。

セキレイとかM・B・Iとか、帝都とかそんな縛りもなく。空を舞い、流れる風^に乗り、自由に飛ぶ鳥のように。

叶うなら、あたしは葦^{あしかひ}牙にも会ってみたい。あたし達セキレイが心の中で、セキレイとしての本能で求める、その存在を。一目、見てみたいのだ。自分の葦^{あしかひ}牙が、どんな人間なのかを。

結果が絶望だったとしても、あたしは受け入れる覚悟がある。受け入れて、バネにして、前へと進む。現実を受け止めて、真っ向から立ち向かっていく。それが、人間らしく生きるって事だと思っから。

「……………なんか癩^{シヤク}だけど、それなりに覚悟はあるみたいだね。コイツ」

「どうする、光? 悪い気するけど、倒す?」

「いや……あたしらで、「ドイツを守る」

「……はい？」

「あつひやつひやつひゃ、やっぱ兄ちゃんは今でもヒモか！ お疲れさま二人ともオ……！」

「否定できない自分が悲しい………」

「つたく、だからさっさと就職しろっつってのに！ あのエセ浪人がああ……！！！」

二人と話したいのもあるし、ちょっと走っちゃったから疲れた。てな訳で、休憩がてらアイスを食べる。

商店街にあったお菓子屋で適当にアイスを購入、その手前のベンチで、三人座って食べるようにしてるなう。だが流石に美女三人とあつてか、道行く一般人はこつちに釘付け。若い連中はナンパすらも考えているようだ。

話といつても『最近瀬尾の兄ちゃんどう？』とか『あんたの葦牙どんなヤツ？』とか、いわゆる恋バナ。お互いの葦牙の自慢大会といつてもいい。兄ちゃんに自慢できるトコなんかないだろうけど。

「でも話聞いてると、いい葦牙みたいだね。料理もできるんだって？」

「そう、これがメチャ美味しいんだって！ ジャンルは問わず、創作料理も余裕で作るし、炊事洗濯も性格もルックスも完璧、文句なしのパーフェクト葦牙だよ。ヲタクって点を除けば。でもそれも個性かねえ」

「あーあ。家の瀬尾にも、そんな風になんか特徴欲しいなー……結局アタシらも、あんたが居候してる間はアンタに料理任せてたし。一人暮らししてたから、出来ない訳じゃないって言ってたけど」

「いんやあー、まさかあそこでの生活スキルが後に役立つとは思わなかったよ！ ハッハッハッハア！」

あたしが二人に保護されてからは、あたしは二人とその葦牙、瀬尾せおの自宅に厄介かあになつてた。

期間にしてみれば二ヶ月ほどだったけど、いろんな意味で充実した

二ヶ月でもあったと振り返る。

ただもうそれは頻繁に、あたしは三人にコキ使われてたからなんだろうけど、家事スキルが異常に鍛えられてしまっていた。ビジネスホテル泊まりで磨いた他人任せな癖も、三日で直した。コンビニや料理店巡りで鍛えた味覚や知識を活かし、失敗という経験を重ねて美味しい料理を作れた。

社会的な事で教えられた事もたくさんあった、人間としての普通な生き方を教えられた。間違ったら怒ってくれたし、頑張ったら褒めてくれた。あたしは、二人に育てられたと自信を持って言える。そして今更でも、こう言いたい。

「……………ありがとう。光、響」

「……………はあ?????」

「あたしの姉ちゃんできてくれて、ありがとう」

「……………バツ、バカか！　いまさらなんだよバカ煌刃！
もっと早くに気付け！」

「（プスッ。光、照れてるの隠せてないよ……………（笑））
ハア……………でも煌刃も、随分大人になったね。あたし達はもう卒業　お別れかな」

「そうだね……………煌刃、アンタももう一人前のセキレイなんだ。
その時は……………分かってるね？」

「んー、分かってるけど……出来れば闘いたくないかな。あたしは二人の事好きだし」

「わがまま（笑）」

「そだね。あたしはわがままだ……そろそろ行くよ。あたしの旦那を待たせてるから」

「おう、行ってらっしゃい。またな」

「またね。今度会ったら一緒に食べよ」

「うん、その時は瀬尾の兄ちゃんも一緒にね。じゃ
バイバ
イ」

「煌刃やーい！」

「煌刃さーん！」

「煌刃ー！」

「（クルクルキョロキョロ）……………いない。也」

全く、家の人間はどうしてこう迷惑をかけたがるかなあ！？ 迷惑
つてゆーか面倒を！

駐車場よりさらに2km先に到着、しかし近辺には煌刃の姿は見当
たらない。近くの人にも聞いたが、これもハズレ。影も形も無い。
探し始めてもう二十分は経っているだろうか、走り回りっぱなしだ
から流石に疲れてきたよ……………

「おおおーい、黒人ー！ツツ！……………！」

「あれは……………煌刃さんです、無事です！」

「んだよ、誘拐とか戦闘に巻き込まれたとかじゃねーのかよ……………
……………」

「……………元気なまま。也」

「煌刃……………」

「くーろとー……………」

「だから誰なんですか貴方は！？　もしかしてキャラ入ってます！？」

「……………黒、なんかキモい。也」

「ほら、チビッコにもキモいって言われてますからやめて下さい！
流石に恥ずかしいです！」

「そんな事知らねーよ、アイトンノウ！　煌刃、もっかい走って来い！　今度は僕の脚本通りに！」

「……………ぶっ」

「あぁんん？？？」

「ぶくくっ……………あーいや、何でもない。OK、もっかい走って来るわ」

「………」

「よくやるわ……………一抜けた、俺しーらね。コンビニでアイスでも食うか」

「……………ボクも食べる。也」

「あ、私もお願いします。バナナ味を希望です」

「アレ、か……………噂の『セキレイ殺しの葦牙』は」

「その様ですね、とてもそつは見えませんが……………一応、プロフィールです。」

都内在住、白羽黒人。二十歳のフリーター、男性。帝都タワー近辺

に豪邸を所有し、両親は海外でM・B・Iの系列に勤務。学歴は中卒で、高校には行ってませんが大卒レベルの学力あり、だそうです。現在保有しているセキレイはNo.37・魅弦、No.90・煌刃、No.100・地天、No.49・鶴の四羽。

格闘技をたしなみ、セキレイとの戦闘では肉弾戦を基本としています

以上です」

なるほど、確かにある意味で曰く付きの葦牙だ。『セキレイを倒せる』だなんて、噂だろうと思っていたが………存外本当かも知れないな。こんなビルの屋上から覗き見のような事をしていて、正解だよ。

何故なら

彼の傍にいるセキレイの一羽が、くると此方に振り返る。

巫女服を着たセキレイは『迷う事なく』此方を向き、私としっかり視線が合った。

私が見えているのか、彼女には。彼女の眼は血のように深紅に染まっていて、不意に此方にニコリと笑いかけてきた。そんな彼女に、私は背筋に嫌なモノが蠢くのを感じてしまった。

「面白いな……………試してみるか」

「……………氷我様？」

「柿崎、連絡だ……………No.10に彼らを襲撃させる。腕試し程度で構わないが、No.10よりも弱ければ全員倒しても構わない　そう伝える」

「^{かし}畏まりました」

さあ、どう闘うのか見せて貰うとしようか。
空想と理想を抱いた子供と、^{あしかひ}現実を生きる化物と
どちらが強いのか。^{セキレイ}

第十六話 三種肉の為に

今日も一人、名も知らぬセキレイを倒した。彼女は短刀を使っていた。

だが倒した いや、殺した。それほどに私は彼女を完膚無きまでに叩きのめした。

私としては、心底不快ではある。セキレイとして名乗る事も許されず、助けを求める事も出来ず、相手に“逃げろ”と告げる事も出来ない。ただ言われるままに、あの男の言う通りに動く事しか出来ないのだ、今の私は。

プルルルルル、プルルルルル……………ピッ。

「……………もしもし」

『No.10、ご苦労様です。そして次の依頼ですが 今か

ら送る写真の葦牙を襲撃しなさい』

「は？」

何を言っているんだ、この男
あの男の秘書、柿崎とか言っ
たっけ は。

『葦牙を襲撃しろ』だって？ 何を馬鹿な事を……………葦牙を襲うのはルールで禁止されている筈だ。それが最初に脳裏に浮かび、次に頭に浮かんだのはコイツらがある種の『無法者』であるという事だった。彼らはそう、鵲鴿計画に非常に否定的なのだ。M・B・I社長がいくらルールを提示しようと彼らはそれを平然と破るだろう。しかも、最悪な形で。

『ああ、拒否権があるなどとは思わないように。貴女にはこれ以外の選択肢が無いのですから』

「……………分かってる」

『よろしい。では写真を送ります』

それが最後、柿崎からの通話は切れた。そして間もなく、一通のメールが届いた。件名は『襲撃対象画像、及び個人情報』。苛立ちを抑え、メールを開く。文章はそれほど長くは書かれていなかった。だがその写真を見て
私は驚愕した。

「ウン……………これって」

『襲撃対象の名前は「白羽黒人」^{しろはくくろじん}、二十歳の青年。現在四羽のセキレイを保有。
二羽は物理戦闘系、二羽は能力系のセキレイと確認済み。可能ならばセキレイも倒して下さい。以上』

「白羽君……………それに

魅弦^{ミッシェー}」

「なん……………だと

!？」

「お？ どしたの黒人」

「これを見たまえよワトソン君」

「誰がワトソンだ誰が。ナニナニ……………品数超・限定！ 豚、牛、鳥、各種300gが 百円！？」

そう、百円だ。夢のワンコイン、絶対の銀貨、小学生のライフライン。それこそが百円！

300gって言えばそれなりの量だ。お一人様各種2パックまでだから、好きな肉を600g買えるという計算になる。そう、“お一人様”だ 今ほど家族が多い事を喜ばしく思った事はないよ。

「煌刃、各員招集！ これより北に出向くぞ！」

「あ、ゴメン。あたし今日知り合いと食事の約束してるから」

「ワッツ！！！؟؟？」

「あ、あその他の連中……………魅弦達は今日は南に買い物に行ってるって。さっきメールで。南は行った事無いからって、眼の利く魅弦が案内で一緒に。帰り遅くなるってさ」

「ノオオオオオオオオオツツ！！！！！！」

バツ、バカなツ！ この僕の完璧な作戦が……… たった二回のセ
リフで打ち砕かれた！？

「そつ、その食事は日程ずらしたりは出来ないのかな！？」

「あー、ちよつとムリ。向こうもあたしも予定噛み合わなくてさ、
今日は偶然噛み合った日なんだ。だからゴメン、今日は勘弁してく
んないかな？ あ、次は絶対一緒に行くからさ！」

「あ、あ、ああ……… そうね、そんな日もあるよね。女の子だし、
人間なものね。そうね、あるよね……… うん、仕方ない。
ならあんまり気は進まないけど、彼を頼るとしよう」

「彼？ なに、アンタの友達かなんか？」

「知合以上、怨敵未満。つてところかな」

×

×

『で、僕に声かけたって訳か』

「いやあ~~~~、昼間ならホストは暇かなーって思ってたさあ？」

『生憎だけど、今日は予定あるんだ。悪いね』

ドタツ、と身体ごと床に倒れ込む。まさかこつも完璧に敗北すると
は……………

呪いの魔方陣でも描いて呪ってやろうか。エロイム・エッサイム、
我は求め　　なんだっけ。

『ああ、それとこれは忠告だけど。最近あちこちで名乗らないセキ
レイが出てるらしいんだ』

「名乗らないセキレイ？　なにそれ美味しいの？」

『姿は見えない、声も性別も分からない。通称「比礼ひれのセキレイ」

既に三羽が倒されてるから、実力者なのは確かなんだ。君
は葦牙としては一、二を争うほど有名だから、気をつけてくれ。も
し何かあれば呼んでくれ、すぐに行くよ』

わあ、やっぱりイケメンだこの人。惚れちゃいそうだよコンチクショ
ウ！

「ご忠告痛み入る。肝に命じとくよ」

『うん。じゃあ切るね、また今度』

「焔君……………サラダバー…ツツツ！……………！」

×

×

「おお、見た目は普通なのに人の数が少ない」

北方面にある、極々普通のスーパー。大手チェーンでもなければ、有名という訳でもない。

だが品質と安さは他のスーパーを抜いており、商品には抜群の鮮度と品質、安さを追求した地元民ご愛好のスーパーである。安く仕入れ、安く売る。それで毎月黒字なんだから、営業としては文句無しなんだろうね。小売店の理想形とも言えるそこに、僕は突入した。

「さて、お肉売り場は……………ぐっツツツ!!!???」

漬物・豆腐コーナー、角を曲がった瞬間
を襲った。

覇気が僕

気圧された……………だがそれはただの錯覚だと気づき、落ち着いて
冷静に状況を確認する。

認識した　　そこは最早一介のスーパーなどではなく、欲望渦
巻く『肉の戦場』と化していたのだ。何十人という主婦が散り散り
に棚を見ている。だがその意識は全て、お肉売り場の側にあるスイ
ングドアに注がれていた。

意識を越えてそれは覇気と化し、5mほどのお肉売り場はまるで死
合いの様な空気を漂わせていた。

「(タイムセールまではあと十分はある……………なら今のうちに)」

今日の夕食は肉祭り。ならばサンチュやコールスローは常備しなけ
れば。

野菜売り場に早足に向かい、目標を速やかにカゴに投入。続いてカ
ットカボチャにタマネギ、ジャガイモ、ピーマン。焼肉の王道たる
野菜達を次々にカゴに投入していく。ジャガイモは『ジャガバター』
の為だ、他に意味はない!

野菜を確保し終えると、時間は一瞬に過ぎ去っていた。あと一分……
早足に再びお肉売り場に向かうと、既にスイングドアの前には
“ある程度”邪魔にならないように主婦達が詰め寄っていた。だ
がその目は主婦ではなく、戦士のそれに近いと僕は感じた。

そして間も無く開幕
車に肉を乗せて。

白衣の店員が姿を現した。台

それを確認すると、僕はカゴを邪魔にならない端の方へ置いて手ぶ
らで腰を落として構える。

「ではこれよりタイムセール、タイムセールを開始致します！ 本
日のタイムセールはなんと驚愕！ 300gのお肉が百円、なんと
百円です！ 品数はごく僅かですので、お早めにお立ち寄り下さ
いませ！ それではタイムセール開始！」

「(いざ) GO！」

店員がマイクで放送すると同時。僕は真っ正面、二m先にある台車
に向かって駆け出した。

僕は自分が人より桁外れな筋力を持ち合わせている事を自負してい
る。だから負ける気は無かった。

そう、人間以上の速度で駆け出した僕と、主婦が
並ぶまでは。

「（そんな……………そんな馬鹿な事が！？）」

「ハアツ！」

「ぐふっ！」

嫌味つたらしく二人のパンチパーマ・主婦が笑い、僕よりも速く台車に辿り着いた。

そして気付いた、二人だけではない。他の主婦全員が一斉に、僕より速く台車に駆け寄っていたのを。

全員スタートは同時だった。つまりこの主婦達は、僕と同じタイミングでありながらも僕よりも遙かに速く前に進んだと。そういう事になる。そして僕は出遅れた、それはつまり
完全なる敗北を意味する。

「馬鹿な……………僕が、負けた？」

蠢く主婦達が去った後には、何も乗っていない台車だけが残されていた。

それを見た瞬間、胸の内に何かが溢れ出した
これが、悔しさなのか。

「くっ、読み違えた！ 彼女達は主婦なんかじゃない、彼女達はそ
う
戦闘主婦ウォーマザーだったんだ！」

戦闘主婦ウオーマザー
とされる存在。

それはあらゆる時代において、武術の達人に近い
武術の達人が極めるのが武術であるならば、主婦が極めるのは主婦
業。どちらもその一点を極める。

万人を退け、欲する物を奪い合う『買い物』。武術の毎日の鍛練に
も似た『家事』。世界を相手取るよりも遙かに険しい道程みちのり『育児』、
十数年の月日を掛け、それらを極めた者だけが得られる絶対にして
究極の称号。それこそが戦闘主婦ウオーマザーなのである！

「（と、御託を並べても負けは負けなんだよなあ……………とほ
ほ。恐るべし戦闘主婦ウオーマザー）」

ちよんちよん。

「うん???」

「あ〜〜〜、お肉要ります?」

振り返るとそこには女神様がいた

じゃなくて。

「君は確か出雲荘いずみせの……………結ちゃんだっけ?」

「はい！ N O ・ 8 8 ・ 結、拳系です！ お久しぶりです、白羽さん！」

^{アッチ}出雲荘ではミニスカの巫女服だったから一瞬分からなかった。

今の彼女はフリルの多いピンクのウェイトレスの格好をしている、手にはカゴいっぱい野菜や調味料やら。そして肉が何故か多めに入っている。牛豚鶏、三種類がそれぞれ六パックずつ。

「結、頑張り過ぎてお肉たくさん取りすぎちゃったんです。でもお返ししようにもどうしたらーって考えてたら、白羽さんが丁度いたんです」

あの死地を潜り抜けた、だって……………これが女子力なのか。

どう足掻いても男子でしかない僕には、とても辿り着けぬ境地だと魂で悟る。

「なあるほど。頑張り過ぎて、か……………頑張るのはいい事だ。でもホントに貰っていいの？」

「はい！ お一人様つーぱくまで、ですから。ルールは守らないと！」

生真面目な子やなあ……………お兄ちゃん、清纯過ぎて泣きそうやでホンマに。

結ちゃんが先に色々買うものを取っていたのか、店内を周りはせず
にそのまま帰って行った。

僕もお肉が手に入ったから用は済んだ。ならさっさと帰って夕食の
仕度をせねばなるまいて。

そして各種2パック、という点でお気付きだろうか……僕は一人
で買えない量のお肉を買っている。豚2パック、鶏2パック、牛2
パックといった具合にだ。何故かって？ 世の中には変装・女装と
いう言葉があるのを知らないのかね。恥を忍んでやった甲斐が……
…… あったというモノオ！！！！！！ by 仮面の人

今日は歩きたい気分だから、わざわざ徒歩三十分の道のりをマジで
徒歩で来ちゃった。しかし疲れない、疲労を感じる訳がない。そん
な風に歩き続け、丁度北区を出ようかという時の事だった。

なにやら、頭上から落ちてくるモノがある。

それは白い布で覆われていて全貌は見えない。

が、地上に落下する際に身を翻していたからおそらくは人間

セキレイである。まるで正体を隠す為に身体を覆うその布は、ま
るで魚介類の持つ鱗ヒレのよう。いや、ここ比礼ひれと言い換えるべきか。

そう、そして思い出したのは焔君との通話内容。『正体不明、通称
「比礼のセキレイ」』。

まさしくアレではないか。よもや話を聞いた当日

に出会すとは、我ながら不運なモノよ。

「……………どちら様かな。僕の知り合いに、君みたいな不審者はいない筈だけど？」

「……………先に言っておく　　ゴメン」

その一言で十分だった。たった一言で、僕は彼女の意思と目的を理解する。

予備で貰ったビニールを下敷きに、重い物袋を電柱の元に置いておく。そして数度の深呼吸。

「虚刀流想像者、白羽黒人　　受けて断とう」

「……………」

彼女は言葉もなく戦闘を始めた。初手は比礼による面攻撃。

無論ただのヒラヒラだなんて訳がない、数十kgの質量を持った布の壁が僕に迫る。

……………いやあ、今日はツイてる。まさか気まぐれに持ち出した“コレ”が役立つとは。

ズオオツツツ！！！！！！　と、僕の“得物”で比礼を斬り裂いた。

「ツツツ!!!????」

突然の事態に彼女は比礼を引き戻し、その元凶を確かめんと僕を凝視する。

顔は見えないが、その視線が僕の手注がれているのはいやほど分かる。

僕が担うのは一振りの日本刀。昔も昔、両親が何処かの誰かに頼んで作ってもらった逸品。だが僕には未だに、当時の両親が僕の趣味を見越して作らせたとは思えないのだ。そしてそれ以上に、この刀を作れる人間がいた事に心底感銘を受け、心底驚愕しているのだ。だれが作ったのか、今でも分からない。だがこれは完璧に再現されている、空想が現実になった証拠。

この薄く脆い刀。針のような刀。

向こう側が透けて見えるほどに薄く。

振るうだけで粉々に砕けそうなほどに脆く。

そして針のように細く
故に美しいこの刀。

「刀……………なのか?」

「そう、刀だ。僕の刀だ
を変えよう」

だから今日は少し名乗り

服の内側、背中から右股みぎももに掛けて刺すように身体に隠していたこの刀。

比礼が迫る瞬間に左踵で鞘を小突いて鞘ごと刀を抜き出し、一瞬で抜刀。そして比礼をバラバラに斬り裂いた。薄い刀を横合いに構え、鞘を左手に逆手に握る。キザったらしい柔和な笑みを浮かべながら。

「全刀流想像者、白羽黒人
うよ」

僕に、ときめいてもら

第十七話 時には昔の話を（前書き）

いつかは語られる、型無（刀）き物語

第十七話 時には昔の話を

「いやあ~~~~、アンタらが物覚え良くて助かるわあ~~~~」

「一応“居候”だからな、家事の一つや二つは手伝わにゃあよ」

「……………家事、嫁の仕事。也」

「おっ、言うねえ~~~~。じゃあ鵜には料理教えてやるよ。おいで」

「（地天を見て）……………むふー（鼻息）」

「（だから何だってんだよ……………アホらし）」

わあ~~~~、皆さん元気に家事をしますね（棒読み）。人手があると速さも段違いですよ。

そんな中、私はリビングのソファに腰掛けて茶を啜ってます。だって家事が破滅的に苦手ですから。

手伝えは十中八九、手伝いではなく荒らしになってしまいますから、下手に手を出したくないんですよハイ。買い物や洗濯干しなら出来るんですが、掃除や料理や洗濯はデメリットしかありませんから無理ですし。

「（と言うより、皆さん予定が無くなったんですよ。黒人さまには大変…………… あんまり悪くない事をしてしまいました。後で謝っておきましょう）」

今日の私の予定は、地天さんと鶴ちゃんに南方面の洋服店を案内する 予定でした。

が。地天さんのセンスに来るモノが無く、鶴ちゃんも同様で一気に冷めたらしく、甘いものを手当たり次第に食べてから帰って来ました。お土産に葛餅くすもちを買って冷蔵庫で冷やしてあります。

煌刃さんも同様。なんでもお食事の予定だったそうなのですが、相手の方が用事で来れなくなったらしいので帰って来たそうです。なんだか寂しそうにもしていました。すぐに立ち直ってましたね。

で肝心な黒人さまは現在北方面 おねえさま 美哉みさのいる地区に出向いているそうです。

なんでも『肉祭り』を開催する為に、超・特売のスーパーに行ったんだとか。しかも歩いて走って。私達が着いて行けないと分かるや否や、友達の方に連絡を取っていたらしいです。そこまでするのかと聞くのは野暮だ。あの人は『家事サイコー！』と素で言っちゃう

人ですから。

「……………友達、ですか」

「なに、魅弦。アンタ友達いないの？」

「います……………いえ、いませんね。友達と言うよりは、家族。親戚の方がしつくり来ます」

「へえ、それって誰よ？ 聞かせてよ、黒人みたくイケメンなワケ？」

「そうですね、一人はイケメンです。後の四人は女性、まあ言うまでもありませんが全員セキレイです。これは随分と昔の話なんですが……………今からそう、八年近く前の話ですね」

に赤ペンで『こつちだよ〜ん』と挑発の言葉が書き込まれていた。

「あんのガキンチヨ何処行ったのよ……………すばしっこさだけはセキレイーなんじゃないの!？」

「おやおや、風花^{かせはな}たんどうしたですか？」

その後方から、なんともゆったりとした歩調で歩み寄る、ナイスバディな女性がいた。

茶色と橙色^{オレンジ}の中間くらいの明るさ、そう例えられる長髪。それを左右三つ編みにした、知的な女性。手にはノートパソコン、風花と同じ黒装束、そしてメガネ。どう見ても非運動系の人間である。

「松^{まつ}……………ちよつと聞いてよ! あのチビッコ、また私のお酒に悪戯したのよ!？」

「ハア……………今度は何入れられたですか? 前は確か一升瓶の日本酒にクエン酸500gでしたっけ?」

「今度は缶ビールにどうやってか、バカみたいにカフェインを混ぜてたのよ。おかげで今もちよつと舌が麻痺して……………ガキンチヨめ、見つけたらあのビール飲ませてやるわ!」

「風花たんもなかなかどうしてあの子に遊ばれてますですねえ。かかいう私も……………『また』パソコンにちよちよいと悪戯されておつむに来てるですが(怒)」

ふふふ、と黒い笑みを浮かべる。松は割と大人しい方なのだが、実際に動くとなると一番面倒極まりない人間でもある。如何せん、周囲への迷惑などを一切考えない事ばかりしでかすからだ。

風花もその被害を被った事がある。あれは巻き込むというレベルを超えて、狙ってるんじゃないかというくらいに派手にやらかしていた。最終的に“彼女”が本気で怒ってようやく落ち着いたという逸話すらある。

「アンタも同じ目にあってるって訳ね……………でもなんでか、探してる間は怒り心頭なんだけど、見つけたら見つけたで怒る気にならないのよねえ。そこが不思議ってゆーか何てゆーか……………」

「松達も、根っこは随分とあの子を甘やかしている、という事なのですよ。でもちよつとは怒つとかないと、あとあと反省しない悪い子になつちまいますからね。大人として、時にはガツンと言わないと」

「それはいいけど、目星はついるのかしら？」

「流石に『此処』で能力を使うと色々五月蠅いですから、正確な場所はこちらからないですが……………あの子が行きそうな場所は、何となく予想はついてるですよ？」

×

×

「ふっふっふ、この魅弦みじゆを甘く見るからそういふ風になるのよ」

「で、なんでお前は俺の部屋に来てるんだ。ついでに烏羽からすは、お前もだ」

「いやね、魅弦みちちゃんがまた悪戯あくごしてるみたいだから。今度は何をしたのか気になっただけさ」

風花達二人がいた場所から随分と離れた其処は、セキレイ専用居住区画。

魅弦が逃げ込んだその一室は、陸奥の部屋だった。その押し入れの中に、烏羽共々隠れていたのだ。

陸奥の特徴を捉えてか、和室を軸に特に家具や装飾と言ったモノは飾りつけてはいない。殺風景と言えはそれまでだが、素朴故の風情と言えは味があるというモノ。

廊下の科学的な概観とは違い、六畳の個室には襖や窓がある。彼の部屋は居住区画の外側にあるので、窓から外の景色も見ることが出来る。だが外は見渡す限りの岩床地帯と変わらないので、これだけが

陸奥の不満なのは秘密の話。

唯一、卓袱台ちゃぶだいの上のポットが近代の利器であり、彼が茶を飲みたくなつた際のご愛用の一品。それと彼が通販で購入したお気に入りのお湯呑み。何処のメーカーが作ったのか、それには『侍』の一字が書かれていたり。

さて、話を戻そう。

現在風花から逃げ延びた魅弦は、陸奥が押し入れに隠していた煎餅を烏羽と共にかじっていた。

「へえ、今度はカフェインをねえ。それはさぞかし苦かつただろうね」

「そうなの！ 風花ねえちゃんつたら舌を出して『ゴージャア！！！！？？？』つて叫んでたの！ やっぱり風花ねえちゃんは面白かつたよ、烏羽ししゅうも来れば良かったのに」

「自分がそんな事したら皆大慌てになるだろうから、遠慮しとくよ。それに自分だけ『師匠』呼ばわりは寂しいんだけど……………他みたいな親しげに呼んではくれないのかい？」

「だつて烏羽ししゅうはししようだからなあ……………かーちゃん、つてのはどう？」

「ハハハ……………遠慮しとくよ。なんかお母さんみたいだ」

「だから 人の部屋で部屋の主を無視して話をするな。でもって煎餅食つなよ」

“ いい加減にしる ” と言いたげに、声をホンの少し荒くして陸奥が口を開いた。

だが実際は怒ったりはしておらず、ただ単に煎餅勝手に食うなど言いたかっただけである。

それ故に口を開く前に手だけは煎餅の袋をしつかりと掴み、懐にソレを取り戻していた。だが二人は襖の中でも食べていたのか、袋の中にはたった二枚しか残されていなかった。煎茶を啜りながら、ごちそうさまと二人が呟く。溜め息をつきながら、陸奥は残った煎餅を再び押し入れにしまう。

「もお、陸奥おにこやのつんでれめ。好きなら好きと私に告白すればいいのに」

「誰が誰を好きだってエ……………?」

「いたたたたたたたたたた！？ やつ、アイアンクローやめてえええええツツツ！！?」

「ははは、二人はホントに仲が良いなあ。自分ももうちょっと仲良くして欲しいものなんだけどねえ」

「あー痛かったあ……………んー、じゃあ烏羽うぶ。ハイッ」

ぎゅーっ！ と、魅弦が右隣の烏羽に抱きつく。当時の彼女にはおよそ胸と呼べるモノは無かった。

だが少女らしさは毛先から爪先まで溢れていた。物語のヒロイン、伝承の少女、そんな存在だった。

烏羽を見た者の多くは、その存在に恐怖する。その恐ろしさに腰を抜かす。だが少女は至極普通に　いや、寧ろ友好的に、親愛を込めて烏羽を『ししゅう』と呼んでいる。それは彼女が烏羽から剣術を学んでいる事も関連しているのだが、それはまた別の話。実際は魅弦が初見の際に、彼女からただならぬオーラを感じたらしく、それから彼女を『ししゅう』と慕う原因となっていた。本人も魅弦の事はそれなりに気に入っているのです、烏羽も逆に魅弦を『みーちゃん』と呼ぶほどに仲良くなっていた。

「私は烏羽うはの事すきだよ。カッコいいし強いし、優しいし面白いし」「自分は面白い事をした覚えはないんだけどねえ……………」

「そりゃ同感だ。烏羽が面白くなったらアイツが真っ先に飛びついてくる筈だしな」

「ああ、そりゃ言ってるね。でもって何かしら実験とかもされそうだ」

「その時は私が烏羽うはを守る、私は皆の弟子だから健人けんせいにだって負けないのさ！」

「ふふふ、それは有難い。じゃあ自分は席をみーちゃんに譲って隠居しようかね」

「おう、任せなさいってのよな！」

「見つけたわよガキンチョオ!!!!!!!!!!!!!!」

「げえッ、風花かぜはな！……！！……？……？……？」

自動ドアが開くと、其処には鬼の形相の風花がいた。

その後ろには頻りにニヤニヤ笑っている松もいる。二人の共通点は『魅弦、お仕置き』である。

「くっ、ここは戦術的撤退！ 烏羽しじょう、陸奥おごいさ、さらば！」

「おう、とつとと行け」

「じゃあね、また今度面白い悪戯話を聞かせておくれよ」

「はいつ、では！」

「あっ、待ちなさいコラ……！！！」

部屋の窓を開けて、そこから元気に外へと飛び出す。

素足で岩床地帯は、と普通なら心配するだろうが、セキレイたる彼女にそれは必要はない。

魅弦は『三階から飛び降りて』身体を翻し、落下の慣性を消して見事な着地を見せた。風花もそれを追おうと窓から身体を乗り出すが、魅弦はすぐさま下の階の何処かの部屋に逃げ込んだため、また見失ってしまう。

「魅弦のヤツ、また逃げたわね………ホントネズミみたいにすばしっこい奴め」

「ははは、楽しそうで何よりじゃないか」

「あなたはあの子の悪戯を受けた事が無いからそう言えるのよ!」

「どうでもいいが……俺の部屋でドタドタ騒ぐな。埃が舞^{ホコリ}ってしようがないんだが」

「それはすいませんですよ、陸奥たん。でもこれで捕まえるチャンスは無くなっちゃいましたですね」

「はあ? なんでよ?」

「たぶん次は『アソコ』に逃げ込んでるからですよ。知恵を巡らせるまでもないです」

「ああ、あそこか」

「あそこならしょうがないよね。自分もあんまり好きじゃないし」

「はあ、今日は諦めましょう……疲れたから部屋でまた飲み直すわ」

シングルナンバー余人が揃いも揃って“苦手”と評する一室と、その主。

唯一魅弦と“彼女”だけは彼を苦手とはしていない。その彼とは、彼女達の調整者であるあの男。

「『『『『マッドラボ
浅間健人研究室』』』』」

×

×

「とうっ、窓からお邪魔します！」

「こらっ、魅弦。窓から入るなとあれほど言っているでしょう」

こつんと、彼女が偶然持ち合わせていた長刀の鞘で頭を小突かれる。実際は特に痛くないほどなので、魅弦はとりあえず『痛そうなフリ』だけは欠かさないようにしている。

それは魅弦が逃げ込んだ陸奥の部屋からさらに距離のある、セキレイ専用の研究室。部屋の主である浅間健人あさま たけひとはなんとも面白おかしく笑うが、彼女はあまりそれを善しとはしない。

「健人さんも、魅弦を叱ってあげてください。甘やかすすぎると、

礼儀を知らぬ子に育ってしまいますよ？」

「クククククツ………いつ、いやそれはないよ。美哉みちがいるならそれだけは絶対にないって！」

「そうだよ美哉おねえさま！ 私は淑女なんだから、大きくなったらちゃんと礼儀正しい女の子になるもん！」

「じゃあ今度から窓から部屋に入らない、って約束できますか？」

「そ、それはちょっと難しいかなあ………（汗）」

およそ、毎日こんなノリツツコミを繰り返すのが、彼女達の日課だった。

しかし彼女 美哉は最近変化が表れていた。そう、簡単。彼女が笑うようになったのだ。

それは『神座島侵攻』という大戦争が起こった後の話だが、魅弦はそれ以前に彼女が笑う処を度々見た事がある。その時の殆どは彼女が一人で笑っていたのだが、魅弦は一度『何が面白いの？』と聞いてしまった。

そして彼女はこう答えた 『大人の秘密ですよ』と。

「さ、それはさておき 魅弦、調整の時間だよ」

「はい」

ぱぱっと服を脱ぎ、ベッド とは言ってもシーツなどは無く、

機械的な診察台と呼んだ方がいい

に寝転がる。余談だが健

人は彼女達の身体に欲情した覚えがない。

美哉も、松も、風花も、烏羽も、魅弦も。相手がどれほどの美女であるうとも、彼は何故か欲情しないのだ。陸奥はそれに対して『お前男色なのか?』と問うた事があるが、健人の答えは至極真つ当だった。

『仕事とプライベートはちゃんと区別してるよ』

調整は早ければ数十分、遅くて二時間程度はかかる。だからその間、やんちゃな頃のいま魅弦はと言つと

「すぴー……………ぐーすかぴー……………」

寝る、ただこの一択だった。何故なら暇だから。魅弦にとって暇は兵器にも勝るモノらしい。

昼間のやんちゃな悪戯に疲れたのか、完全に爆睡中な少女。自分が裸だつて事を完璧忘れている。

美哉は風邪を引かないようにと、持ってきたシーツを掛けてあげた。その姿は母およではなく母性溢れるお姉さんだつたと、健人の談。斯くして一時間と経たず、本日の魅弦の調整は終了した。

「それにしても、不思議な子だね。本来なら彼女のような、普通のセキレイに能力は無いのがセオリーなんだけど……………この間見せてくれたアレ、間違いなく固有能力レラスキルだよね」

「『神の眼 《オウル・レンズ》』……………本人も正確な制御出来
てはいません。発動の感覚も掴めていないようですから、あまり期
待は出来ませんよ」

「それは彼女のお姉さんとしての辛口か、それともいずれ闘う相手
への示唆か。どっちだい？」

「どちらでもありませんよ……………ただ、その様に思っただけです」

嘘つき 健人は小さくそう呟いた。

美哉は魅弦の事をまるで他人の様に話していたが、それは真っ赤な
嘘だ。

他人の事をとやかく言う人間は、そんな優しい目をしない。

他人の事をとやかく言う人間は、そんな風に温かく微笑んだりはし
ない。

それは慈愛、母性、友愛、親愛。愛する者を見守る目だった。そう、
彼女はどうしようもなく魅弦の事を 否、全てのセ
キレイの事を愛しているのだと。健人は無意識にそう悟った。

「あ、そうそう。今度から新しい子が来るんだ」

「新しい子……………他のシングルナンバーですか？」

「うん。とりあえずNo.6からNo.10まで全部覚醒させた。
うちNo.09は宮島さんのとこに」

「そうですか……………それはまた　　災難ですね」

「だねえ。僕もあの人のトコにだけは行きたくないよ（汗）」

宮島　それは月海の調整者の事なのだが、それはまた別の世界で語られる事もあるだろう。

丁度その折。自動ドアが開き、一人の少女が入ってきた。魅弦と同じ年くらいの、幼い少女だった。

「こ、こんにちは……………」

「こんにちは」

「やあ、ユウ 鈿女。時間通りだね」

鈿女と呼ばれた少女は、始めて見る美哉に何処か脅えていた。だが美哉から邪気や悪意、そういった類のモノを感じられないのか、すぐに怖がりはいしなくなった。

そしてこのタイミング、魅弦はゆったりと身体を起こし、とりあえず目の前数m先の鈿女が目に入った。互いに視線が合い、そのまま十数秒後の事。

「初めまして、あなた誰？」

「な、No.10・鈿女です。よろしく……………お願いし

ます」

「さあ、そこからどうするんだい？」

「ぐ、っは

あツツツ……………!!」

比礼はボロボロ、身体中血だらけ切傷だらけ、満身創痍の体現者。彼女を評価するならそうなる。

心なしか、胸元の布すら千切れそうでちょっとドキドキしてたり。き、期待なんかしてないぞ!?

だがこんな状況でありながらも、顔を隠す比礼だけは決して脱ごうとしない。比礼は最初はそれなりに大きかったが、今や二mとないただのバスタオルだ。

「あたし、は

負けられないんだ……………ツ!」

「ほづ?」

「名乗る事も許されず、倒した相手を見送る事も許されず……そんなでも、やらなきゃいけない事があるんだ。アンタには分からないだろうけどね」

「それはセキレイとしての覚悟かな。出雲荘在住、セキレイNO.10・ひづり 紺女ちゃん?」

「ッ!?!」

「あれだけアクロバットに動いてたんだ。顔が見えない訳がない」

「ッ……………」

ほらほら驚いてる驚いてる　そういう顔が見たかつたんだよ。
素直な、彼女の　　紺女としての表情を。にしても理由、か……
……………聞きたいトコではあるな。だがしかし。

「今日はここいらでお開きだ。じゃね」

なんと言つか、やる気にならない。シラケるし、ノラない。
隠れてた表情に出てるんだよ。『嫌々やってます』ってのが。そんなヤツ相手に真面目に闘うのがおかしいよ。僕は『闘いたいヤツ』
としか闘わない、だって面白くないもの。だからさっさと帰る。帰って刃牙バキを見る。

「まっ、待ちなさい！」

「うん？」

「私は……………あたしは、アンタを倒さなきゃいけない。あたしの為に、そして……………千穂の為に！」

「葦牙の為に、か……………なるほど、セキレイらしい覚悟だね」

彼女の事情は察するに、葦牙が何かしら不自由をしているんだろう。それも命に関わるほどに。

彼女はそれを救うべく、巨大な勢力に媚びへつらい、力を借りる代わりに已む無く闘っている。

全ては愛する葦牙の為に、ただその為だけに彼女は今まで奔走してきたのだらう。名乗らないという不義理を堪え、容赦無く叩き伏せる不快を押し込めてまで、彼女は葦牙の為に……………

「笑わせんじやねえよ」

第十八話 和解、と呼ぶべきか否か（前書き）

なんともものんびり執筆中なわたしです、ハイ。
段々クオリティが下がっているのが自身でも分かるこの頃……
お恥ずかしい。

×

×

見よう見まねで虚刀流を覚え始めた頃に、僕は『バカ』『オタク』と、非常に無下に、そして異端の様にイジメられていた事があった。だが僕は一度としてやり返したりはしなかった。当時から自分の力が強いのはよく理解していたから、不用意に暴力は振るわなかったからさ。それで迷惑するのは僕以上に両親だと、それも理解していた。だから徹底して我慢した。

しかし一度だけ、友達が僕を庇ってくれた事があった。そしてその友達は『僕を庇った』という訳の分からない罪状でイジメの対象になっちゃった。その時だった。

おそらくそれが最後であろう、僕という人間の 白羽黒人という人間が魂の底から憤怒を覚え、自身を抑えられなくなったのは、そして今でも思わずにはいられないんだ。

“なんで僕に助けると言わなかったんだ”と
結論として。

その

僕はイジメをしていた学校の先輩後輩同級生全員を、『殺人的な暴力』で叩きのめしたのだった。

×

×

「ナニ？ なによなによ、もしかして君って自分に酔っちゃってる
痛い人なの？」

『誰にも頼らず一人で闘い続けてる私カッケエ……………（
哀愁）』とか素で言っちゃう人なワケ？
うっわ痛った~~~~い！ そして可哀想~~~~（涙） 気持ち悪い
よそーゆーの、マジ勘弁してほしいんですけど。有り得ないっつー
かアホらしっつーか、現実見やがれるな？ ナルシストとかマジ勘
弁

葦牙の為に、ってのと一緒に自分のナルシズムも満たされて嬉しい
？ ねえねえどんな気持ち？」

怒涛の語り。多少の脚色は許しておくれやす。
そして鈿女ちゃんは、それを聞いて本気で怒ったらしい。怒気が溢れ出してるよ。

「なっ
何言ってるのよ！ あたしは千穂の事だけを思って！ ずっと……誰にも助けなんて求めたりしないで……
一人ぼっちで……ずっと」

「嘘だツツツ！……！！！」

「ひツツツ！……！！！！？」

「……君、出雲荘に住んでるんだよね？ 焰君のトコ遊びに行ったとき、二階にいたの覚えてるよ」

「……だからなに。それがなんなのさ」

「あの出雲荘に住んでる人間が、一人ぼっちな訳がない。大家の美哉さん、友達の焰君。皆人君に結ちゃんに月海ちゃんにくーちゃん。それと見てないけどあと一人。これだけの友達がいるのに、君が一人ぼっちだという意味が分からないよ……
何故、助けてと言わないんだい？」

「……………言える訳ないじゃん。だってあたし、比礼のセキレイなんだよ？ 礼節を弁わかへない、友達の友達すら平然と襲う、最低のセキレイなんだよ？ そんな事……………絶対言えないよ」

スパツと。前触れも無く、鈍女ちゃんの胸元の比礼を斬り捨てた。なんかイラッてきたから。

薄刀・針が限定剣技が一つ、速遅剣そくちけん。『脆い』という点を活かした、

“ 剣を伸ばす ” 技。

ちゃんとした理論みたいのはあるにはあるんだけど、一々説明してたらキリがないから以下略。とりあえず距離の概念が無い刀、と認識しておいてほしいかな。鈍女ちゃんの比礼を斬り捨てると、僕は闘いの意志が無い現れとして薄刀・針を鞘に納めた。

「ちょツツツ！！！！？？？？」

「わお、巨乳」

「へっ、変態ツツツ！！！！！！！！ シリアスな空気で普通こんな事する！？」

「我が生涯に、一片のシリアス無しツツツ！！！！！！！！」

「北斗！？」

閑話休題

改めて、僕は今後の事について語りだす。

「鈿女ちゃん、君の葦牙……………僕が助けよう」

「……………えっ？」

「もう一度言おう。僕が君の葦牙を助ける」

「……………出来る分けないよ。千穂は……………あたしの葦牙は、不治の病なんだ。そこいらの病院じゃ治せる病気じゃない、今入院してる病院でも治るかどうかも分からないんだ。そこから連れ出したって、すぐに死んじゃう……………あたしには、もう選択肢はないんだ」

「ある！」

断言した。もう茶化したりとか、まどろっこしい事一切なし。キリツとした真顔での叫び。

そうと分かれば、動かざるをえまい。何せ僕は有名人だ、有名人らしく堂々と振舞おうじゃないか。

それに友達の友達、という言い方にもちよつと壁を感じちゃってる……………寂しいなあ、普通に友達って言ってくれたら理由は聞かずに何でも助けてあげるのに。こう、物理的なアレコレ限定だけ。流石に僕には病気を治す技術とか軍資金なんてのは存在しない。っつーか医大とかも行きたかつたけど学力が（汗）

だがしかし。この世には、目に見えている腹黒い男がいる。

ちようどここから見える、この帝都のど真ん中に聳え立つあの忌々しいロンドン塔風の本社ビル。

「というか紺女ちゃん、なんで“アレ”に気付かないかな」

「あ、アレって？」

「アレ M・B・Iだよ」

「……………いやでも、社長はそんな事で動かないと思うよ。あの人、なんだかんだで傍観者みたいだから。それにあたしはその、色々あってお尋ね者で、動くとしたらよっほどの事じゃないと……………」

「じゃあよっほどの事をするまでだ」

×

×

「お願いします」

「……………」

ポロリと、高美さんが啜えた煙草を落とすのが視界の端で見えた。場所はぶっ飛び、M・B・I・本社ビル内、社長室。つつかこんな馬鹿デカイフロアいらなによね絶対。

その壁の一面は全てガラス張りで、それを背にM・B・I・社長・御中広人は社長の玉座に腰を降ろしていた。高美さんは事業報告のようで、手にはバインダーにまとめられた大量の用紙。僕には到底理解しえない事が書き込まれているんだろう。僕の後ろには一緒について来ると、鈿女ちゃんも一緒なのだ。

なぜ土下座しただけでそんなに驚かれるんだ。

「お、おい。君は本当に白羽黒人君か？」

「はい、そうです。お願いします」

「いや待て。待ってください、君は本当にあの御中広人嫌いの白羽黒人君なのか？」

「はい、紛れもなく白羽黒人ですお願いします」

眉間を摘まんで、まるで夢を見ているかのようにしばらく目を閉じる。

そして改めてタバコを取り出し、火を点けてすうすうと吸い込む。吐き出して、高美さんは一言。

「よし御中、いっぺん死んで夢かどうか確かめてこい」

「ちよつ、高美くん！？ それ私のせいじゃないよね、絶対死ぬ必要ないよね!？」

「あー……………ゴホンッ！ 人に頼み事をしに来たんだ。

ちゃんとした礼儀は弁^{わか}えてるつもりですよ。例え相手が“クソクズ御中”であっても、ちゃんと筋は通しますよそりゃ」

「頼み事？」

「それはまずはこのNo.10・鈿女ちゃんから話を聞いてからだね。鈿女ちゃん」

斯々（かくかく）然々（しかじか）ダイワのシカさん。数分の説明で説得中。

「なるほどな、葦牙が不治の病でそれを治してほしいと。細女、具体的な病状は？」

「えっ？ あ、えと……………分かんない。あたしは『治らない』っただけ聞いてたから。カルテとかは病院にあるけど、警備とか嚴重だと思っ」

「そこらへんは僕にお任せを。データの回収から葦牙ちゃんの保護まで、なんでもかんでもお任せ御座れの白羽黒人！ 細女ちゃんがキスしてくれたら無限に頑張ってみせよう」

「えっ、それでいいの？ じゃ……………ちゅー」

目を閉じて、肩に手を添えて。身体をぴったりとくっつけて。身体を乗り出すように、柔らかさそうな、ピンクの唇を立てて

「ちよっ、待つ待つて！ 冗談、冗談だから待つてエッツッ……！！！！」

くっつかないで、胸が、胸がアツツッ……！！！！！！ あ、柔らかい……………（赤面）

ってかデジャヴじゃね？ いつの事だか 思い出してっらんっ
って余裕無いわアツツッ……！！！！！！

ああ柔らかい、柔らかいっしたら柔らかい。サイズにして90以上は

あるか、ハリのある乳房を僕の胸板に押しつけてきて、形が変わっている。これが……………おっぱいなのか　　うちには煌刃しかないからなあ、お色気担当。
しかし本人はあんまりお色気担当のつもりが無いし、根がサバサバしてるからあんまり……………ね？

「ちえっ、冗談かあ。ワリと本気だったのに」

「なん……………だ、と？」

「あいや、なんでもないよ。アハハハハ」

「さて、黒人君」

御中がようやく僕に話しかけてきた。いつもの不敵な笑みを浮かべ、なんとも不遜な態度で。
高美さんと紺女ちゃんは邪魔になると思ってたか、脇へ下がってくれた。間合いにして二m、僕と彼の距離はそれだけ。他には何も無いし、誰もいない。

「話は分かった。では早速だが、条件を出させてもらおう」

「おい御中！」

「高美くん、これは私の『ボランティア』だ。いくら私でも、人並みに善心はある。だがそのボランティアに私がどのような条件を付けても、文句を言われる筋合いはない。それにゲームマスターは平等でなくてはならない、ならば依怙^{えいひいき}鼻^{びし}屑^{せつ}ではなく、平等に条件を出さねば」

確かに、真つ当だ。審判及び主催者兼スタッフが依怙鼻屑なんて、あっちゃならない事だ。それを踏まえれば、クソ御中の言い分には納得がいく。だからどんな条件でも飲むつもりだ。

少なくとも『死ぬ』『殺せ』『裏切れ』以外なら大体は許容範囲内だ。御中の腹いせに何処かの誰かを襲えと言うならやるし、仕事の邪魔になるヤツがいるなら殺す以外の方法で始末する。

「なに、大した事はない。最初から最後まで、ただ君一人で全てをこなして欲しい」

「それは『侵入』から『強奪』『保護』そして『逃走』『隠蔽』まで全て一人で、という事かな？」

「そうだ。それが私から提示する、君への唯一の条件だ。ああ、知り合いサービスでカルテだけはこちらが勝手に検査させてもらおう。どうかね？」

そんな事無茶だ

そんな顔をしてるよ二人とも。

彼女らの知る僕はあくまで一般人だから、急にそんな事が出来る訳がない。そう思ってるんだろう。

だが 何事にも可能性がある。小柄なバスケット選手が自身の倍はある選手からボールを奪う事もあるように。最下位のマラソン選手が終盤一気に追い上げて一位に舞い上がる事があるように。

しかしてそれらは決して偶然などではなく。歴れっきとした『努力』と確固たる『自信』より生まれる結果なのだ、僕は理解している。ならば、僕もそれに等しく努力をせねば叶わないだろう、今回の一件は。

「白羽黒人

その条件。承った」

「ね、ねえってば！ ちょっと待ってよー！」

本ビルを出てすぐ、あたしは黒人くんに突っかかるように話しかけた。

言うまでもなく、さっきの滅茶苦茶な条件の事だ。相手はあの氷我、そう簡単に事が進む訳がない。

ひよっとすれば、今のこの会話すら盗聴してるかもしれない。だがそれならそれで、あたしは堂々と裏切る事が出来る。面と向かってあの男をぶっ飛ばせる。最悪千穂に手を出すなら、半殺し以上もいとわない。

「あんなの無茶だって！ あたしも影からバレないように支援するし、あたしの友達にパソコンに強いヤツもいる！ だから一人なんて無茶は

」

くしゃりと、頭に手を置かれて

グシャグシャグシ

ヤーーッッッ！！！！！！！！！

「ぎゃあああああーッッッ！！！！！！！！！！」

「やーい髪の毛ボサボサ魔神ー（笑）」

うう、せっかく直毛だって自慢だったのに……………完璧グシャグシ

ヤだよ。

手櫛で適当に乱れた髪を直していると、黒人くんはあたしを乗せてきた車に乗り込む。道中歩くのが面倒とレンタカーに乗ってきたんだ。とりあえず答えを聞いてないから、あたしも助手席に乗り込む。エンジンを掛けると、黒人くんは行き先は何処ともなく告げる事なく走り出した。しかし目的地はあるようで、ハンドルに迷いが無い。赤信号で車を止めると、今度は逆に黒人くんから話しかけてきた。

「紺女ちゃん。ねえ紺女ちゃん？ 君は“助けを求められる幸せ”って分かるかな？」

「なにそれ、おかしいし。助けを求められて幸せなんて、フツー逆でしょ。助けられる側が幸せになるだけで、助ける側に幸せな事なんてフツー無いじゃん。デメリットだけ、って言えば変だけど」

何故かグローブボックスに入っていた櫛と手鏡を発見し、速やかに髪をとかしていく。

ついでに本社に戻った時に貰った、着替えの予備を後部座席で着替える事に。

胸元と腰のスカート状の比礼、そして白のハイソックス。ついでに新しい比礼も貰ってきた。今着ている比礼がボロボロ、それを見かねてか　　もっとも、それは黒人くんがあのだ硝子細工みたいな刀で斬り刻んだからなんだけど　　黒人くんはグローブボックスから新たに取り出したボデिताオルをくれた。

「そつだね。普通ならそこはデメリットを優先して処理していく筈だ。でもね紺女ちゃん、助けを求められない事がどれだけ辛いか

知ってるかい？」

そこはやっぱり男子だからか、メンソールの聞いたヤツだった。女性向けのヤツよりはあたしは好きだから、手早く腕や胴やと身体中を拭き回していく。そして着替え完了。

その間も車は進んでいて、今はあたしもあまり知らない住宅街にやっ来ていた。

「……………なんとなくは。つまり、今のあたしを言いたいんだよね」

「遠からず近からず。でも合ってる事に違いはない……………そうだね、じゃあ例え話をしようか。」

ある町に、二人の少年がいました。少年達は大変仲の良い、地元でも有名なコンビでした。

仲の良い二人は『二人なら何でも出来る』と心から信じて止まなかったのです。

だから二人は、イジメをしていた上級生にケンカを売って、見事にそれを成敗しました。

当然、二人は両親と先生に怒られました。同時に褒められもしました。『正しい事をした、良くやった』と。二人が通う学校ではイジメ問題が非常に大きく、どの学年でも年間イジメの報告が絶えない学校でした。その一端を成敗した、その事に二人は心底感激し、以来二人は“絶対に嘘は吐かない”と互いに約束を交わしました。

しかし、それは彼らが大事に巻き込まれる引き金でしかありませんでした。

上級生のイジメを成敗した、それは同級生と後輩のイジメ連中にしてみれば、由々しき事態でした。

上級生を成敗した二人は、次は自分達を成敗しに来るのではと。故に、同級生と後輩は手を組みました。そして成敗された上級生もやられて黙ったままという訳ではなく、リベンジという名の復讐に燃えていました。

そしてある日、事件は起こってしまいました。放課後に二人が別々に別れた後に、イジメ連中は集団で二人を“シメ”にかかったのです。ですが連中には予想外の事が一つだけありました。それは片割れが、実は格闘技の達人だったという事を知らなかったのです。

連中はイジメに来た筈が、逆にシメられた。そしてその場で土下座を強要され、今後反抗及びイジメ行為の一切をしないと契約を結ばされました。これで一件落着、とはいきません。

少年は相方のいる場所へ全速力で駆け出しました。

二人が別れてからまだ五分と経たずの襲撃、ならば距離はそんなに離れてはいない筈だ。

少年は肺が悲鳴を上げている事など何のその、さらに脚を早めました。そして見つけた、辿り着いた。路地裏にあたる場所にて、相方がバットで殴られているのが見えました。小学生ながら、中々ハイなイジメだったのでしよう。

まだ見つからない少年は相方を助けようと駆け出しました。しかし、相方はそれを視線で御します。

『来るな、これは俺の勝負だ。まだ負けてない』
相方の鋭い目はそう語っています。

だが誰が見ても勝敗は明らかだ。だが勝ち負けじゃない、気位の問題なのだ。少年は理解していた。二人は仲が良い、だからお互いの言いたい事がよく分かる。少年が自分を助けたがっているのは分かってても、相方はそれを善しとはしませんでした。いくら殴られても、蹴られても。相方は反撃のチャンスを探っていました。しかしそれは無惨に終わる。金属バットが、相方の右足に振り下ろされました。ポキッという、嫌な音が聞こえました。そしてそれがスイッチでした。

少年はとうとうキレて、イジメ連中二十人以上を本気で叩きのめした。

それはもう、鼻が折れたり頬骨が陥没したり、四肢が変な方向向いたり、かなり危ういレベルで。

辺りは連中の鼻やら口やらから飛び散った血糊がこびりついていて、凄惨な状況だったと発見者は言います。少年は相方を抱き抱え、病院に向かいました。すぐに入院確定、少年は相方が痛みで気絶している事を心底感謝しました。

これで相方に咎められずに済むな、と。

以来少年は相方を避け続けました。クラスが違うのが幸いか、学校でも出会う機会はありません。そんな風に、二人の小学生時代は過ぎていきます。ですが、少年は相方に未だに一つ、聞きたい事がありました。

なんであの時、自分に助けを求めてくれなかったのかと。自分達は“嘘は吐かない”と約束したんじゃないのかと。何故大丈夫なんて嘘を吐いたのかと。少年は今でもその答えを知りません」

……異常にリアリティのある例え話だった。

聞き入っていたから気付かなかったけど、車は何処かの脇道で停車していた。

人通り話し終えると、黒人くんは外の自販機で爽健 茶を二本、あたしと黒人くんの分を買ってきてくれた。それを適当に口に含むと、黒人くんは更に話を続けました。

「鈿女ちゃん、もし君が少年の立場なら。君はどうする？ 相方を助けるか、相方の気位を取るか」

「あたしは………助ける。それ以上傷つくよりはずっといい」

「でもね、そうすると後に『なんで助けてと言わなかったんだ』と考えるんだよ。言ってくればいくらでも助けたのに、ってね。この話のオチは“お互いの矛盾”ってトコなんだけど………ゴメンね、変な話しちゃって」

なんだか申し訳無さそうんだけどそれはあたしがしたい表情だ。これからあたしは“助けてもらう”ってのに、一方的に助けてもらってばかりだ。何かお礼がしたい。

けど黒人くんはそのまま車を出ると、少し先の一軒の豪邸に入って行きました。つい釣られて追いかけてきたけど、勝手に入るのはアウトだと門の前で踏み留まる事に。それから出てくるのに、五分ほど。

手にはトランクケース、それとなんだか黒い布を持っていた。ウインクであたしに合図すると、あたし達は足早に車に乗り込み再び何処かへと走り出した。

「さ、とりあえずは東方面かな。 鈿女ちゃん、葦牙ちゃんの病院つて何処？」

「氷我財閥系列の、医大なんだけど……………場所分かる？」

「それだけわかれば。 帝都の地図は目ぼしい場所は全部覚えてるから」

なんちゅー記憶力してんのよこの人。 頭の中はコンピュータか何か？でもって今気付いたけど彼、地味に着替えてるんだよね。 買い物袋も持ってってたし。

黒のシャツに黒のパンツに黒のブーツ、グローブにはトランクケース。 それとあの黒い布、アレって実はコートだったんだ。 運転しながら、黒人くんは手早く慣れた感じでコートを着ていく。

「鈿女ちゃん、車運転出来る？」

「えっ？ まあ、適当には……………流石に黒人くんみたい
に上手くはないけどさ」

「アクセルとハンドルが切れれば問題ないよ。 じゃ、作戦だけど

」

そうして黒人くん主催。

あたしと千穂の為に、彼の救出作戦が始まった。

第十九話 闘い奪うは、ただ彼女の為に（前書き）

作者の好きな漫画家

大暮維人（OH - GREAT）

イメージしづらかったらゴメンだぜ……………（汗）

第十九話 闘い奪うは、ただ彼女の為に

六月は末。早めに梅雨が明けた、ほんのり涼しい深夜の事である。場所は東方面、氷我財閥系列の医大病院。広大な敷地と優秀な医療スタッフ。

現在はM・B・I.に出し抜かれているが、それ以前は世界的な権威を持つ名の知れた病院でもあった。そんな病院の周辺には、特異な衣服の女性が多数巡回をしていた。別に彼女達はSPではない。とある男の命で此処を警備しているに過ぎないのだ。正確には、この病院のとある一室の少女を。

そこからさらに距離の空いた、東方面最大のビル。これもまた氷我財閥系列のモノだ。

その最上階、社長室。そこに主犯格はいた。今は書類の処理を済ませ、コーヒータムである。

「ふう……………やはり、彼女は裏切ったか」

「はい。見張りに出していたセキレイから連絡で、No.10と白羽黒人はM・B・I・本社に向いた模様。おそらく御中広人に直談判しに行ったものと思われます」

「となると……………やむを得ないな。柿崎、No.10の葦牙の警備にセキレイを二羽追加しておいてくれ。あとデータバンクのカルテも此方に移して削除しろ。おそらく来るぞ 今日明日にもな」

「畏まりました。早速連絡を取ります」

柿崎は部屋を後にし、医大病院に連絡を取りに行った。

そして氷我は自分のパソコンのキーを叩き、とある画像を拡大する。それは先日、東方面に買い物に来た際の黒人達の画像だった。黒人を中心に、四羽のセキレイ。彼は白羽黒人という人間について、並々ならぬ調査を行っていた。当初それは彼が“御中広人と何らかのラインを持つ”と予想しての調査でしかなかった。

だが現在は全く違う理由がある。それはラインなんてモノではない、もっと巨大な

そう、鵜鴎計画全体を動かしかねないほどの、巨大な問題だった。故に、彼は白羽黒人については徹底

して調査を進めているのである。

「まさか、彼があのおの御中とそんな関係だったとは……………いや全く。世に“偶然”と言っ言葉はあれど、真に存在したためし無し」
全く以てそうだな。利用価値は十分にある、今後は彼を利用して」

「氷我様ツツツ!!!!!!」

氷我の秘書・柿崎が物々しい表情で部屋に戻って来た。
手にはよほど慌てていたのだろう、携帯を握りしめたままだ。そして柿崎は口を開き、驚きの発言。

「No.10の葦牙が

連れ去られましたツツツ!

!!!!!!」

「……………なん、だと

？」

そうして、話は今から十分前に遡る

「なるほど、あの病室か……………確かに厄介ではあるね」

彼女の病室はそれなりに高い階にある。まずは地上入り口付近に三人。そして周囲に三人。

屋上に四人。中にはさらにいる事だろう。しかし病院だ、それほど大きな騒ぎは起こせない。

ならどうするか　　簡単だ。忍び込めばいい。優しいな、道がいくらでもあるじゃないか。警備も中々に“ずぼら”だし、これほど容易いとは思わなんだ。こんな発言から分かるだろうが、僕はもう忍び込んでいる。

語りながら確認しながら、しかし身体は止める事なく、中にあつという間に侵入。

「（母さんに隠密技術習つといて良かったよ。まさかこの歳で侵入とかやるなんて思わなかったけど）」

うちの母親は、とにかく人を騙するのが得意だった。息子も旦那も、

家族も平然と騙すのだ。

だが基本的にはいい人で、僕があれこれ教えて欲しいと頼めばあれこれ教えてくれる、優しい人。

M・B・I・所属という仕事の関係上、命を狙われた事も多々あったらしく、自身を守る術だけは徹底して鍛え抜いていたそうだ。隠密技術もその一環、『忍べる』という事は『見つからない』、人から逃げる事を得意とする。元々武術も得意なんだけど、母さんはこっちの方が好きだったらしい。

曰く

『ボンドみたいでカッコいいじゃない』。

今回は僕が白羽黒人であると気付かれない為に、わざわざ正体を隠して隠密に動いている。だから今回だけは虚刀流も封印する。並の人間ならともかく、セキレイ相手となれば動きを覚えられる可能性があるからだ。その為に、今日はわざわざ家にしまつてあつた、変装用の衣装と短刀を持ち出した訳で。なにはともあれ経験は生きるモノだね……………母さん、ありがとう愛してるよ。

さて、とりあえずは千穂ちゃんのいる階に来た。彼女の部屋は目の前なのだが

いる。

ドアの前に二人。知らないセキレイが二羽。他の階の巡回は無かったが、あの部屋は別らしい。

単純に千穂ちゃんを守るというのもあるんだろうけど、千穂ちゃんが『誰かに連れ去られる』事も考えてるようでもある。なるほど、氷我泉……………優秀だな。それを考えつくとは、中々に平和ボケはしていないらしい。

しかし深夜で、しかも病院だ。あまり騒いでは患者に迷惑だし、病気に障る。だったら……………

x

x

カ
ン
ッ

カ
ッ
カ
ラ
ッ

カ
ラ
カ
ラ
カ
ラ
カ
ラ

.....

「見てくるわ」

警備のセキレイの一羽、No.35・安曇野^{あずみの}は様子を見に行った。千穂がいる病棟は中心に空洞のある四角形型に出来ている。正面入り口とは正反対、裏側にあるその一辺の真ん中の部屋が彼女の病室。そこから左右には長い廊下が延びている。安曇野は音のした方向、右側の廊下へと歩を進める。音は左の角の向こう側から聞こえた、安曇野は得物であるショールを構え、素早く角を曲がる。だが其処には空き缶が一つ転がっているだけで、人の影も形も無かった。

「気のせい.....か。全く、ゴミはゴミ箱に捨てる」

落ちていた空き缶を拾おうと手を伸ばす。この時、彼女は完璧に警戒を怠っていた。

深夜の病院というのは、“其処にいる”というだけでかなりの緊張感を要するモノだ。

だから彼女は一瞬とはいえ、安心してしまった。そして脱力し、空き缶に手を伸ばす。それが、彼女の敗因だった。空
き缶に触れた瞬間、キュツ！ という“何かの擦れる音”が聞こえた。遠くはない、そう、それは耳元で聞こえた。

ナニがいる。だがもう遅い。次の瞬間安曇野の首には何かが強烈に巻き付いていた。

「が、ッ　　ワイ、ヤー……………ツツツ！！！！？？？」

声が出ない。安曇野は引つ張られる方向へ、視線は自ずと天井へと向いてしまう。

そして安曇野は見た
天井に張り付く“黒”の中に
一点浮かぶ、笑う白い仮面を。

意識はそこで途絶えた。だが死んではいなかった。幸い、仮面は彼

女を殺そうとはしなかった。

ワイヤーから腰に付けた発電装置を介し、人間なら即死する電力を一瞬で放電して気絶させたのだ。

そして扉の前のセキレイ、No.45・羽曳野^{はひの}は丁度その死角にいた。安曇野は音もなく気絶させられ、あまりに戻るのが遅いので羽曳野も様子を見に後を追う。そして今度は倒れている安曇野を起こそうとして

以下同様の手順である。

「（セキレイってひょっとしてバカばつかなのかな……………）
……………」

×

×

「（堂々とお邪魔しますよ……………）……………あー、寝てる寝てる）」

ベッドの上には、なんとも病弱そうな少女が寝ていた。今にも死にそうに、その身体は細い。

ドアは極力静かに閉めたつもりなんだけど、やっぱり深夜に物音は

まずかったか。起こしてしまった。

「……………どちら様？」

「紺女ちゃんの友達、なんだけど……………今日は用事があったきたんだ」

「うずめちゃんの……………？」

「今君の病気を治そうとある人が動いている。今から君を其処に連れていくんだけど、いいかな？」

「うずめちゃんは？」

「外で待ってる。時間が無い、いいかな？」

「はい」

彼女は一瞬の迷いもなくyesと答えた。肝が据わってるのか、ただ単に寝ぼけてるのか。

深夜は身体が冷える、白い寝間着が目立たないように僕の黒コートを防寒も兼ねて着てもらった。

で、ここからが本題だ。如何にして病院の外、M・B・Iへ彼女を連れていくか。一人ならいくらでも忍び込めるが、外へ人間一人抱えて出るとなれば別だ。だが考えてはある。千穂ちゃんを木陰に隠し、今度は堂々と正面に姿を晒す。

「なんだ、貴様は？」

正面玄関を警備していたセキレイの一羽が問いかけてくる。
そして今更だが………氷我という男は南の御子上と同様に複数のセキレイを所有しているようだ。

深夜だからか、その小さな騒ぎすらも聞きつけて、各所を警備していたセキレイ達が続々と玄関に集まる。総数は十羽といったところか、しかし焦る事は無かった。もう忍ぶ必要がないから。

「離れて、コイツたぶん………」

「氷我様の言っていた『セキレイ殺し』、か………気をつける」

「なんでもいいからちやっちやと殺っちゃおうよ。十羽がかりなら一瞬だつての」

全員が武器持ちだった　　つつか、武器持ちがこんだけ並んだら結構壯観だよな。

デュアルランス、モーニングスター、ブレード、シュウシャベリン、
双頭槍、鉄球杖、剣靴、騎馬槍、トマホーク両手斧、なぎなた薙刀、両手鎖鎌、ボウガン、青龍刀、あまつさえ一人は西洋鎧と来た。なんだっけ、鎧専用の格闘術つてのがあったっけか。

「しかしこう武器持ちばかりだと………ねえ」

「かかれッ！」

ダッツツ！！！！！！ と、全員が僕を目掛けて得物を構えて駆け出す。

普通のセキレイなら、こんな状況ならまず一目散に逃げる筈だ。数はそのまま戦力であるとも言おう。

けどさ、相手は皆武器持ちなんだよね。でもって昔っから対武器戦闘の訓練を積んでたんだよねコレが。

理由を聞かれたら『時代の風潮』だ。銃や化学兵器が流行してるこんな時代に、わざわざ肉弾戦だけで闘うヤツが何処にいるよ、いな。いってフツ。だから僕は鍛練で何より優先したのは、対武器戦闘だった。

短刀、直刀、長刀、曲刀、銃剣、重剣、西洋剣、その他 e t c。剣だけでこれだけの種類があるんだ、対武器戦闘は確実に無駄にはならないと信じていた。でも翌々（よくよく）考えたら僕って平成っ子だからさあ、こんな風に武器を持った相手と闘うなんて有り得ないって思ってたんだよね。

戦国でもあるまいし、そんな必要あるのかって考えた事もあった。けど、意味はあった。

バギイイイイイイイイインツツツ！！！！！！と、一合目。迫り来る両手斧と青龍刀を拳で粉々に砕いた。

「「なツツツ！！！！？？？」」

まずは二人を殴って吹っ飛ばす　　生憎、僕は武器を使う相手に負ける気がしないんだよ。　　そもそも虚刀流でなくとも、武術の大半は『そういう様に』出来ている。弱者が強者に立ち向かうための、弱い者が強い者から身を守る為の術、それが武術の本来のあるべき姿。

空手は世界的な格闘技だが、本来は“侍相手に闘う事を前提に”作られた武術。

故にその型や技には『刀を相手にした』受け技が今も残っている、日本が世界に誇る武術だ。

中国ならば珍しいが、心意六合拳というのものもある。武器術を多く取り入れた武術なんだが、それは逆を言えば『武器への対処法』を心得た、“対武器戦闘のスペシャリスト”であるとも言つ。

「ならこれはどうだ!？」

ボウガンの矢が放たれる。回転弾倉式の、なんとも効率性を重視したいボウガンだ。
しかし、使うのが人間なら厄介だが、セキレイが使うのならば僕の敵じゃない。

解説をしよう。セキレイの筋力は基本的に人間の数倍はある。結ちゃんも拳系だからアレだけど、焰君も鈍女ちゃんも等しく人並み以上の力は持っているものだ。

「なんで、当たらな　　ッ……………!?!」

だから、そんな両腕でボウガンを支えたら『射った反動で射線軸がズれる』訳がない。

つまり矢は文字通り、この距離でなら直線で飛んでくる。で、相手は図体のデカイボウガン。その照準が何処に付けられているのかわかなくて、正面から見れば丸分りである。なら身体の動きを最小限に、しかし脚は素早く動かし。一気に間合いを積めていく。拳法における縮地しゅくちという歩法だ。

「じんのッッッ!……………!」

「疾ッッッ!……………!」

ゴシャアッッッ!……………!　と、ボウガンを正面からの掌底で粉々に叩き潰す。

丁度矢が放たれる瞬間だったのか、出かけた矢はそのまま逆行してセキレイの少女の額に当たった。脳を揺すられてボウガンのセキレイはグラリと気絶し、僕はそのまま次の相手へと意識を集中する。

今度は槍のセキレイ。双頭槍だけでは分かりにくいだろうが、とにかく刃が普通よりも大きい。先端に付けられた刃は、文字で言えば中央を貫通した『H』の形状である。突く事よりも斬り払う事を主に置いていた槍だ。

分かる人は『冒険王ビート』の“バーニングランス”を連想してはくれまいか。彼女はそれを捨二無に突いてくる。対し僕は身体を半身反らし、摺り足で回避する。

「コイツ……………ッ！」

掠りもしない。そんな見え見えの攻撃が当たる訳がない。

人もセキレイも同じだ。攻撃の際には自然と視線が『狙い』に集中してしまう。視線を合わせしまえば、彼女が何処を狙っているのかは文字通り一目瞭然。そして連撃をすり抜けるように、槍が突くと同時に前に滑るように踏み出す。

「しまっ

」

シユカンツツッ！！！！と、腰の短刀を右逆手で抜き、斬り上げるように槍の柄を切断した。

突然刃が無くなった事により重心が崩れた彼女の横合いに迫り、側頭部を握り直した短刀の柄で打つ。

倒れたセキレイ・槍と入れ替わりになるように、さらに続けて僕の背後。鉄球杖モーニングスターを振りかぶった少女がそれを一直線に叩き下ろす。コンクリートを粉々に粉碎する一撃それを手を使わずの側転で後方へ回避。四散するコンクリートの破片の中、ワイヤーを伸ばして少女の首へ絡ませる。

向こうもこちらを潰した気でいたのか、難なくワイヤーは絡む。締めつけ、スイッチを押す。

「きゃあああああああッッッ！！！！???」

ベルトのスイッチを入れ、人間なら即死する電力を垂れ流す。

時間にして五秒、ワイヤーを引きほどいて次の戦いへと思考を切り替える
あと五羽。

『コイツ……………人間じゃないッ!』

「疾ッ!」

再度縮地で、次は鎖鎌のセキレイに狙いを定める。間合いは目測十m。

対して彼女は鎖鎌を柄ではなく、鎖を握って高速で振り回し始めた。甲高い風切り音が響く。

「やあああッッッ!!!!!!!!!!!!!!」

鎖鎌を水平に、正面の僕を刈り殺そうと一閃する。鎌自体が大きくある意味での『面制圧』だな。

彼女の身体に巻きつけた鎖を伸ばすと、それは5m近く伸びていた。それを屈んで回避し、前転で勢いを殺さずに前へと進む。右手に短刀を握り、一層前へ前へと加速する。

それに続く連続的な鎖鎌での面攻撃。飛び跳ね、転がり、飛び込み、距離を詰める。そして眼前。

「ちいッッッ!!!!!!!!!!!!!!」

「刃ッッッ!!!!!!!!!!!!!!」

短刀を振るうと同時。少女は自身の脚に鎖を絡ませ、盾のように正面に鎖の壁を作り出す。

僕は“あえて”そのまま短刀をぶつけ、そのまま彼女のなすがまま、彼女は短刀に両手で掴んだ鎖を絡ませる。『短刀に鎖を絡ませ、動きを封じた今なら殺れる』という狙いだろう。それを見越して空中、左右後方から騎馬槍ジャベリンと薙刀が串刺しに、そして剣靴ブレードシューズが跳び蹴りで迫る。

「くたばれええええええええええええええええッッ!!!!!!!!!!!!!!」

「やっ……………」

「ひっ」

「このまま私を見過ぐすのであれば、君達には手出ししないでいこう。どうする？」

「（コクコクッ！）」

鎖鎌の少女は有無を言わずに僕を開放し、そのまま僕は背を向けて茂みに隠れている千穂ちゃんの回収へと向かう。だが一人だけ返事をしていないのがいるのもわかつている。

鎖鎌のセキレイは戦意喪失、となれば残っているのは鎧のセキレイ。しっかりとした全身装甲、しかし無駄な装飾などは一切なく、彼女の体にフィットする形で作られたそれは軽量ながらも十分な防御力を搭載した現代的な鎧と言える。

「ふっ……………はあああああああッッッ！！！！」

鼻で笑って、そのまま声を上げて突撃。肩を突き出した前屈み、体当たりでもするつもりだろうか。

『賊刀・鎧』みたく頑丈で隙間無く、肩に攻撃用の螺山（下）があるわけでもあるまいし、恐れる事はない。

ちよっと手加減しようかと『虚刀流吉の構え・鈴蘭（すずらん）』の基（もと）とされる、

空手の構え『天地魔闘の構え』を取る。大体似たような構えだから、想像するに難はないよね。で、結果は

「流形気功鍛針功

真伝

「は？」

ギョツ！ と眼を見開く。まるでイヤなモノに出会したかのような、そんな声。

だが軽いとはいえ、それなりに重さを抱えた鎧だ。もはや自身を踏み止める事は出来なかった。

説明の感覚的には虚刀流『肆の奥義・柳緑花紅』が最適だろう。

だが鍛練も無し、ぶつつけ本番でもある。体内で発した気功を全て拳に注ぎ、同じ発勁である柳緑花紅を放つ感覚で撃ち出す。形は龍をイメージ、身体を渦巻く龍が氣という名の咆哮を上げる。全身を駆け巡る氣は螺旋を描き、拳へと辿り着く

我王双龍炎烈掌

「っていやなにそれ」

叫ぶ時間も無く、鎧を木っ端微塵に粉碎されたセキレイは地面に倒れて気絶した。

いやあ、我ながら神がかった技であった……………最早この身は人にあらず、二次元である。

さて、ビビって腰を抜かしてるヤツは無視して
茂

みの中にいる千穂ちゃんを迎えに行くと、あれだけドンパチやってたのに、これまた随分ぐっすりと眠っていらっしやうた。そんな彼女を抱き抱え、走り出す。行き先はM・B・I・本社裏搬送口、高美さんのいる所へ

そして舞台は十分後の氷我のビルへと戻る。表情こそ冷やかだが、彼は確実に焦っていた。

優秀な手駒であるNo.10を失った事、人質であるその葦牙を失った事、そして明らかな自身のセキレイ達の損失。これを総計するまでもなく、氷我は圧倒的な被害を受けていた。

「氷我様。一つ追加のご報告、いえ、訂正が……………」

「……………なんだ、これ以上何かあるのか」

「今回氷我様のセキレイは ただの一羽も機能停止していません」

「なに……………？」

警備に出していたセキレイ、計十二羽。それら全員が武器を破壊されるかそれなりの傷を負っているものの、誰一人として機能停止はしていない。幸いなのか、ただの狙い通りなのは分からないが、氷我の損失はこれでチャラに近くなった。

「これは……………やはり『セキレイ殺し』の仕業か？」

「それが……………違うようで。これは無傷だった個体から得られた情報です。」

侵入者は『黒衣に白の仮面。30cmの短刀と鋼鉄製ワイヤーを武器とした、空手と気功の使い手』との事です。噂のセキレイ殺しは我流の武術を使う筈ですから、おそらく他人かと……………」

「それはつまり 誰かのセキレイが変装して襲撃を試みたという事か？」

「可能性は他にもありますが、それが最有力かと思われず。そして最も留意すべきは そのセキレイは、“たった一

羽で”十羽のセキレイと真っ向から渡り合えるという事です」

そんな個体はどれほどいるのだろうか。南か、西か、それとも噂の北か。だがいずれにせよ、氷我にとってはそれらは全て敵でしかない。いずれは闘う、彼にとってはそれだけでしかなかったのだった。

「（駒が必要だな。手順を繰り上げるうえに少々手荒にはなるが仕方ない）

………柿崎、セキレイを集める。これから少し出掛けるぞ」

カタカタとキーを叩くと、ディスプレイには一組のカップル、もといセキレイと葦牙が表示された。黒髪ショートカットの少女に、銀髪の少年セキレイ。先日より氷我が考えていた、対M・B・Iの切札になりうる存在。

「彼らを

此処しようたいに誘拐する」

第二十話 再びの語り

「あー……………遅いなあ」

昼頃にさ、黒人君に『車運転できる？』って聞かれたじゃん？
アレの意味って『鈿女ちゃんレンタカー返してきて』だったんだよねえ。

わざわざ私服に着替えて、わざわざ車走らせて。わざわざ歩いて帰ってきましたよ、M・B・Iへ。

その裏搬送口にて、黒人君が千穂を連れてくるのを待ってるんだけど……………時刻は深夜三時。

千穂の事をずっと待ってるんだけど、流石に深夜の三時間はきつい……………コンビニで買ってきたコーヒーとブラックガムが生命線と化している現在のあたし。

昼間の空き時間、あたしと黒人君はファミレスで時間を潰しがてら、

ずっと喋っていたりした。好きな食べ物とか、どんな服が好きとか、黒人君の趣味のアニメで何があたし向きだとか、なんか友達みたいな話をしていた。そう、あたしって今思えば真つ当な友達いないんだよね。

結ちゃん達とかは友達だけどセキレイとしては敵同士だし、佐橋ちやんは友達っていうか同居人だし、松や焰や美哉は家族に近いし。世間でいう『普通の友達』がいないんだ。その点じゃ黒人君はあたしにとっては初めての『普通の友達』になるのかもしれない。

なんだっけ、黒人君のオススメのアニメ、えーっと………“僕は友達が少ない”だっけ。

友達を増やしたいなら、このアニメを見ればいいんだって。よく分かんないけど、今度借りてみよう。

「どうだ、まだかかりそうか？」

M・B・I・セキレイ 鵜飼計画主任、さほし たかみ 佐橋高美。

千穂の治療を担当してくれる事になった、科学者兼医者の人。リラックス中だったのかジーンズにTシャツで、寝癖がついてる。流石に四六時中起きていると治療に差し支えるとの事で、仮眠室で寝ていたらしい。

「分かんない………此処から病院は距離あるから、人間が人間一人抱えてなら二時間かかるかな。警備のセキレイとかもいるだろうか。慎重にやって二時間、たぶんあともう一時間くらいだと思う」

「そうか……………なら私は、もう少し寝させてもらおうとしよう」

「……………でも先生もよく助けしてくれる気になったよね。あたしがお尋ね者なの、知ってるでしょ？」

「フツ、歳を取ると敵だの味方だのってのは薄れてくるものさ。あんまり知らないけど、善意で助きたいヤツ」ってくらいにしか私は考えてないよ、だから気にしない事ね。

それと、私は中の警備室にいるから用があるならそこにおいで。わざわざ登り降りするのも面倒だ」

……………カツケエ、これが大人の女ってヤツなのかな。あたしには無理かも。

そう吐き捨てて（なのかな？）高美さんは中へ戻っていった。あたしは新たなブラックガムを口にする。

刺激的な味が舌を刺激し、また軽く眠気が去っていく。ふと頭上を見上げると、なんとも綺麗で神秘的な満月だった。あたしと千穂が出会った緑溢れる昼間の庭とは違う、真っ暗な闇夜に金色の光。

初夏の蒸し暑さを肌身を感じる、そんな夜
月の中

から誰かが飛び出てくる。

いいや違う、誰かがあたしの視線で月と同じ高さから落ちてきたんだ。こっちに向かって。

そう
紛れもない。二人が帰って来たのだ。

「千穂

.....！」

ふわりと。なんとも軽い着地で黒人君は戻ってきた。人間一人、千穂を抱えて。

だが人間抱えて跳んできたにしては随分動きが軽かったが何故だろう。とは今更問わない。

彼に不可能は無いのだと、あたしは本能で理解した。セキレイでもそれなりに強い自信のあるあたしに一方的に有利に闘って、今夜は十羽近いセキレイをはね除けて彼は帰還してくれた.....それが、何よりの証拠で絶対の証明になっていた。

「うずめ.....ちゃん？」

「千穂！」

「うずめちゃん.....うずめちゃんきゃッツッ！！！！？？？」

「千穂ツツッ！！！！！！！」

急にグラリと、黒人君の身体が傾いたのだ。彼に抱き抱えられていた千穂は、そのまま正面に投げ出されるようにその華奢な身体を宙に浮かせる。

あたしは間一髪で千穂をキャッチし、逆にあたしがお姫様だっこをするハメになっていた。

そして倒れた本人は息を荒げトに前のめりに倒れていた。

そのままコンクリー

「ちよつ、黒人君!？」

「だ、大丈夫ですか？」

「あ、あー……………っは、っはあ……………はあ、はあ　　ッ
ハ……………ギリ、はあ……………かな」

息も絶え絶え、昏間持ち出していた真つ黒な服とその顔を覆う白の仮面。

あたしと違つて黒人君は正体を隠すのには余念がないようだった。とりあえず苦しそうなので服を脱がせる。そして仮面を外すと

顔中に尋常じゃない量の汗を掻いていた。ひとまず深呼吸、息を整えると黒人君は何があつたかを話し始めた。

「病院にいた警備のセキレイ、全員で十二羽なだけどさ……………とりあえずソイツら倒して帰つてた訳。でその道中にさ、いきなり追つ手が来たんだよ、新たに五羽も。

闘つても良かったんだけど、流石に千穂ちゃん抱えてつてのは無茶が過ぎるから、全速力かつ全力で逃げてきたんだ……………全く、一時間の道程が二時間に伸びちゃったよ」

「(つつか十二羽も倒して五羽から逃げきるってどんな体力してんの……………)」

やはり彼は普通じゃない、あたし達セキレイにも並ぶ珍種の人間だ。ひよつとしてセキレイなの?　とも考えるが、セキレイがセキレイ

を羽化させられない事は知ってる。

なんか遺伝子的なレベルでの無理な話で、別にキスしたら死ぬとか
そう訳じゃないが絶対に羽化は不可能だそうだ。あたし達の力の源、
鵺鷓セキレイ基幹きかん自体がセキレイに対して反応しないらしく、またあたし達
が葦牙を見つつけられるのもこの鵺鷓基幹のお陰。

セキレイがセキレイたり得るのはこの鵺鷓基幹があつてこそ。だが
もし似たようなモノがあつて、それが黒人君の力の源であるとした
ら……………んにゃ、そんな訳がない。鵺鷓基幹以上のエネ
ルギーを持つてて、かつ人間に耐えられる代物なんてある筈ないよ
ね。

「ってこんな事してる場合じゃないや。ちょっと待つててね千穂、
お医者さん呼んで来るから！」

x

x

「成る程な、病状は分かった。鈿女、あとは我々に任せろ。この程

度ならすぐに治してやる」

氷我の病院で治らないとされた病気に対して『この程度』
やはりM・B・Iは格が違う。

時刻はもう早朝四時を指していて、高美さんは医療スタッフ数名を引き連れて奥に籠った。千穂はキャリアに乗せられて同伴、『治つたら連絡するね』と一言言って二人は別れた。そして今あたしと黒人君は

「いやあお見事お見事！ 見事な活人拳術絵巻だったよ黒人君！
ハッハッハ！」

「そりやどーも」

最上階に位置する社長室、そのソファでテーブルを挟んで社長と向かい合っていた。

差し出された飲み物であったしはオレンジジュースを、黒人君はミネラルウォーターを飲んでいる。

しかしこの社長、随分とご機嫌だった。普段からテンション高いのは知ってるけど、今日はまた一段と機嫌が良い。何か悪巧みを成功させた子供みたいな、嫌味つたらしい笑い声である。

「で、実際千穂ちゃんの治療期間はどのくらいなんだい？」

「長期間の入院で減退した体力や筋肉、その後の様子見で半月か一ヶ月程度だ。ま、我がM・B・Iにかかればこの程度は朝飯前リハビリの

夜食前だよ。ああ、それとその間はNo.10・細女くん、君もお見舞いに来て構わんよ」

「うえ！？ あ、いやでも社長、あたしが何したか知ってる……………
……………んですよね？」

何故か疑問形で敬語になってしまった。らしくない言葉を口にされると、なんかむず痒いな……………しかし社長はより一層高い笑い声を上げてピツとあたしを指差す。

「今日の私はご機嫌だ、よって君の過去の一件は不問とする。今日からは堂々と日の下を歩くといい」

「……………マジで？」

「うん、マジで」

「ただ嫌がらせと憂さ晴らしが成功してご機嫌だけじゃないのか、お前は」

色々終わってか、高美さんが帰って来た。早朝四時過ぎだというのに、なんでこの人達こんなに元気なんだろう……………ってか今なんか気になる単語が

嫌がらせ？ 憂さ晴らし？

「（ギクツ！？） や、やだなあ高美くん！ M・B・I・社長、稀代の天才たるこの私が昔色々嫌がらせされた氷我財閥に対して嫌がらせが成功した程度で喜ぶだなんて、そんな大人気ない人間な訳がないじゃないか、いやホント！
どうせならビルとか病院とか経済破綻起こせばいいとか思ってる訳ないじゃないか全くいやホント！」

「「「（やっぱり中身ガキだコイツ……………）」」」

つまり、氷我への遠回しな嫌がらせの為に黒人君を差し向けたって事ね……………

千穂の事もいいように使われたって事だよね、それって。でもま……………いつか、そのくらい。

正直あたしには、今回の一件はメリット以外は何もない。一番大事な千穂を救えて、M・B・I・社長から直々に免罪符を貰って、あの氷我に一泡吹かせる事にも成功して、そして友達が出来た。

全てを引き起こしてくれた本人は、なんとも暢気のんきにミネラルボトルにストロー注してちうちうと水分を補給している。あたしがじつと彼を見ていたのに気付くと、黒人君はニコツと笑い返してくる。

「（……………ヤバい、浮気しちゃいそうかも……………ゴメン千穂、あたしダメな子だよ（涙）」

「さて、高美くんにはしばらく紺女くんの葦牙の治療に専念してもらうとして　とりあえず紺女くん、君にも一応お咎めをしておかねばならない。ゲームマスターとして、M・B・I・社長として」

「……………はい」

ゴクリと、生唾を飲み込んだ。あたしや高美さん、場の者に緊張が走る。しかし黒人君だけはこんな状況でも平然としていて、やはり只者じゃないと　ただ疲れて眠いだけかもしれないけど

思い知らされる。

そして社長は再び手袋に覆われたその指をピツとあたしに向けて

言い放つ。

「一週間葦牙とは面会禁止で、あとVIPカード使用禁止で、あと何があるかな……………あ、そうそう！　治療が終わるまで葦牙とキスも禁止！　以上！」

「軽ッッッ!!!!???」

鈿女ちゃんはとりあえず、本社の仮眠室で仮眠をとる事にしたそう
だ。

高美さんはそのまま仕事に向かい、最終的に社長室には僕と部屋の
主たる御中だけになってしまった。その御中もなんだか眠そうに欠
伸くひをしている。だが急に彼は前のめりになり、テーブルの向こうの
僕に話しかけてきた。

「どうかね、白羽黒人くん。闘う葦牙としての日常は」

「あん？」

「刺激のかね、情熱のかね、衝撃のかね、快楽のかね、爆発のかね、衝動のかね、狂のかね、劇のかね、病的のかね、慢性的のかね。君は今を
この世界を、鵲鴿計画を楽しんでいるかね？」

「……………なんとも言えない気迫があつた。いつものおちゃらけた雰囲気は何処へやら。」

しかし不敵な笑みだけは絶やさずに。彼はいつも必ず誰に対しても上から視線で接しようとする。

にしても、今を楽しんでいるか

か。それを聞かれ

ると、僕は yes と答える。家族には両親を筆頭に。魅弦みづるがいて、煌刃こうはがいて、地天じてんがいて、鶴つるがいて。友人には焰君ほむらがいて、鈿女つむぎちゃんちゃんがいて。知り合いには佐橋君さはしやその妹の紫ちゃんむらさき、彼らのセキレイ達、さらにその友人。人の輪は、無限に広がっている。

「ああ。僕は今を楽しんでいる。心底ね」

「では問いを変えようか。白羽黒人くん、君は去と今に満足しているかね？」

過

「否」

「ほう。俯きもしなければ答えに一寸の迷いすらないとは……………」

「解りきつた事を聞かないでくれよ奇人。そんな事を今更聞いて何なるんだよ」

僕は確かに今を、未来を楽しんでいる。今にも満足はしている。だが過去は別だ。あの日には、“あの頃から”全ての過去に満足した覚えなんか、一度だって無いさ。

他人から見た僕の過去が栄光に包まれた華やかな一生だったとしても。

身内から見た僕の過去が、他の人間の誰より強く雄々しく、目映く輝いていたとしても。

僕から見た自分の過去の全ては、そこらへんの道端の汚泥とさして変わらない。『過去の他人』という綺麗な硝子細工に、『僕』という汚泥を塗りたくっている。その程度の価値しかないんだよ、僕には。

魅弦達と婚くいで、うっすら思い出した僕の昔。
今から十五年ほど前の、僕が五歳の頃の記憶
ていた、僕の始まり。

忘れ

「御中」

「なにかね、黒人」

「お前はあの時、あの日の僕に
た？」

僕の身体に何をし

「何も。私は君には何もしていない。私は科学者として、一人の医者として、一人の人間として。私は“君の怪我”を治した以外には何もしてはいない……………約束しよう。なんなら此処で首を賭けても構わないが？」

「なんだよ。貴方だって即答じゃないか、人の事をどうこう言えたモンじゃない」

「似た者同士、という事だろうね。私と君は」

「よしてくれよ気色悪い。僕は僕で

貴方は貴方だ。

同じ人間はいない」

×

×

「怪我を治した以外は何もしていない、か……………」

嘘だ。あの時、眼鏡の奥の瞳は、僕を見ていた。

だがその眼は真実を語る目ではない。嘘を語る目をしていた。

だが自分の事なのに、何一つ思い出せない。十五年前、自身が大怪我を負ったのは覚えている。だが御中がそれをどうやって治したの

か、それを僕は知らない。両親も知らないのだから、知るのは御中だけになる。

「（この馬鹿げた身体秘密………いい加減知りたいたコだったんだよ）」

コンクリートを素手で破壊する人間なんて、マトモに考えたら有り得ないだろう。

なら答えは必然的に、御中が僕の身体に“何かを施した”という点に行き着く。

それに魅弦達を羽化させた時の、あの翼

セキレイ

と同じ光の翼、その謎とその正体。魅弦達を羽化させた時の、その後感じた激痛。自身の事は分かっていたつもりなのに、実際は全く以て理解していなかっただけのようだ。

外で地表から見上げたタワーは、やはり巨大だった。そして自分の謎の答えはその頂上にある。あの男が、全てを知っている、全てを握っている。ならば問わねばなるまい。

「いつかは答えて貰うぞ御中………僕がなんなのかを」

第二十一話 妄想（前書き）

なんか寝ぼけてたら、無意識に指が動いてこんな事に

おや誰か来たようだ。

第二十一話 妄想

「えーっと、ちょっと間居候いそする事になったNo.10・10・細女いとこです。
とりあえずヨロシク」

居候いそ。他人や知人、人の自宅に仮住いする者の事を指す言葉である。
その居候が、とうとう我が白羽家にもやって来た。そう、先日の一
件で知り合った細女ちゃんだ。
いつかは来るとそれなりに覚悟してはいたものの、まさか知り合っ
て二日の人間、もといセキレイを我が家に泊める事になるとは誰が
予想出来ただろうか。いいや出来る訳がない、つか出来たら怖い。

「とりあえず諸般の事情がありまして、彼女をしばらく家に匿う事
になりましたのでヨロシク」

「浮気……………ですか？（怒）」

「めっ、めめめめめめ滅相も御座いません！ セキレイ全羽との殺し合いや世界大戦を起こす覚悟はあっても、皆様を裏切つて浮気をするような勇氣なんかは一切合切粉微塵も御座いませんマスですよハイ……！」

「いや逆にそっちの方が勇氣いるんじょ」

「うずめ」

「ほひツツツ！！！！……？？？」

今度は細女ちゃんに嫉妬の矛先が向けられた。つか呼び捨てかよ仲良いなオイ。

細女ちゃんは細女ちゃんてビックリし過ぎて声裏返ってるし、態度もなんだか奇抜になっている。

「貴女に問います。決して嘘は吐かぬ様に」

「は、ハイッ！」

キラリと鈍い光を放つ魅弦の瞳。

有無を言わせぬセキレイ問答の始まりであった。

「問・杏。貴女は黒人さまと友人以上の関係は持っていない」

「い、イエス」

「問・弐。貴女は黒人さまよりも必ず自身の葦牙を優先する」

「や、ヤア」

「問・参。貴女は黒人さまに
恋愛感情は抱いては
いない」

「圧倒的イエスと言え！ 鈍女ちゃんそれだけは断固としてイエス
と言ってくれエッツッ！！！！！！！！」

「んー……………ハーフandハーフ、かな」

「黒人、さ、ま」

「く、ろ、と」

「……………クロ」

「……………南無三。さよなら黒人、俺はお前を忘れない」

一分後、ソファで裸にひん剥かれてビンタされまくった僕がいた

「うずめ、本音を言いなさい。今なら許します」

「だ、だからアンタ達から黒人君は取らないってば！　あたしの葦
牙と本妻は千穂なの！！」

「……………嘘、ない？」

「あたしはあんまり嘘は吐かない！」

「あんまりなのね……………まあいいや。ほら鶴、動かない
の」

「ん……………」

ワシャワシャーツ！　と、力強く鶴ちゃんのを頭を洗う煌刃さん。当
人はなんとも気持ち良さそうです。

浴室前に地天さんを警備に当たらせて、現在女子全員で夕方のバス
タイムをお楽しみ中であります。

「ふおお……………メロン。。。」

「へっへー、おっきいでしょ？　ほればふばふーってね」

「んぶうー……………（至福の表情）」

「ケツ、デカけりやいってモンじゃないっての。大きさ、形、感度、肌艶！ 全てが合わさってこそ真のおっぱいである！」

と黒人が言った

全くあの人は……………一度や二度では反省しないようですね。なら今度は

にしても、やはりうずめの胸は異様に成長しますね。妬ましい、妬ましいったら妬ましい。

日に日に私も成長してはいるものの、それでもまだ85……………クツ、巨乳には『巨乳になる遺伝子』でも組み込まれているのでしょうか。あるなら是非とも私に入れて下さい是非。

「にしても魅弦、アンタの葦芽ってスゴいね。セキレイ相手に全くビビらないし、メチャ強いし」

「ええまあ、黒人さまですからね」

「あ、確かに。黒人だからビビらないのかもしれないね」

「……………クロ、闘う事、楽しんでる。也^{なり}」

「おつ、久々の『也』いただきました。お返しに背中をゴシゴシだー！」

「ふおお……………気持ち良い。也」

だが改めて振り返っても、今まで黒人さまが誰かに勝負を挑まれて逃げたところは見た事がない。

いや、逃げようという気がないだけなのかもしれない。あの人は今を、一瞬を楽しみたがるから。

快樂主義者、とは言えないが、楽しめるモノは徹底して楽しみ尽くす。それが白羽黒人の主義だと私は考える。目の前にゲームがあればすぐにプレイするし、美味しそうなモノがあるなら食べて自分で作る。

なにはともあれ、大抵は自分を中心に考えるのが白羽黒人なのだ。その辺りは、烏羽ししゅうと似ているのかもしれないですね。昔はそうでしたが、今は
よく分らない。

「あ。ねえねえ、ちなみに気になってただけだよ」

「なんですか、しょうもない事を聞いたら怒りますからね」

「黒人君ってさ。この中で誰が一番好きなの？」

『黒人君ってさ。この中で誰が一番好きなの？』

「ぶツツツ!!!????」

なっ、ナニ言い出すんだあの新規居候は！^{ほつとで} それは絶対禁句だろうが!?

我が家の禁止事項、全体的にまとめるとそれは『独占的な競争意欲の刺激』である。

“アレは自分だけのモノ” だの “ナニナニだから自分一番” だのと
言った事はココでは禁止されている。

これは黒人が決めた事ではなく、黒人の両親が昔から教えていた事であるという。曰く『独り善がりの強さは誰より弱い』と、若千七歳のガキに教え込んでいたらしい。英才教育も目じやないスパルタである。

無論黒人はそれを俺達にも教え込んでいる。抜け駆けや独り占めはダメだぞ、と。

だが今のはアウトだ。完全に細女のミスだ、これで我が白羽家のバランスは崩れてしまった。

『皆は平等』という皆の価値観が崩れ去る音が心で聞こえる……………

……そしてドアの中からバタバタという物音。慌てて浴室のドアから身を退かす。すると

「いいですか、唇を一番に奪った者が勝者です」

「抜け駆け以外はなんでもアリ、戦闘もアリ」

「……………ルール無用。也」

黒のストレート、ウェーブがかかったブラウンのロング、栗色のセミロング。

どれも少し濡れている。だが三人はそんな事は気にもせず、タオル一枚でリビングへと向かった。

「あちゃー……………なんかマズイ事しちゃった？」

「無駄に競争意欲刺激すんじゃないよ、まったく……………」

「ていうか、今までこの話題が出なかった事にあたしはビックリしたり」

「お前らバスタオルで出歩くなよ、恥じらいがねえのかよ」

「いやあ、見られて恥ずかしいモノなんて持ってないし」

「うちはまだマトモだったか……………」

「ハッ、殺気!?!」

と思ったが、ただの気のせい

「あ、脚があ……………」

「しっ、痺れるウ……………」

「……………助け、て……………也」

では無かったようです。いや、「無い」とは言い
きれないかな。

眼前にはフローリングに正座する三人娘。ヒロインズ 余程長時間座っていたの

か、苦悶の声を上げている。

三人とも何故か“不埒ふらちな”バスタオル姿で、ソファアに座する僕は更に不埒なトランクス一丁。そういえばと、鈿女ちゃんの失言により襲われて脱がされたと数十分前を思い出す
おの
れおっぱいめ。

「で、君らは何を理由に正座してるのかな？」

「そ、それはですね……………」

斯々（かくかく）然々（しかじか）ダイハツなんたら

「ふうん、鈿女ちゃんがねえ。で、地天が能力で今しがたまで無理矢理正座をさせていたと」

「とっ、とりあえず正座を崩しても宜しいでしょうか……………痛くて痛くて仕方ないんです」

「うん？ んふふー……………だめ」

「なっ！ この鬼、ドS！ あたしらを助ける気は無いのか！」

「……………ほう、煌刃よ。君は僕をドSと呼ぶのか。ならば教えねばなるまい、ホンモノのドSを」

「え、いやあたしはノリで言っただけで やっ、ちょっと待て」

「ご想像にお任せします。エロいので見せられないよ！」

「うあ、ひ、あ……………うっ」

「ククク、どうした。（足の裏を）くすく擦って（指の）ワレメをこす擦っただけだ。まだまだイケるだろう？」

「も、許、ひ……………墮ち、るウ……………」

「ふんっ、いい身体をして堪え性の無いヤツめ……………なら次は鶴
お前だア」

だが鶴はいない。煌刃に構いまくってた隙に逃げられたみたいだ。
代わりに綺麗な字の置き手紙が一枚、そっと置かれていた。『

さらば。僕はしばらく旅に出る。也』ほう、

面白い。

「脚が痺れているのに、ただの子供がそう遠くに逃げられはしない
……………」

×

×

ハア……………ハア、ハア……………

「鶴よ、やアはり此処にいたか」

「ぴつつつ！！！???」

ガチャリと開けたのは、M・B・I・製・業務用ドラム型洗濯機のフタである。

中には鶴が膝を抱える形ですっぽりと収まっていて、逆に他に逃げる事を考えない隠れ方だった。

「自分が遠くに逃げたと思ったから、此処に隠れたんだろうが……
……甘アい。僕は二次元の化身、君のような子供が隠れそうな場所など一目瞭然、刹那の閃きよ」

「あ、あ……………あぁ」

「丁度いい。元から痺れているのに今度はその体勢だ、まだ痺れているんだろう?」

中から僕を見上げる鶴に対して、ニタリと下卑た笑みを浮かべる。洗濯機の中の鶴は、徐々にガタガタと震え始めている。痺れが残っているからか、時折ピクピクと身体が反応していたりもする。そんな彼女に僕は

「僕の責めに耐えられたら、キスしてやる」

ガチャリ……………ギイイイイイイイイ

「お待たせだ、魅弦ウ」

震えてはいけない……………恐れているのを悟られたら最後、
私は死ぬ。
そう腹をくくり、必死に痺れる脚を耐えながら黒人さまが眼前に来
るのをひたすらに待つ。
そして現れた 彼の腕には、なんとも言えない愉悦の表情を
浮かべる鶴ちゃんがいた。

「では魅弦、君が最後だ……………覚悟はいいね？」

「ど、どうかお許しを……………今後は二度とこの様な真似は致しま

せん。何卒お許しを……………！」

身体は動かせないから、上半身のみを動かして謝罪する。
頭を下げて、膝に手を添え、完全な服従と懇願の体勢。これ以外に
出来る事など何も無い。

「ふうむ……………よかろう、赦す」

「ッ！では！」

「だが弄る」

「ぎつつつ!!?!?!?!?!」

コツンと、爪先で私の膝を小突いた。その衝撃は、言うまでもなく私の脚に響く。

衝撃が痛み、痛みは瞬く間にあの瞬間の“言い様の無い痺れ”が身体中を駆け巡る。痛いのか気持ち良いのかも分からない中で、私は見下してくる黒人さまを見上げる。

「いい表情だ魅弦……………もっという顔を見せておくれ」

「く、黒人、さま……………何故」

「うん、何故と?」

「何故この様な、酷い、事を……………」

「そうだね」

指が動けない私の背後、足の爪先へと迫る。
黒人さまの顔は鼻先に、互いの吐息がかかりあう距離で、彼はこう
言った。

「愛してるから

それに他ならないからさ」

「ぶるおおあああああッッッ！！！???」

ドゴオッッッ！！！！！！！と、咄嗟に自分の顎を殴ってしまった
……………痛エよクソッ！
ヤバい夢を見てしまった。つい反射的に自分の目を覚ませようと、
ワリと本気で額を殴った。

……………が、あんまり変わらんみたいだ。ただ痛いだけで、現実に

はとくになにも起きてはいなかった。ただし、僕が全裸にひん剥かれていたのは事実である。今もリビングのソファアールの上で裸一貫だ。

「い、いかん……………危うく夢精してしまつたコだった。二十歳にもなつて恥ずかしいぞオイ」

時計を見る。時刻は夕飯時、またはテレビで談笑タイムである。

しかしリビングには僕だけ、なんとなく携帯を確認すると地天からメールが一通。

『アイツら全員風呂だ。逃げるなら今だぞ　ガンバ』

アイツ、いいやつだったのに……………と、過去形にしたら殺されそうだから口にしない。とりあえず服を着て、キッチンに向かう。食材は……………ああ、珍しく冷蔵庫に食材が全く無いや。

「……………逃げるついでに買い物行こう」

新規居候のデビュー初日は、なんとも言い難い　度し難い流れで始まった。

第二十二話 己とは何ぞや（前書き）

のーんびり書いてた。
たぶん内容グツチャグチャだと思う。

そしてF a t eマジヤベエ……………なんだかんだ今期N o . 1確定
だろアレ。

なによりキャスターコンビマジで狂気だったwww
アサシン先生マジ先生だったし、ギル様マジギル様だったし。イリ
ヤとウェイバーがせめてもの救いだったか……………しかしロリの後
にアレはねーよ（涙）

あとホライゾンがダークホースだったり、ベン・トーが初見殺しだ
ったり、まじこいが謎だったりと、なにかと波乱の秋である。今の
ところこの四作を中心に観てる感じ、寝る間を惜しみながら……………

……………

そんな、十月半ばの事だった。

第二十二話 己とは何ぞや

とある家族がいました。父と母と、一人の息子の三人家族です。

父と母は共働きで、ともに大手企業の重役という裕福ながらも多忙な家族でした。

誕生日に両親が揃った事は今まで一度もなく、よくて生まれた年と翌年の一歳の誕生日くらいのものだと息子は後に思い返す。だが息子はそれを咎めようとはせず、寧ろ両親を鼓舞し励ましていました。それは全て家族の為であり、自分を裕福に育てようとする親なりのちよつと変わった愛情表現なのだ、息子は何となく悟っていた。出来れば一緒にいて欲しいのだが、我が侂を言う勇気がありませんでした。

寂しくはないか、と聞かれれば寂しい。が、辛いかと聞かれればそれは違う。

息子は都内の中央に立つ大きな自宅に、一人ぼっちではなかった。

たまに遊びに来る母方の叔父が、息子の遊び相手になってくれたからだ。どんな文句も我が俣も、叔父はなんなりと叶えてくれたのを息子はよく覚えていた。金銭も、遊びの面もだ。

それだけじゃない。勉強も、遊びも、世情も、叔父は息子に教えられる事は全て教えてくれた。

息子は叔父を心底好いていた。単なる叔父と甥なんて域じゃなく、もはや父と子、兄と弟のように仲睦まじい関係であった。両親も、息子が叔父といるのを知って安心して毎日を過ごさせていた。

だが安心は、一度の事故で不安と悲哀に変わる。

「うん。あたしが氷我から渡されてた討伐対象セキレイのリスト。前にメールで送られてきた」

スチャツと開いた携帯には、見せるの前提で既に画面が用意されていた。

セキレイとその葦牙、それらが一件一件別々に送られている。写真は勿論付いている。

「どれどれ……………ほう、結構数があるね。十羽くらいか」

「たぶん邪魔なヤツを先に潰すか、服従させようとか考えてたんだろね。今写真見せた三羽は“終わった事”だけど、これは別。黒人君倒したら行く予定だったセキレイの写真」

ピピピと素早く操作。そして表示されたのは、いかにも弱そうな金髪のセキレイだった。

その葦牙も並んで写っていて、葦牙はなんと………
…そう、童顔だった。

「No.95・久能くのと葦牙の鶺鴒せいらハルカ。帝都を脱出しようとしてるペアだよ」

「脱出ウ？」

なんと、それは驚いた。まさかこの期に及んで帝都を脱け出そうと

考えるヤツがいるとは。

どうでもいいからあまり触れてはなかったが、帝都は下手な城よりずっと堅牢な城塞と化している。

つい先日移行した第二段階で、この帝都の“セキレイと葦牙に対する”警備はおよそ二倍近く強化された。だがそれは他国や他社からの攻撃に対してではなく、セキレイと葦牙の『内からの脱出に対して』である。つまりは檻の代わりなのだ、この街は。

陸は勿論の海に空、果ては宇宙まで手が延びているとかなんとか。武力に経済に政治と全般的に。

「でね。あたしも噂でしか聞いた事ないけど、M・B・Iには直属のセキレイがいて、鶺鴒計画に反対的なセキレイや葦牙を討伐するのが主目的の部隊がいるんだって。確か名前は懲罰部隊」

「懲罰部隊……………御中や魅弦から聞いた事はある」

「氷我情報だと『M・B・Iの狗』とか『紅・蒼・黒の鶺鴒』とか『殺戮部隊』とか、とにかくいろんな通称があつて、どれもよくないのばっかなんだよ。とにかくメチャクチャ強いらしくて、会ったヤツは皆殺られるって話。だから間違いなく、この二人は殺られる」

黒 その言葉に、思い当たるセキレイがいる。いや、彼女以外思いつかない。

あの日、M・B・I・本社の治療室で魅弦と会話した後。御中と一緒に現れた、あのドス黒いセキレイ。

銀灰色の長髪に、濁りきって濁りしかないような瞳、細い四肢と、

狂人的な笑み、そして長刀。

あれ以来一度として出会でくわす事のない彼女。いつでも死臭を撒き散らしていそうな彼女。殺気と狂気を振り撒き、誰も彼もを巻き込んで皆殺しにしてしまいそうな彼女。僕と殺し合いたいと言った彼女、その名は

烏羽からすば。

「僕は……………黒い鵲鴿と会っている」

「……………マジで?」

「はい、マジです」

しかし面識はたったの一度、彼女が覚えているかどうかは分かったモンじゃない。次次に会えばおよそ必ず、闘う破目になる。殺し合いだ。

「とにかく

氷我が僕の目論見もくろみ通りに動くなら……………

……………」

「目論見? なにか作戦でもあんの?」

「ある。氷我という葦牙とその一味セキレイを倒す、絶好の理由と機会がね。その為には久能ちゃんと接触する必要があるんだ……………
細女ちゃん、その久能ちゃんは今は何処どこにいるんだい?」

「確か……………北方面のご真ん中。出雲荘からは遠いけど、佐橋ち

「やん達の圈内かな」

「北か……………」

紺女ちゃん曰く『自分が北でセキレイ狩りをしていたのは、氷我が自分の負債を最低限にする為』。

しかし、北にはそれほど有力なチームがいただろうか。南には御子上、東には氷我、詳細不明の西。

思い返しても北エリアにいるのは焰君に瀬尾くん、せいぜい皆人くと紫ちゃんに　　はないか。

だって彼どう足掻いたってヘタレだし、彼のセキレイはうち二羽が非戦闘向けだ。結ちゃんと月海ちゃんが強いのは認めるが。紫ちゃんはあんまり闘いには興味なさそうだし、椎名も闘いは苦手そうだ。焰君はセキレイの守護者ガイディアンとしてある程度は名前が知れてるし、なにより自身もセキレイだから調べればすぐに分かる。瀬尾くんはあんまり闘いには興味が無さそうだが、実力は確かだ。なんせ、あの双子と婚いでるんだから。

「紺女ちゃん、西と北の有力者って誰？」

「西は確か真田さなだって男だったと思う。セキレイの持ち数は分かんないけど」

「西は分かったけど、もう一つの北は？」

「……………」

「……………北は？」

「えっ、きつ、北！？ あ、いやー……………あ、えと、それはちょっと言えないかなー。アハハ（汗）」

「……………言いなさい」

「あ、えとね？ あたし実は口止めされて」

「言いなさい」

「いやだからあたしは迂闊に喋った」

「言え。さもなければ昼・夜食と睡眠時間を嫌がらせのように削ってやる」

「ぐぬぬぬ……………」

「可愛い顔ネタは効かんよ。言わなければ おやつも抜きだ」

「ハイッ！ 北には『般若』と呼ばれてるヤバい人がいます！ 時々脅されますッッッ！……………！」

『般若』に脅されます

あ、なんか分かった気がする

る。でも言ったらなんか不幸になりそうな気がする……………やめろ、この事は意識から外すんだ僕よ。
これは恐らくだが、そのうち何かの機会に分かるだろう。それまでは知らなくてもいいだろう。

「と、適当に北の情報は手に入れた訳だが……問題は“いつ”“どれ程の数で”来るかだね」

「……………まさかとは思うけど、氷我がこのままセキレイ狩りを続けるとか思ってる？」

「思ってるよ」

会った事はないが、氷我は非常に自意識過剰なうえに、自分に多少なり酔っているナルシストだ。

自身の能力と才能、権力と名声を持ったが故か。氷我は恐らくだが、僕への挑発としてセキレイ狩りを続けるだろう。少なくとも、僕に関して何も調べていないなんて事はない筈だ。

そしてそれを止めようと、大々的に正面に僕が乗り出したところで、自身のセキレイをフル投入して一気に殲滅、とかだろうか。とりあえず一方的にはなく、『自身のセキレイに手を出された』という大義名分が欲しい筈だ。それなら鶺鴒計画に則^つって戦うことができる。

「なら、氷我はセキレイ狩りを続ける。それを逆に利用させてもらう事にしよう……………僕は知略謀略の探り合いは苦手だが、意地の張り合いは負ける気はないんだよ」

「え、なに？ 『男には、負けられない時がある』ってヤツ？」

「みたいなモンさ。さて、僕はまた技の鍛練でもするよ」

「なんだかんだ話してたらもう早朝かぁ……………ふぁぁ、ゴメンあ
たし一回寝るわ」

「そ。お話ご苦労様、しつかり寝るんだよ」

昨晚二時、ふと部屋にやって来た鈿女ちゃん。その話題は自身の悪
行についてだった。

罪滅ぼしでもあるのだろうが、なによりこれ以上氷我に好き勝手さ
せるのが癪しゃくなんだろう。

千穂ちゃんを人質に、鈿女ちゃんを利用して弱者をいたぶるような
真似を平気で行い。他人を利用するだけで、自分は影に隠れながら
常にほくそ笑んでいるようなあの男が許せない。

面識は無くとも、僕はとりあえず氷我を叩きのめしたくなってきた
トコだ。

庭に出て身体をほぐし、まずは虚刀流の技の鍛練から。
キレのある体捌き。突き、袈裟斬り、斬り上げ、一刀両断。一通り
を踏襲する。

全刀流の刀捌きを練習、あえて“薄刀・針”ではなく普通の刀です
るのがミソだ。次に先日使った風を操る『風の道』《ウイング・ロ
ード》の訓練に入る。掌で風の叩きつけるように

ん？

「？」

僕はなんで一度も練習じかっすりしてない技を使えたんだ

「柿崎、では手筈通りに頼む」

「はっ」

不快だ。不愉快極まる。あの男

白羽黒人。

病院に忍び込み、No.10の葦牙を誘拐したのは間違いなくコイツだ。それ以外考えられない。

身内にすら自分の事を話さなかったNo.10だ。おそらく戦闘中になんらかの理由で正体が判明、それをきっかけに救援を求めたんだろう。白羽黒人が我流の格闘技を使うのは調べていたからいいが、まさか武器も使えるとは
それにしてもこの報告書、メチャクチャだ。

「伸びる刀に瞬間移動、斬撃を撃ち出す、レーザー……………」
… 本当に人間の技か？」

監視に付けたセキレイですらも、白羽黒人を人間とは思えなかった
そうだ。

曰く『自分達とさして変わらないか、それ以上の化け物』
全く以て同感だ。

「大義名分……………か。まあいい、向こうが私に釣られるならそれもよし。いずれは闘うんだ、今か後かの違いしかない。なら先に潰させてもらおうか」

とりあえずエサは
個体、No.92が丁度いい。

No.10に出していた情報の

私がこの個体を狙うと踏んで調査に踏み出したところを、全羽で袋叩きにする。

元々この鵲鴉計画に正直に従ってやるつもりなど無いのだ。なら最初から一対一で勝負させる必要などない。それに、私はやられたまま引き下がるような安いプライドは持ち合わせてはいない。

だから、最低限で最高の仕返しをする。

前回敗北した十二羽全てを使い、No.10の持っていたリスト全てのセキレイを襲撃、可能ならば撃破。白羽黒人が現れたのならそちらを最優先に討伐する。厄介者は先に潰そう。

「運が良ければ、御中お抱えのセキレイも倒せるかもしれないな……

……懲罰部隊、か」

噂では最強のセキレイを集めた、対セキレイの駆逐部隊と聴く、武器も数も実力も不明の存在。

だが、どの噂でも必ず『紅』『蒼』『黒』の三色が挙げられる事から、おそらく三羽であろう。

「フツ………これが上手くいくなら、私は皮肉にも神に愛されているという事になるんだろうな」

神を疎んじる私が神に愛されている、か………滑稽だな。だがあ

の怨敵たる御中を……………M・B・I・を潰せるなら、私は神にも悪魔にも頭くぶを垂れよう。それが私なりの、この計画に対する“覚悟”というモノだ。

「白羽黒人……………悪いが、早々に退場してもらおうか」

現在、リビングのソファアにて放心&mp・思考中。
すると隣に鶴が来たが、あえて無視をする。

「……………クロ、なにしてる？ 也」

「うん？ 何をしてるかとか聞かれれば……………ぼーっとしながら考え事してる」

「……………考え事？」

ゴメン、反応しちゃった……………クソ、yesリータン
oタッチの筈なのに。
今果てしなく頭を駆け回るのは、先日の病院襲撃事件の際の事で、
つい今朝は早朝の事である。

ただの一度も鍛練をしていないのにも関わらず、僕は『風の道』を
使えた……………この事実。

自慢だが、僕は記憶力はいい方だ。一年前くらいの事なら全て覚えて
いる自信もある、禁書目録インデックスほどじゃないがね。だがここ一年前後
の記憶を洗っても、僕が『風の道』に関して鍛練をした覚えは全く
無い。

そもそも、この一年前後に『エアギア』に関しては一切触れてはい
ないのだ。コミックもアニメも、その情報についてもだ。それど
ろか、自分が使った事で“そんなのあったなあ”と思いついたくら
いなのだ。

だが意識して『風の道』を使おうとすると、何故かあまり使えない、
使えなくなる。

掌を叩きつけるように
とイメージするが、全くの無理。そ
よ風すらも起こらない。

拳圧で風は起こるが、風を意識的に起こすのは何度試しても無駄と
知る。だから次に『我王双龍炎烈掌がおうそうりゅうえんれつしょう』もとい気功の一種である『鍛たん
針功しんこう』を放とうとするも、これも失敗。『肆の奥義・柳緑花紅しりゅうりょくかこう』や
発勁はつけいの超劣化版しか出せない。

「（自身が認識していない技を何故か体得し、あまつさえ実戦に投
入……………だが僕自身には記憶は一切なく、再度使用する事は何故
か不可能……………訳が分からんよ）」

今更この二つや他の技については鍛練する気はないし、北斗関係の技は気まぐれ程度のモノだ。

つまるところ近接系サイコーである。『レベルを上げて物理で殴ればいい』もいいところだ。

虚刀流、全刀流、昔ながらで鍛練していた中国拳法、空手、柔術、合気道、ムエタイ、ボクシング、サバット、カポエラその為の武器術や格闘技などが僕の主流。『刀語』カタナカタリの忍法は優秀だから昔から“モドキ”の練習はしていた。

「鶴」

「????」

「鶴には……………僕はどう見える？」

「……………クロはクロ。也」

「ん……………ハハツ、確かにそうだ。僕は僕だね、そりゃそうだ」

僕は僕、自身はどこまで行っても自分でしかない。

我がであり己こであり……………ほくである。それが白羽黒人だ。

流派は主流は虚刀流、サブで全刀流、その他真庭忍法及び世界の格闘術。

ビジュアル系っぽい顔立ちと、肩にかかる程度の黒髪と黒い瞳、身長は187cmで72kg。体重の殆どは筋肉が占めている、細くガッチリした身体。自宅は帝都内タワー付近の大豪邸、地元じゃ有

名な豪邸。

四月に魅弦との運命的な出会いを果たし、めでたくなのか葦牙となる。

葦牙になる前に既にセキレイを一羽撃破、殺意をもつての戦闘であるため見事に機能停止。

その後M・B・I・本社内の医療施設で二日間の睡眠、目覚めた後に高美さん及び“我が敵”御中から鶺鴒計画についての講義を受け、自宅へ帰宅。我が家の前で、これは本当にめでたく魅弦を羽化させた。

五月の半ば、魅弦との初デートに臨む。とても楽しかった。

その帰宅直後、自宅前で二羽目のセキレイ・煌刃と出会う。一晚の試合ののちに和解、イチャイチャとあれこれがあつてめでたく羽化させる。我が家に足りない、家事要員の増加に胸が震えた瞬間だった。

その後の五月は末、地天と鵜に出会う。二羽同時に、その他も交えて。

地天とは腕試しと噂になっていた『セキレイ殺し』の真相を確かめるために手合わせ、隠し玉の多さで僕が勝利を納める。その後突如現れた南の御子上のセキレイ達に襲撃を受け、魅弦のサポートを受けながら地天をノリで羽化させ、三羽を撃退。その後鵜も羽化させ、合計四羽のセキレイを抱える事になった。

そうして六月の末、今に至る。

そして僕は彼女達セキレイではなく、自身に向き合わねばならない。

「クロ

「うん？」

「稽古………したい。也」

「稽古、か………よろしい。じゃあ着替えて庭に集合だ」

「ブ・ラジャー！ 也」

オチがしんちゃんってどごなのよ………まいつか。

第二十三話 正義の葦牙とセキレイ達（前書き）

なーがらーくなスランプ。まだ抜けない……………が、一応書き上げ。
文脈、内容、e t c……………優しく見てくれ。次の更新も時間かか
るんだぜ

第二十三話 正義の葦牙とセキレイ達

息子は交通事故にあった。それは自宅から少し離れた、市民公園の前での事だ。

不幸にも、居眠り運転をしていた4tトラックに真つ向から轢かれ五m以上吹き飛ばされたのだ。

無論無事ではなく、トラックを運転していたドライバーが病院に通報、すぐに救急車がやって来た。

息子は当時最大規模でもあった氷我財閥直系の病院に入院、すぐに集中治療室に送られた。

家事を担当していた家政婦の話によれば、友達と遊ぶとの事で小一時間程前に家を出たばかりだという。しかし公園にいたのは息子の一人だけ、寧ろ昼下がりという時間帯に公園に子供が一人というのが不思議であった。連絡は海外にいる両親にも瞬く間に伝わり、二人は有無を言わずに帰って来た。

そこで見たのは

身体は無傷なのに、全身を管で繋

がれた憐れな息子の姿だった。

「ハイ、とゆるー訳じゃないが　　今から真面目に鵓鴉計画しようと思いまーす」

「……………どしたの急に。なんか悪いモン食った？」

真面目で悪いかコンチクショウ、僕だつてやる時はやるんだよ。
紺女ちゃんとの相談から翌日、午前十一時。リビングにて家族会議を開いた。

議題は『今後の鵓鴉計画に対する我々の対応、及び敵対勢力の認定と対応』である。つまりは僕が敵対している“東の氷我”と“南の御子上”とどう戦うか、あと佐橋くんや紫ちゃんとどう共同戦線を張るかという議題である。

絶対敵は南と東。西は保留、北の佐橋くと紫ちゃんは味方だ。暫

定的に解するならこうなるね。

「異論、または意見あるかな？」

「はい」

「どうぞ魅弦^{みづる}」

「その他のセキレイ達は？　つまりは、東や南のように大規模な集団ではなく、普通の葦牙とセキレイに対してはどうするのですか？」

「ナイス意見グッジョブ魅弦。一般のセキレイについては、判断は各自に任せる。一々僕が意見するのも変だし、どうせなら君達にある程度は委ねるべきだよ、葦牙としてね」

なるほど了解、と呟き魅弦は茶を啜^{すす}る。新茶のほうじ茶は美味しいのなんのってね。

逆に一々僕の意見を待たないと動けないなら、そりゃいつやられても文句言えないよ。

己で考えて自身で行動する。それが知的生命体として生まれた者の宿命であり、義務である。虫や微生物のように反射で生きている訳じゃないんだ、“らしく”生きなきゃ損以外のなものでもない。

そして議題は変わり、鈿女ちゃんの報告にあったセキレイ狩りのリストの公開及び対策の考案。

「とりあえずはそのN.O.95が『殺られる順の最有力』なんだから

？ なら魅弦抜きで五人のうち一人か二人で尾行して、ズドン巫女の魅弦が遠距離から周辺を監視、発見次第魅弦が狙撃で倒す。これでどーだ？」

「アンタ頭良いんだ……………以外だわ」

「テメエは俺を一般のギャル男かなんかと勘違いしてねえか……………
…？」

しかし、地天の策は全く以て正解でもあった。正解過ぎる程に、それは正しい。

僕らの目的が“セキレイの保護”じゃなく“氷我のセキレイの討伐”だけならば色々と楽だが、今回は両者を手取らせてもらう事になる。倒すだけならわざわざ全員で出向いたりなんかはしない。

「んで、結局どーすんだよ？ 決めんのはお前だぜ、黒人」

「そーだねえ……………じゃまあ、地天の作戦でいいかな。それが一番お利口そつだ」

「つて事は、あたしも久々に闘えるつて事かあ。くうーつ、そう考えると生きてるつて感じるねえ！」

「そういえば地天さん、鶴ちゃん的能力は何なのですか？ 私も未だに聞いていないのですが」

「あ、鶴の能力？ そーいや言っただけ。コイツの能力は

」

「へえー、チビッコの能力がそんな“チート能力”だったとはねえ」
「いや、チートでもねえだろ。ちゃんと弱点あるし、制限あるしメ
ンドーだし」

いや、だからってあの能力は無いでしょ……………チートってあーゆ
ーのを言うんだよ？
あたしや魅弦みたく物理担当で無いのは分かるけど、そんなおバカ
能力ってわかるとねえ……………
年下に壁を感じるよ。で、今は魅弦を前に白羽一家全員、2 km 離
れた高層ビルの屋上から護衛対象ターゲットの監視中。時刻は午前十一時、昼
時。あんパンと牛乳片手に刑事みたく張り込みしてるなう。
朝の七時から張り込みを続けて約四時間。受験生受験生だから朝からのバ
イトはないだろう、と踏んだ黒人の読み通り朝は特に動きはなく、
それから今までに至る。そして魅弦が言うには、ようやく動きアリ。

「寮を出ました。方向は……近所のスーパ―ですね。昼時ですから、お昼ご飯でも買いに行っただんでしょう」

「魅弦、周囲に変動ある？」

「いいえ、ありません黒人さま。ですが重畳、それでは作戦通りに
地天さん、煌刃さん。追跡お願いします。目標及び周辺に変化があった場合には逐一連絡しますので、あしからず」

「敵襲があつた場合には独自の判断で動いてくれていいよ。僕も今回はここから見守る事にする。もし何か問題があれば駆けつけるけど、それまでは二人で頑張りなさい。以上、白羽黒人でした」

「了解」

「ダツツツ！！！！！！ と屋上のコンクリートを蹴り、付近のビルへと飛び移る。

それを複数回繰り返しながら、2 km先のNO.95目指して一直線である。セキレイの筋力ってやっぱり便利だわ。わざわざ一般人みたく地面に敷かれた道を歩かなくていいというのは、かなりの時間短縮である。

今回は焦る要因もないので、少しゆっくり目に移動。一分ごとに魅弦から定時連絡で『異状なし』という声が届き、あたし達はそれにより尚更ゆっくりと歩を進める事ができる。道中飲み干した牛乳のパックとあんパンのビニールをコンビニのゴミ箱に捨てながら、つい気まぐれに地天と談話してみる事にした。

「アンタ、また黒人からなんか格闘技教わってたでしょ？」

「もとから肉弾戦は得意じゃねえんだが、護身術程度には覚えてたんだよ。ほれ、軍隊正式使用のコマンドサンボだっけ？ それをちよつと鍛えて、あとは制服が日本っぽいからから手を少々手ほどきされた。アイツマジドSなんだぜ？ 人が休憩つつつてんのに無視して攻めてくつから能力使つて応戦したら、本気でブツ飛ばして来たからもうアチコチ痛くつてよお……………」

天才肌、というのはこういうのを言うんだろう。

毎日毎日、あいている時間を見つけては彼は黒人に稽古を着けて貰っている。

一時間の時もあれば三時間以上、短ければ十分程度の稽古もある。しかしかれはその時間内に教えられたことをすべて繰り返している、毎日毎時、何度も何度も。武技は日々の踏襲と実戦というが、彼の場合は前者が圧倒的に意味深い。努力する天才、それが普段の地天である。

「そりゃ御愁傷様。話変わるけど、そーいやアンタの服ってさ、『BLEACH』の檜佐木にそっくりだよな。肩口で切つてるとことか、スカーとつぽ裾しんとか。なんか狙つてんの？」

「狙つてねえよ、つか狙うかボケ。てかお前も知ってんだろーが俺らの制服事情。M・B・I・お抱えのデザイナーが御中と共同で俺らの制服作つてつから、俺らの意思ガン無視で服出来上がつてんの」

「あー、そいやそーね。言われて思い出したわ」

流石は天下のM・B・I、デザイナーの一人や二人召し抱えるのは当たり前という事だ。
たぶん個人ファッションという名目辺りが妥当か、じゃなきゃこんな辺鄙な服作らないでしょ。

「つか、あたしらも制服着たのって一ヶ月振りくらいじゃない？」

「あー確かに。黒人がちゃんと洗濯してくれてたから臭わねえし、ありがてえな」

「つと、見えたわ」

「はい、前方の二人で間違いありません」

視界の先、百mほど先に二人並んで歩くカップルを発見。

間髪入れず魅弦が指摘し、目標である事を認識した。とりあえず家屋の影に隠れて監視。

しかし……………なんて弱そうなセキレイだろ。小パン一発でも倒せそうな気がする。つつーか自滅しそうな気がする。こつ……………転けて頭打つてみたいな、ドジッ子な感じに。

「煌刃さん、後ろから小突いてみてください。たぶん機能停止しますよ」

「バカ言ってるじゃないわよこのバカ。で、動きは？」

『少々お待ちを。少し視界領域を広げ
く反応あります』

るまでもな

反射的に背中の中の蛇腹剣に手が伸びる。リアルタイムに話を聞いている地天も、真剣な表情に。

隠れながらNo.95にさらに接近、距離にして二十mほどに迫った。そして魅弦からさらに連絡が入る。

『目標の前方五十mから反応あり、数は四。全員武器を所有、目標へまっすぐ進んでいます。性別は全員女性、武器は………青龍刀デュアルランス、ハルバートに双頭槍、鎌槍斧にこれは 鎧ですね。フルプレートアーマーです』

「」

『おや、どうしましたか？ そんな驚いた顔をして。何かおかしな事でも？』

「……………アンタってさ、ひよっとしてレーダーより優秀なんじゃないの？」

『何を今更。最大視界は二十km以上ですよ。なにはともあれ、私は動けません。いざとなれば黒人さまを寄越しますから、頑張ってください』

「あーはいはい。了解了解だ (コイツに理屈云々言っても通じね

えよなあ……………」

ダツツツ！……！！……！！ と二人に向かい飛び出す。二人が気付いた時にはあたしらは二人の前にいた。

着地とそれと同時に、正面から四の敵影が現れる。魅弦の言う通り女で武器持ち、魅弦の言葉通りの武器を持っている。ここまで正確だと逆に怖くなるよ、身内ながら。

「へえ、ホントに来たよ。氷我様マスターの言う通りだ」

「白羽黒人は前には出ない 読み通りね」

読み通り、か……………黒人が向こうを読んでる分、こっちも読まれてたって事か。

けど四人なら五分五分どころか、まだ余裕だわ。十羽以上になると話は別だけど。

「アンタ達が黒人の言ってた氷我のセキレイ？」

「そうだが。何か？」

「狙いは後ろのNo.95って事でいいのよね？」

『ハッ、そうね。アタシはさっさとその雑魚倒して、あの白羽黒人ってヤツにリベンジしたいんだけど』

「リベンジねえ……………ま、なんでもいーか。一応自己紹介しとくわ。No.90・煌刃よ」

「槍のセキレイ、No.62・郭くわよ」

「ハルバート鎌槍斧のセキレイ、No.58・かぶらぎ鍋木だ」

「No.25・あまの阿万野。得物は青龍刀」

『No.47、鎧のセキレイ・たたり鑪だ。オイ、お前は名乗らないのか？』

お前、とは地天の事だろう。ただ一人、得物を構えず腕をぶらりと下げている。

自身の事を指摘されたのに気付くと、地天は「ああ」と言ってオーバークションに挨拶を始める。そう、「掌を相手に向けながら」

「んじゃはじめまして、No.100・地天です。戦闘方法は肉弾戦と」

パツツツ……………と掌を合わせる。まるで見せつけるかのよう。

瞬間、鎧以外の三人は何かを感じたのかそれぞれその場を離れる。
次の瞬間

「はっ、はははははハルカさまあ~~~~！」

「うっ、うるさい久能！ じつとしてる死にたいのか!？」

なんとも仲の良いカップルだった。

……まあ、アレは放っておいても大丈夫でしょ。所謂^{いわゆる}ラッキーマン^{マン}だろうから。

「重力……………厄介な能力ね」

「だが、厄介だと分ければ

「斬るツツツ!!!!!!」

細い路地を、三人が天地無用に襲いかかる。三角跳びよろしく、電柱や外壁を足場に阿万野と鍬木が迫る。正面からは槍兵である郭が、真っ向から槍を突き立てて突撃。狙いは全て地天だ。

ましてさっきの攻防で確認できた“不可視の攻撃”だけでも、優先順位の決断には十分である。

「けどさせないっての!!!!」

「コイツ……………邪魔よ！ 鍬木、阿万野。あたしはコイツを殺る、アンタ達は能力系を！」

「承知！」

地天の前に飛び出したあたしに反応し、加速する身体を急停止させた。

その際の反動を利用し、身体を右に一回転させて槍を斬り払うように振るう。

対し、あたしは二m以上ある蛇腹剣を盾のように構え、右から来る槍を真っ向から受け止める。

ゴイイイイイイイイイインツツ！！！！！！ という鉄の反響音が響き、防御成功を物語る。

だが技後硬直だろうか、郭は防御ンレに対して即座に反応は出来なかった。

ならばと、あたしは長いジャケットの下、右足に絡めて隠していた蛇腹“短”剣を一気に抜き放ち、関節を解除。巻き付く蛇のように駆ける刃を郭に向ける。

「なんのおツツツ！！！！！！！！」

シュコンツ！ と

槍の柄が真ん中辺りで折れた。

いや、一本だった槍を二本に分けただけだ。左右の手に、短槍が握られる。

流さ1.5m程になった右手の短槍ンレを振るい、郭はあたしの蛇腹短剣の軌道を弾いて逸らした。「これはマズイ」と短剣を引き戻し、

あたしは後方に翔んで双刀を再び構える。

「仕込み槍ね……………ゴメン、舐めてた」

「こちらこそよ。私も仕事じゃなかったら、貴女との戦いを楽しめたのね」

「葦牙の命なら已む無し、ってトコかしら？」

会話はそこまでだった。郭は短槍を握りやすい位置で握り、再度突撃を敢行する。

あたしは剣士として、それを真っ向から受けて立つ。白羽家の次女として、恥ずかしい真似は出来ない。

六月末の某日。よく晴れた、初夏の事でした。

気温は二十五度。梅雨も明けた本日はお日柄も良く、絶好の

「はあああああああッッッ！……！！！」

絶好の、戦い日和ですね

ってんな訳ねーよなあ！

(怒)

鎌槍斧ハルバートの鎬木、青龍刀の阿万野の攻撃を回避しながら、そんな事を思っていた。ヒラリヒラリと、風に揺れるシーツの如く攻撃を延々と回避。

「斬ッッッ！……！！！」

(スカッ) 何十合目かの回避。

「貴様………馬鹿にしているのかッッッ！……！！！」

(スカッ) また回避。

「ハア、ハア……………ハッ　クソツツツ!!!!!!」

(何故だ……………これだけ攻撃しているのに、何故掠りもしない!?)

ただひたすらに　回避あるのみ。だって近接戦闘とか俺の本分じゃないし(笑)。

無駄の無い動きで無駄無く攻撃を回避し、無駄な抵抗もしない。だから一切疲労は感じない。
ひたすらに回避のみを追求し、黒人指導の下に完成させたのは、回避『するため』だけの技。名を“万象流転の型”と命名。それを追う二人は無駄に体力を浪費し、息も荒々しく大粒の汗を流していた。

「オイオイどうしたよ？　俺あまだ汗一つ掻いてねーぜ？」

「貴様……………なにが能力系だ。“出来る”ではないか」

「侮辱……………許さず」

「あー嫌々。そーやって人を無駄に捲し立てる人って嫌ーねえ」

二人はもう何も言わなくなった。能力系だからという“驕り”を捨てたのだ。
肩の辺りに得物を構え、呼吸をすぐに整えて再度真っ向から突っ込んで来た。猪突猛進とはこの事か。

「弱っちい俺に負ける。武闘派の概念スタンス

まるごと潰してやら

あ!!!」

第二十四話 E n e m y o r V i c t i m (前書き)

敵か 被害者か

書き上げホヤホヤを上げるちや。
なんだろう、また指が進む進む(笑)

第二十四話 E n e m y o r V i c t i m

「あつ！ 惜しい！ そこ、そう、チャンスだそこッ！ あーなん
で避けるかなあ！」

「なに身内の闘いを悪役みたいに楽しんでるんですか……………」

「……………クロ、次、貸して。也」

「えー、どーしよっかなあー（笑）」

「……………むうー（怒）」

頬を膨らませながら唸る鶴はやはり可愛いモノだ、心が和む。双眼鏡片手に遠距離から、煌刃と地天の戦闘をまじまじと観察中。意外と楽しい。

座る僕の胸元に飛びついてくる鶴を撫で撫でしながら、二百mの辺りから監視中だがまあなんとも、映える闘いだなあと思う。美女対美女、美青年対美女×2、ロマンしかないよねコレ。

うちの子は受け？ それとも攻め？ いや総受け総攻めだと信じたい！

「で、どう？ 体力戻った？」

「戦闘可能な程度には……………ですが、数で攻められたら……………無理ですねハイ……………」

「……………ううー、クウーロオー！」

「あーもう、ハイハイ。ほら鶴、貸してあげるから泣き止みなさいな」

「……………ありがと。也（涙目）」

とりあえず最後に確認したのは、煌刃も地天も距離をとって仕切り直しをしている場面だった。

あれだけ落ち着いているなら、よほどの事がない限りは負けないだろう。我ながら身内には死ぬほど甘く過保護なんだと思いが、

こつやって離れた時だったりする。
手持ち無沙汰なので、気まぐれに魅弦の頭を撫でてみる事にした。

「んっ……………黒人さま、手つきやらしいです」

「何を言うか。フツーに撫でてるだけだろ？」

「悪ノリしてくれませんかえ……………魅弦は寂しくて死んでしましますよ？」

「こら鷓、あんまり騒ぐと怒るよ？（無視）」

『神の眼 《オウル・レンズ》』の対価として体力を消費した魅弦には、現在休憩をとってもらっていたトコだ。そう

僕の脚でレッツ・膝枕なう！

さて諸君。『男が膝枕しても萌えねえよ！（怒）』と仰るのはよおく分かアる。

どこの世界でも膝枕をするのは美少女や美女であって、僕ら男性は本来される側の人間だ。

だががしかし。気分転換に視聴者側ではなく、自分が当事者となつて考えてみてはどうだろうか？

胡座あぐらをかいている自分の脇から美幼女が、なんとも無邪気に胸元に抱き着いてきて

さらに自分の太股ふとももには美少女が疲労と晴天の暖かさから、うとうととした表情で語りかけてくる

しか
も両方が自分スキー。

あまつさえ、不意に頭を撫でてやれば『んあっ……………』とかゆー

色っぽい声まであげる始末。

「どうだあい？　なんだか不思議な気分になってきただろおう？　練習っておいしいね　るね　ね！」

「……………」

「……………　紺女ちゃん、いい加減こっち来たら？　面白いよ？」

「フーんだつ。黒人君あたしにも出番くれるって言ったのにさー、いざ来てみれば観戦だなんて嘘つきだよホント。嘘つきはよくないんだぞー（棒読み）」

「……………　お留守番どーし仲良し。也」

「ああ鶴ちゃんは優しいなあ……………　あたし妹が来るなら鶴ちゃんがいいや（涙）」

「……………　妹」

なにやら空を見上げて　やはりこういう時は二頭身にデフォルメされる鶴である　むう、と唸る。なに考えているのか分からないが、解決出来た瞬間頭の電球が灯り

「……………　おねいちゃん」

「くくくつふおあぁツツツ！！！???? (吐血) 「 「 「

ガクガク震えが止まらない……………なっ、なんだ今のは。
鶴が何とはなしに「おねいちゃん」と言っただけなのに、なのになんなんだこの胸のざわめきは!?

「……………?」

ハッ よ、よせ鶴！ そんな潤んだ瞳の上目遣いは
よすんだ！

見てはいけない、なのに視線と身体は彼女を求めてやまない。彼女から逃げられない。

魅弦と紺女ちゃんも同様。二人とも「うわあ…………… (赤)

」とか呟きながら頬を真っ赤に染めている。どうやら僕が抱いている感情は僕だけのモノではないらしい。

安心したよ、僕は間違っではないなかつたんだね……………そ
う。ならばこそ !

「

「ハッ!? 身内が邪悪にして純粹な何かに墮ちていくのを感じる

.....!」

「だからあ.....なんで余裕満々で余所見よそみなのかしらあ
っ!?!?!???」

ブオオンツツ!! と薙いだ双頭槍を身を反らして回避、数歩
下がって蛇腹剣を盾のように構える。

イメージするなら.....モン ンの大剣のガードって感
じかな。一番分かりやすいでしょ?

「勝負の最中に余所見なんて、ホント余裕ね。それとも誘ってるの

かしら？」

「ゴメンゴメン、なんかさ……身内が危ない方向に走り出した気がしてならないんだよねえ」

こう、世間と大人の倫理に関わるヤバいなにかが起こっている気がする。

気のせいであれば当然、その気があれば危険、そうだったらあたしが裁く。否、裁かねばならぬ！

で、それはそれとして。ジリジリとした焦燥感と緊張感に身を委ね、あたしと槍使い・郭くわくわは睨み合ったまま動かない。多少刃を交わしても、また距離をとって睨み合う。

少し離れた後方では、地天と青龍刀使い・阿万野あまのと鎌槍ハルパート使い・鎬かぶ木らが交戦中。しかし、開戦から十分近く経過した現在も地天には一切掠り傷一つつけていない。

かの地天はと言うと、まるで木の葉の様にヒラヒラと動き回り、踊っているかのような足運び。

挑発か、それともそれが基本なのかはさておき。地天が二人相手に未だ余裕を残しているのが驚きだ。それにあたしには、アイツみたいに“真っ向からぶつからない闘い方”は出来ない。

近接物理系の運命たてめか、その基本思考すらも猪武者っぽくなっているのが我ながら憎らしい。

「そう考えると、うちの葦牙の度量つてのが改めてよく分かるわな……」

「ええそうね。慢心ばかりするセキレイと余裕しかないセキレイ、

馬鹿にしてるわねホント」

「ま、これも良い葦牙に巡り会えたって事よ」

「いい葦牙、ね……………。そ。それは確かにいいわね」

悲しそうな……………なんて悲しそうな目をするんだろう。

けど、その理由もなんとなくは分かる。黒人と細女から話は聞かされていた。

セキレイの強制的な羽化と服従。

氷我という男がセキレイに強いているのは共生ではなく、徹底的な利用と服従。

自身の愛する者としてではなく、ただの“手駒”としてしか見ていないし、そういう風にしか使わない。

自ら望んで彼に羽化してもらった者もいるだろう。強制的な服従という姿勢に対して不満のない者もいるだろう。けどあたしは許せない、そんな事だけは断じて。弱いとか強いとか関係ない。誰かを“ただのモノ”として扱うのだけは許せないんだ。

「……………ねえ、アンタはさ。自分の葦牙を　　愛し

てる？」

「……………」

答えは返って来なかった。それこそが返答だと、彼女の二つの目は告げる。

あたしが聞きたかった事はもう聞いた。満足出来る答えこそ返って来なかったが、それはもういい。

「セキレイNo.90・煌刃。セキレイ達とあたしの誇りに賭けて、あたしはアンタとアンタの葦牙を倒す」

「セキレイらしく」、ね
No.62・郭くわ！
葦マ牙スター様の為に、いざ参る！」

これがせめてもの手向けだろう。セキレイでいられなくなってしまった彼女への、最後の華。

それを倒すのは、セキレイでなければならぬ。黒人に『代われ』と言われても、あたしは譲らない。

腰を深く落とす。短剣を放り捨て、脚を前後に開く。二mを越す蛇腹剣を背負うように肩に乗せ、一刀両断の構え。言い当てるならば、示現一刀流の構えが相応しいだろう。

郭は槍を一本に繋ぎ直し、数度振り回してその切っ先をあたしへと向ける。正面右に半身を広げ、肩より高く握った槍の切っ先は、上段からあたしの中央　　心臓を狙っている。

「一槍、一突を以て二を穿つ」

槍がブレて見える

闘気による錯覚だろうか。

安心出来る間合いとして5m以上はあるのに、それが無駄に感じられる程の覇気。

しかし気圧されるだけでは名折れ。高鳴る心臓を抑え、この一刀に意識を注ぐ。

他への意識を全て絶ち、ただの一となつて剣を握る。そうすると、自ずと落ち着いてくる。

地天達はいつの間にやら、あたし達のいる場所よりもかなり離れた場所へと移動していた。ひよつとして地天が決闘に気を払ってくれたのだろうか、だとしたら嬉しい限りだ。

背後にいた二人 No.95・久能くのと葦牙・鷗しきハル力は既に危険を感じてか、あたし達から尚更離れていた。丁度後方へ5m、電柱の影に隠れている。ああもう、完璧じゃない

二人きりの闘い。誰の邪魔も、葦牙や回りも関与出来ない、二人きりの闘いだ。

「破ハツツツ!!!!!!」

自身の脚力に併あわせ、前屈みに前方へと傾く重心を利用しての超加速。彼女の爆発的な脚力により、足場“だった”コンクリートはクレータ状に碎けて歪んでしまう。

それを後に、あたし目掛け郭は真っ直ぐに駆け抜ける。角錐上に肩を突き出し、切っ先を突き立てた槍のお陰で空気抵抗が減り、先の攻防以上の速度で突っ込んで来る。そして接触の瞬間まで僅か一秒

足らず。

右足を軸に槍ごと身を縮込め、柄を握る右手を引く。左足を少し浮かし、全力の刺突の構え。

人類最古の兵器、槍。原始時代より続くその武功は、今尚継承されている。

間合い千畳であろうとも無頼の強さを誇る槍の真骨頂は、一撃必殺と点攻撃、その速度にある。

『槍を相手取るならば足場を丸太と考えよ』
つまり左右に避けるのではなく、正面から避けろという事だ。横に避ければ雑がれて柄に打たれる、正面から避ければ突きの後の隙を狙って一撃で決められる。槍との戦いは常に乾坤一擲、どこの漫画でも伝承でもこれはみな同じ。

「パニング・ランス 穿槍烈破ツツツ！！！！！！！！」

右足で踏み止まり、前方へと掛かる慣性の力を利用。

先端に近い部位を握る左手で照準を定め、柄の中辺りを握る右手で一気に突き抜く。

心臓目掛けたその突きは、槍一本に全てを擲った一撃。幅20cm近いその刀身は、今から避けようと思ってもとても間に合わない。何より速いのだ、彼女の突きは。だからこそ

しかし、正面からの突きを避けられなければ即ち死。

あたしはまだ動かない。溜めに溜めているんだ、今更ビビったからって逃げるわけにはいかない。

軸足である左足で、前に踏み込む。その一步が、郭と同様にコンクリートをクレーター状に変形させた。

柔道の一本背負をイメージしてもらいたい。あれの動き、いやさ柔道という格闘技全般において、全ては『平行四辺形』を中心にしてある事を思い浮かべれば、その投げた相手が一体どれほどの質量をもって地面に叩きつけられるかを思えば、あたしの繰り出す一撃の重さが理解できよう。

超硬度金属『オリハルコン』を用いたこの蛇腹剣。幅30cm、刀身2.3m、厚さ5.7cm、重量118kg。千度を超える熱によつてのみ変形する、鉄塊の如き剣によつて繰り出される一撃は

「蛇剣へびけん一刀いっとう」

深鎚フシヅメ」

城門を打ち崩す、破城鎚の如し

！

「黒人直伝、頂心肘！！！」

鎌槍斧を振りかぶった嫡木の右腕を掴み、引き寄せると同時に肘を胸部に叩き込む。

重力付加による威力増大により、ざっと計算しても二百kg近い質量を叩きつけた事になるな。

「ゴホッ！……………貴様、能力系か拳士か、ハッキリ、しろ……………ッ！」

「だから両方って言ってんだろ？ 空手に柔術、ムエタイに八極拳、我が葦牙から学べる事は全て学ぶ！ それに、威力に関しちや俺の能力で重量付加してつから、まあセコいっちゃあセコいんだが」

我が能力『重力』は、そのかかる方向すらも自在に操る。

重力は本来なら上から下へ向かう筈のモノを、座標Aから上下左右自在の方向へと向けられるようになる。

さらに、なにかの物体にそれを付与する事で『方向性を持った破壊力』が生まれる訳だ。既存の重力を無効化し、その方向を指定する事も出来る。高いトコから落としたモノが、下ではなくしばらく横に飛んでいく、と言えば解るだろうか。

「……………解せぬ」

「ああ？」

「……………貴様、何故本気で闘わぬ？」

俺に打たれて言葉足らずな鎬木に代わり、阿万野あまのが口を開いた。

俺の『重力罫グラビティン』を避け続けていたからか、汗ビツシヨリだ。青龍刀を肩に担ぎ、阿万野は続ける。

「貴様には、闘気や殺気を感じない……………我々を追い払おうとしているか、撤退させようとしているだけの様に思える闘い方だ。まさか……………やる気が無いのか？」

「……………」

「沈黙も又答えまた。是と受け取ろう。ならば何故我らを邪険にする？ 貴様も私やその鎬木と同様に大層な戦好きと見るが、よもや我らに臆した訳ではあるまいな？」

溜め息を吐いた。そして脱力。

別に息を荒くしていた訳じゃないが、とりあえず気分を変えるために。

「俺はさ。なんつーか……………今の葦牙に会えてスゲー嬉しいし、

有難いって思ってる」

「……………?」

「強くて、優しくて、面白くて、なんでも知ってる。俺が肉弾戦苦手って聞いたなら好きな武術を好きなだけ教えてくれたし、料理とか家事も教えてくれた。面白い話とかさ、色々聞かせてくれた。

スゲー楽しかった。毎日毎日、楽しい事ばっかだ。なんか夢みてーだった」

バカみたいに騒いで、バカみたいに遊んで、バカみたいに暮らせた。葦牙とセキレイや人間の、たぶん理想の世界最高峰。そんな中に俺達はある。

「姉貴が二人いて、妹が一人。丁寧だけどなんか変な長女に、喧嘩っ早いけどメツチャ優しい次女。ちっせー頃からずっと一緒の妹に、こんな大所帯なのに全然皆に構ってくれる親父みたいな葦牙」

「……………幸せそうだな。ノロケか?」

「んまあそんなトコだ。でき、そんな幸せな俺がお前らに聞くのもなんだけだよ
お前ら、ホントに幸せか?」

葦牙に道具みたいに扱われて、必要不必要・有能無能で自分を判断されて切り捨てられる。

会社の関係じゃねーんだ、セキレイと葦牙つてのは。恋人とか親友とか家族、そんなモンだろ。

自分にとって幸か不幸かじゃなくて、単純にそれが誰から見ても不幸だから俺はお前らに聞きたいんだ。ホントにそんな生き方で良いのかと、ホントにそのままでも自分も葦牙も幸せなのかと

「……………ふむ、幸せ　　か。 鈴木、主はどうだ？」

「そこで私に振るのか……………まあいい。重力使いよ、私達が幸せかと聞いたな。ならば答えよう……………私は幸せではないが、私は今に満足している」

「……………」

「私達は確かに葦牙からは存外無下に扱われている。企業の上下関係にも近いな、命じ命じられ、従い従えるだけの間柄だ。だが少なくとも、此処にいる私と阿万野はそれに満足している。

不満が無いかと聞かれれば私は嘘だが、少なくとも葦牙と婚いだ事を悔いることは無い」

「然り、私も同意だ。我らは人に非ず、我らはセキレイだ。忠義を以て仕えこそすれ、情や愛などはその延長線上に過ぎぬ。元来の我々は騎士のそれよ。ならばこそ、我らに愛はない。だが、私は不満は無い」

マジかよ。なんとカッコイイ女達だろうか。

尽くせれば愛されなくてもいいとキタか。これは予想外、善し悪し

両方の意味で。

あまりに予想外過ぎて、つい笑いが溢れる。その生涯を無理矢理か
どうかは知らないが、自分を愛してくれない人間の為に捧げると。
彼女達はそう言っているのだ。これが可笑しくなくて何を笑う。
自分を招いた主に非はなく、寧ろ葦^{かれ}牙に招かせた自分にこそ非があ
ると。なんとおかしな話だ、あまりに被虐的過ぎて話にならない。
しかし何故だろうか
それを否定する気にならない
のは。

「……………OK、分かった。もうアンタらの葦^{かれ}牙や扱いに
関しちゃ何も言わねえ。聞かないし聞きたくもない、それでいい。
チャラ男みたいなんが言うのもなんだけどよ、言わせてもらっぜ

アンタら、マジイイ女だわ」

「今更か？」

「アツハハハハハハ、ナイスリアクション！ ……じゃそゆ事
で、こっからあ本気だ」

それだけで、二人は武器を構えた。今までに無いくらいに、真剣な
表情で。

俺はそれを見てフツと笑い、掌をパンツ！ と合わせる。『鎧^{たたら}の鑪』

の時と同じ様に。

それを視認した瞬間だった、二人は迷わず俺目掛けて全力で突撃を敢行する。第三者から言わせれば、それは正しい。先の攻防で鑪が同様のパターンで倒されていたのなら、今の動作を警戒するのは必定。

既に能力の発動を何十度と見せているんだ、発動のタイムラグや掌てのひらに関してもなんとなくはバレているだろう。なら能力を発動される前に、正面から斬り伏せる。

それが最有力で、最優秀な選択肢。これまでの闘いを見ていた誰が見てもそう答えるだろう。

だが、だからこそ

れとは次元を異とすると知れ。

此処からの闘いは、今までのそ

「グラビボール 重力球、フルセット 多重展開

」

そう呟くと、左右に腕を伸ばす。掌から周辺に多数の重力球グラビボールが展開され、まるで俺の周囲だけ空間が歪んでいるかのような錯覚を覚える。

「ハルバート・トウース 重斧刃戟ツツツ！！！！！！！！」

「青龍・一刀両断ツツツ！！！！！！！！」

そして同時、二人は俺の目前に差し掛かっていた。しかし、俺は動かない。

何故動かないかと聞かれれば、こつ答えよう

必要

無い、と。

No.100・地天。能力系だと物理系にバカにされてはや数年経つが、今までの模擬戦とかじゃマトモに負けた覚えはない。戦闘が能力頼みなのも重々理解している、だから俺は能力を極める事にした。

重力というモノについて、それなりに調べた。知識もある。そして至った結論は

「爆^はぜろ、天地」

何の変哲も無く。

力を振りかざすだけである

「……………何か、言い残す事ある？」

「……………あ、あ、あ……………ありがとう」

グチャリと、血塗れの身体が地面に横たわる。均整のとれた身体は、肩口から右脇腹までが豪快に斬り開かれて、辺りは血の海と化していた。開いたのはあたしなんだがね。

地面が周囲十m程に渡り、クレーターを作っている。市街地から離れた場所で良かったと、ホントに思う。

こんな場面、一般人にやスプッター過ぎて受け付けられない。なによりお巡りさんの出番になる。

「おつ……………全くホント、どうやって調べてるんだか」

郭が機能停止してからまだ一分も経っていないのに、M・B・Iの回収班が見える。

何人かがへりから降りたのを確認すると、あたしはその場を後に地天のいる場所へと向かう。

魅弦はサボってるのか、一向に連絡が入って来ない。仕方なく、直感に頼って彼を探す事に

したのだが、これまた一分しない内に見つけた。しかもワリと露骨に“らしい”痕跡があった。

「これまた……………何したのよアンタ」

「べつつに。ただ潰しただけだぜ、正々堂々と」

あたしの“深鋌”^{みじち}よりも、それは酷い惨状……………いや、戦果だった。

横たわる鎬木と阿万野を中心として僅か二m程だが、まるでその一部分だけがハンマーでも叩きつけたかのように変形していた。クレーターのように、深さ三mに渡って。

だがそれを生み出したであろう地天は汗一つ掻いてないし、服には傷の一つも無い。二人の持つ得物は、二人の身体共々『粉々に』砕かれていた。顔が見えないのが、あたしにも彼女達にも幸いなのだろう。

「ほら、終わり終わり。さっさと帰ろーぜ」

『はい二人とも、ご苦労ーさま』

と、ここでようやく通信が入った。本来なら魅弦からの筈だが、何故か黒人からの通信である。

だがイヤホンの向こうから『ほら細女、幼女は素晴らしいでしょう？』『幼女サイコー……………あたしもう死んでもいいやあ』なる不吉な声が真実を知る心を殺していた。

『終わったみたいだね。じゃー帰ってくるついでに、おつかい頼みたいんだけどいいかな？』

「おつかい？ 帰って着替えてからじゃダメ？」

「自販機オチは無しだぜ。テメーで買って来いって話だ」

『いやもう、片手間で済むしそこから数mも離れてないから。ほら
後ろ』

「「後ろ？」」

「ぴいッッッ！！！？？？？」

「バツ、バカ久能！ 声出すなバレちまっただろーが！」

「じっ、じっ、じっ、ゴメンなさいハルカ様あああああッッッ！！！！
！……」

『それ、持って帰って来てちょーだいね』

第二十五話 彼との連立

『おめえ、ただの“あんま”じゃねえな？』

『アンタも……………血の臭いがするねえ』

「北野武よ、何故貴方はそんなにカツコイイのか
目指した
くなる」

「黒人さま、初代座頭市って何処ですか？ 地下室に無いんですが」

「あー、初代は古いからビデオじゃないとダメだね。地下室の隣に変な部屋あったでしょ、あっちだ」

「へー、初代ねえ。あたしも見てみよ。魅弦、なんか飲む？」

「気分で麦茶を」

「ならあたしは烏龍茶」

ドタドタと地下室へ駆け降りていく二人、みづる魅弦とこっは煌刃。
バックのお茶を持って、二人は地下にあるアニメ鑑賞室の隣にあるビデオ鑑賞室へと向かって行った。

何故別室なのか、その問いにはこう答えよう。

ビデオには ブラウン管が いいじゃない 字余り、B Y 黒人

「……………クロ、おやつ食べたい。也」

「あーもう三時か。昼御飯遅かったから時間感覚狂ってたよ……………
…よしよし、ならば冷蔵庫のアイスを三つまで食べてよし！ 魅弦
達がチェック付けてるヤツはダメねー」

「……………ボーナス。也！」

とててて、と小走りに台所へと駆ける幼女。
すると『全部チェックがあああああ……………！』とか聞こえて

きたがまあいつか。
テーブルの爽健美茶を飲み干し、再び映画鑑賞に勤しむとしよう。
午後の窓の外は初夏の陽気、カランと鳴ったグラスの氷が夏を思わせる。不意の暑さに我が家もとうとう扇風機を出した、六月の末の事である

「ちょっと待てやコラ」

ガシッ！！と。細女ちゃんに中々の握力で肩を捕まれつい『アウチツツツ！！！！！！』と声を粗げてしまう。
ビククリしながらも右手ではリモコンで一時停止を押す辺り、殊勝にしてコマメな僕である。

「いやいや黒人君、流石にそれはないっしょ？」

「アレ、いたんだ細女ちゃん。比礼ひれよろしくウツスイイ~~~~し、姿見えないから何処に行ったのかと」

「ちよツツツ！！！！??? 地天君と洗濯と掃除してたんでしょーが！つか自分が命令したんだから忘れんな！あと勝手に『ウツスイイ~~~~の』とか変なアダ名付けんなー！ツツツ！！！！！！！！」

対して本来葦牙を守るべきセキレイはというと
涙目な顔が
やたらとふにやふにやしていた。

葦牙・鷓ハルカ。帝都大学志望の受験生、浪人、童顔。都内に在住で、住んでるアパートは独り身の浪人限定の安宿同然らしい。最近久能ちゃんが来て追い出されかけてるとか。

No.95・久能。能力系のセキレイ、金髪の少女。戦闘能力はこれっぽっちもなく、能力もハルカ君曰く“大声をあげるだけ”らしい。あまりのダメっぷりに付けたアダ名は『無能』。

一応出したお茶は飲んでくれてはいるものの、警戒心だけは絶えな
いのが現状。

正しいと言えば正しいのだが、助けた側としてはもうちょっと油断
して許容して欲しいトコである。

「……………アンタ、なんで俺達を助けたんだよ」

「善意、友愛、隣人愛。汝隣人を愛せだよ、十字教知らない？」

「そんな事じゃなくて！……………なんのメリットも無し
に、俺や何の取り柄もない無能な久能を助けた訳じゃないんだろ。
俺はその理由が聞きたいんだよ」

「は、ハルカ様ひどいですう……………（涙）」

「理由、と言われましてもねえ」

本気で『汝、隣人をラブしちゃいなYO！』で助けただけなんだが

「なっ、なんだよ！ 一体なんなんだよこの家はアツツ！……!?
?..?」

パッポー。数分後

「ぐっふッ……………まさか、中二病と呼ばれるだけでこれほどのダメージ、とは……………ぐっッ！」

「（アホかコイツは）」

「（まー黒人君だし）」

「（コイツら訳が分からん……………）」

「（……………アイス美味し。也）」

「まー笑い話はここまでにしよう。本題だが……………君達、帝都から逃げ出したいんだってね？」

核心を突くや否や、ハルカ君の表情がさらに強張る。同時に、久能ちゃんを自分の背後へ。

僕から見て左のソファーに座りながら、彼は僕から少し遠ざかる。しかし反対のソファーに鉦女ちゃんと地天がいるのを認識すると、

今度は開き直ったかのように胸を張る。

「……………そうだ。俺達は、この帝都を脱出したい。鵜鴎計画なんてのに、興味は無いんだ」

「と言いますと?」

「俺のセキレイ、久能は弱い。たぶんセキレイ一弱いと思う。能力もマトモに使えねーしドジだし間抜けだし、しょっちゅう躓^{しま}くし。ホント頼りねーよ」

「バ、バル」ガ様^{さま}あ……………(涙)」

「あーもー、一々泣くなよ! ……………でもさ、俺はコイツが良いって、そう思ったんだ」

……………あー、そゆ事。なるほどなるほど、そゆ事ね。僕がなんでこうまで彼らを助けたくなったのか、それが今ようやく分かった。

「どんなにコイツが無能でも弱くても、コイツは『俺がいい』って言うてくれた。俺もそんな久能に惹かれた。他の誰にも靡^{なび}かずに、俺を待つてくれたんだ。理由はそんだけありや十分だ。

……………自分のオンナくらい守れなきゃ、男失格だろ」

その時の彼の顔は、とても凜々しかった。童顔だけど、男の顔だっ

た。
自分の守るモノとやるべき事を理解した、立派な男だった。僕みたいに中途半端じゃなくて、そう。

眩しくてキレイで。純粹だから、僕は惹かれたんだ……………

「……………地天、魅弦達を呼んできて。緊急会議だ」

「……………あいよ」

「鈿女ちゃん、佐橋君の番号知ってるよね？」

「あ、うん。一応」

「悪いけど教えてくれないかな。ちょっと用事が出来た」

「……………黒人君まさか」

ああもう、絶対笑ってるよ。たぶんスngoイ顔してる筈だ。ニタリと、グチャリとした笑顔をしているだろう。今僕は久々に魂の底から盛り上がっている。こんな機会、人生に一度あるか否かだ。あの男にケンカ売るなんて、生まれて初めてだ。

「我々白羽家はM・B・Iに反抗、二人をなんとかして外へ逃がす
ケンカ祭りじゃ」

「（ブルルツ）な、なんか寒気がする……………」

「皆人さん、ひよっとして夏風邪ですか？」

「なんじゃ、吾の夫われともあるう男が風邪などと情けない」

「あ、でも熱とかないから大丈夫だよ。心配してくれてありがとう、
月海」

「しんぱつ……………！ う、うむ。大事無いなら良いのじゃ」

照れた月海は顔を背け、再び道路の打ち水に戻る。今日の俺達の雑用は、庭の掃除だ。

鍛練をする結ちゃんや月海の為に、庭の整理である。小石拾いとか、草むしりとか。

しかし大家さんがワリと頻繁にやっているからか、出雲荘いずもせうの庭は意外とキレイだったりするのだ。ゴミも無いし、虫もない。ので、掃除はすぐに終わった。

もうすぐ七月、夏が近い。そんな出雲荘だが、最近同居人が一人姿を消している。

「（うずめさん、何処行っただら……………）」

その時の大家さんは『長期の外泊』だと言ったが、それにしただって急な話だ。

なんの前触れも無しに、はや一週間近く経つ。同居人ゆうじんとしては、心配せざるを得ない。

しかし悩んだところで解決策が浮かぶ訳でも無し、今日はバイトも無いから思う存分勉強に勤しむ事にしよう。そう思って自室に入り、ペンを握った直後の話だ。携帯が鳴った。

「非通知……………？ 誰だろ、へんな勧誘じゃないよな」

恐る恐る通話に出てみる。最初の五秒くらいは無音だったんだけど、

そこからが怒涛だった。
携帯の向こうでなにやら激しい物音がする……………こう、出雲荘に
近い感じの騒音が。声は遠くて聞こえないけど、それが一層向こう
側へのインスピレーションを掻き立てる。で、その五秒後。

『あ、あーもしもし？ 佐橋皆人君？』

「え、あ、はい。佐橋は俺ですけど……………」

『あー良かった、通じた通じた。ほらね、通じたでしょ？ 魅弦、
取り分多めにしといてよー』

『私が六割、鶴ちゃんが四割ですな判ります』

『……………ゲット！ 也』

『僕の残せよ、残しとけよ！？ “押すなよ”とかじゃないかな
！?』

……………あ、なんか聞き覚えある声だ。ワリと最近の。

『あたしの金を返せええええー！ ツツツ！……………！』 つて
叫びは聞こえない事にしといて。

「えと……………白羽さん、ですか？」

『おお、覚えててくれたんだ！ 超嬉しいよ佐橋君！』

というか、忘れかけてた自分がかかなりバカに思える。こんな人を忘れそうになってただなんて。

白羽黒人^{しはばくじん}、肩にかかる黒髪の美青年。少し筋肉質な身体と高い身長に、人当たりのいい性格。

葦牙でありながらもセキレイを相手取るほどの無類の強さ。二羽のセキレイの葦牙。そんな彼に、俺は携帯の番号を教えた覚えがない。なら誰から？ その疑問は彼の返答ですぐに解決した。

『出雲荘の面々が心配してるだろうから一応の報告。鈿女^{かみめ}ちゃんはこっちで元気だよ』

「う、うずめさん……………うずめさんがいるんですか!？」

『ちょっと待ってね』

え、あたし!?! いいじゃん別に出なくても、ほら早く話あつ、ちよつと!

だから、あたしは話す事とか無いから! つつーか恥ずかしいから! あーもー、分かったから変な動きしないでよ! 分かった分かった出る出る、出るってば!

『……………も、もしもし。佐橋ちゃん?』

「うずめさん！　うずめさんなんですよね!？」

『あ、えと、うん。あたし。“佐橋ちゃんの知ってる”……………うずめだよ』

「よ……………良かった……………無事だったんですね。ホントに……………良かった……………!」

あれ、なんだろ。なんで俺泣いてるんだろ。うずめさんが無事だったから？

いいや違う。自問自答って訳じゃないけど、これはそうじゃない。俺はうずめさんと生きてまた会えると分かったから、こころして泣いてしまったんだ。

『ちよつ、佐橋ちゃんどしたの!？』

「っ……………な、なんでまないです。あ、あのうずめさん。うずめさんがなんで白羽さんの家に？」

『えーつと、その、色々トラブルがあつてさ。ちよつと匿^{かくま}ってもらつてんの。でも近い内に出雲荘に戻るから、美哉にもそー伝えといて。あとはそう……………「たぶん入居者が一人増える」って言うっついて』

「入居者、ですか？　はい、まあ分かりました。伝えときますね」

『うん、それじゃ。代わるね』

『……………もしもし、佐橋君？』

「はい。あの、それで電話の用件は……………」

『おおっ、察しがいいね。まあ話は“葦牙としての”、なんだけどね』

×

×

その日の午後。夕食と風呂を済ませてからの事である。
場所は出雲荘201号室、松さんの隠し部屋。二階への階段を上が
ってすぐ右手、突き当たりの壁の裏側に松さんの部屋はある。ちよ
つとした忍者屋敷だ。寝間着に着替えた俺のセキレイ達は、そこに
揃っている。

「それでなんじゃ皆人、急な話とは」

「うう、皆人さん眠いですう」……………」

「くーもお……………ねむねむう……………」

「ほら皆たん。夜も遅いですし、結たん達が寝ちまう前に話をするですよ」

「あ、うん。その、急な話なんだけど……………今度、葦牙とセキレイを脱出させる事になったんだ」

『……………』

……………沈黙がこれほどに痛いとは知らなかった。皆が俺を凝視してくる。
対して俺はキツとした表情を崩さない。これは真剣だと、口ではなく顔で語る。そしてそれは伝わった。

「……………詳しく話せるのであろうな、皆人」

「勿論だよ。その為に今夜は皆を呼んだんだ。これはその、俺一人

じゃ決められない事だからさ……俺だけの事じゃなくて、これは皆の事だから」

それから俺は一切遜色無しに、白羽さんから聞いた事、提案された事の全てを話した。

眠そうにしていたくーちゃんも、なんとか頑張っけて聞いてくれた。話は十数分に渡って続く。

……白羽さんの提案、それは『葦牙とセキレイの脱出、その協力』だった。あの人の提案の前提は『複数の協力者の参加』『参加すら葦牙とセキレイ全員の“任意”』。つまり無理矢理ではなく自分で決めろ、と言う事だ。

「君はそんな事しないだろうけどね」
そう付け足してくれたのは嬉しかったな。

で、十数分後。話し終えた俺は何も言わずに皆の意見待ち。そして最初に口を開いたのは月海だった。

「なるほどの……よく分かった。じゃが吾は気が進まぬ」

「月海？」

「皆人。此度の件、如何に葦牙たる汝なれの頼みであろうとも聞き入れる訳にはいかぬ。赦ゆるせ」

「えっ、あ、ちよつと月海!？」

たったそれだけ言って、月海は部屋を出ていった。何か気に触る事

でもあったのか。

それとも『脱出』と言う事自体が気に食わないのか。それなら仕方ない、無理強いだけは絶対にしたくないから。白羽さんも同じ事を言ってたし、月海が参加しない事も前提に織り込み済みとも言っていた。

「……………その、結ちゃんやくーちゃんや松さんは、どう？」

「結は皆人さんのままに、ですよ」

「くーも！」

「との事ですよ皆たん、因みに松も同じくです。松達は皆たんのセキレイですから、皆たんの行くところ、皆たんは何処までも着いていくですよ」

「皆……………でも、月海にも一緒に戦ってほしかつたな」

「月海さんは頑固者ですからね。松にも分かるですが、色々赦せないんですよ」

皆たんには教えられないですけどね、松さんはそう付け足した。とにかく、白羽さんの言う通り三人は確保出来た。あと数人、出来れば強い人がいい。となれば
俺の知る限りでは、あの人しかいない。あの人曰く『よろず屋』、大家さん曰く『クズの人』。

とまあ、後日話を聞きに行くとして……………

「夜も遅いし、今日はもう寝よっか」

「そうですね、と言つ訳で皆たん。結たん達を運んでくださいね」

「へっ?」

「ぐーすかぴー……………(眠)」

「……………あ、あははははは……………」

「お姉さん?」

「はい、姉です」

皆が寝静まり僕の就寝前、突然魅弦が僕の部屋を訪れた。悪戯と思つてたら、脱出計画の件だった。

そしてベッドの上、今宵の彼女の寝間着はキャミソールに下着。ウチも皆人君に劣らず女子率高いから、これくらいで一々反応してたらキリがない。……………我は今、悟りの境地なう。

「脱出の際には間違いなく、人手と等しく『安全に向こうへ渡らせる方法』が必要になるかと」

「まあそれは考慮してはいたさ。M・B・I直属部隊が相手になるのは承知の上だし、その為に皆人君にも声掛けたんだ。人海戦術だよ、ヒューマンインスパウワー」

「それで、向こうへ渡らせる際の方法の案はどのようなモノを？」

死ぬほどシンプルなモノしか用意してないんだけどねえ……………まあいいか。

第一候補は『直渡し』。道中迫り来る敵を全て撃破、そのまま最後まで同行する。

しかしその際にはあの“黒い鵜鴎”を相手取る事になる為、最も成功確率の低い手段となるのは必定。

第二候補は『ラグビー』。僕らが外敵をマークし、その際に二人に橋を渡り逃げてもらう。

この場合にも、いずれにせよ懲罰部隊と闘うのは避けられない。戦闘に関しては僕を筆頭に闘うからまあ問題は無いとして、やはり“黒い鵓鴉”である。一人で戦えば、僕は間違いなく死ぬ。

第三候補、これが魅弦の提案である『能力による援護』だ。

魅弦曰く、彼女の姉は風の能力者であるらしい。その能力を使い、二人を向こうへ“吹っ飛ばして”渡らせるという、中々アグレッシブな方法である。これなら或いは……………？

「後は佐橋さん次第ですが、案の一つとして考慮しておいて下さい。その際には私も姉を探しに行きます」

「了解、覚えておく。しかし君にお姉さんか……………セキレイは血縁関係とかないと思ってたよ」

「いえ、実姉ではありません。幼少の頃に長い事同居してましたから、そのクセです。その人の他にもあと四人、姉と兄がいます。姉も同じ場所で育ったのですが、あまり接する機会は無かったですし、覚えてないでしょう」

「そついや、君達の住んだ場所って……………」

「ええ、神座島ですよ？」

ドクン……………

……………なんだ今のは。胸になにかが引つ掛かった気分だ。懐かしいような、前世の記憶のような。言い難い何かが、脳裏を駆け巡る。
まぶた 瞼を閉じると、そこには暗闇ではなく光が満ち溢れていた。部屋の光ではなく、なにか別の……………これはそう、天上の光にも似た暖かい輝き。その最果てへ僕は導かれて

「黒人さまツツツ！！！！！！！！」

「……………ツツツ！！！！？？？」

「どうしたんですか、気を失ってましたよ？」

大声で慌てた様子から、嘘ではないのが分かる。しかし気絶していたと、この僕が？

体感時間にして数分なのだが、聞けばほんの数秒しか眠っていなかった。なんだこのテンプレは。

「神座島……………」

「なにかご存知なのですか？」

「……………いや、思い当たる節が無い。たぶん気のせいだ」

「ならよろしいのですが……………疲れてるんでしょう。今夜はしっかり寝てください。明日の朝は私が家事をしますから、たまには寝坊でもして下さいね」

「あ、ああ……………出来ればそうしよう」

「はい、よろしい」

立ち去り際に……………優しく頭を撫でられた。たぶん十数年振りにそれに何故か胸がときめく。格付けするのは残酷だが、やはり僕は魅弦が一番好きなんだろう。なにより僕は皆の事が好きだ、愛している。だが……………魅弦は僕にとってはおたぶん、特別な存在なんだろう。

「.....酷い男だな、僕も」

今夜は魔うなされそうだ.....

え。

「もお、いい加減諦めたら？」

「いや、まだ一合目じゃないですか（汗）」

「ええー、しんどいじゃない。真面目に戦うの」

何を言っとなるんだこのボディコン女
そう思わざるを得ない発言である。

さて、そろそろ現状の詳細を語る事としよう。先日の緊急会議から翌日、晴れた午後の事だ。場所は都内の市民公園、随分とデカイ緑溢れる公園だ。平日の午後とあって、人はまあ少ない。以下回想

x

x

魅弦の提案である『風のセキレイ』を確保する為に、会議の翌日早朝から帝都を走り回った。

にも関わらず、一日街中を駆け回っても一向に見つからなかった。追記だが、探索に動いた人間は白羽家の者だけではない。佐橋君達も協力してくれて、管制一人、捜索班十人、総勢十一人での大捜索だ。

しかもうち八人がセキレイで、僕も同等の体力を持っている。つまり擬似的にも九羽のセキレイが動いているのだ。だが一日かけても見つからなかった。

その後、初日の夕方に改めて交流を深めようと、白羽家で超・デイナーを開催。

うちは彼らからすればうちには新顔が二人いるし、顔馴染みの鈿女ちゃんもいる。

焰君にも声をかけたのだが「体調が悪い」の一点張りで、残念ながら出てきてくれなかった。佐橋君のセキレイの一人、管制を担当してくれた松さんも「おんもに出るのはまだ早いのですよ」と訳の分からない事を言っけて引き籠ってしまう。結局集まったのは白羽家と鈿女ちゃんを抜きにして四人である。

「NO・100・地天だ。ヨロシコ」

「NO・49・鵜………也」

「NO・88・結、拳系です」

「NO・09・月海じゃ」

「くーは草野だもー」

「佐橋皆人です。よ、よろしく願いします」

「魅弦達は顔見知りだから以下略。さて諸君、本日は目出度い日である………白羽家の新たな住人と、佐橋家の者達の出会いを祝して
乾杯ツツツ！！！！！！」

『乾杯——ツツツ！！！！！！』

かくして宴は始まった。お酒は僕や佐橋君や鈿女ちゃんだけとして、まあ普通の食事会、BBQである。

タレは自前で作ればいいとして、肉の入手がまあ面倒だった。精肉業者に直に買い物しに行ったのなんか生まれて初めてだよ。つか良く売ってくれたな社長、僕は助かるばかりだけど。鼻^{ひいき}真にさせてもらおう。

努力の甲斐もあって、この場にはまあ高級食材もあれば市販のスーパールの肉も混在している。しかし一度焼き始めてしまえば、安い肉なんかは楽しさで割と誤魔化せるのだ。これぞ主婦の節約術&am
p・処世術である。

「はい、お肉焼けたよー。いる人誰ー？」

ジュージューとひたすらに肉を焼き、適当に合間を見て肉を摘まむ。佐橋君や出雲荘の面々は紐女ちゃんとの再会に華を咲かせ、うちの面々はひたすらに食うばかり。いや、いつも通りの光景なんだけどもなんか納得いかないなあ………まあいいか。カルビとホルモンが焼けた。

「はいはい、結が食べます！」

「なつ、これ結！ 汝なれさつきから肉しか食べておらぬではないか！ 野菜も食わんか野菜も！」

「ちゃんと食べてますよ？」

「嘘をつくな！ ならばその皿にてんこ盛りに乗っておるお肉の山はなんなのじゃ！？」

「これは皆さんに配るんです。余った分は結が食べますよ」

「くーももらったも！ いっぱいたべるも！」

「草野だけなら殆どではないか！ 汝一体どれだけ食うつもりじゃ、カロリーが怖くはないのか！？」

「ちゃんと運動してますから！（鼻息）」

嗚呼、若さとは何と気高く青く、美しいものなのでしょう………思わず目を瞑りたくなる。

しかし本当に野菜も食べているから、比率は合ってるかどうかも定

かではないし、作る側としては食べてくれる事は喜ばしい事なので文句など言える筈もない。という訳でどんどん量産していこう。二十人前は用意したんだけど、ひよっとして足りなくなるんじゃないかという恐ろしい不安が胸をよぎる。

「やーもー、佐橋ちゃんったらホント可愛いーなあー」

「うっ、うずめさん落ち着いて！ 酔っても落ち着いて下さい！」

「ほーら酔いが足りないぞー、飲め飲めエー！ ツツツ！……！！！」

「ぐぶるげぼぼぼぼぼぼぼぼ！……！！……！！……！！」

雄々（おお）、あれは世界でも稀に見る『ビール吊り上げイッキ飲み』ではないか。

人間を吊り上げて強制的に開口、ビールもとい酒を滝流し呑みする様から名付けられた一芸。

佐橋君も酔ってるのかそれともテンパってるだけなのか、鉦女ちゃんがセキレイの能力であり武器である『比礼^{ひれ}』を使っている事に何もツッコまない。だが鉦女ちゃんが楽しそうでなにより、葦牙の千穂ちゃんと会えない期間が長かったのか、時折浮かべる寂しげな表情は回数が減る事だろう。

それに千穂ちゃんも近々本社から出てくる。それまでの辛抱だ、頑張れ鉦女ちゃん。

「（ガシッ！） なあに一人で黄昏^{たそがれ}てんだよ黒人オ…… W W W」

「うおおッッッ！！！？？？（さっ、酒臭さが異常……………危険
だっ！！！！）」

抱き着く煌刃。普段着のYシャツ越しに覗くブラと豊満な乳房が、
僕の倫理精神を揺さぶる。

しかしそれをまさかの『異常なレベルの酒臭さ』で戻されるとは、
予想外にして規格外にも程がある。ツマミに肉を食らいながら、酒
を浴びるように呑み続ける様は文字通りの酒豪。既に一升瓶が何本
か転がっている。

「ぐへへへへへー。黒人オ、パンツよこせよお」

「お前は変態親父か！？」

「ちえー、ノリの無いヤツだなあ。……………それとも、
あたしじゃソノ気になれない？」

ピタリ

ゴクリと、自分が生唾を飲み込む音が異様に大きく聞こえた。
潤んだ瞳、濡れた唇、ほんのり紅潮した頬、甘えるような艶やかな

声。

細く白い指が鎖骨の窪みから胸板をなぞり、徐々に下半身へと下っていく。臍へいに触れると今度は上へ上へと登っていく。だが登りは指ではなく手全体で身体を舐め回すように、その終着点は僕の頬だった。

あまりの急・怒涛展開に、思考は出来ても反射が追いつかない。されるがままである。

「黒人だつて甘えられるだけじゃなくて、たまには誰かに甘えたいでしょ……………」

「そ、ソナ事八無キニツキナノヨ？」

「嘘ばかり……………ならなんであたしの誘惑を拒否しないの？」

「カ、身体ガ反応シナイノデース。コレハ呪イデースカー？」

「ち・が・う。黒人があたしに惹かれてるから……………メドゥーサの伝説知ってる？」

僕は睨まれたカエル改め睨まれた兵士かなにかですか！ ペルセウスは何処いどこぞ！？

しまいには手だけでなく身体をも密着させて来た。僕の四肢メドゥーサに彼女が自らの身体を絡ませるかのように、それこそまるで大蛇メドゥーサのように顔の距離も鼻先10cmくらいしかない。互いの息が顔にかかり、呼吸音が聞こえる。

「ねえ……………?」

「なっ、なにかな!？」

「あたし達ってさ……………キス、まだ一回しかしてなかったよね？」

「そ、そだったっけ!? 色々有りすぎて覚えてないな——!!」

「ふうん……………じゃあいい機会だね。今日はたっぷり思い出させてあげる」

「あ、あああああああ

アッ——ッ——ッ!

!……………!」

白羽黒人

桜、散る。

「きゅんんんんんんん……………」

バタリと、煌刃が横に倒れた。硬直してたからキャッチ出来なかったが、芝生の上だから平気だろう。

目がグルグルと回っている、どうやら気絶しているようだ。しかし偶然にしてはタイミングが出来すぎな気がする……………!!

そ

う思っていたら、煌刃が立っていた場所に別の人間が立っている事に気付く。

見上げるとそこには、手刀を作って溜め息を吐いている地天がいた。

「お、おお、おおおおおおお………白羽家の良心、地天様！

お助け戴き、心より感謝を申し上げます！ よろしければ金一封など如何でしょうか！？」

「いやいらねーよんなモン、つか自分のセキレイくらい手玉にしろよ（汗）」

「赦そう。手に入らぬからこそ、美しいモノもある

」

「間違いなくそこで使うセリフじゃねーだろ。　　ったく、リ

ビングに寝かしくからその後はお前がなんとかしろよ。　　いーか、絶対に巻き込むなよ！？」

「ありがとうツンデレ、そんな君に僕は恩赦しか贈れない！」

お姫様だつこで煌刃を運び、そのまま食事へと戻る地天、我が家のツンデレ枠。

そのツンデレの後ろでは、来賓の二人が意外に皆と仲良く談笑しながら肉を突ついていた。

葦牙同士でもあり受験生でもある佐橋君とハルカ君は勉強やら生活やらの方面で盛り上がったたり、以前住んでいた寮が同じという点でも話が合っていたり。久能ちゃんはいくーちゃんと楽しそうに遊んだりと、まあ馴染んでるみたいで安心した。

「はあ、はあ……………や、やっと逃げれた……………うずめさん酒癖悪すぎだよ」

鈿女ちゃんから逃げ仰せた佐橋君を発見。酔い潰れた鈿女ちゃんは煌刃同様に地天が屋内へ連行していったとき、おしまい。しかしまた、ゴミが散らかってるなあ……………掃除が大変だなこりゃ。

「お疲れ、佐橋君」

「あ、白羽さん」

「なんか色々と急な話ですまないね、協力してくれとか仲間集めてくれとか……………ホントなら多々手順を踏まなきゃならないのに」

「い、いいんですよこれくらい。それに鷗君いい人だし、俺も二人の事助けたいなって思ったから……………だから、白羽さんは抱え込まなくていいんです。これは俺と皆で決めた事ですから」

「そう言ってくれると助かるよ……………ところで、佐橋君は誰か味方呼んでくれたのかい？」

「……………え、ええ、まあ」

え、やだなにその無駄な“溜め”。スツゴく不安になるんだけど。

当の佐橋君の泳ぐ視線は何処を捉える訳でもなく、あまつさえなんか冷や汗を掻いてる。

……まあ、予想してる人間はいる。佐橋君の人脈で鵜飼計画に関わりのある人間、セキレイや軍隊と対等に渡り合える存在。そして“この街に詳しい”人間となれば。

「ひょっとしてさ……ビリビリ？」

「……はい」

「……まあ要求したのは僕だから文句言わないよ。だから聞こう　頼りになる？」

「そ、それは保証しますよ。本人も意外とノリノリでしたし」

「そう、ならいいんだけど……」

あの不良男ヤンキーを動かさせるとは、佐橋君も僕に劣らず中々の策士と見た。

随分前とは約二ヶ月、五月の頃の事だ。魅弦と出会ったばかりの頃、御中が起こした祭り第一弾。

植物園での戦闘の際に発見した、佐橋君をくーちゃんの下へと連行していったセキレイ二羽とその葦牙。見るからに不良オーラ満開の彼らを佐橋君ヘタレが動かせるとは、中々どうして根性あるじゃないか。

「お、俺だってやるときはやりますよ！」

「アハハ、メンゴメンゴ。さて、話は急展開だがアレ誰？」

「ハーイ！ それじゃイツキ飲み、いつきまーっすツツツ！……！……！」

事は手が空いたので、ゴミの片付けを始めた事に由来する。
庭に散乱している一升瓶やアルミ缶のゴミ、それらを拾い集めていた時の事だ。

……明らかにテーブルに置かれたり、落ちている瓶の数が“おかしい”。

佐橋君と僕、鈿女ちゃんに煌刃が飲んでいたとしても、一升瓶が『十数本も』空になるだろうか。いくら勢いがあるといっても、わずかに一時間前後でそんなに空けられるわけがない。

鈿女ちゃんと佐橋君は缶ビールを主に、煌刃は缶チューハイ主軸。僕はメイン、皆は気まぐれで日本酒と焼酎とウイスキーをコロコロと飲みまわしている。ならば本来そんな数の瓶が空く事はないのだ。

そしてとうとう目に入ってしまった、あの謎の部外者・オブ・ボデイコン。

自分の周りの事であれこれ忙しかったから気付かなかったけど、なんか異質なモノが紛れ込んでいる。

紫色のボデイコンスーツみたいな服と、過去見てきた中でも最大級のおっぱい。艶のある長い黒髪と酒豪という言葉が生きて動いているかのような飲みっぷり。

みんなも祭りのテンションでおかしくなってるのか、それともただ単にバカだから気にしてないのか。

「アレ、どうする？」

「どうするって……とりあえずあの人の話を聞かない事には、ねえ？」

「だよねえ……とりあえずは肉体言語に訴えてみようかな。なんかタダ酒飲まれてるみたいで癪だし」

「ちょ！？　だ、ダメですってば！　穩便に、穩便に話し合いで行きましよう、ねっ！？」

冗談だよ、と告げてとりあえず接近してみる。

だが普通に寄ってもつまらないだろう、と考えて試しに気配を消してみる。

現在はちょうど僕に対しては背を向けている。視覚外から極力無音で、歩く際には他の皆が起てる物音に乗じて。視界に入りそうになれば、すっと死角の方向へと滑りこむように移動し、あっという間に背後に。

さて、まずは「わっ！」とでも声をかけて驚かしてやるつか。

「どちら様かしらん？」

ピタリと、彼女の動作が突如として完全停止する。

あまりの不動さに思わず僕も硬直し、驚嘆の声すらも上げる事が出来なかった。

しかし彼女が自らこちらへと振り返る事でその緊張は解け、僕は表情だけ固めたまま二歩後方へと下がる。手に持った一升瓶の最後を一気に飲み干し、感無量の息を吐いてそれをテーブルに置いた。

「女性の後ろから気配を消して近寄るなんて、ひょっとしてストーカーか何か？」

「……………こりゃ驚いた。けどその前にまずは謝罪を、すみませんでした」

「よろしい。お姉さんはお酒が飲めてご機嫌だから許したげるわ」

「まあご機嫌なのはそれとして………どちらさま？」

「私？ お姉さんはそう、通りすがりのお酒大好きでナイスバディで妖艶で謎めいた大人の女よ」

「あら、風花ねえさんじゃないですか」

僕と女性を挟んで数m先、魅弦が結ちゃんから奪ってきた肉を口にしながら名前を呼んだ。

しかし新たに勝手にお肉を焼いている様子から、多分放っておいても大丈夫だろうと別の意味でも安心する。で、現状は魅弦の発した言について追求しようと思う。

第一に、魅弦は女性の事を「ねえさん」と呼んだ。

第二に、今後僕たちが『脱出作戦』を行う際に、人手として必要な人材もまた魅弦の『ねえさん』である。

第三に、その『ねえさん』はセキレイである。そして先日まる一日を費やしても発見できなかった人物が、目の前でベロンベロンに酔って立っている。

全員が僕と視線を合わせて、何度か瞬きをして女性を見る。

対して女性は何の話かと、きょとんとして僕らをクルクル見回している。そして結論は無言の内に決した。

『確保——————ッッッ！——！！——！！』

×

×

かくして、時系列は現在へと戻るのであった。

姿の見えない人物を探すのではなく、見えているものを追いかけるだけのなんと楽な事か。

しかし最終的に肉体言語に及ぶのは僕ら戦闘民族の性である^{サガ}と知ってほしい。結局全員で鬼ごっこをして、どういう流れでか「先に捕まえたもん勝ち。妨害アリ」という理由で、全員から何故か僕がフルボッコにされるといふ事態にまで発展したのは黙秘^{とくひ}したい処である。

「だいたい、なんで私に用事があるのよ。魅弦の事だから碌な事じゃないでしょうけど」

「失礼ですね、風花^{ねえさん}。これでも歴^{れっき}とした慈善事業ですよ？」

「……………恋バナ？」

「オウイエス、恋バナ。実は斯く斯く云々ありましてですね」

第二十七話 出陣、若者

コンコン、と鉄製のドアを叩く。

「ノックしてもしもし。部屋から出ないと悪戯にC4投げちゃうぞ〜」

「なっ、なにハロウインのノリで怖い事言ってるんですか!？」

No.03・風花^{かせはな}の協力を得る事が出来たその翌日。

佐橋君と結ちゃん、僕と鶴^{ぬえ}は最後の協力者、瀬尾^{せおのかほる}薫の自宅を訪れていた。

都内某所、大家さん曰く「食い扶持^{ぶち}に困った哀れでどうしようもななくクズな人」と言う。

しかしそんな人間が、こんな高級住宅街ど真ん中のマンションに住

んでるんだらうかと疑問が浮かぶ。大家さんに住所を聞いて探したから間違いないだらうけど、『瀬尾』と書かれた看板を直視してなお怪しいと思う。

「と、ところでなんで今日は鶴ちゃんを？」

「すたで社会勉強、也」

「あ、お勉強皆人さんもよくやってます」

「社会勉強と帝大の受験を一緒にしてもねえ……………？」

時間潰しの他愛ない会話も、一分続けは普通のトークである。

そして一分後、ガチャリとドアノブを捻って出てきたのは細身の女性。

つまるところ、瀬尾君のセキレイだ。“12”の数字が書かれた紅紫のタンクトップとショートパンツのラフなスタイルだ。しかしその初動は少し頭を下げ気味でこちらを見ておらず、

「あの、集金ならお金無いんですけど……………」

と言い出す始末。如何いかんともし難い対応であった。

しかし改めて確認しようと思顔を上げてこちらを見ると、反応は全く別のモノになった。

ーに決まっつてらあ……!!」

「せ、瀬尾さん！　せめて話だけでも聞いてくださいよお！」

「断固拒否に決まっつてんだろーが！　クッソなんつー馬鹿力してんだ、ドアが動かかねーじゃねーか……!!」

「いやまあ、腕より脚が強いのは物理的に当然でしょ。たった二本だけで人間一人支えてるんだから」

「クッソオー……ツツツ……!!」

×

×

「　　帝都脱出、ねえ……」

マル　口をすばすばしながら、瀬尾君はなんとも無気力且つ適当に

答えた。

リビングのソファで僕達は腰を下ろし、その正面に向かい合うように瀬尾君が話を聞いている。

その横には、？12・響ちゃんひびの姉であり、“11”の数字の入った黒のタンクトップを着た？11・光が壁ひかりに背を預けている。

鶴は暇なのか、結ちゃんの膝の上に座っておっぱいに頭を預けている。不埒な事この上なく羨mゲフゲフ。

「で、その依頼者は何処にいんだよ？」

「M・B・Iに嗅ぎ付けられて殺られるのはゴメンだから、今は大家さんのところに」

ああそりや確かに、と深々と納得していた。この様子なら、懲罰部隊の事も知っているようだ。

キッチンからは響ちゃんが長話になると思いコーヒーを出してくれて、目が合ったらぺこりと軽く会釈をされた。街で見かけた時はそんな印象は無かったのだが、彼女は“まだ”大人しい方だと僕の中で定義する。

「で、だ。俺から『困ったら頼れ』って言ったから無理クソでも手え貸すのは決まりだ。今回のM・B・Iのやり方にや気に食わねえ事ばっかだから別に構やしねえさ。で

“コレ”は

？」

右手を逆手に、人差し指と親指の先端を合わせて小さな輪を作り、

これ見よがしに見せつける。

瀬尾君が言いたい事も分かる、嫌なほど。流石にM・B・I相手では誰も無償で闘ってはくれないだろう。

だが生憎僕らには彼を動かせる程の“現金”はない。M・B・Iのマネーカードはあっても、それに頼りつきりで自分の稼ぎが無いのだ。佐橋君の稼ぎは家賃に当てられるから無理として、僕の方も貯蓄はあるが未来予算として正直使いたくない。

賭博喧嘩という手段もあるが、時間がかかる。数もこなさなきゃならないから、無論パス。

そういった中で導き出され、且つ彼を無償に確実に動かすにはこの一択であると、佐橋君と下した答え。

「出雲荘の借金」

ガタツ！ と、あからさまに瀬尾家の面々が食いついてきた。

瀬尾君が徐々に冷や汗を流し始めたところで、話を続ける。話術は僕の担当と事前に決めていたからだ。

口説き文句、改め強制従業文句は多数考えてあるが、今の彼なら一番シンプルなヤツで落ちる筈。

「いやね、今その二人は出雲荘にいるんだよ。で、大家さんにも色々とは話通っててね、簡略化してるけど『M・B・Iに追われてるから助けてい』って言ったんだよ。そしたらさ、瀬尾君のトコに行こうって話になってさ？」

いやあ佐橋君もいい人紹介してくれたよ、まさかこんなタイプの人

間違ったとは思わなかったしさ。

でだ、瀬尾君。此処からは本当にビジネスの話だけど………君らは現在、出雲荘に対して中々に莫大な借金を抱えてるよね。そりゃまともなりーマンの一ヶ月の給料が消えても足りないくらいに。そこで大家さんは一つ提案をしてくれたんだ。『瀬尾さんが無償で手助けをするのであれば、借金の三分の一はチャラにしてあげましょう』ってね。優しい人だよねえ大家さんって、人助けで借金を三分の一もチャラにしてくれるんだからさ。

僕ならこれを無視するなんてあり得ないね。実力があるならササッとこなして借金を減らして、堅実にバイトすれば生活費も借金返済も簡単になるのに………

そっかあ、瀬尾君は今回はノってくれないのかあ。仕方ないなあ、大家さんには『ダメでした』って報告するしかないのかあ。でももしたら今後瀬尾君が出雲荘に“タカリに”行った時の扱いが更に酷くなるのは目に見えてるよなあ。

そこはさあ、ほら。良識と常識、強さと優しさを兼ね備えた社会人の大人として色々手を貸してくれるだろうと僕らは信じているよ？

なんなら今すぐ大家さんに電話してホントかどうか確認とるけど、どーする？」

「いやあすいません大家さん、こんな事にお名前とか色々借りちゃって」

「いいんですよ、これくらい。瀬尾さんの借金は三分の一削ったくらいじゃ全然減りませんから」

出された煎茶を啜りながら、大家さんとなんでも無い雑談と後日談を話していた。

二階にいるハルカ君達へは佐橋君が報告に、鶴はそのまま自宅へ皆への伝令に走る。

それにしても、まさか借金返済の話がこうも突き刺さると思ひもしなかった。涙目に「……………ちくせう。いーもん、悔しくねーもん！」と言った時は笑いそうになったけど、それは借金した人間が悪いんだと言う教訓にもなるだろう。

「しかし大家さんも色々悩み事が多いですね。大所帯で借金で未亡人で」

「あら、そつでもないのよ？ 主婦業はコレで色々楽しいですし」

「確かに、白羽家の大黒柱の身としてはよく分かりますよ」

「まだお若いのに、色々大変ですねえ」

「何を仰いますやら、若いなら大家さんものでしょ？　まだ二十代真ん中か少し手前ぐらいじゃない？」

あはははは、おほほほほ、と。午後の談笑は絶える事は無かった。

「何処までご存知なんですか？」

それを、たった一言で壊すのは非常に惜しい。が、これも必要事項なのだから仕方ない。

大家さんはきよとした目で僕を見て、すぐにクスリと笑みを浮かべて開き直ったかのように口を開いた。一瞬惹かれたのは魅弦達には内緒の方向でお願いします。

「何処まで、ですか。とりあえず、皆さんがご存知の範囲は知り得ています」

「その先は？」

「ある程度は。立場上お話しする事は出来ませんが、私は“彼女達”を知っています」

「なるほど……では僕の事はなにか？」

……彼女は何も話さなかった。

だがその表情は『言えない何か』を秘めている。僕にんげんの事なのに、僕あしかひに言えない事を。

けど、僕はそれについては何も聞かなかった。いや、聞きたくなかったんだろと思う。そうじゃなけりゃ『いいですよ、話したくなったら話してください』なんて逃げ文句を言う訳がない。いつもならもう少し押すのに、今回の僕は本当に逃げ腰になっていたと後々に思う。

結局出雲荘を出たのは夕方、佐橋君たちは夜の為に先に寝溜めすると眠っていた。出迎えが欲しかった訳じゃないけど、『またね』とか『お疲れ』とか、そういう再会のセリフが言えなかったのが口惜しい。

「む」

「お」

出雲荘の玄関を出ると、すぐ右手。月海ちゃんが屋根の上に座っていた。

しかし表情は浮かないようで、こちらを見てもまた上の空である。けどそれが逆に気になって、つい彼女に構ってみたくなくなってしまった。数歩のステップで庭の方に歩き、庭の中央で右足を深く踏み込む。そして軽く飛んで、屋根の上にふわりと着地する。

人間が屋根の上に飛び上がって来るのがそれ程珍しいのだろうか、

目を見開いて僕を見つめてくる。

「……………なれ 汝、やはり人間ではないのではないか？」

「何を仰る、僕は人間でござえますよ。ちよつと色々あつて人より身体が強かったり、昔から武術の鍛練してたから変に戦闘に耐性あつたりで、僕は君達セキレイじゃなくて人間。ただの人間だよ」

「……………そういうのであればそんなのじゃろつが」

ふう、と彼女は溜め息を吐く。美人は溜め息姿もキレイだ。それを僕はフツと笑った。それが気に障ったのか、彼女はむつと言つて腰を上げる。

「なんぞ、馬鹿にされておる気がするのじゃ」

「してないよ、別に」

「……………のう白羽殿。汝は何故なにゆえあの二人を助けようとするのじゃ？」

何故なぜ、なにゆえ。なんでメリットも無しにあの二人を助けるのかという問い。

人助け、善意、善行、人の為に生きる。彼らが眩しかった、羨ましかった、だから守りたい。

..... 本当に、それだけなのか？

ただ単に、僕はあの人に一泡吹かせてやりたいだけではないのか？

あの人 御中広人に。今の僕らの姿も見えていて、それを嘲笑^{あざわら}っているだろうあの男を。

他人を盾にして、僕はあの人にただ単に嫌がらせをしようとしているのではないのか。そうだとしたら、この人並み外れた身体を以てして、僕はなんと下らなく臆病なのだろうか。自問自答によって疑心暗鬼に陥る、実に愚かしい話だ。

真っ直ぐこちらを見つめる月海ちゃんにも、それを答える事は出来なかつた。

つまるところ本心は何処にあるのか、自らの心象でありながらそれを微塵も理解出来ていなかったのだ。

ならばなにかを失えば、僕は本心^{ソレ}を知る事が出来るのだから。

うか。大事なモノを、失えば。

自分の腕や脚、永久的な身体の自由、知識や記憶、財産、命

そして、みんな。

「.....白羽殿？」

「.....ゴメン、月海ちゃん。それには答えられないや」

「.....そうか。ならばそれでも良い。汝には汝の想いがある、吾^{われ}もその涙を見ればよう分かる」

涙だった？

「……………アレ、ホントだ。なんで涙なんか流してるんだろ。涙腺
変に刺激しちゃったかな？」

目尻から溢れんばかりの涙が頬を伝い、頬骨のラインに沿って流れ
落ちていく。

涙を流していると意識したらそこからはもう尚更、止まるどころか
ドンドン溢れてくる。

「なんだろコレ……………悲しくないのに、なんで涙……………なんか

「

……………」

「ああクソ、拭っても拭っても止まらないや……………ゴメン月海ち
ゃん、変なトコ見せちゃっ」

お母さん。

「て

」

「……………その様な、泣きじゃくる童わらわのような姿を見せるでない」

首に手を回され、胸に押しつけるように僕を抱いてくれた。普段なら大慌てなのだが、今だけはこの感覚に甘えたいと心底感じていた。

母性

誰かに守られているという感覚に。

「) あらあら。佐橋さんには内緒ね) 」

「良く寝たかあ！？ 飯食ったかあ！？ 歯ア磨いて風呂入って、
身^{みだしな}嗜み整えてるかア！？ 」

激励、とは言い難い言葉で激励を贈る。

この場にいるのは総勢十四名。白羽家より一同、出雲荘より佐橋君と結ちゃんとかーちゃんに鈿女ちゃん、瀬尾家より一同。そして主催、鶺鴒ハルカとそのセキレイ・久能。以上、十四名。

「風花は？」

「アイツあ様子見たとよ。マジで助けが必要なら出て来るだろうし、必要ねーなら傍観決め込むんだろ」

「成程ね。まあいいや、それじゃ各員、各々の役割は覚えてきてるね？」

まず第一段階。瀬尾家一同が都内にある電力施設を襲撃、街の機能を一時的に麻痺させる。交通、情報といった点を制圧し、作戦を円滑に進める要因とする。その後は自由行動、彼らの仕事はここまでで終わりだ。

第二段階。都内の北側に大橋がある。今回の脱出にはそこを使用する事で決定している。が、やはりそこへ向かうには線路を通らなければならぬし、それが最も近道でもある。

くーちゃんかぐらんの能力で駅に滞在している部隊へ奇襲と攪乱かくらん、その騒ぎに乗じて一気に乗り込む。

第三段階。あとはまっすぐ突っ込むのみ。道中妨害が多数入るだろうが、それらは僕らで退ければ問題ない。僕は最終的な場所まで付いていき、彼らを見送る兼護衛する。

どうだろう、シンプルイズベストだからこそ成功率も高いと思えるだろう？

セキレイの一同はそれぞれの制服を佐橋君はジーンズにシャツと動きやすいものを。ハルカ君と久能ちゃんは先日と同じ服を。僕は黒のタートルネックと黒のパンツ、それにブーツ。これぞ勝負服である。

「なお、改めて言うておくが……………死ぬなよ」

第二十八話

“Duel”

the Dead Bridge

一節（前書き）

世界的に名高く、都内では最大級の病院。そのICU（集中治療室）に、一人の少年がいた。

全身を管に繋がれ、その周辺には様々な医療機器が稼働し続け少年の身体機能を補助している。

それを抗菌ガラスの向こうから見守る二つの影がある。それは少年の両親だった。海外での事業を切り上げ、大急ぎで日本に帰って来たのだ。

だがそれは少年が事故に会ってから既に翌日の事であり、そんな少年に付きつきりていたのは唯一人。それは少年の叔父だった。彼は母親の弟に当たり、彼は大学に通いがてら仕事で忙しい姉の代わりに、少年の面倒を見てくれていたのだ。

「……………すまない、姉さん。僕がしっかりしていれば……………こんな事には……………」

「過ぎた事を口にしないで。口にするのはこれからの事で、するのは今すべき事。それだけよ。それに自分のせいと言うなら、その達者な頭を働かせてあの子を救う方法の一つでも考えなさい」

姉は闇に弟を責めていた。何故放っておいたのか、と。だがそれは本来ならその時間に少年の面倒を見ていた家政婦の方であり、叔父にはなんの罪もない。彼は普段はただの頭のいい大学生であり、毎日毎時付き添っている訳ではないからだ。

叔父は改めてガラス越しに少年を見る。見るに堪えない、無惨な姿だ。

外傷こそないものの、その内部は酷い事になっている。内臓をミンチにした上でシャッフルしたかのように、ほとんどの内臓は正しい位置に修まっていないのだ。

潰れた内臓は機械で代用出来るが、このままではいずれ少年は死ぬ。それは確実だ。

だからこそ、叔父は動かなければならなかった。彼の中の唯一の可能性。それが善かれ悪しかれ彼を救う方法に成りうるのならと、叔父は口を開いた。

「……………あの子を、僕に預けてくれ」

日は落ちて 月が昇れる 暗い夜。今日の帝都も宵闇を街灯が照らしている。

帝都北部にある新東帝都北駅。その改札口付近に、複数の影があった。

一つは軍服。濃紺を基調とした仕様で、それぞれが一応程度に武装している。

腰のホルスターに拳銃、肩にはライフル。数は四人で、二人一組に分かれて駅で検問を執行している。手にはM・B・I支給の小型コンソールを持ち、彼らはその存在を明確に知らない存在を取り締まっていた。

このコンソール、裏面に小型カメラが付いており、此処から取り込んだ画像の人物と一致する画像を本社データベースから検索、即座に伝達する超高性能アイテムなのである。流石は天下のM・B・Iといったところか。

もう一組は私服、人数にして九人。全員が年若く、中には子供までいる。

あまつさえ美男美女の集団とあっては、それを目にした者はついその姿を追いかけてしまう。

それは私設憲兵達も同様であり、最初はそれを見ているだけ、見とれているだけだった。しかし己の職務を思い出し、憲兵の一人は慌てて改札に近寄るその先頭の青年に話しかけた。

「お、おい君。すまないが身分証明書か何かを」

見せてくれ　その一言を口にする前に、憲兵はその脚をくの字に折って倒れてしまう。

そしてそのまま意識を失い、それを傍で見ていた同僚は何が起こったのかをすぐに理解する事が出来なかった。しかし、青年の腕

その拳が真っ直ぐに伸びていて、その先が丁度同僚の立っていた場所、頭部があつた場所と一致した事に気付く。

「貴様　　ッ！」

瞬時に腰のホルスターのベルトを外し、ベレッタM92Fに手を掛け同時に安全装置を外す。そして目の前の青年に向けて威嚇のつも

りで構えた
のだが。

グシヤリと。

正面から何かがベレッタにぶつかり、その銃身を叩き潰したのだ。憲兵はそれを理解出来なかった。否、彼の持ちうる知識において、それはあり得ない事だと思っていたからこそ、それをすぐには理解出来なかっただけだ。

だが改めて拳銃を直視し、それが完璧に使い物にならない状態になった事を確認する。そして再び正面を見ると、先ほどと同様に青年の拳が正面、拳銃を構えていた位置に置かれていた。

そういった順を追って、ようやく憲兵は現状を理解する事に成功した。

この青年は拳一つで拳銃を叩き潰し、同僚をたった一撃で気絶させたのだと。そしてその全てを判断出来たのは、自分が同僚と同じように膝を追って倒れながらの事であった。

「クーちゃん」

その身を真っ黒な服で統一した青年の声に、トテトテと小さな女の子が前に出る。

手には小さな鉢植えがあり、土からは小さな花が咲いていた。それを前に掲げる。

すると次の瞬間、その花は爆発的に成長を遂げ、花から大樹へと進化を遂げた。根の太さは1mを軽く越え、長さは駅の改札口の全面

を壁のように塞いでしまっていた。

しかしその一角だけは穴が空いており、そこから先ほどの青年の一行は中へと入って行く。少女はそれを見送り、姿が見えなくなった時点でその穴を樹の根で完全に閉じる。

少女の役目はここまで。少女は鉢植えをその場に置き、そのまま自らの住居へと帰っていった。

その先で青年達は駅内を走り、ホームを目指して階段を駆け上がっていく。

その階段の踊り場に出た瞬間、上のホームに二つの影が視界に入る。改札口付近に立っていた憲兵と同様の服、間違いなくM・B・Iの人間だった。それを認識した途端、一団の中から一つの影が前に出る。袖を切った巫女服に真っ赤な袴、二つに結び分けた長い黒髪が特徴である。

少女は手にしている弓を前に掲げ、腰の下げた矢筒から二本の矢を掴みつがえた。そして狙いを定める時間はおよそ一息と呼ばれる合間であり、少女の手を離れた矢は正確に憲兵二人の顎を捉えていた。改札口の時と同様に、憲兵は膝を折って倒れる。一団はそれを確認する間も無く、駅のホームへと飛び出した。

「頃合いかな」

「で、ですね……………ぜえっ、ぜえっ……………」

一団の内、三人は息も絶え絶えになっていた。休憩のつもりか、三人は椅子に腰を下ろしている。

時刻は十時五十九分。作戦始動まであと一分を切った。そんな中、

青年は三人に呟くように話しかける。

「もう息上がってるの？ それじゃこの先持たないよ三人とも」

「がっ、頑張り……………ますっ……………！」

「や、やってやるよ！」

「は、はいッ！」

直後だった。フツ　　といった感じに、駅を含んだ周辺が一斉に停電した。

ここから距離はあるが、同時進行しているもう一方　　瀬尾の班が作戦を成功させたという事だ。

瀬尾家は帝都北側の電車の変電所を襲撃し、そこ一帯を破壊。この時間から一定時間まで電車をストップさせる事が目的である。この間に青年達は、背後の二人を引き連れて鉄橋を渡り切らねばならない。

脱出には時間制限付き、一団のうち三人が脚が普通もしくは遅い。そんな限定条件が付けられた上で、黒の青年が執った行動は至極簡単な事だった。

「結ちゃん、煌刃、地天。急ぐよ」

三人に指示を出すと同時、名を呼ばれた者達はそれぞれ事前に割り振られた担当の者へ歩み寄る。

結は皆人へ、煌刃はお姫様だつこの要領で久能を、地天は背中に背負うようにハル力を。各員はその状態のまま終電前のホームを飛び出し、レールの上を外北側へ向かい一斉に走り出した。

全速力を以てレールを走り抜け、その先にある鉄橋を目指して一直線に進む。

道中に停止している車両を見たが、中の乗客が青年達を何とも言い難い目で見えていたのは言うまでもない。それをおよそ無視しその先、鉄橋がようやく視界に入った。距離にして100mほどか、一同は更に脚を速める。

しかし橋に踏み込んで数分と経たず、先頭の青年は脚を止めた。後続の全員は先頭の突如停止に反射的に止まり、青年の前方鉄橋の半ば辺りを凝視する。するといた、鉄橋の半ば辺りに人影が二つ。

「佐橋君達は下がって」

青年は勇んで前へ歩み出る。すると前方の人影の片方、左手の影が動いた。青年と同様に前へ歩み出し、なんともやる気のなさそうな歩調で二人は間合いを詰める。

そして互いの姿が正確に認識出来る間合いに入って理解したのは、影の人物は女性でセキレイだという事だった。真つ黒な振袖に下にはスパッツ、保護用のグローブとまとめ上げたピンクの髪。

「へえ、ホントに来たよ。脱出狙いの集団」

「……………という事は、誰かから情報が流れてたって事が。」

「有名人は辛いねえ」

「うちの知り合いからの情報でね、スツゴク強いヤツが脱出の手助けするって話聞いたからさ。だから一時間くらいここで張り込んでたんだよ。あー暇だったー」

首をコキコキと鳴らしながら、少女は身体を伸ばし解していく。青年も拳を握り、身体を伸ばし解していく。そしてお互い一応程度に名乗りを交わした。

「懲罰部隊所属、 “ 緋い鵓鴿 ” No. 105・紅翼^{へいしほや}」

「葦牙・無所属、虚刀流想像者・白羽黒人」

「じゃあやっぱアンタが黒が話してた“セキレイ殺し”なんだ。そんな強そーにはみえないんだけどなあ……………ねえ、実はセキレイが闘ってたのを嘔吐してたってオチは？」

「ないよそんなモン。正真正銘、全部僕の戦果だ」

「……………あつそ。蒼、暇ならあの後ろの連中と遊んだら？ ボクはこつち殺るからさ」

「……………紅翼、また、取られた……………まあ、いい。向こうで我慢、する」

ゆったりとした歩調で紅翼の後を追ってきたセキレイは、相対する

黒人と紅翼の横を通り過ぎ、黒人の後方に控える一団に向かい合う。紅翼と同じ黒の振袖、だが紅翼とは違いその大半がボロボロになっている。その上身体中に包帯を巻いていて、素肌が見えるのは首から上だけと言う極めて奇妙な服装だった。気だるそうにしている彼女からは、およそ覇気や闘気と呼べるモノは感じられないが。

「NO・95・久能と認識……………そのセキレイを、渡せ……………」

「だ、誰が……………誰がお前みたいのに渡すか！」

「……………成る程。抵抗の意思有り、それに……………」

セキレイは久能と彼女を庇うように抱いている少年、鷓鴣ハルカの周囲をまじまじと見回す。

視認出来るだけでも葦牙二人、セキレイは計六羽もいる。しかもM・B・Iと帝都内では既に噂となっている“セキレイ殺し”のセキレイとなれば、彼女は紅翼のように油断は出来なかった。

「“蒼い鶴鴣” NO・104・灰翅^{はいはね}……………貴様ら全員、機能停止

……………」

至極真面目に灰翅は構える。彼女の両手、そこには軽装甲に包まれた前腕部と、五指にはそれぞれ刃渡り30cmはあるつかという鉤爪が付いていた。だが

「「「「さーいしょーはグー、じゃんけん

「「「「

ポンツツツ！！！！！！！ という掛け声に、四人が己の右手を高速で突き出す。

グー、グー、グー、パーの順で突き出された手を辿って行くと、パーを出していたのはミニスカートの巫女服を着た豊満な胸の少女だった。少女ははしゃぎ気味に跳ねると、その勢いそのまま前へと踏み出す。

「NO・88・結^{むすび}、拳系です！」

「……………バカにしてる、のか……………！」

慢心する者と達した者、無垢な者と堅調な者。緋と黒が相対し、黒と背中合わせに蒼が立ち、桃と相対する。黒人は壱の構え・鈴蘭^{すずらん}を執り、三人はそれぞれの構えを執る。

互いに睨み合い、戦闘に参加しない者は護衛対象を守る為に一步後ろに下がる。

そしてようやく、戦闘が始まった。四者が一斉に前へと走り出し、眼前の敵へと己が得物を振るった。

「とりあえず軽く死んじゃえッッッ！！！！！！！！！！」

踏み込んだ左足で前方に跳躍し、空中で身体を左に捻りながら右拳を振り抜く。

僕はそれをより速く前に出る事で行き違いになるよう、紙一重で回避し、互いの立ち位置を変えるようにそれぞれが交差する。空中に跳んだ紅翼よりも地面を走る僕の方が反復は速く、瞬く間に踵を返し後方の紅翼に向かって跳躍する。

だが懲罰部隊と呼ばれるだけはある。紅翼は空中で身体を更に捻り、頭上から飛来する僕に対してガード体勢を取っていた。しかし最早攻め手を止める事は叶わない。ならば、防御ごと打ち崩す！

「虚刀流・木蓮ツツッ！！！！！！！！」

袈裟斬りのように繰り出した蹴りを、紅翼は空中で構えた両腕で受け止める。

そして衝撃が消えたのを見計らい、彼女は腕を払って蹴り脚を僕ごと吹き飛ばす。

さらにその反動を用いて彼女は後方へと下がり、調子を確認めるように両の手首をコキコキと鳴らし、腕の筋を伸ばす。身体を捻り綺麗に着地した僕も、再び“きの構え”を執る。紅翼は口笛を吹いて、

「やるじゃんアンタ。これならちょっとは楽しめそーかな」

「ちょっとじゃなくてトコトン楽しませてあげるよ、気が狂うくらいにね」

「うわ、下ネタ？ 下品なのはさ マジ死ねっての」

×

×

シュオンツツッ！……！！ という風切り音を立てて、灰翅の鉤爪が空を切った。

その音は、灰翅の五指に着いた鉤爪が奏でるモノ。だが一度だけではない。

反し突きの刃の音は幾十度にも重なって辺りに響き、結をひたすらに攻め立てる。

その刃を受ける結は身を小さくし、左右に身体を動かして最小限の動きで鉤爪を避けていた。否、速すぎて避けるのが精一杯なのだ。だからこそ冷静に、灰翅の甘い攻撃を見極めようとしているのだ。

だがそれに気付かない灰翅ではない。伊達に懲罰部隊は名乗っていないという事だろう。

灰翅は鉤爪による攻撃を二段構えで行い、一撃目を反撃しやすい甘い攻撃とし、二撃目を正確無比な追い討ちとしていた。これのせいで結は一撃目の時に攻め込もうにも、二撃目のせいで迂闊に攻め込めないでいた。

まして拳系と鉤爪という、相性としては中々に分の悪い勝負でもある。拳の届く間合いよりも鉤爪の方がリーチがあるし、なにより先に言った通り、灰翅の動きが結にとっては圧倒的に速すぎるのだ。

「処刑の爪……………！」

さらに攻撃の速度と手数が増す。今度は一撃目もより正確に、二撃目は一層無慈悲に。

大振りに見える攻撃も、実は隙の無い連続攻撃の布石。結は防戦一方に決め込むしかなかった。だがそんな中、結はある事を思い出す。それは作戦決行の昼間の事だ

『武器の組み手?』

「そう、言い換えるなら“対武器戦闘の方法”と呼ばうか」

黒人は庭に近接組を呼び集め、達人としての『戦闘におけるコツ』を語っているところだった。

縁側には横並びに一同が会し、暇なのか能力系もその奥の居間から遠目に話を聞いていた。語り手の黒人は庭に出て立ったまま、いつもの調子で至極真面目な話を続ける。

「じゃあこの中で武器系との戦闘経験ある人は拳手。勝ち負けは抜きね」

すると全員が手を挙げた。結を始め月海や鈿女ウツメメ、白羽家の一同が手を挙げている。

白羽家の面々は葦牙で家長たる黒人から近接格闘及び対武器術の訓練を受けている。だから『対武器』や『対格闘』のどちらに対しても拳手する事が出来る。

しかし佐橋家の面々はそうはいかない。参加しない月海は抜きにしても、結はNo.43・夜見との戦闘が最初で、後は大家みやからの手

解き程度にしか戦闘経験がない。だからこそ、戦闘において経験豊富な黒人がその“コツ”を語っておくべきだと判断したのだ。

「家の面々は毎日のように言い聞かせてるからいいとして、あとは結ちゃんと細女ちゃんだね」

「結も実は経験があんまりないんですよね」

「あたしはまあ普通かな。何回かやり合った事もあるし」

「よし、じゃあまずは何を教えようかなーっと……………」

足元に置かれていたカバンのジッパーを開き、中をまさぐる。

そこからは『ガチャガチャッ!』という金属やら何やらが擦れあつたりぶつかる音があたり鮮明に聞こえて来て、それが無駄に一同のインスピレーションを働かせていた。

そうして黒人はカバンからあるモノを取り出した。刃を革で覆った、三本爪の鉤爪だ。

「例えばコレ、鉤爪。これの一番の対処法は何でしょうか？」

黒人はそれを徐おもむきに手に装着し、革の鞘を外して刃を見せつけるように翳かきした。

結達はそれぞれの対処法を考えるも、ベストと呼べるモノに行き着けずにそのまま黙り込んでしまう。白羽家はそれによく黒人から教え込まれているので、今更考える事もない。

この後には夜の為の寝溜めの時間が待っているので、黒人は回答を待たずに話を進める。

「まずは刃物の特徴を話そうか。これは世界各国共通、およそ全ての刃の武器に言える事だ。

刃物とは本来“ 斬る為のモノ”、だから刃物は必ず一面が非常に薄く鋭く研がれている。日本刀なら『切れ味で斬り裂く』事を持ち味にしているし、西洋剣は『重量で叩き斬る』事を持ち味にしている。いずれにせよその刃は非常に鋭く、触るだけで切れるなんてのは当たり前な事だ。そもそも、刃に触れる事自体が間違いだしね。で、最近刃物の多くは前者の日本刀のように片面にのみ刃を備えたモノが多いんだ」

西洋文化においては武器の種類は並々ならぬ多さを誇り、儀礼用や訓練用のモノを含めれば数は圧倒的な差がある。剣一つで数が百を越えるのがいい証拠だ。

だがその大半は『量産』『破壊力』『汎用性』を重視していて、切れ味はあるがすぐに切れなくなるし、存外簡単に折れる。故に一刀一殺の為に諸刃もろはにしているのだと、黒人は持論を語る。

「この鉤爪のように刃が片面しかない武器の対処法。それは意外と簡単なんだけど、実戦でやろうとしたらリスクの方が圧倒的に高いからオススメはしない。だからこっちはオマケで覚えといてね。片刃の武器の対処法は」

コッソ。

「ツツツ!!!???」

灰翅は今日初めて、心底からの驚愕を味わっていた。

それは結が灰翅の攻撃に対し後退を止めて、拳を構えた後に起こった事だ。

それを反撃の意思と受け取り、先程と同様に右の鉤爪で袈裟斬りを繰り出し、後に左で斬り上げの追い討ちを喰らわせてやると灰翅は思っていた。だが現実はそうはいかなかった。

灰翅が繰り出した右の鉤爪を、結はおよそ紙一重で回避する。それこそ胸元の服が掠れ、五指のうち三本の切傷が服に刻まれるほどにギリギリの距離だ。灰翅はそれを“反応仕切れていない”と判断し、一気に仕上げに掛かっていった。

しかし次の瞬間だった。

振り抜いた右の鉤爪の“裏側”に対し、結は右の裏拳を打ち込んだのだ。

攻撃を受けて引き下がる“と考えていた”結に、続けて左の鉤爪を放とうとしていた灰翅は必然的に左手を引いていた。所謂溜めいづるの動作である。

故に右の鉤爪を弾かれた事で体勢は一気に崩れ、身体は左方向へと捻る形で結に隙を曝さらしてしまっていた。驚愕の中、灰翅は見た

結が『してやったり』とした表情を浮かべていたのを。

つまり。あの紙一重の回避も、それ以前の反撃の構えも。

それら全てが、この一瞬の為の下準備せうびんでしか無かったのだと、灰翅はようやく気付く。

そして眼前にて、結と呼ばれる近接格闘系のセキレイは左の拳を握る。それに対し、灰翅は心の底から焦りを覚えた。それは自分が他のセキレイに比べて耐久性というモノに乏しいという事を自覚しているからであり、故に灰翅の行動は半ば身体を酷使する形でしか行えなかった。

「はああツツツ!!!」

「ぐむっ!?!」

結の拳が隙だらけの右脇へと打ち込まれた。その衝撃だけで灰翅はおよそ5mほどの距離を吹き飛ばされる。しかし地面に体が接触する事はなく、滑り止まるように灰翅は自身の身体を制止させた。

しかし結の表情は浮かない。攻撃に成功した筈の彼女だが、その手応えには違和感を覚えていた。この感覚は、肉とは違う別の

金属類を打ちつけた時の感触だと。それは正解であり、距離の空いた灰翅の右脇には左手が、放たれた結の拳との間に壁のように挟まれていたという事に気付く。

灰翅は衝撃をモロに受けた左手と、その余波を受けた脇腹の調子を確かめつつ両の鉤爪を構える。

「やる、な……………」

「結、負けませんから！」

×

×

「ほお、結ちゃんはやっぱり強いなあ。基礎が良いのかな……………」

「よそ見すんなよこのツツツ……………」

砲弾並みの破壊力を込めた拳が放たれ、それを後ろに一步下がって回避する。
それが立て続けに放たれ、僕は若干余所見をしながら紅翼の攻撃を凌いでいた。

「ちよこまか逃げないでよ！ さっさと殺^ヤられろって……………」

「ええー、やだなそれ」

右のフックから始まり、左ストレートから右ストレート。ボクシング風のスタイルで、下がる僕を追い詰めるように攻め続け、果ては跳ねて空中二連回し蹴りである。

それらを決して真っ向から受け止めはせず、左右に受け流して攻撃の軸を逸らしていく。

時折牽制の打撃を混ぜたりもするが、それも猪武者のように突っ込んで来る彼女にはあまり効果が無い。

「もう二十分も経ってるのか……………これは不味いかな」

「はあ！？ さっきからワケわかんないっての！！！」

それもそうだ、全てこちらの話だから彼女に分かる筈もない。

停電から既に二十分近く経つ。おそらくあと十分もすれば電力は復活するだろう。

もう少し紅翼の実力を見てみたかったが、M・B・Iが大軍を送ってくる事も予想出来る。なによりこの場にはいない“彼女”が来たなら、間違いなく形勢は逆転する。

彼女を知る僕や魅弦にしてみれば、彼女こそが最大の恐れ、最後の難敵。懲罰部隊の事を知ってから、この作戦は『速攻離脱』を必定としている。アレと闘うのはいくら闘い好きな白羽黒人にしたって、ヒメノコ御免被る。

「では早々に退場願おうか、懲罰部隊のお嬢ちゃん！」

「誰がお嬢ちゃんだ誰が！　ボクの名前は紅翼だツツツ！！！！！！」

一層力んだ拳が振るわれる。当たると身体が木端微塵に損壊するレベルの打撃だ。

避けるのはハナから至難。だからこそ僕は恐れず前に踏み込み、拳に真っ向から向かって行く。

弧を描く彼女の腕に、直線に移動する。噛み砕いて解説するなら、自ら攻撃に当たりに行っている。そして眼前数cmと迫る時、首だけを逸らして拳を鼻先一寸足らずで避け、右の貫手ぬきでを鳩尾目掛け穿つ。

紅翼の視線が、瞬く間に僕から己の鳩尾へと移る。それは『しまった』という表情で、

「忒の奥義・花鳥風月ツツツ！！！！！！」

若々しい赤い血が、コンクリートを真っ赤に染め上げた。

此処に第一戦の勝者が決し、敗者は大地に平伏す姿を晒した。

第二十八話

“Duel”

the Dead Bridge

一節（後書き）

試しに書いてみた文字通りの前書き。

如何だっただろうか……………？

日本を遙か離れ

地図に載らない島、かみくらしま神座島。

その島の中心部、そこには一隻の巨大な船があった。船、ではなく舟 俗に言う、宇宙船。

その中の一室で、一人の少年が深い眠りについていて。とは言っても眠っている場所はシーツの掛かった柔らかいベッドではなく、柔軟性に富んだウール状の材質を敷き詰めた、未来的なカプセルだ。そしてその真横、白衣を着た青年が二人立っている。かたや眼鏡に黒髪、かたや茶髪にジャージ。研究者らしからぬ姿だが、この二人はこの場における最高権力者であるのは間違いない。

「……………この事、高美さんには？」

「言っていないさ。いくら私が言おうとも、こればかりは反対されそうだ」

「全く以て」

カプセルの傍らにある空中ディスプレイには、少年の事細かなカルテが表示されている。

心拍数、血圧を始めとし、呼吸のリズム、新陳代謝、筋肉の活動、内臓の状態、彼の身体の全てを機械が把握している。そして同時に、

内部では催眠性の高いガスをごく微量ずつ散布し、少年の眠りを助長している。

若者は、青年に問いかける。

「これはいつから？」

「一年前だ。彼は私の知り合いの息子でね、ある日不幸な事故で意識不明・半死人の状態で運び込まれ、病院が手をこまねいていた処を報せを受けて神座島（こま）につれてきたんだ」

ジャージの青年が此処に来たのはつい最近の事だ。

そして来るや否や、すぐに青年にこの部屋に案内された。

そこにいたのは、昏睡状態になってはや一年になるうかという不幸な少年の姿だった。半年前までは内臓のほとんどを機械で代用していたが、最近になって適合出来る人工の内臓を製造する事に成功。すぐに移植し、完治に一歩近づいていた。

……だが、身体が治っても意識が戻らなければ意味がない。少年が戻らなければ無駄でしかない。それでも青年は治療を止めなかった。いずれ、目を覚ますと信じて……

「で、この子の名前は？ 誰の子供なの？」

「彼は、名を白羽黒人……………そして、私の甥だよ」

第二十九話 “Duel” the Dead Bridge 一節

人というのは、歴史上最大の神秘と秘密を持った
奇跡の代物である。

頭部から首、四肢と関節、骨格と内蔵、筋肉と皮膚、五感と脳髓、
思考と感情、自己とその肉体。

人類の祖たる生物が誕生してからおよそ一万年以上経過し、年々そ
の身体は進化を続けている。その身体には赤い血が流れ、知能は絶
える事なく蓄積され、次代へと受け渡される。それが、人の営みで
ある。

ではその人体に、外部からの接触を行なった場合どうなるのか。では一番身近でありながらも縁遠い『刺される』という事を主旨として話してみよう。

包丁を持った事のある人なら、生活で刃物に触れる機会のある人なら一度は指を切った事がある筈だ。

その際にまず覚えるのは指を切った時の痛みと、自身の血液がすぐには流れず、ゆっくり染み出て来るといふ事だ。幼い頃には痛みの後にそれを不思議と思い、それが自身の事なのかと疑ったりもするかもしれない。

しかしそれは『切れた』であつて、刺された訳ではない。刺された場合、その血の出方は切れた場合とは大きく違う。

何か刺さつたままの場合だとそれが蓋となり、血が流れるのを僅かだが遅らせてくれる。包丁で刺されたら『抜くな!』と言われるのはこれだ。寧ろ抜けば大変な事になる。

何も刺さっていない穴。人体という血の流れる穴のない物体に無理矢理穴を開ければ、当然そこから血液はあるだけ流れ出てくる。つい数秒前まで自分の身体を巡っていた血液を見るのは、中々にキツイモノがある。

だがそれは『刺された』と認識出来る程の冷静さが残られている場合の後であり、実際に刺されればおそらく痛みと驚愕、死への恐怖で刺された理由を模索する事など出来ないだろう。

なら認識出来ない場合はどうなるか。

声を上げた。それはなんとも間拔けな、力の無い声だった。ゆっくりと己の腹部を見る。鍛えた身体は、他者への敗北を許さない自慢に溢れている。

人間と同じでありながらも人間を超える力を持ち、それを理性を以て振るう。だがそれは他者の為でなく、己の為に他ならない。それは自慢であり、誇りでもある。その為に自らを鍛えているのだからだがそれが突如として壊れた。肉体という血と肉と自身の詰まった“袋”が破られ、痛みよりも先に茫然自失となってしまっている。『何故自分が刺されている？』という、在り来たりな疑問だ。

だが刺されていると認識した以上、次に襲ってくるのは他でもない痛みである。

しかし刺された当人は刺された事とその痛み以上に“誰に刺されたのか”を疑問に抱いていた。

ズブリ。

腹に刺さっていたモノがさらに数cm深く身体を抉り、貫いていく。皮膚をさらに裂き、肉を斬り、臓腑ぞうぶを破壊しながら“原因”は前へと進む。

肉を貫かれる感覚はより鮮明に、だが痛みが来るよりも先に当人は己の背後を見た。

くるりと

視界に入ったのは灰色の布。羽織と呼ば

れるその端を辿って行くと、その先には黒い振袖があった。と、同時にその手に握られた“原因”をようやく認識する……………長さ
は七尺程だろうか、現代換算して二m超の日本刀だった。

刀をまじまじと見て、ようやくその視界を上へと向ける。

自らを刺した、誰かを見定める為だ。しかし刺された者はそれが誰なのかを何となく理解はしていた。故に『何故?』という疑問の言葉
を口にするよりも先に、口にしたのは自らを貫いた者の名前

その名は。

「からず、ば……………?」

「やあ、久しぶりだねえ。あの時よりも強くなっててなによりだよ」

頭部後ろで結った灰銀色の長髪、濁った灰色の瞳と不健康な程に白
い肌。

細い四肢と少しトーンの低い声、両の手で突き刺した長刀は、青年
の腹を確かに貫いていた。

青年が着ている黒い服の上からもわかる程に、彼の鮮血イソチが溢れ散っ
ていく。

青年は視界が徐々に掠れていくのを感じていた。首を右に捻ってい
たから、その隅に映る敵の少女セキレイ・紅翼の表情もなんとか見て取れた。
青年以上に驚き、そして同時に恐怖を覚えている。

その鳩尾には青年が突いた貫手が丁度ギリギリ服に触れる位置で止

まっついで、あと数秒遅れれば間違いなく彼女も青年と同様、もしくはそれ以上の惨状をその身を以て引き起こしていた事を紅翼は理解した。

腹の臓腑を逆流してきた血液が黒人の口から噴き出す。

ここに来て青年は、自らが考えうる限り最大の危機的状況に陥った事を理解した。

セクレイNO.04・鴉羽^{からすば}。

“ワケ有り”とされるシングルナンバーの中では現在最強とされ、闘える個体は存在しないとされる。それは最強の葦牙たる黒人も例外ではなく、彼とそのセクレイ達を含め集団戦と持ち込んで闘った場合の勝率は

ゼロ。

「君も良いね。でもねえ
じゃないとダメなんだ」

自分はやっぱり、あの人

腹の中の異物が動いた。背筋に沿って縦に刺し貫かれていた刀身が横を向く。

白刃は左の脇を向いて、鴉羽はニヤリと笑った。そして文字通り

斬り裂いた。

×

×

心でそう叫んでいた時だ
落ちてきた。

不意に視界の外、上側から何か
帝都側を背にする自分と外を背に右手に立つ青年、白羽黒人の背後
にそれは突如として現れた。

青年は意外と背が高く、肩幅も背中も大きい。その為、彼の背後に
立ったなにかを紅翼には見えなかったのだ。だがほんのコンマ数秒
の事だ　　白羽黒人の腹部を、鋭利な刀が貫いていた。

紅翼は自らの胸部、鳩尾に触れる位置で止まっている青年の貫手を
見て、止まっていた呼吸を再開する。気付かれない程度に早く、す
ぐに呼吸を正して。改めて青年の背後の存在を確認する。

知っている。この女を、紅翼はよく知っている。

名を鴉羽。“ワケ有り”のシングルナンバーの一人であり、自分が
所属する懲罰部隊の筆頭だ。

「　　からす、ば……………？」

「やあ、久しぶりだね。あの時よりも強くなつててなによりだよ」

彼女の持つ長刀は確実に青年の腹部、胃より少し下の辺りを刺し貫
き、その服にジワジワと真っ赤な血を滲ませていた。青年は敵前で
ありながらも躊躇い無く背後に振り向き、その存在を確認する。

鴉羽はそのままなんの躊躇いも無く

葦牙・白羽黒

人の腹部を横一文字に斬り裂いた。

弧を描くように刀身に付着した血液が遠心力で払われ、腹からは血
がドクドクと流れ出す。

青年はその勢いに、まるで糸に吊られているかのように引つ張られ、その身を庇う事なく倒れた。

倒れた後もその身を中心に、コンクリートの地面は赤に染め上げられていく。青年は出血多量によるショックにより度々痙攣を起こしているが、それ以上に　　これは不味い事になったと、紅翼は思った。

「く、黒……………？　　葦牙って確かマジに殺^ヤつたら、ヤバいんだよね……………？」

「そうだよ。“それがどうしたんだい？”」

ゾツとした。目の前の女は、青年を手に掛けた事を全く気にもしていない声と、無機質な目だ。

葦牙を殺す事はM・B・Iから禁じられている。鴉羽は勿論自分達も、セキレイ全体が分かっている事だ。

理由はちゃんとあるが、今はそんな事そっちのけだ。この女はM・B・Iが敵に回っても平気だ、と、遠回しに口にはしている

つまり、懲罰部隊である自分達が敵に回っても怖くないと、そう言っているのだから。

x

x

葦牙の青年・佐橋皆人は今日一日で何度も驚かされていた。

駅での黒人の早業に始まり、鉄橋に来てからの戦闘への意欲。進んでセキレイに挑む勇氣。

そして戦闘が始まってからの彼の動き。『曰く付き』と称される懲罰部隊を相手に余裕の一言。まるでヒラヒラと踊っているかのような動きで惑わし、かと言って反撃する訳でもない。

その視線は眼前の少女ではなく、自分達に近い方
結ちゃん
の方に向いていた。

遠目にもよく分かる。彼は全く以て余裕しかない。目の前の少女など最早相手になどしていないと。

「白羽さんスゴいですよね……………ホントに強い」

「そりゃね、うちの葦牙は“セキレイ殺し”の異名を持つ変態だから」

「……………変態？」

「けど、ありゃ遊びすぎだな。相手の方がたぶんイライラしてんぞアレ」

「あーなんか分かる。あたしも最初黒人くんとやりあった時『なんだコイツふざけやがってー！ツツツ！！！！』』とか思ってたし。でも強いなあー、ありゃあたしは無理だわ」

白羽さんのセキレイ、煌刃さんと地天さん。そして出雲荘の同居人、
細女こめさん。

全員が色とりどりなセキレイとしての正装を纏いながら、各々の意思を口にしていく。細女は実体験に基づいた話だが、皆人は『やりあった』というところを聞き逃さなかった。

「ってかアレマジに同じ人間かよ……………強すぎだろ」

「……………スゴいです」

「それはもう。既に一対一では二羽も倒していますから」

「……………無双。也」

今回の脱出計画の第一人者、鷗ハルカとそのセキレイ・久能くの。あまりに弱いから、まともに戦っても敗北は目に見えているからと言うのが理由だ。

そんな彼らの言葉に答えたのは、同じく白羽黒人のセキレイ・魅弦と鶴だ。彼女らは戦っている姿こそ白羽黒人である、とでも言いながら彼を評した。その表情には心配など微塵も感じていない。

過去の戦闘や彼の持つ実力を換算すれば、寧ろ心配するなど無礼だとすら思っているのかもしれない。そんな青年の姿を見て、皆人は羨ましく思った。

もし自分にもあんな力があれば、結ちゃん達を守れるのに………と。

しかし同時に、皆人は彼の強さが一朝一夕で手にしたモノではない事を知っている。

おそらく幼少の頃からの気の遠くなるような鍛練によってじちか培われた、経験と技術の力。そして鍛え抜いた身体から生まれるモノこそが、彼の生涯の宝なのだ。故に憧れるのだと。

「あ、決着つくみたいだよ」

細女の声に、全員の視線が鉄橋の半ば辺りにいる二人集中する。

黒人の動きは先ほどのように遊んでいるモノではなく、隙を狙って動くモノに変わっている。

此処からは聞こえないが、彼は今もあのセキレイの少女に罵詈雑言ちよっかいを出して挑発しているに違いない。だから彼女の動きが徐々に大振りになっていくのだろう。

そして次の瞬間だ

黒人の姿が消えた。

たぶんあの少女の影に隠れているんだろう、皆人は単純にそう思っていた。

だが違う。距離があるからこそ、その全体図を事細かに視認出来たからこそ、そう言える。

少女の右側、その地面

そこに、黒い影が倒れている。

皆人が立つ位置から約五十mほど離れた場所に、真っ赤な池が出来ていたのだ。黒人は、その中心で横たわり、ビクビクと痙攣している。

「あれ……………えっ？」

皆人は言葉を発する事が出来なかった。少し遠い場所で、見知った者が血塗れになって倒れている。ただそれだけの事なのに

言葉に出来なかった。

正直、こんな時に『大丈夫？』とか『どうしたの？』とか聞くのも変だ。

血塗れになっている人間を見て、寧ろ優先するのは110番だろう。だがこの場で皆人は、

「白羽さんツツツ！！！！！！」

ただ、名前を叫ぶ事しか出来なかった。否、それ以外何も浮かんで来なかった。

しかし、皆人の周囲にいた者達は違った。皆人が声を上げるよりも早く、動いていた。

x

x

ゆっくりと
鴉羽は自らの頭上、視線上では紅翼の後方を見上げた。

紅翼もそれを視認し、咄嗟に脇へと退避する。其処には狂気染みた双眸そっぼうと、人に在らざる表情を浮かべた女性が、巨大な剣を持って自分に襲いかかって来ていた。だが鴉羽はこんな“日常”に焦る事も無く、手にした長刀を掲げてその黒刃に手を添えて、

ガッギイイイイイイイインツツ!!!!!! と。

質量にして100kg以上はあるだろう鉄の塊を、鴉羽は難なく受け止めた。その衝撃の余波で、受け止めた本人よりも先に足元のコンクリートが砕ける。だが鴉羽は邪悪で異質な笑みを絶やす事は無い。

そんな中視界の先
五十mほど先の方で、一人の少女が弓に矢をつがえているのが見えた。自らの背丈よりも大きな弓を取り、放たれた矢は真っ直ぐに此方へと翔んできている。それを見た鴉羽は、彼女達が連携して自分を殺しに来ているのを再認識した。だが

「「なツツツ!!!?????」」

鴉羽を間近で見ている煌刃と、弓兵故に視力に優れた魅弦は現状に驚嘆の声を上げる。煌刃の眼下
心臓目掛け放たれた矢は、

其処には無かった。第三者の介入も無かった。ならば何処に？ と聞かれれば　それは鴉羽の口に、と答えよう。それ以外に解は無い。

鴉羽はあの一瞬、魅弦が自らの何処を狙い矢を放ったのを見切っていた。

そして身体をほんの少し屈め、胸元に届く寸前に矢を噛み、見事に捕まえたのだ。

既に100kgを超える物体を支えながらのこの超反応。流石に魅弦達も驚き以外何も感じなかった。だが魅弦は驚嘆しながらも、彼女の強さを以てすれば有り得ない事ではないと納得もしていた。古い知り合いには分かるが、昔からの彼女を知らない煌刃にはそれは分からない。しかしそれがどうした　自らの葦牙を助ける為なら、古い知り合いであろうとも敵ではないか。魅弦はありつたけの声を上げて、

「地天ツツツ！！！！！！」

その名を叫んだ。名を呼ばれてなお速く、地天は鴉羽の眼下に迫っていた。

三人は別に怒り任せに動いていた訳ではない。その全ては葦牙である黒人を助ける為に他ならない。

だから無意識にはあるが、作戦のようなモノは出来ていた。煌刃が真っ先に突撃し、鴉羽の動きを止める。そしてその隙に魅弦が鴉羽を射殺す。それが失敗したならば　地天が突撃し、仕留める。

現状は第三段階。地天はその直感に従い、鴉羽に突攻を仕掛けた。

矢が放たれると全く同時に、地天は駆け出す。それこそ、弾丸の如き速度と言っても差し支えないだろう。重力制御もあつての事だろうが、それにしても速い。

そんな彼よりも矢は先に鴉羽に到達し、当然のように矢は彼女に止められてしまう。そんな彼女、葦牙である黒人が勝てない相手に、自分がどうして勝てようか　　理性はそう語りかける。

だが感情は違う。例え勝てなくとも、自分が機能停止する事になつても。それでもアイツを助ける、それが地天の決意だった。左手に七倍の重力を保有した重力球グラビボールを待機状態で固定し、左手を伸ばす。

あと五十cmと迫り　　地天は気付いた。

自分の頭上に、一本の線が。鴉羽の右足が上がっているのを。

「がッ

」

振り下ろされた足は確実に地天の頭部を捉え、問答無用で美女に虐げられる美男の図が出来上がった。その声さえも遮り、鴉羽はさらに笑みを浮かべた　　これら一連、合わせて三秒の間の出来事である。

「おや……………?」

鴉羽は疑問の声をあげた。それは自身の左側に倒れている筈の青年が、見当たらないからだ。

ほんの少し視線を外へ向けると、そこには青年を背負って飛んでいる小さな姿があつた。幼女は青年をそのまま連れていくと、鈿女の

前で横に寝かせる。

「ゴメン黒人くん、少し痛いけどガマンしてね……………」

腕に巻いていて比礼を伸ばすと、それを器用に黒人の身体に巻いていく。

傷口から内臓が零れないように、そして止血の意味合いを込めての応急措置であった。さらにシヨックで舌を噛み切らないように、口には猿轡のように捻った比礼を挟んだ。

「……………」

鶴はふらりと立ち上がり、鈿女の前に壁になるように立った。

その前方には 服と身体を裂かれた結と、その実行者である灰翹がいた。

x

x

それは当然の事だった。

自分達の少し先で、一緒に戦っていた人が倒れた。

その人はセキレイではなく、葦牙。本来なら、自分達が守るべき存在だ。

その人の身体から溢れ出した血は血溜まりを作り、彼はの身体は断続的に痙攣している。これはいけない。そう思い、結は青年を助けに行こうとした。

だが実際には自分よりも、それを見ていた彼のセキレイの方が先に動いていた。四人は全く同時に動き、三人が攻撃する間に鶴が視界の外から黒人を抱き抱え、救出に成功した。

鶴は黒人を鈿女の下へと連れ帰り、鈿女は黒人に即座に応急措置を施す。

全員が己の成すべき事を理解している、完璧な連携だった。

「……………無視、するな……………！」

しまった。と、結はとんでもない事を忘れていた事に気付いた。

自分は絶賛戦闘中で、自分が相対しているセキレイは並々ならぬ強さを誇っている事を。

咄嗟に気付いて回避はしたものの、胸元は切り裂かれ肌には赤い線が四本、さらに鉤爪によって発生した空気の衝撃波でその身は吹っ飛ばされ、鉄橋の支柱に背中からぶつかってしまふ。

「かはッ

肺の中の空気が強制排出され、数秒の呼吸困難に陥る。頭も打ったからか、千鳥足だ。

さらには揺れる視界の中、自分の葦牙　　皆人と今回の第一
者・ハルカと久能達の下へ、灰翅は近づいていく。しかも全員が黒
人にかかりつきりで、それに気付いていない。

逃げて　　ただその一言が、声にならない。結はそんな事を、何よりも悔しく思った。油断しなければ、もっと自分が強ければと、後悔が積み重なっていく。しかし、

「……………」

気付いてくれた。たった一人、前に出たのは　　鵜だった。

黒人を抱き抱えて逃げ去るだけの力はあるのだから、闘う事も出来るだろう。

だが結は呼吸を整えながらも、心配でならなかった。彼女は聞くところによれば能力系のセキレイだ。そんな彼女が武器系である懲罰部隊に勝てるのか　　いいや、無理だ。

結は皆を守ろうと、脚に力を入れる。だが双脚は震えるばかりで、立ち上がるうとはしない。まだ意識は多少なり朦朧もつろうとしているし、戦闘についてもおそらく敗北は目に見えている。

「逃げて……………」

声が出ない。

朦朧とする意識で、結はありったけの声を上げた。

「逃げて……………皆さん逃げて下さいッッッ！……………」

それを聞いた灰翅は笑いながら、鶴に迫る。

右の鉤爪を大きく掲げ、それを振り下ろした

ミシリ。

「
」
灰翅は声に出来なかった、その驚愕を。ただの少女の蹴りが右脇を捉え、二回りの差はある身長と実力で勝っているであろう自分を吹っ飛ばしたのを靴底で滑り止まり、痛みが残る脇を抑えながら灰翅は問いかける。

「……………なんだ、お前、は……………」

「……………能力系、セキレイNO・49・鶴ぬえ也」

幼女の言葉に、灰翅は違和感を覚えた。この幼女は今、自らを能力系と？

自分を吹っ飛ばした蹴り、あれだけの力を持ちながらこのセキレイは能力系と名乗るのか、と。

本来能力系のセキレイとは、肉体的な戦闘能力が低い代わりに能力による戦闘力の補足が基本だ。風や水、炎や電気。それこそ様々だが、大抵は補足の域を出て『能力系』強者』なんて常識が出来てしまっている。

実際能力系は強く、並のセキレイならば容易くやられるだろう。シングルナンバーのうち六羽は能力系で、一羽を除けば全員が圧倒的

「……………能力系、セキレイNo.49・鶴也」

な強さを誇る怪物軍団でもある、と鴉羽から聞いた事がある。

ならばこのセキレイはなんだ？

一体なんの能力を以てこれほどの力を有しているのか？

灰翅の疑問には終わりが無かった。だが答えは其処にある。

この幼女、鵜と闘えば答えは簡単に出る。能力系という以上、能力を使って闘うのは間違いない。ならばそうしよう、闘い、その能力を見極める

！

「処刑の爪……………！！」

結の時と同様、鉤爪の二段構えで攻撃する。甘い誘いの右と、必殺の左の連携。

結もこれに手こずらされたが、彼女は端から見ではいたが戦闘初見だ。避けられはしまい。

鵜は構えた。それは能力系とは違う、実戦的な戦闘の構えだ。能力系は数も希少であるため全員が同じなのは知らない。が、少なくとも灰翅はこの幼女が戦闘の素人ではない事は分かった。だから確実に、堅実に

その首を搔くために鉤爪を振るう。

しかし鵜の行動は予想外

否、予想など出来るもの

か。鵜は明らかに近接戦闘の構えをしていた。それは戦闘経験のある灰翅からしても判る。

そんなヤツが、いきなり謎の攻撃をしてきた。

グシャリと
灰翅は生まれて初めてコンクリートに
キスをした。

だがそれは数秒で解かれ、灰翅は素早く身体を起こして後方へと退避した。

そして身体の調子を確認しつつ、前方3mほど先にいる鶴をまじまじと見つめる。

……………今自分は何をされた？ 灰翅はそんな疑問を抱いている。

自分は確かに間合いを詰め、鉤爪の届く距離でそれを振るった。それは間違いない。

鶴も、その瞬間もだが全く動いていなかった。構えはあの葦牙と似たような構えで、右手を前に突き出し、左手は腰で握っている。構えたまま動く事もなく、何かを仕掛けた様子も無かった。

自分が突っ伏した地面を見る。まるで何かに押し潰されたかのように、目測2m弱がクレーター状に砕け潰れている。普通ならば、これを起こす場合は大質量の物体を叩き落とすか、それに見合う破壊力を持った何かを叩きつけるかの二択だ。

相手が能力系である事を考慮するならば、間違いなく前者。後者は近接格闘系の仕事だ。

発生条件、破壊力、範囲、予備動作、それらが分からない以上、灰翅は迂闊には動けなくなっていた。しかし動いたのは灰翅ではなく、鶴の方だった。

「ふっ！」

前屈みに、体重を前に掛けるように走り出し、前方にいる灰翅目掛け一直線。

灰翅は後退するよりも反射的に構え、そして牽制のつもりで右の鉤爪を薙いだ。

対し鵜は、ここで低い身長を活かした。灰翅の身長は169cm、鵜は140cm。二回り差のある鵜は、上段から袈裟斬りのように振り下ろした鉤爪を“より下段に沈む”事で回避し、懐に飛び込んだ。

元々前屈みだったのを、鉤爪が振り下ろされた瞬間に身体を意識的に倒したのだ。空を斬る鉤爪、突如対象が消え灰翅は急ぎ視界を下に向ける。鵜は地面にピタリと合わさるような状態から腕立て伏せの要領で身体を瞬時に起こし、逆立ちのように灰翅の頭部を狙って二本の腕の力と身体を抜く体重移動で上段に跳んだ。

灰翅は身体を仰け反らせ、スレスレとところで鵜の跳び蹴りを避けていた。

だがそれも急場凌ぎ、灰翅は無理な回避のせいで後退り、足取りはおぼつか
覚束ない。

鵜はそれを見逃さず、灰翅の頭上・上空で体勢を立て直し、蹴りの構えで
突如、猛スピードで落下してきた。

「ぐうツツツ！！！？！？」

灰翅は再度咄嗟の防御体勢を取る。腕を交差させ、受け止める構えだ。

鋭角に落下してきた鵜は躊躇い無く、灰翅の両腕に真っ向から蹴りを食らわせた。

灰翅は何度目か分からない後退りを感じ、あの蹴りがまともに喰らっていた場合を想像し恐怖する。しかしそんな事は関係なく、鵜はその際の衝撃すらも利用し後方へ飛び跳ね、また高速で地面に着地。そして再び灰翅目掛け一直線に飛び出し、加速する。まるで近接格闘系のような身体能力、能力系らしい不可視の高速の正体。解答を得られぬ問題を前にしながら、灰翅は思考を戦闘と解決の両方に割いた。

謎のまま闘えば、いずれ墓穴を掘って殺られるのは目に見える。

しかし解決一辺倒になれば、謎の戦闘能力によって負けてしまうのも同様に判断出来る。ならば同時進行、その能力の解析と防御体勢ながらも戦闘を続行。なにより懲罰部隊としてのプライドが“撤退”を許さなかった。

「……………刃ッ！」

適当な牽制、防御一辺倒ながらも下がる事なく鵜の能力の発動の間を見逃すまいと目を凝らす。

……………しかし、解せない。これほどの戦闘能力を持ちながら、近接格闘系に属さないとは。

紅翼や先ほど戦っていた結ほどではないにしろ、鵜の格闘センスはそれに通ずるモノがある。葦牙であり格闘の達人である青年の指導もあるのだろうが、それにしたって大した動きだ。武器系である灰翅からもそう言える。

だが自らを“能力系”と称した以上、彼女のこの戦闘能力もひよつとすれば能力の応用で生まれたモノかもしれない。そうだとしたな

ら、中々に利便性の高い能力である。

落下速度の加速、近接格闘系並の破壊力。能力系とは言っても大抵は科学現象で証明出来るモノだ、流石にそんな馬鹿げたSFじみたモノは聞いた事がない。あえて言うならば、よくて『対象を腐敗させる』程度だろう。

灰翅は呼吸を整える。最早油断は許されない。

眼前のセキレイの戦闘能力が自らに匹敵すると知れた以上、甘えは捨てなければならぬ。

いざ参る。そう意気込んだ瞬間だった。灰翅の横を一つの影が通りすぎた。影はそのまま灰翅の横を通り過ぎ、鶴の真横辺りを滑りながら停止した。幼女はその影を直視し、戦闘中でありながらも駆け寄りそうになる。

それは、血塗れの人間。ダメージの総量で言うなら黒人以上に悲惨で凄惨な状態。が一人。身体中に切傷を残し、衣服も髪も全身を血で染め上げた青年。地天はかろうじて息をして、意識は毛ほどにしか残っていないかった。

鶴と灰翅は恐る恐る視線を後方へと向ける。赤い斑点が滴るその道の先。そこには、

「残念だなあ。彼ぐらいには楽しめると思ったのにねえ」

地天と等しくその身を深紅に染め上げた鴉羽と、その手に掴まれた血塗れの煌刃の姿があった。

鴉羽は煌刃の首根っこを掴み、そのまま引き摺る形で赤い線を引きながら灰翅の横に並ぶ。

あの勝ち気な強者の煌刃が、無抵抗……………それは鶴にとって絶望の一片でしかなかった。

煌刃の剣は鉄橋の隅に転がっていて、蛇腹剣として関節を外したまま放置されている。その周辺は派手に損壊していて、先ほどの原型を留めてはいない。鴉羽は鶴の方へ、地天の上に重なるように煌刃を投げ捨てた。

改めて二人を間近で見ても、その姿は酷い。五体は斬り裂かれ、服は薄布一枚で繋がっている。普段なら多少ふざけながらコメントするところだが、鶴はそんな気にはならなかった。怒りが沸いてくるのか、と聞かれればそうではない。これは怒りでなく、そう

「……………殺す」

「やっぺーらん。オチビさん」

x

x

「あ、あああああああ……………！」

止まらない赤。染め上げ行く赤。辺りは赤一色に染まっていく。青年を抱き抱える少女も、それを救おうと全力な少女も。それを見守る少年少女達も。

細女は比礼を用いて斬り裂かれた黒人の腹部を覆い、内臓が出ないように、失血しっけつしないようにと何度も真つ赤に塗れた比礼を新しいモノに取り替えてはまた取り替えて。だが止まらない、止まってくれない。

あまりの出来事に、魅弦は冷静さを完全に喪失していた。抱きながらただ泣き声を上げる事しか出来ず、黒人の口から噴いた血を顔に浴びても、それを拭おうともしない。その巫女服は袴だけでなく、胴着も共々赤に染まっている。

久能は現実を見たくないのか、それとも現状が彼女には恐ろしいのか、ハルカの背に隠れて震えたまま。ハルカも恐怖に震えながらも、これは自らが巻き起こした事と目を逸らさずに向き合っている。

皆人は大学入試のオマケ程度に覚えていた知識の中から、医学に関するモノを手当たり次第に脳から引き出していく。だが現状では全く役に立たない方法ばかりで、そのどれもを破却はきやくする。

病院に連絡を　　駄目だ。そんな事をしても現状を説明する信憑性のある方法がない。

M・B・Iに　　駄目だ。自分達は今まさに、そのM・B・Iに歯向かっている。助けてくれる訳がない。

氷我財閥の病院　　なおの事駄目だ。行けば助けるどころか逆に襲われかねない。危険過ぎる。

皆人は思考を巡らせる。なにか解決策はないか、どうにか救う術はないかと。

しかしその全てに彼の知識は“否”の一字を浮かび上がらせ、案の尽くが潰つぶえていく。

この間にも黒人の身体からは血液が失われていき、唇ももう随分と青くなり、身体はかなり冷たい。痙攣も止まり、呼吸もヒュウヒュウとか細いモノになっている。薄く開いている目も虚ろで、意識などある筈もない。

前方数m先では、自分達を守る為に小さな少女が今も戦っている。鴉羽の代わりに観戦をしていた紅翼が参戦、灰翅と手を組んで鶴を攻めている。

一対一ではまだ互角だったモノを、二対一では流石に分が悪い。鶴は回避と防戦一方で、反撃の余地など微塵も無い。其処から先では結が未だに立っていない。いや、立ってはいいるが千鳥足、参戦しても間違はなく瞬殺だ。だから迂闊に動けない。

鴉羽はとうとう飽きたのか鉄橋の手摺てすりに腰を下ろし、肩に長刀を担いで観戦に浸っている。それだけで勝率は上がるのに、二対一ではそれも無意味だ。だから、皆人は思った。彼女が此処にいたなら、少しでも状況は変わっていたのかもしれない、と

×

×

「ぐ、むっ」

「ホラホラホラア、どおしたんだよおツツツ！……！！！！！！」

「く、クク……………紅翼、悪趣味……………！！」

鵜は改めて、近接格闘系の強さを認識した。これは確かに強い、勝てないな、と。

あの灰翅とかいうセキレイも中々、リーチのある鉤爪はこれほどとは思わなんだ。

絶え間無い拳の壁に、終わり無い鉤爪の曲線。拳を凌ぎ隙を見つけたと思っても、その背後から鉤爪が上段から襲いかかってくる。鉤爪を避けても、それを穴埋めするかのように蹴り脚や拳が打ち込まれる。

二対一の苦境に体力は疲弊し切り、最早虫の息である。だが鵜は下がる事はない。寧ろ前へ、前へと進んで行く。後退してもまた同じ位置まで押し戻す。例えば身体に傷を負ってでも。あの二人が守ろうとした人を、彼が守ろうとした人達を守る為に。

幼女はただそれだけの為に、自らを犠牲にする。涙など後でいい。痛みなど、今はどうでもいい。自分が闘う事で彼らが救われるならば、この身など幾らでも捧げよう

！

「……………見切った」

「……………！？」

「お前の能力は……………衝撃を操る能力、だ」

鵜は声を発する事が出来なかった。翳した掌、その先にいた筈の灰

翅が懐に潜り込んできていたのだ。

あまつさえ、自らの能力の解説までしてくる始末。咄嗟に後退するが、灰翅はそれも読んでいるのかさらに踏み込み追ってくる。だが鵜は諦めず、能力の照準を合わせようとがむしゃらに掌を翳す。だが

突然、灰翅の進撃が止んだ。

鵜は何故かなど問う事も無くさらに下がる。だがすぐに気付く。あの緋い鵜鴒は何処に

？

「もーらったつ」

「ツツツ!!!????」

鵜の背後、いつの間にか紅翼が回り込んでいた。しかも既に構えている。二対一と頭で理解していたのに、彼女の事を一瞬だが忘れていたとはなんとという事だ。

だがもう遅い。紅翼は既に溜めの段階を過ぎている。無防備に晒された背中に彼女は、

「粉 砕ツツツ!!!!!!」

身体を回転させ、捻りを加えた双掌打を打ち込んだ。

鵜の着ていたシャツが弾け、平らな胸と白い肌が露になる。

本来ならこのまま衝撃で吹っ飛ばされるところを、紅翼は意地悪く鵜の首を鷲掴みにして宙づりに仕立て上げた。下着一枚の幼女とそれを責める女子……絵的には非常に危険だが、この際気にしていない。

鶴は気を失ったのか、首を絞められても声もあげず無反応。宙吊りにされてもその身体は何の反応も示さない。機能停止と判断したのか、紅翼は十秒ほどしてその身体を適当に放り投げた。幼い体軀は宙を舞い、数mほど飛んでようやく地面と再会する。

そこにはちよつど結もいて、彼女は覚束ない足取りで鶴に歩み寄り、彼女を抱き寄せた。

その姿はまるで母親……慈しむような目で鶴を見る結。紅翼はそれが気に入らないのか、「ふうん」と鼻を鳴らし、ゆっくりとした足取りで結の方へと近づいていく。彼女の性格をよく知る灰翅は、彼女が何をしようとしているのかを知っている。しかし興味がないので放っておく事にした。

「ねえ」

紅翼は結に声をかけた。気兼ねない、普段なら普通の挨拶程度だ。しかし今は違う。まるで恐怖や緊張を煽るかのように、楽しそうにそれでいて憎らしげな声だった。だが結はそれに反応せず、土埃で汚れた鶴の頬を袖で拭い、奇麗にしてあげる。

「ちよつと、無視しないでくれるかなあ。ボク今君に話しかけてるんだけど？」

「ク、ククク……紅翼、無視されてる……！」

「うっさい！ ってかアンタさっきから同じような事ばっか言っていない！？」

紅翼が灰翅に語りかけるために、振り向いたときだった。

結がゆっくりとした様子で鶴を地面に寝かせ、袖を千切って服代わりに鶴の胸元を隠す。だが俯いているためにその表情は窺えず、紅翼はついつい興味本位で屈むような姿勢から結の表情を覗こうとした。

だが
パァンツツツ！！！！！！ と、鋭い平手打ちが
紅翼の頬に炸裂した。

本人もあまりに突然の事に、呆けている。だがそんな彼女よりも先に動いたのは、他でもない結だった。

「……………子どもをこのような目に合わせて。あまつさえ辱めて。貴女達は……………あなた達はそれを恥ずかしいとは思わないのですか！？」

「……………」

「セキレイ同士の戦いであれば、それは何の事もないのでしょう。ですがあなた達のそれは違う……………あなた達が行っているそれは戦いではありません。ただの暴力です！」

……………なんとも倫理的な、ごくごく普通の事だった。

子供に手をかけた事を恥ずかしくないのか、と
結はそう言っているだけだ。

結はありったけの声で、心の限り喉の限りに叫んでいた。普段の好奇心旺盛で天然な姿など、其処には無かった。あるのは、セキレイとして誇り高い一人の少女の姿だった。結は震える足を叩き、頬を叩き気を引き締める。ぐっと拳を握り、腰を落とす。彼女の戦闘の

構え、敵は目の前の赤い少女。

その少女はようやく変化を起こした。周囲にも漏れだすほどに、今の彼女は怒気と殺気に満ちている。その目は血走っていて、口元は裂けたように笑っている。彼女もまた拳を握り、深く構えた。

「?88・結! 拳系、参ります!」

「……………上等ジャン。ヤッテやるよ」

×

×

さて、と……………灰翅は再度鉄橋の帝都入り口方面を見る。

外敵はいなくなった……………と思ったのだが、まだいた。集団の中から一人、前に出る影がある。

胸元と下半身を白い比礼ひれで隠した、頭部の左端で髪を結った女性。

灰翅は記憶力がいいほうなので、以前彼女の顔をリストで見えた覚えがあった。あれはそう、『要注意人物』のリスト内にあった……………

「?10・細女オウゴン……だな」

「……やっぱバレてたかあ。あたしも有名人の仲間入りかな、こりゃ」

「……いずれにせよ、お前も討伐対象ターゲットだった……なら、今日ここで、殺るヤ」

「あっちゃーやっぱりかあ。じゃあまあ、仕方ないかなあ……」

軽快な口調で細女は比礼を伸ばす。黒人の傷口を覆っていたにせよ、その長さは依然健在。現在は3m弱しかないが、それでも比礼使用の彼女にとっては十分に武器に成り得る。

……正直言つて、細女の勝率は非常に低かった。悲しいが武器の相性もあるし、それにすぐ後ろには友人達が控えている。彼らを守るためには、不退転・孤立無援の覚悟で挑まなければならない。対して灰翅は何も言わず、ただゆったりとした調子で鉤爪を構えた。細女との相性において、灰翅の鉤爪は最悪と言ってもいい。なにせ刀と違って小回りが利くし、なにより刃物だからだ。両者が睨み合う。

しかし開始の合図は少し変わっていた。

鉄橋の下、細女の立つ場所の左右から

長大な水の柱が

突如聳え立ったからだ。

水の柱は雄々しく聳え立ち、その先頭を曲げて両者の間へと滝のように降り注いだ。

あまりの水量に、本来なら透過して向こうが見えるはずの水は、気

泡が降り混ざりなおの事向こう側が見えなくなっている。だからだろう、彼女達はその中に何かがあると踏んだ。

だが彼女は、鈿女はこれが何なのかを知っている。彼女の知り合いで、こういう派手な登場を好む者がいるのを。水を扱う、唯一のセキレイがいる事を。そして案の定、中から出てきたのは

白と黒の衣に身を包んだ、黄金の髪を持つセキレイだった。

「心変わりをして急ぎ馳せ参じてみれば……何と酷い」

滝が弾け、消滅する。彼女は後方にいた一団と、少し先に横たわる三つの影を見つける。

いずれも、同じ釜の飯を食った仲の者ばかり。あまつさえ一人は本来なら傷つける事すら許されぬ葦牙の青年、だがその彼は己の夫の傍で血達磨になりながら息絶えかけている。他の三人にしたって同様だ。

ここに来て、彼女は生まれて初めて殺意と怒気の合わさった感情を抱く。赤く濁々（だくだく）とした、どす黒い感情。嫉妬や恨みなどではない。これは己の遅れを恥じた、自らへの怒り故に彼女は言う。

「吾が夫、吾が朋友、吾が恋敵、そして我らセキレイが守るべき葦牙にすら手を掛ける下賤な野犬共よ……懲罰受くるは、汝ら也！ ？09・月海、参るツツツ！！！！！！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9062u/>

セキレイ 翼と拳と恋物語

2011年11月20日05時07分発行